

私立大学

○ **北星学園大学**

授業科目名	ボランティア・アクション論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部（福祉臨床学科）2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計23名（男子学生8名 女子学生15名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア活動の歴史と可能性を学ぶ		
授業内容	第1回 科目説明、ボランティア活動の実態と理念 第2回 社会福祉の歴史とボランティアの役割（ソーシャルワークの起源） 第3回 社会福祉の歴史とボランティアの役割（社会福祉制度の形成との関係） 第4回 社会福祉の歴史とボランティアの役割（社会福祉実践とボランティア活動） 第5回 市民化活動への広がり、NPOの概念と実際 第6回 各国でのNPO、ボランティア活動の比較 第7回 福祉施設実践とボランティア活動 ～奉仕活動から権利擁護へ 第8回 地域福祉実践とボランティア活動 ～地域課題の発見から解決に向けて 第9回 ボランティア活動の広がり ～企業、学校教育、国際協力 第8回 ボランティア活動推進政策と推進機関の役割 第10回 ボランティア活動の実際：活動継続・運営の課題 第11回 活動推進方法と演習：課題の発見、発想力を磨く 第12回 活動推進方法と演習：活動プログラムの開発 第13回 活動推進方法の演習：活動プログラムの報告・評価 第14回 専門職や行政との協働～アクション型ボランティアを目指して		
教科書	「福祉キーワードシリーズ ボランティア・NPO」		
授業の工夫点	ボランティア実践事例の紹介 グループ演習を通して、ボランティア・プログラミングの実施		
授業の評価方法	授業参加度（毎回のフィードバック用紙）＋レポート課題＋出席点		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	福祉施設・機関からのボランティア活動紹介		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 酪農学園大学

授業科目名	ボランティア活動・NPO・NGO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方自治、キリスト教学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	環境システム学部3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計42名（男子学生25名 女子学生17名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講では、NGOの発生の歴史的起源とその精神的理念、ボランティア運動との諸関係を基軸に据え、ボランティア運動やNPO・NGOが日本の市民社会の中で正当な認識と位置づけを獲得することを目標に、コミュニティレベルでの自治の主体形成と、いわゆる発展途上国問題を特に視野に入れて考察していく。またNPO法の特質と問題点を実践的な視点から考察する。その際、ボランティア運動やNPO・NGOの活動の現状と課題を、実際にその現場に身を置き、身体と心を伴った学び（身体的認識知）と参加型学習をとおして、近代市民社会の構成員たる自らの問題として考究す		
授業内容	<p>第1回 はじめにー授業計画、担当教員の分担等について（河合、高橋） 自治の主体形成の歴史的概括 共同体→国民国家→市民→住民、地球市民（河合）</p> <p>第2回 NPO法成立の背景とその概要（河合）</p> <p>第3回 主要国のNPO制度の概要ーアメリカ、イギリス、フランス、ドイツー（河合）</p> <p>第4回 小括ー公・共・私の連携と分担を中心にー（河合）</p> <p>第5回 NPO・NGOの形成原理としてのキリスト教共同体とそのエトス（高橋）</p> <p>第6回 世界とアジアと日本におけるNGOの役割とその使命 ー国際協力の現場から「国家と国益」を越境する「地球市民」としてー（高橋）</p> <p>第7回 開発途上国における保健医療・教育・福祉活動とNGO（高橋）</p> <p>第8回 NGOって何？：「非政府」について考える（越田）</p> <p>第9回 世界から考える・地域から考える（越田）</p> <p>第10回 NGOの仕事（パート1）：スリランカでの緊急援助（越田）</p> <p>第11回 NGOの仕事（パート2）：東ティモールでの復興支援（越田）</p> <p>第12回 NGOの仕事（パート3）：政府に対してものを言う（越田）</p> <p>第13回 NGOの仕事（パート4）：フェア・トレード（越田）</p> <p>第14回 変貌する世界とNGO（越田）</p> <p>第15回 まとめの議論：私たちにできること（河合・高橋・越田）</p>		
教科書	講義中に、レジュメ・資料を配布する		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	講義中の小レポート（20%）とレポート（80%）の総合点で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	環境ボランティア海外実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	再生エネルギー経済学、環境GIS、環境リモートセンシング	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	環境システム学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計79名（男子学生47名 女子学生32名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	不明
必修・選択の別	選択		
授業目的	海外での環境問題を現地でも学び、また現場を訪問しボランティアとして活動することにより、国際環境協力の現場を肌で体験する。		
授業内容	<p>実習は以下の3コースとし、担当教員が引率する。 なお、3コース以外であっても、実習内容が相当以上であると認められる場合においては、単位を認定する（例：エクステンションセンターが主催する海外環境研修等）。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年度当初、当該実習の概要について説明会を開催（以後も含めて計3回程度実施）。 ・実施派遣先国の概要について事前に調査する。 ・実施派遣先国の環境問題（自然条件、社会経済条件等々を含む）の概要、訪問先機関等での実習事項について事前の説明会のなかでイメージを固めていく。 ・実習スケジュール、ツアープラン等の作成をおこなう。 ・実習参加者による事前準備レポートを作成する。 ・実習後の受講者レポートを作成し、3コースの報告会を開催する。その後、研修成果の印刷公表に取り組む。 <p>○ドイツにおける再生エネルギー利用、市民参加型循環型社会（エコ社会）体験コース 時期：9月1日～9月10日（予定）</p> <p>○ボルネオワイルドライフコース（マレーシア） 時期：9月1日～9月13日（予定）（人数が多数の場合は2月にも実施）</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	研修コース毎に受講者レポートを作成し提出する。さらに受講者による報告会を開催する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 札幌大学

授業科目名		ボランティア実習Ⅰ	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	経済学 教育制度論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部(経済学科)1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計27名(男子学生26名 女子学生1名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	37.5時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア体験を通じて、実社会の現状を学習し、社会人としての基礎能力を高めることが目的です。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 講演会:ボランティア活動の心得 3. 大学周辺の公園清掃 4. 町内会の花壇作成の補助1 5. 町内会の花壇作成の補助2 6. 町内会の花壇作成の補助3 7. 大学周辺の公園清掃 8. 防災基礎訓練(災害時の吹き出し) 9. 収集ボランティア1 10. 防災基礎訓練(土嚢積み) 11. 収集ボランティア2 12. 消火栓除雪準備 13. 国際交流センター留学生餅つき大会補助 14. 収集ボランティア3 15. 大学周辺の消火栓除雪準備、まとめ 		
教科書	使用しない。必要な資料は講義の際に配布する。		
授業の工夫点	2時間連続の授業を隔週で実施します。		
授業の評価方法	平常点70%、小テスト10%、夏休み課題10%、計100%とし、50%以上を合格とする。実習であるので毎回の活動を最も重視します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		ボランティア実習Ⅱ	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	経済学 教育制度論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部(経済学科)2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計10名(男子学生9名 女子学生1名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	37.5時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア体験を通じて、実社会の現状を学習し、社会人としての基礎能力を高めることが目的です。 ボランティア実習Ⅰで培った資質や能力をさらに向上させることをめざします。とくに、ボランティア実習Ⅰの経験者として、活動の中でリーダーとしての役割を果たすことが求められます。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 講演会:ボランティア活動の心得 3. 大学周辺の公園清掃 4. 町内会の花壇作成の補助1 5. 町内会の花壇作成の補助2 6. 町内会の花壇作成の補助3 7. 大学周辺の公園清掃 8. 防災基礎訓練(災害時の吹き出し) 9. 収集ボランティア1 10. 防災基礎訓練(土嚢積み) 11. 収集ボランティア2 12. 消火栓除雪準備 13. 国際交流センター留学生餅つき大会補助 14. 収集ボランティア3 15. 大学周辺の消火栓除雪準備、まとめ 		
教科書	使用しない。必要な資料は講義の際に配布する。		
授業の工夫点	ボランティア実習Ⅰを修得していることが望ましい。特に教職課程を履修するためにはボランティア実習Ⅰの2単位修得が必要である。		
授業の評価方法	平常点70%、小テスト10%、夏休み課題10%、計100%とし、50%以上を合格とする。実習であるので毎回の活動を最も重視します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 札幌国際大学

授業科目名	国際ボランティア リーダーシップ論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計14名（男子学生7名 女子学生7名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	日本にいと平和に見える世界では、さまざまな紛争や内戦などで、2千万人に及ぶ難民がいたり、アフリカなどでは変わらぬ貧困と飢餓で多くの人が苦しんでいます。これらの地球上の問題解決に貢献することは、日本のこれからの大きな課題です。この講義では、こうした国際協力・貢献の実際の基礎的な理解を得ることを目的とします。		
授業内容	第1～2週、国際協力とボランティアに関する基礎的視点についてレクチャー。 第3～12週、アフリカ、中南米、アジアなどで青年海外協力隊、シニアボランティアなどで活躍した人をゲスト講師として招き、一人2回ずつ話をしてもらいます。 第13～15週、まとめを、グループごとの発表形式で行います。		
教科書	後日指示		
授業の工夫点	講師により、国際協力・貢献についての基本的な意義についてのレクチャーを行うとともに、実際に国際ボランティアの第一線で活動した方々をゲスト講師に招き、生の体験について学びます。		
授業の評価方法	基礎的なテキストとゲスト講師の講義をもとに、グループごとにプレゼンテーションを行い評価します。ふだんの出席状況、発言状況も評価の大事な要素とします。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGO・NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計21名（男子学生13名 女子学生8名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	国益を重視する国家間の国際協力は今や限界であり、地球市民レベルで営利を目的とせず行う時代になった。活動というよりも生き方としてのカギがNGO・NPOである。私の青年海外協力隊の経験をベースに市民が行う国際協力の意義を学ぶ。		
授業内容	スケジュールはおおよそ以下のとおり ①自己紹介、ガイダンス、アンケート ②アンケート、キーワード説明 ②青年海外協力隊活動事例（ケニア編） ③国際協力ワークショップ I ④国際協力ワークショップ II ⑤貧困の構造について I ⑥貧困の構造について II ⑦南北問題の歴史 I ⑧南北問題の歴史 II ⑧ODA活動事例紹介(ビデオ) ⑨ODAの理念と現状 ⑩NGO活動事例紹介(ビデオ) ⑪NGOの理念と現状 I ⑫NGOの理念と現状 I ⑬アンケート ⑭まとめ ⑮質疑応答 注) 順は多少異なることもある。 状況によりゲスト講師による講義を実施することもある。		
教科書			
授業の工夫点	座学50%、スライド、ビデオによる視聴覚学習30%、参加型ワークショップ20%		
授業の評価方法	評価は論述式筆記試験により80%、講義への参加度合い、授業姿勢20%の各比重を勘案し行う。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際援助技術論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計15名(男子学生7名 女子学生8名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際援助は政府ODAと民間NGOや市民活動団体が行っている。それぞれの特徴や課題などを挙げ、学生と共に考え、討議する。学生や社会人にも参加できる活動などを紹介する。		
授業内容	1) ガイダンス 2) 国際援助概説 3) ODA援助の例 4) NGO援助の例 5) 札幌で活動するNGO 6) 学生が行うNGO活動 7) 北海道の事例 8) 国際援助とグローバル化 9) 現地で活動するNGO 10) NPOとNGO 資金調達と人材育成 11) NGOスタディツアー 12) NGOボランティア 13) 宇宙船地球号 14) あなたに今できること 15) まとめ		
教科書	後から指定する		
授業の工夫点	ビデオ、プレゼンテーションなど多彩な方法で導入し、わかりやすく解説し、積極的に質疑、討論をする。少人数のグループワーク中心。		
授業の評価方法	試験はなし。レポート7～8回の提出とその評価を70%、出席点を30%とし、成績を評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	キャンパスアクティビティ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	人文学部・現代社会学部・観光学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	未	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	学内の活動に積極的にに関わり、社会に開かれた目を養う。学内での特定の活動に対して、教職員がアドバイスやサポートを行い、「授業計画」に記載されている条件を満たした場合に単位を付与する認定科目である。		
授業内容	①特定の活動とは、オープンキャンパスの学生スタッフを中心に、他の所定の活動のことを指す。具体的な活動内容については、履修登録期間中にこの科目の説明会を行なうので、それに参加して確認すること。 ②活動時間は通算60時間以上を必要とするので特に卒業を予定している年次の学生は計画的に行なうこと。 ③活動する際は、PDCA(計画、実行、検証、対策)のサイクルに留意しながら活動すること。 ④活動に対する所定の報告書の記入・提出を担当者に行ない面談を受けること。(なお、報告書についてはオリエンテーション時に説明する。) ⑤この科目の総括は観光学科であるが、それぞれの活動に対して担当者の指示に従うこと。		
教科書	使用しない		
授業の工夫点	定期的な講義は行なわない。学内で特定の活動を行い、それに対して履修者が記入した報告書に基づき、担当教員と個別面談を行なう形式をとる。		
授業の評価方法	特定の活動時間が60時間に達し、報告書を提出し、それを基に担当者との面談を受けた場合に単位認定を行なう。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域アクティビティⅠ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	人文学部・現代社会学部・観光学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	未	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	前期開講期間に地域社会においてボランティア活動を行った場合、授業計画に記した条件で単位が与えられる。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 ボランティア活動と講義に、通算で原則60時間以上従事・参加する。 2 活動開始時に担当教員に連絡し、単位認定申請手続きの指導を受ける。 3 活動中に担当教員に状況を中間報告し、必要書類を提出する。 4 活動終了時に担当教員にレポートを提出し、必要書類を提出し、口頭試問を受ける。 5 過去のボランティア活動や、演習等で単位認定される活動は対象外とする。 6 講義方法①のボランティア活動の内容としては、次のようなものが想定される。 ・児童、青少年、高齢者などに対する援助活動 ・地域のお祭り、調査、まちづくり活動などへの参加 7 講義方法②のボランティア活動の内容としては、次のようなものを予定している。 ・札幌市内の児童会館におけるイベント企画・運営 ・大学周辺地域の文化・歴史・環境・健康等のまちづくり (6・7であげた例以外の活動も単位認定の対象となるので、担当教員によく相談すること。) 		
教科書	使用しない		
授業の工夫点	講義方法には以下の2つのパターンがある。 ①学生が自主的に受け入れ先を開拓し、講義を受けずにボランティア活動に従事する。 ②毎週の講義を受けながら、担当教員が用意したボランティア活動に参加する。		
授業の評価方法	中間報告、レポート、口頭試問の結果を総合的に評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域アクティビティⅡ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	人文学部・現代社会学部・観光学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	未	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	後期開講期間および夏期・冬期休業期間に、地域社会においてボランティア活動を行った場合、授業計画に記した条件で単位が与えられる。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 ボランティア活動と講義に、通算で原則60時間以上従事・参加する。 2 活動開始時に担当教員に連絡し、単位認定申請手続きの指導を受ける。 3 活動中に担当教員に状況を中間報告し、必要書類を提出する。 4 活動終了時に担当教員にレポートを提出し、必要書類を提出し、口頭試問を受ける。 5 過去のボランティア活動や、演習等で単位認定される活動は対象外とする。 6 講義方法①のボランティア活動の内容としては、次のようなものが想定される。 ・児童、青少年、高齢者などに対する援助活動 ・地域のお祭り、調査、まちづくり活動などへの参加 7 講義方法②のボランティア活動の内容としては、次のようなものを予定している。 ・札幌市内の児童会館におけるイベント企画・運営 ・大学周辺地域の文化・歴史・環境・健康等のまちづくり (6・7であげた例以外の活動も単位認定の対象となるので、担当教員によく相談すること。) 		
教科書	使用しない		
授業の工夫点	講義方法には以下の2つのパターンがある。 ①学生が自主的に受け入れ先を開拓し、講義を受けずにボランティア活動に従事する。 ②毎週の講義を受けながら、担当教員が用意したボランティア活動に参加する。		
授業の評価方法	中間報告、レポート、口頭試問の結果を総合的に評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	海外ボランティア演習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計12名（男子学生6名 女子学生6名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際ボランティアフィールドワークの事前演習： (1)研修先団体や現地に関する資料を読み、事前の知識を深める。 (2)日常生活に必要な現地の言語表現を学習し、研修先でのコミュニケーション能力を開発 (3)滞在に必要な注意事項等や渡航手続き等に関する諸注意		
授業内容	1. 講義 国際ボランティアフィールドワーク:目的と意義 (1) 海外でのボランティア活動がなぜ必要とされるのか。 (2) 若者が貢献できる活動とは (3) 異文化理解とコミュニケーション:「笑顔と善意」だけでは抱えないこと (4) 文化とアイデンティティ:日本人であることと多文化時代に生きること 2. 研修先の経済社会事情等に関して情報収集し、発表 3. 英語や現地の言語等実用的なコミュニケーション能力開発のための語学演習 4. 海外研修時の注意事項等		
教科書	授業中に適宜配布		
授業の工夫点	「国際フィールドワーク」の目的と意義に関する全般的な講義、現地の状況把握のための情報収集と発表、活動に必要とされる基礎的な語学学習等を実技訓練する。		
授業の評価方法	レポート作成と発表 各50%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際フィールドワーク		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計14名（男子学生7名 女子学生7名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	80時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際ボランティア活動に必要な実務能力開発のための現地演習:東南アジアのNPOプログラムに参加し、現地での体験を通して、関連科目で学んだ理念、理論の理解を深め、同時に英語や現地の言語を学び、異文化理解とコミュニケーション能力獲得の重要性も認識する機会とする。		
授業内容	1. 経済的に恵まれない家庭環境にある児童のための教育施設、生活支援施設等でのボランティア活動 2. 日本語教室、絵画教室、食事の準備等日常生活の活動や体育館等の施設作りに参加 3. 地域の高校等訪問、高校生との交流		
教科書	研修中適宜配布予定		
授業の工夫点	現地のプログラムを介して各種のボランティア活動に参加する。		
授業の評価方法	1. 現地での課題・活動への積極的な取り組み、自主性、協調性等に関する評価 50% 2. 研修終了後のレポート 50%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		国際ボランティア論	
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計31名(男子学生15名 女子学生16名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	紛争解決、戦争や災害の復興支援、環境問題、子供・女性、難民、移住者・労働者、エイズ等の問題に国連等の国際組織や政府の取り組みに加え、個人がボランティアとして参加する活動が重要視されている。国際ボランティア活動に関する理論や内容、事例等を学習し知識・関心を深める。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス:授業のスケジュール、内容、課題提出、評価方法、自己紹介 2. 第1部 国際協力のこころ 3. 第2部 国際社会の痛み 紛争～飢餓、貧困 4. 第2部 国際社会の痛み 難民～地球環境 5. 第2部 国際社会の痛み 食糧危機～災害 6. 第3部 国際協力の内容 開発援助～多文化共生 7. 第3部 国際協力の内容 緊急救援～環境保全 8. 第3部 国際協力の内容 文化交流～保健医療協力 9. 第4部 国際協力の形 10. 第5部 ODA 国際協力NGO 地域レベルの国際化 ODAの現状と展望～自治体国際化の深化と拡大 11. 第5部 ODA 国際協力NGO 地域レベルの国際化 第6部 NGO活動におけるマネジメントシステム 12. 第7部 国際協力活動の実際 NGOの組織作りと運営の実際～ケニアでの教育協力の実際 13. 第7部 国際協力活動の実際 ジンバブエ-スポーツ活動の振興～コートジボワール-青年海外協力隊の経験 14. 第8部 日本の国際協力の現状と展望 15. 復習と期末試験の説明 		
教科書	「国際協力の地平-21世紀に生きる若者へのメッセージ」 NGO活動教育研究センター(編集)京都昭和堂(出版)		
授業の工夫点	講義形式、ビデオ視聴、ゲスト講師の特別講義、テーマに基づいた自由討論		
授業の評価方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 積極的な授業態度、自由討論への参加度(20%) 2. 課題レポート提出(40%) 3. 期末テスト(40%) 		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		国際ボランティア組織論	
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計10名(男子学生6名 女子学生4名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際ボランティア組織の運営・マネージメントの多様性を説明しながら、創出することが可能な現状を学習し、社会の中で自分たちの役割が何かを深めていく。		
授業内容	<p>以下のとおり実施する。</p> <ol style="list-style-type: none"> ①ガイダンス、プロフィール紹介 ②国際ボランティア組織とは ③ボランティア組織とマネージメント ④重要なコーディネーション ⑤ボランティアコーディネーターの本質 ⑥市立札幌病院ボランティアの会「やさしさ・ジェントル」の組織から ⑦病院ボランティア国際フォーラム(1) ⑧病院ボランティア国際フォーラム(2) ⑨アメリカ、カナダ、台北におけるボランティア事例 ⑩ディスカッション ⑪PMF、札幌国際ブラザ外国語ボランティアネットワーク、札幌NPO市民活動連合会から ⑫ディスカッション ⑬プレゼンテーション ⑭プレゼンテーション ⑮感想、まとめ 		
教科書	プリント活用、テキスト・参考文献は未定		
授業の工夫点	ビデオ、パソコン(パワーポイント)を使用したビジュアルな講義を展開し、活発な意見を交換していく全員参加型の授業を行う。		
授業の評価方法	<ol style="list-style-type: none"> ①レポート(40%) ②自由テーマでのプレゼンテーション(30%) ③出席と授業態度(30%) 		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 北翔大学

授業科目名	ボランティア・NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間福祉学部生活福祉学科社会福祉コース 2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計23名（男子学生18名 女子学生5名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会福祉、国際問題、環境問題等現代社会では様々な領域でボランティアが活躍しており、現代社会ほどボランティアの活躍が期待される社会はない。本科目ではボランティア活動が必要とされる背景にふれつつ、今後のボランティア活動のあるべき姿を探究する。ボランティア活動は賞賛されるべきことではあるが、一方で独善的な活動のすすめ方をすると予期せぬ悪い結果をもたらしてしまう。そうならないため、誰がどのように「困っている」かについての適切な理解が必要となる。また、在宅福祉の担い手がここ数十年で大きく変化したことからも伺えるように、行政、企業、ボランティア、家族それぞれに問題解決の担い手としての一長一短がある。より良い問題解決のためには、それぞれの利点と欠点を見極める柔軟な発想も必要である。本科目の展開にあたっては、主に以上の点に留意しつつ講義を行う。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション:現代社会におけるボランティア活動の持つ意味 2. ボランティア活動の定義と諸特性 3. ボランティア活動の歴史 4. 障害者ボランティア ①歴史的経緯 5. 障害者ボランティア ②ボランティアと当事者との関係づくり 6. 国際ボランティア ①歴史的経緯 7. 国際ボランティア ②国際協力の抱える諸問題 8. 児童・教育ボランティア ①様々な児童問題 9. 児童・教育ボランティア ②学校ボランティアの実際 10. 当事者運動とボランティア 11. ボランティアからNPOへ ①NPOの成り立ちと制度 12. ボランティアからNPOへ ②ボランティア組織の運営 13. 今後の展望 ①高齢者福祉におけるボランティア活動の位置づけ 14. 今後の展望 ②まちづくりにおけるボランティアの役割 15. 総括:「慈善」から「関係づくり」へ 		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	受講態度4割・テスト・レポート6割の割合で評価。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 稚内北星学園大学

授業科目名	ボランティアI		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教師論 他	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	情報メディア学部（情報メディア学科1年次）	授業のレベル	その他（実習が主のため、初級から上級まで様々なレベルの内容が含まれている）
平成20年度履修者数	計33名（男子学生28名 女子学生5名）	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の今日的意義を学ぶとともに、地域におけるボランティア活動を実践することにより、貢献のためのスキルを身に付け、自己実現と社会参加の意欲を養う。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(授業の目標と内容、展開予定、注意事項の確認等) 2. ボランティア活動の歴史と今日的意義(人はなぜボランティアをするのかを考察する) 3. ボランティア活動先の紹介と登録(自発的に選択する) 4. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 5. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 6. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 7. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 8. ボランティア活動の中間のまとめ(活動の中間的総括を行い課題を整理する) 9. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 10. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 11. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 12. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 13. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 14. ボランティア活動のまとめと討論(活動を振り返るとともに、ボランティアIIの履修に当たっての課題等を明確にし、意欲を高める) 15. 期末レポート(まとめのレポートを作成し提出する) 		
教科書	興梠 寛『希望への力』光生館 2,800円 ISBN4-332-60058-4		
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア活動70 レポート30		
授業のサポート体制	随時、相談を受け付けるとともに、実習先の指導担当者にも相談を受けていただけるようお願いをしている。		
学外の関係機関・団体との連携	稚内市教育委員会、少年自然の家、北海道稚内養護学校など		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアⅡ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教師論 他	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	情報メディア学部（情報メディア学科1年次）	授業のレベル	その他（実習が主のため、初級から上級まで様々なレベルの内容が含まれている）
平成20年度履修者数	計18名（男子学生16名 女子学生2名）	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	40時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の今日的意義を学ぶとともに、地域におけるボランティア活動を実践することにより、貢献のためのスキルを身に付け、自己実現と社会参加の意欲を養う。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(授業の目標と内容、展開予定、注意事項の確認等) 2. ボランティア活動の現状と課題(問題点を出し合い、特に支援の在り方を考察する) 3. ボランティア活動先の紹介と登録(自発的に選択する) 4. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 5. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 6. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 7. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 8. ボランティア活動の中間のまとめ(活動の中間的総括を行い課題を整理する) 9. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 10. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 11. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 12. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 13. ボランティア活動の実践(登録したボランティア先で活動する) 14. ボランティア活動のまとめと討論(活動を振り返るとともに、ボランティア活動の今日的意義と望ましいあり方について考察する) 15. 期末レポート(まとめのレポートを作成し提出する) 		
教科書	興梠 寛『希望への力』光生館 2,800円 ISBN4-332-60058-4		
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア活動70 レポート30		
授業のサポート体制	随時、相談を受け付けるとともに、実習先の指導担当者にも相談を受けていただけるようお願いをしている。		
学外の関係機関・団体との連携	稚内市教育委員会、少年自然の家、北海道稚内養護学校など		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東北福祉大学

授業科目名	福祉ボランティア活動Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学科全学年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計1221名（男子学生389名 女子学生832名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	本学の教育理論である「行学一如」(理論と実践、知識と技術の融合)の実現を図ること、福祉社会を担う人材の育成を目的にボランティア活動に対し単位認定を行なっている。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア活動講座の開講(7回程度) 2. ボランティア活動の実践 		
教科書			
授業の工夫点	体験を通じた学びをバックアップしている点		
授業の評価方法	講座等の出席状況、ボランティア活動状況、レポート等による。		
授業のサポート体制	ボランティアセンターによる活動等のコーディネート、相談支援。		
学外の関係機関・団体との連携	有機的ネットワークを強化している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	総合福祉学部2・3・4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計54名(男子学生11名 女子学生43名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	それぞれのフィールドで活躍する実践者等からボランティア・市民活動の現状と課題、今後の可能性などについて多面的に学んでいく。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション・大学における学生ボランティア支援 2. 国際貢献活動を考える 3. ボランティアマナーについて 4. エンターテインメントとボランティア 5. 市民教育の為のサービスラーニング 6. 環境とボランティア 7. バリアフリー社会をめざして①身体障害者支援 8. バリアフリー社会をめざして②知的障害者支援 9. 子育て支援とボランティア 10. コーチングによる人材の育成 11. ボランティア団体とマネジメント 12. 企業の社会貢献活動とボランティア 13. 地域で子どもを育むために 14. 21世紀型ボランティアのあり方 15. まとめ 		
教科書			
授業の工夫点	種々の実践から学ぶ点		
授業の評価方法	レポート、出席		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	NPO・企業・大学等の関係機関・団体等の皆様に講義をいただいている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ ノースアジア大学

授業科目名	NPOの経営		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	経済学部3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	英国の「チャリティ」と並び称される、米国「NPO(民間非営利活動組織)」のダイナミックで、しなやかな市民活動を理解し、社会に対する基本理念再構築に資するため、社会への企画・提案能力を身につける。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. NPOとコミュニティの歴史 2. 日本におけるNPOの歴史 3. ボランティア活動/NGO・CSO活動との関係 4. 市民活動全般から見たNPOの位置づけ 5. 市民活動と公益について 6. NPOのロールミッション(共生) 7. NPOのマネジメント(事業活動組織の役割) 8. コミュニティビジネスの必要性 9. コミュニティビジネスの形態① 10. コミュニティビジネスの形態② 11. NPOのマネジメント(中間支援組織の役割) 12. コーディネイトと意思伝達の手法 13. 民間企業の戦略的社会貢献活動 14. 民間企業のCSR 15. 小論文 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席+小論文		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続			

○ 仙台大学

授業科目名			
授業科目名	ボランティア活動実践A		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	生物学、介護福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	体育学部（体育学科・健康福祉学科・運動栄養学科・スポーツ情報マスメディア学科 1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容	ボランティア講座 ボランティア体験の実践 ボランティア体験を振り返る一まとめ① ボランティア体験を振り返る一まとめ② レポート作成		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア活動10回以上、レポート提出により評価		
授業のサポート体制	介護・福祉施設実習に関する授業でのアプローチ		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
授業科目名	ボランティア活動実践B		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	生物学、介護福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	体育学部（体育学科・健康福祉学科・運動栄養学科・スポーツ情報マスメディア学科 2年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容	ボランティア講座 ボランティア体験の実践 ボランティア体験を振り返る一まとめ① ボランティア体験を振り返る一まとめ② レポート作成		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	介護・福祉施設実習に関する授業でのアプローチ		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
授業科目名	ボランティア活動実践C		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	生物学、介護福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	体育学部（体育学科・健康福祉学科・運動栄養学科・スポーツ情報マスメディア学科 3年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容	ボランティア講座 ボランティア体験の実践 ボランティア体験を振り返る一まとめ① ボランティア体験を振り返る一まとめ② レポート作成		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	介護・福祉施設実習に関する授業でのアプローチ		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動実践D		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	生物学、介護福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	体育学部（体育学科・健康福祉学科・運動栄養学科・スポーツ情報マスメディア学科 3年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容	ボランティア講座 ボランティア体験の実践 ボランティア体験を振り返る一まとめ① ボランティア体験を振り返る一まとめ② レポート作成		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	介護・福祉施設実習に関する授業でのアプローチ		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 仙台白百合女子大学

授業科目名	総合福祉実習 I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計40名（男子学生0名 女子学生40名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	2ヶ所以上 2日以上
必修・選択の別	必修		
授業目的	社会福祉士養成にかかる授業。学内で学んだ福祉の知識を基に、分野を限定せずソーシャルワークを展開する施設や機関で、施設見学及びボランティア活動を行う実習を通じて、職業倫理を体験し、身につける。社会福祉専門職への自覚をもつ。		
授業内容	授業は大きく2種類あり、大学側で準備する施設見学と自ら依頼するボランティアがある。 施設見学 1. 事前学習 2. 実習 3. 事後学習 ボランティア 1. 事前学習 2. ボランティア活動の実施 3. 事後学習		
教科書			
授業の工夫点	実習を通じて、職業倫理を体験し、身につける。社会福祉専門職への自覚をもつ。		
授業の評価方法	実習・レポートを踏まえて評価する。		
授業のサポート体制	ボランティア先の紹介・掲示		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア受け入れ先に授業内容の説明		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間学部2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計64名(男子学生0名 女子学生64名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際的に活動するボランティアの理念と実践活動を学ぶ。人間の生活は世界の人々(地球市民)が協力して作り上げているものである。国際機関や各国政府やNGOは、そのアクターの一つである。ボランティアも大きな期待が寄せられている。国際的に活動するボランティアの理念とその実践活動を学び、世界でのボランティア活動への参加の準備をするのが国際ボランティア論である。授業は阪神淡路大震災とアメリカ南部を襲ったハリケーン・カトリーヌ・ド・ヌーヴがあぶりだした諸問題の検討から始める。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 国際ボランティア論の射程を学ぶ 導入。自然災害の被害者はどんな人たちか 2. 国際ボランティアの課題を学ぶ 難民問題、貧困問題、国際紛争等 6回 3. 国際ボランティアのアクターを学ぶ 国境なき医師団、シャンディ国際ボランティア会等 4回 4. 社会開発を学ぶ 経済活動と社会開発活動とNPOの関連を学ぶ 3回 5. まとめ 		
教科書	毎回パワーポイントの刷り出しを配布する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	各回に提出を求める前回授業の評価レポート及び期末の試験による。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間学部3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計29名(男子学生0名 女子学生29名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の内容理解。ボランティア活動が必要とされてきた歴史的・社会的背景から検討を行う。その後に具体的な活動内容について理解を深め、ボランティア活動の課題や今後のあり方を探っていく。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ボランティアに関する基本的問題 3. ボランティアの歴史(1) 4. ボランティアの歴史(2) 5. 環境問題とボランティア(1) 6. 環境問題とボランティア(2) 7. 家族支援とボランティア 8. 高齢者とボランティア(1) 9. 高齢者とボランティア(2) 10. 教育とボランティア(1) 11. 教育とボランティア(2) 12. 国際協力と国際ボランティア(1) 13. 国際協力と国際ボランティア(2) 14. 市民活動とボランティア 15. 総括 		
教科書	特に指定はしない。参考書を随時用いることにする。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況、試験あるいはレポート課題の成績から総合的に判断する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東北公益文科大学

授業科目名	現代社会とボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	多分野の教員が担当	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	公益学部1～4年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計86名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修選択		
授業目的	ボランティア活動入門		
授業内容	1. ガイダンス 2. ボランティアの時代 3. ボランティアの実際（地域づくり） 4. ボランティアの実際（環境保全） 5. ボランティアの実際（災害） 6. ボランティアの実際（福祉） 7. 参加の心得－ボランティアをする前に 8. ボランティア活動に参加してみよう（実践①） 9. ボランティア活動に参加してみよう（実践②） 10. 地域のボランティア活動事例 11. ボランティアの社会的役割 12. ボランティア活動の研究 13. 学生によるボランティア 14. ボランティアの将来と課題 15. レポート作成		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート・授業への参加状況		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	共創まちづくり論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	多分野の教員が担当	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	公益学部2～4年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計42名	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	まちづくりの基礎を学ぶ		
授業内容	1. 『ボランティア学』を学ぶために 2. 出合いのワークショップ（討論グループづくり） 3. 人はなぜボランティアをするのか 4. ボランティア・コミュニケーションへの考察 5. 世界のボランティア史と市民社会の誕生 6. 現代社会におけるボランタリズム理念 7. 統計にみるボランティア・NPOの世界 8. ボランティアマナー・トレーニング① 9. ボランティアマナー・トレーニング② 10. グローバル社会におけるボランティアの展開 11. 国際協力NGOの歴史と課題 12. 生涯学習社会とボランティア活動の役割 13. 学校教育におけるボランティア学習の可能性 14. ボランティア・NPOと行政とのパートナーシップ 15. 企業の社会的責任とフィランソピー		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート・授業への参加状況		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	商工会議所		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO経営論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会系	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	公益学部2～4年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計17名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPOは何を求めて活動するのか。それぞれの目的にふさわしい経営とは、どのようなものかを考える。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 講義の進め方と学生の要望 2. NPOの意味する範囲とその活動目的 3. 法人とは何か、特定非営利活動促進法（通称NPO法）の成立経緯 4. NPOの活動目的（会則と定款） 5. 目的の実現のために（活動計画の立案と予算） 6. 事例研究（1）農業と共存するまちづくりのNPO 7. 事例研究（2）福祉NPO 8. 事例研究（3）芸術振興のNPO 9. 事例研究（4）1国際協力のNPOの活動を映像に見る 10. 事例研究（4）2目的実現のための目標管理 11. 事例研究（4）3活動資金調達のための積極的な意義 12. NPOに関わる人々のやる気を引き出すために 13. 地元のNPOの活動 14. まとめ 15. 期末テスト 		
教科書	NPO基礎講座3「現場から見たマネジメント」(山岡義典著)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート・授業への参加状況・期末試験		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今年度のみ		

授業科目名	非営利組織論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉・NPO事業論	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	公益学部2～4年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計104名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	非営利組織の事業形態や今後のあり方、関連する政策の現状や見直しなどを調査・研究する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義ガイダンス 2. 政策が実施される仕組み 3. NPO法人の現状 4. NPOの活動 5. 非営利組織論（NPO法人事業者1） 6. 非営利組織論（NPO法人事業者2） 7. 非営利組織論（農協、生協など協同組合） 8. 非営利組織論（社会福祉法人、医療法人など） 9. 行政とのパートナーシップ1（事業委託） 10. 行政とのパートナーシップ2（地方分権と、地域社会における非営利組織のあり方） 11. 英国の非営利組織改革（チャリティ法改革） 12. 英国の非営利組織改革（ソーシャル・エンタプライズ論） 13. 日本の非営利組織改革（公益法人改革） 14. 日本の非営利組織改革に対する政策提言のあり方 15. まとめ 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 福島学院大学

授業科目名	地域ボランティア活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	福祉学部福祉心理学科1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計10名（男子学生7名 女子学生3名）	授業区分	講義、実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	35時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	高齢者福祉施設やボランティアセンターの見学、ボランティア実習などを通してボランティア活動の基礎を学ぶ。		
授業内容	1～2. 事前オリエンテーション・実習に関する諸注意・ボランティアの基本的姿勢と心構え。 3. 高齢者福祉施設やボランティアセンター見学及び、利用者との交流事業～ショッピングフレンド～ 4. ふれあい広場の参加・協力 5～14. 福祉施設・地域ボランティア実習 夏季・冬季休業期間または、休日など授業に支障ない平日。 15. 事後オリエンテーション 実習のまとめ、レポート提出		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	実習先からの出勤簿及び、実習レポートにより単位を認定する。評点は記載せず、GPAには反映しない。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	専門演習Ⅰ ～ボランティアの理論と実践～		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	福祉学部福祉心理学科3・4年次	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計5名（男子学生0名 女子学生5名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの理論と実際にふれ、ボランティア・コーディネータの技術的内容を理解させる。		
授業内容	1. 検討会のテーマ・内容を決定する。障害者との交流活動の準備 2～14. 各自で決めたテーマについて検討会を行う。 15. 前期末試験 16～29. 障害者との交流活動を行い、活動についての報告を各自発表する。 30. 後期末試験		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業参加態度80% 期末テスト20%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今年度のみ(旧カリキュラムのため、今年度で終了)		

○ 千葉商科大学

授業科目名	ボランティア実践論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	公共政策	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	商経学部(2・3・4年次対象)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計21名(男子学生21名 女子学生0名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	この講義はボランティア活動の実践ノウハウや経験談の紹介は行わない。「ボランティアを実践するための基礎概念」について講義をする。その目的は単にボランティア論に終始せず、ボランティアの役割がなぜ最近注目されるようになったのか、なぜボランティアが社会で重要な位置を占めるようになったのかを考察することを通じて、市民と企業、政府、自治体、学校、病院、あるいは市民同士、さまざまなセクターが、立場が異なりながらも「関わり合い」を通じて、社会における諸問題の解決を共同で行う重要性を説くことである。この問題解決プロセスは、さまざまな立場に立つ人間、市民同士が、問題に関与し、解決作業を共同化することで、新たな価値創造と信頼関係の構築を実現させる可能性を持っている。これは「新しい政策論」を説く第一歩であるが、それを実現させる重要な鍵として期待される「ボランティア」が果たすべき役割について総合的検討を行う。		
授業内容	第1回「ボランティア論」そして「政策論」(イントロダクション) 第2回「ボランティア」「NPO」の定義と現状 第3回「ボランティアのモチベーション」 第4回 ボランティアの人材育成 第5回 ボランティア・NPOの組織化とマネジメント 第6回 ミッションと経営理念 第7回 ボランティア活動におけるリーダーシップと支援システム 第8回 ボランティア・NPOのガバナンス 第9回 ボランティア・NPOの経営戦略 第10回 非営利マーケティング、ソーシャル・マーケティング 第11回 協働、パートナーシップ、ネットワーク 第12回 情報社会とボランティア 第13回 総括「市民のエンパワメントによる新しい政策創造をめざして」		
教科書	『ボランティア・NPOの組織論—非営利の経営を考える—』 田尾雅夫・川野祐二編著 学陽書房		
授業の工夫点			
授業の評価方法	1) 平常点(出席は勿論、授業中の積極的な質疑応答の姿勢を評価) 2) 中間クイズ(不定期) 3) 中間レポート 4) 期末筆記試験(定期試験期間に実施)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 和洋女子大学

授業科目名	地域生活支援実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	障害者福祉等	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	家政学部	授業のレベル	
平成20年度履修者数		授業区分	講義、実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	50時間以上（半期）
必修・選択の別	選択		
授業目的	生活・福祉・環境・居住等の分野で、市民組織やNPOやボランティア組織等の非営利組織・企業・自治体等の実践的活動に主体的にかかわることにより、1) 学生自身が問題意識を磨き、2) 大学で学んだ知識や技能を実践で確かめ、3) 現場からの多面的な知見を習得し、4) 感性を磨くことにより、大学における専門学習の習得を豊かにする。併せて自らのキャリア・デザインを考える契機とする。		
授業内容	この授業は＜実習前授業＞＜実習＞＜報告会＞で構成されている。 ＜実習前授業＞実習前授業を通して、もう一つの自分、もう一つの生き方を見つけ、自分にもっともふさわしいボランティアの場を見つける。社会福祉士、教員を目指す人は特に履修することを勧めたい。実習前授業は4月から隔週で行う。 1 授業のガイダンス 全体の進めかた、スケジュール、評価等 2 ボランティアって何だろう？ 教科書を読んでボランティアの意味を深める。 3 ボランティアの活動分野・地域・団体 自分は何かしたいの？何が出来るだろう？ 4 ボランティア経験に学ぶ ボランティアをやっている人・やった人から経験を聞き、学ぶ。 5 ボランティア先を選ぶ 市川市、千葉県の情報等に基づき、自分に適したボランティア先を選び調査。 6 ボランティアにあたっての注意事項 ボランティア・マナーや危機にあたっての注意事項を学ぶ。 7 ボランティア先の決定。 ボランティア先を選び、依頼し、必要な書類や健康診断を行う等の準備。 ＜ボランティア実習＞ 7月から翌年1月までの間の50時間以上。 ＜実践報告会＞ ボランティア体験についての報告会を行い、経験を交流する。		
教科書	金子郁容「ボランティアもう一つの情報社会」		
授業の工夫点	実習前授業、実習、報告会で構成		
授業の評価方法	事前授業、ボランティアの参加状況、ボランティア日誌、ボランティア報告から総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	市川市社会福祉協議会の協力を得て実施。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 関東学院大学

授業科目名	国際化と異文化理解[NGO論]		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経済学部2～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計57名（男子学生51名 女子学生6名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	自分ひとりでも社会を変えたり、社会に貢献するために何が出来るかを、具体的な事例に取り組みることによって学ぶ。NGOに対する関心や理解を深めてもらい、何かひとつでも実践するところまで到達したい。		
授業内容	<p>ことも昨年に続き「ハチドリ計画」をテーマに、地球温暖化に私達一人一人ができることはなにか、その具体的実践を行うNGOを立ち上げます。そのことをとおして、学生自身が自発的にNGOを立ち上げることの意義を学び、現実社会でもそれを応用できる能力を養う。</p> <p>1. 南米の先住民ケチュア族に古くから伝わるつぎのような伝説があります。 これを題材に、「ハチドリ計画」NGOを教室で立ち上げます。 「森が燃えていました」「森の生きものたちは われ先にと逃げていきました」 「でもクリキンディという名のハチドリだけは、いったりきたり、くちばしで水のしずくを一滴ずつ運んで、火の上に落としていきます」 「動物たちがそれを見て、『そんなことしていったい何になるんだ』とって笑います」 「クリキンディはこう答えました『私は私にできることをしているだけ』」</p> <p>2. 具体的に、どのようなNGOを立ち上げるか、参加した学生たちが議論して形にしていき、それに基づいて構内で実践し、たの学生たちにも参加の呼びかけと実践行動を広げていきます。 3.最後に、各自で実践記録をレポートにまとめます。</p>		
教科書	「私にできること-地球の冷やし方」(ゆっくり堂刊)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート作成 70% 出席状況 30%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPOマネジメント		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部2～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計107名（男子学生85名 女子学生22名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	昨今注目されているNPO（民間非営利組織）の役割は、これまで政府が担うものだと考えられていた「公益」や「公共」を、市民の組織が担い、市民の自治による社会をつくりあげていくことです。とはいえ、NPOの多くはまだ未成熟かつ小規模な組織です。今後、NPO自身が力をつけていくことが必要となると同時に、法制度などの環境整備も不可欠です。本授業では、NPOの実態や、NPOをめぐる社会状況についての理解を深めるとともに、今後のNPOセクターと社会のあり方について考えていきます。		
授業内容	NPOの社会的意義や活動実態、運営の課題、NPOに関する法制度のあり方などについて、NPO支援の現場での経験をもとに、具体的な事例を紹介したり、ビデオを上映しながら講義を進めます。受講人数によってはグループ討議などの時間もとりたいと考えています。 また、各回の授業内容についての質問や意見を授業の最後に提出（任意）してもらい、次回の授業の冒頭に質問への回答や補足説明を行います。		
教科書	「知っておきたいNPOのこと」（日本NPOセンター）		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験60%、授業で配布する質問・意見用紙への記載内容40% 定期試験の評価の視点は（1）問題を的確に把握できているか、（2）自分の意見を述べられているか、（3）整理されたわかりやすい文章となっているか。 質問・意見用紙への記載内容の評価の視点は、自分なりに問題意識をもって授業を受けているか。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ソーシャルサービス		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	キリスト教学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	工学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計0名	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間程度
必修・選択の別	選択		
授業目的	校訓を具体的な現場において実践すること。		
授業内容	これは現代社会においてボランティア活動が重要な意義を持つようになったことに対応して設けられた科目である。 本学の建学の精神である「人になれ、奉仕せよ」との校訓を具体的な現場において実践するボランティア活動に、ある一定期間、積極的かつ継続的に参加した学生に対して、諸報告を審査した上で単位として認定する科目である。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	説明会、個人的面談、活動の諸報告を審査して認定。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	総合講座Ⅱ(ボランティア講座)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員 (複数担当)	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア 組織神学 キリスト教文化 障害者福祉論	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英語英米文学科・現代社会学科・比較文化学科)1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計145名(男子学生74名 女子学生71名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	関東学院教育の特色は、「人になれ 奉仕せよ」との校訓の中に示されている。この言葉は、絶対者との真の出会い、人をして他者への奉仕へと向かわしめるというキリスト教信仰の神髄を的確に表すものである。その意味から言えば、真の神との出会いを教育の場に求め続けてきた本学にとって、キリスト教教育の一貫としてのボランティア活動自体は取り立てて新しいことではない。むしろ本学がその長い歴史を通して取り組んできたもの、つまりそれは関東学院の重要な伝統の一部であるといえる。そこで、本講義を通じて多様な視点から本学の特色である「校訓：人になれ 奉仕せよ」に触れて学び、建学の精神の内実化・活性化に供することを願っている。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 建学の精神とボランティア 2. 国際協力とボランティア(1) 3. 国際協力とボランティア(2) 4. 国際協力とボランティア(3) 5. 国際協力とボランティア(4) 6. 人間の尊厳と障害(1)障害とは何だろう 7. 人間の尊厳と障害(2)自立生活とは何だろう 8. 人間の尊厳と障害(3)認知症のある人の尊厳 9. 人間の尊厳と障害(4)生きるとは何だろう 10. 寿町は何処にあるのか—寿町の基礎知識と地理的特徴 11. 寿町はどのように出現したか—日雇労働者の歴史と社会の変化 12. 寿町に行こう—寿町における支援活動とボランティア実習 13. 寿町が伝えるもの—ボランティア実習に参加して得たもの 14. 講座のまとめ 15. 冬季ボランティア実習レポート提出 		
教科書			
授業の工夫点	各界から選りすぐった専門家による講義及びボランティア実習を重視し、「建学の精神」に真摯に取り組んでいる。		
授業の評価方法	<ol style="list-style-type: none"> 1.出席を重んじる。 2.冬学期間中の実習を重んじる。 3.レポート提出(各担当者の指示による)。 4.期末テスト(冬季ボランティア実習レポート)。 		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	海外ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域社会学 農村社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部(比較文化学科)2～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名(男子学生8名 女子学生11名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<ul style="list-style-type: none"> ・「ボランティア」の基本的な考え方を理解する ・様々な国におけるボランティア活動の概要を理解する ・国境を越えたボランティア活動について理解する ・上記について、自らの力で考え、意見を述べられるようになる 		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業ガイダンス：講義のねらいと概要 2. 基本編(1)：ボランティアとは何だ？—ボランティアの定義と歴史、特徴を学ぶ— 3. 基本編(2)：海外ボランティアとは何だ？—海外ボランティアの歴史と意義を学ぶ— 4. 基本編(3)：何故海外ボランティアが必要なのか？—事例をVTRから学ぶ— 5. 現状・考察編(1)：海外のボランティア(1)—その基本とアメリカ・イギリスのボランティア— 6. 現状・考察編(2)：海外のボランティア(2)—先進諸国における様々なボランティア— 7. 現状・考察編(3)：海外のボランティア(3)—途上国におけるボランティア活動— 8. 現状・考察編(4)：中間まとめ&国際ボランティア事例をVTRから学ぶ 9. 現状・考察編(5)：日本の国際ボランティア(1)—青年海外協力隊の活動— 10. 現状・考察編(6)：日本の国際ボランティア(2)—国際NGOの活動(1)— 11. 現状・考察編(7)：日本の国際ボランティア(3)—国際NGOの活動(2)— 12. 現状・考察編(8)：日本の国際ボランティア(4)—国際緊急医療援助(1)災害時の場合— 13. 現状・考察編(9)：日本の国際ボランティア(5)—国際緊急医療援助(2)紛争地の場合— 14. 現状・考察編(10)：国際難民援助の活動について&講義のまとめ 		
教科書	遠藤克弥編『現代国際ボランティア教育論』・勉誠出版・2004年		
授業の工夫点	「ボランティアとは何か」を抑えた上で、海外ボランティアについて学習する。また、「海外ボランティア」の様々な類型について整理したうえで、ひとつひとつの活動の中身について考えていく。特に、「海外ボランティア」活動の様子を理解しながら、学生がそれに対してどのように考えるかを重視した授業を行う。		
授業の評価方法	平常点(出席レポートメール提出・1回10点×4)40点+期末試験60点で評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPOマネジメント		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPO	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文学部（比較文化学科）2～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計17名（男子学生5名 女子学生12名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	変革を求められている日本の社会において、新しい市民社会のあり方を考える。このあり方のひとつとしてNPOの働きと可能性を検討してゆく。そしてNPOの働きとそのマネジメントを学びとしたい。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. 市民社会とNPOについて 3. NPOとNGOの働き 4. 北米のNPO 5. 日本の社会とNPO 6. 企業と行政とNPO 7. NPO法について 8. NPOマネジメント1、組織 9. NPOマネジメント2 ミッション 10. NPOマネジメント3、資金 11. NPOマネジメント4、リーダーシップと人材、ボランティア 12. NPOマネジメント5 協働、 13. NPOの評価 14. NPOの課題と期待 15. まとめ 		
教科書	島田恒著『NPOという生き方』発行PHP研究所 PHP新書335 2005年3月発行		
授業の工夫点	授業の内容はできる限り視覚的に理解できるようビデオ等による展開や、授業もパワーポイントを用いて展開してゆく。		
授業の評価方法	期末試験、出席、レポート等をあわせて総合評価。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際ボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	宗教社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間環境学部現代コミュニケーション学科 1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計117名（男子学生67名 女子学生50名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	歴史と現状を通して国際ボランティア活動をするNGOの真相を学ぶ。		
授業内容	<p>ボランティア精神と活動の観念、歴史と社会においてその活動の位置付けと現状に対する意識を高めることがこの授業の目的である。</p> <p>当講座は、エクスポージャー学習（現場へ行って「五感で学ぶ」こと）を強調するので、学生が体験的に学ぶことを狙っている。尚、英語で運営される授業なので、英語を通して学習できる機会を与えることも目的である。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート提出・出席・参加態度から、総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPOの現状		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	歴史環境保全とNPO NPO会計	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間環境学部人間環境デザイン学科・現代コミュニケーション学科2～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計14名(男子学生9名 女子学生5名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	NPO/NGOが社会を支える3つの柱の一つを担うため、現状では、どのような存在であるのか、また、行政、事業者・企業とどのような協働を実現しているのかを知る。NPO団体比較調査を行う際の比較指標項目の抽出により、どのような視点が必要であるのかを探る。		
授業内容	21世紀は、行政(public)、事業者・企業(private)に加え、第3のセクターとしてNPO・市民活動団体・組織(Non Profit Organization、Not only for Profit Organization)も社会を支える時代となる。市民社会の到来とは具体的にどのようなことをさすのか？ NPOの現状を認識し、私たちは、どのように市民社会を形成していけばよいのかという点を理解することを目指す。		
教科書	山内直人著『NPO入門』日経文庫 日本経済新聞社		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験の成績:50% 課題提出状況:25% 出席状況:25% 中間試験の成績:実施せず、ただし、毎回のクイズにこたえることにより、出席状況と内容理解度を確認する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPOの実践		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	歴史環境保全とNPO NPO会計	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間環境学部人間環境デザイン学科・現代コミュニケーション学科3～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計16名(男子学生11名 女子学生5名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	「あなたのつくりたいNPO」の設立手続き過程をたどる。各自が想定するNPOの公益性(不特定多数の利益)と使命(存在意義)をきちんと確認する。		
授業内容	NPOの設立から解散までのライフ・サイクル・ストーリーを仮想設定し、NPOのマネジメントについて、事例から実践例を分析し、理解する。とくにそれらのNPOとかかわる多様なNPO/NGO、および関係する助成団体や組織、行政など、そしてボランティアをはじめとする多彩な市民・国民を想定し、Q&A形式でNPOの運営(マネジメント)についてのセンスを磨く。環境系NPOを主な参考事例とする。各自が設定したNPOの定款、書類等、PR資料をつくり、NPO法人認証手続きおよび会員募集についてのイメージトレーニングを行う。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験の成績:実施せず 課題提出状況:50% 出席状況:25% 中間試験の成績:実施せず。ただし、毎回のクイズに答えることで内容の理解程度と出席状況を確認する。その他(プレゼンテーション):25% 「あなたのつくりたいNPO」を紹介し解説する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 相模女子大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	現代自治体論	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	学芸学部、人間社会学部、栄養科学部（1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計115名（男子学生0名 女子学生115名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	人はなぜボランティアをするのか。その根底には、はっきりしないけれども、ともかくやりたいという気持ちがあると思う。これを大事に育むにはどうしたらよいか、この講義ではボランティアを法と政策の観点から考えます。		
授業内容	<p>福祉、環境、まちづくりなどさまざまな公共分野において、政府と並んで市民・ボランティアが公共の担い手であることを描き出し、ボランティアがその思いを実現していくための道すじを考えます。</p> <p>第1回 はじめに ガイダンス（授業の全体像、受け方、試験等について）</p> <p>第2回 ボランティアの基礎1（定義、歴史等）</p> <p>第3回 ボランティアの基礎2（NPOとの関係）</p> <p>第4回 ボランティアの基礎3（ボランティアの現状・実態）</p> <p>第5回 ボランティアの法と政策1（現状・体系）</p> <p>第6回 ボランティアの法と政策2（福祉政策）</p> <p>第7回 ボランティアの担当者をお招きして1（福祉）</p> <p>第8回 ボランティアの法と政策3（環境政策）</p> <p>第9回 ボランティアの担当者をお招きして2（環境）</p> <p>第10回 ボランティアの法と政策3（まちづくり政策）</p> <p>第11回 ボランティアの担当者をお招きして3（まちづくり）</p> <p>第12回 ボランティアの法と政策4（国際化政策）</p> <p>第13回 ボランティアの担当者をお招きして4（国際）</p> <p>第14回 ボランティアの法と政策5（あり方）</p> <p>第15回 まとめ・確認</p>		
教科書	レジュメ配付		
授業の工夫点	授業は参加型、ときにはワークショップをまじえて行います。実際にボランティアにたずさわっている人に来ていただき、現場の動きを学びます。		
授業の評価方法	出席と試験		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO概論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	経済政策と公共システム	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	学芸学部人間社会学科(2年次、3年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計21名(男子学生0名 女子学生21名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	NPO、NGOに代表される非営利・共同セクターの社会、経済における位置付けを理解することを目標とする。 統計データやネット調査をもとに非営利組織のマネジメントの実態に迫ることにより、非営利組織に対するさまざまな誤解を解いていくことをテーマとする。		
授業内容	<p>「NPO」には、特定非営利活動法人を指す狭義のNPOと非営利組織全般を指す広義のNPOが含まれる。 この講義では主として広義のNPOの立場から、NPOの実態に迫っていく。わが国のNPOの現状や国際比較、NPO誕生の背景を紹介するとともに、NPOが積極的に活動する分野を選び、NPOの強さを分析する。また、営利企業とは異なるNPOのマネジメントの特徴や政策的観点にも言及する。</p> <p>第1回 イントロダクション:クイズで考えるNPO神話 第2回 NPOの鳥瞰図 第3回 わが国のNPOの現状(1) 第4回 わが国のNPOの現状(2) 第5回 NPOの国際比較 第6回 非営利革命の背景(1) 第7回 非営利革命の背景(2) 第8回 さまざまなNPO(1):教育・文化分野 第9回 さまざまなNPO(2):医療・福祉分野 第10回 さまざまなNPO(3):国際的な活動を行うNGO 第11回 さまざまなNPO(4):市民社会とNPO 第12回 NPOのマネジメント(1) 第13回 NPOのマネジメント(2) 第14回 NPOの制度と政策 第15回 講義のまとめ</p>		
教科書	<p>・教科書 山内直人『NPO入門』第2版、日経文庫、日本経済新聞社、2004年。 ・参考書 柏木宏、『NPOマネジメントハンドブック—組織と事業の戦略的発想と手法』、明石書店、2004年。 山内直人『ノンプロフィットエコノミー—NPOとフィランソロピーの経済学』、日本評論社、1997年。</p>		
授業の工夫点	特になし		
授業の評価方法	授業時間中に実施する試験(50点)と関心を持った非営利組織について調べるレポート(50点)の合計点で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 鶴見大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部1年次以上	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計98名(男子学生52名 女子学生46名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動における原理的諸問題の考察や国内外のボランティア活動の状況を通して、それぞれ独自のボランティア観が形成されることを目的としている。		
授業内容	ボランティア活動の原理的諸問題では、自発制・無償制・公共制をとりあげ、日本社会におけるボランティア活動の基本的諸問題の理解に努める。さらに、日本社会のボランティア活動と国際貢献分野におけるボランティア活動の状況を、ビデオやスライドを用いながら紹介します。特に、社会教育施設のボランティア活動ではボランティアの自己形成に焦点を据える事によって、ボランティア活動に含まれる学びの構造を分析し、ボランティア活動の学びの可能性について追求する。		
教科書	なし		
授業の工夫点	スライドやビデオなど、できるだけ多様な教材を取り入れる。		
授業の評価方法	課題レポート・出席上京・受講態度によって総合的に評価する。 割合は下記のとおり。 1.課題レポート 40% 2.出席状況 30% (全授業回数数の75%以上の出席が必要) 3.受講態度 30%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 山梨学院大学

授業科目名	ボランティア・NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	法学部政治行政学科1年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計27名（男子学生19名 女子学生8名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容	<p>この授業では、現代日本社会でその活躍の場を拡げているボランティアやNPOについて、具体例を沢山紹介しながら、その魅力や課題、問題点などを掘り下げていきます。</p> <p>近年、行政が解決すべき政策的課題がますます多角化していくなかで、行政のみでの問題解決に限界があることが、多くの領域でわかってきました。そこで、先進的な取り組みを続けているボランティア・NPOと、行政がどうパートナーシップ（連携）して、地域（政策）課題を解決していくか、が大きな争点の一つになっています。</p> <p>そこで、この授業では、現場のゲスト講師をお呼びしたり、ボランティアやNPOに関する国内外の様々な実例を用いたりしながら、初學者の皆さんにもイメージしやすい、理解しやすい内容を準備しています。また、講義はなるべく皆さんの意見を伺いながら、時にはグループで考えて頂きながら、出されてきた意見を元に次の展開につなげていく、そういう双方向で面白い講義になれば、と願っています。</p> <p>これをお読みの皆さんの中には、これまでボランティアを積極的にしてきた人も、中高生時代に強制的にさせられてイヤな思いをした人も、「まったく自分には関係ないこと」と信じている人も、いろいろいると思います。皆さんが、「ボランティア・NPO」にまつわる色々なことを深く知り、自分でも色々考え、他人の意見も聞いているうちに、これまで自分が持っていた「囚われ」のようなものに気づき、そこから新しい視点がボランティア・NPOに対してだけでなく、自分や社会に対しても抱けるようになって頂ければ、それがこの授業のねらいです。</p>		
教科書	テキスト「よくわかるNPO・ボランティア」（川口・田尾・新川編、ミネルヴァ書房）		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続			

○ 流通経済大学

授業科目名	ボランティア活動論及び実習Ⅰ・Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会科学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	社会学部2年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計21名（男子学生13名 女子学生8名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	施設を訪問いたします。
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	さまざまなボランティア活動について学び、自分のライフサイクルのなかでのボランティア活動について考えていく。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア活動と評価 2. 青年期とボランティア活動 3. 環境問題とボランティア 4. 国際化とボランティア活動 5. イギリスのボランティア活動 6. ビデオ（地域社会とボランティア） 7. 青年海外協力隊と平和部隊 8. ビデオ（中国での植林ボランティア） 9. 施設訪問（予定） 10. ボランティアの歴史と基本用語 11. まとめ（重要事項の確認、試験の注意など） 		
教科書	毎回プリントを配布する。		
授業の工夫点	特になし		
授業の評価方法	レポートにより評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 獨協大学

授業科目名	全学総合講座(地域再生システム論—これからの「まちづくり」のヒントを探る)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	経営学など	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1～4年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計292名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域の活性化と地域の再生を制度面から学ぶ。		
授業内容	<p>講義概要 この科目は内閣府や草加市などの協力を得て実施している講義である。具体的な施策や事例などを紹介し、例示しながら講義する。</p> <p>各講義の個別テーマは授業計画(最初の授業時に配布する)のとおりであるが、地域の中で問題となっていることを中心に、テーマ設定を行っている。</p> <p>この結果、地域の中で起きている様々な事例を通して、地域の実状が理解できると共に、地域の課題についての新たな認識と共に、自分が住んでいる地域や将来住むであろう地域の可能性に関して、示唆にとんだ内容が展開されることで、地域で求められる支援活動や人材に関する具体的な問題意識を得ることができるであろう。</p> <p>授業計画 1.ガイダンス 2.日本における特区の方向性 3.起業家支援策 4.中心市街地の活性化 5.安全なまちづくり 6.河川浄化の取り組み 7.ちよだボランティアチケット 8.高齢者に優しいまちづくり 9.埼玉県のNPO推進について 10.埼玉県のNPOの状況 11.男女共同参画 12.地域再生成功への共通項ビジョン・リーダーシップ・システム 13.防災対策(打診中) 上記授業計画は講師等の都合により変更することがあります。</p>		
教科書	その都度、指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	平常点70%、レポート30%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	講師派遣		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	教育科学特殊研究Ⅷ(ボランティア論)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	スポーツレクリエーションなど	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	国際教養学部2～4年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計33名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの諸様相について検証し、基本的ボランティアの組織(NPO/NGO)活動を理解。		
授業内容	<p>講義目的・講義概要 ボランティアの諸様相について検証し、基本的ボランティアの組織(NPO/NGO)活動を理解。 原義である自主性・無償性・社会性と歴史的意義と活動を現代社会の中で実施検証していくフィールドワークである。 歴史的・社会的変遷と関連事項(宗教・医学)の検索と説明。 産業社会と人間生活の方向性の接点を解明し、本来人間が保持している感情(優しさ・介護心・いたわり)の表現と活用の意義を理解し、社会的立場(小地域的・組織的・国際的)の研究と組織的な協力関係や団体のマネージメント能力の基本的知識の把握 救急法の体得(心肺蘇生術)(介護・手話の知識習得) 手話入門・草加市探訪</p> <p>授業計画 ① 講座ガイダンス・班編成 ② 草加市の福祉施策について ③ キャンパス内のボランティア ④ 社会・養護施設・日常での必要性 ⑤ (老人体験・介助研究) ⑥ 手話 ⑦ 災害時の応急法について ⑧ 心肺蘇生法 ⑨ NPOマネージメントについて ⑩ 組織運営の基礎と実状について ⑪モチベーションとコミュニケーションについて ⑫(災害を想定して、自然の中での生活体験) ⑬ 草加市探訪・まとめ</p>		
教科書	適宜プリント配布		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席、レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	講師派遣、実習道具の借用		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際NGO・ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	外国語学部2～4年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計170名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	NGOの現状と課題を理解し、健全で効果的な国際協力に貢献するNGOのあり方を考える。		
授業内容	<p>講義概要 総論として国際的に活躍するNGOの変遷、今日的課題等、NGOの全体像を把握した後、“国際協力とNGO”をテーマとした各論を学ぶ。特に、国際社会の現状を反映した「人間の安全保障」の概念とNGO活動との関連に焦点を当て、平和構築分野での日本のNGO活動を中心に考察する。 講師は、国際協力実務者としての立場から、なるべく現場の状況を反映した講義になるよう工夫したい。</p> <p>授業計画 1. 講義全般の説明。NGO活動とは何か。 2. 世界情勢の変化とNGO 3. NGO活動の歴史と変遷(1) 4. NGO活動の歴史と変遷(2) 5. 国際協力におけるNGOの役割 6. 他のアクターとNGO(1)国際機関 7. 他のアクターとNGO(2)政府機関・企業 8. 「人間の安全保障」・平和構築とNGO活動 9. 緊急人道支援活動とNGO 10. NGO活動の具体例(国境なき医師団など) 11. カンボジアの事例を考える 12. NGOの基盤強化 13. まとめ - 国際協力NGOのあり方</p>		
教科書	「国際協力NGO」(今田 克司・原田 勝広編著) 「シリーズNPO—NPO/NGOと国際協力」(西川潤・佐藤幸男編著) その他、授業で適宜紹介		
授業の工夫点			
授業の評価方法	期末定期試験90%、平常授業で課すレポート等10%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	現代社会Ⅰ(NGO論)、国際交流研究Ⅵ(NGO論)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力	共通・専門等の別	共通、専門
開設学部(学科)及び年次	全学部1～4年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計300名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	具体的事例をもとにNGOのあり方を考える。		
授業内容	<p>講義目的・講義概要</p> <p>紛争解決や平和の実現、人権、環境、開発(貧困)問題など、国境を越える地球規模の公共的な課題に自発的、積極的に取り組む市民を主体とした活動が目ざされている。こうした組織は主にNPO/NGOと言われ、非営利、非政府の立場で独自の視点と発想を持って、各地での活動に取り組んでいる。</p> <p>この講座では、紛争問題では、イラク、アフガニスタン、パレスチナなどの現地における活動を題材にしながら、考える視点や安全対策など具体的な事例をもとに活動のあり方を考える。また、開発問題では復興から開発期に入ったカンボジアやラオスを事例に、開発のプロセスで起こる様々な人権侵害、自然破壊などについて考える。また、復興、開発期における政府開発援助(ODA)の諸問題についても具体的な事例をもとに検証する。</p> <p>また、こうした紛争地等で活動するNGOが、力を合わせることで、世界を動かす力を発揮する事例として、対人地雷全面禁止条約の成立過程(オタワプロセス)についても詳しく説明する。</p> <p>授業計画</p> <p>①～②「対テロ戦争」と市民社会Ⅰ／イラクの現状</p> <p>③～④「対テロ戦争」と市民社会Ⅱ／アフガニスタンの現状</p> <p>⑤ スーダンの現状とNGOの取り組み</p> <p>⑥ NGOによる復興・開発協力の事例(カンボジア)</p> <p>⑦～⑧ 対人地雷の廃絶キャンペーンに学ぶNGOのネットワーク</p> <p>⑨ パレスチナ問題を考える</p> <p>⑩ アフリカにおけるHIV/AIDSの現状</p> <p>⑪ 政府開発援助とNGO</p> <p>⑫ 東アジアの中の日本と私たち</p> <p>⑬ NGOの組織運営と資金</p>		
教科書	日本国際ボランティアセンター著「NGOの選択」 地雷廃絶日本キャンペーン編「地雷と人間」		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート、平常授業の課題		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	全学総合講座(NPO論 人を変える・地域を変える・世界を変える)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	経営学など	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1～4年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計297名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	企業やNPOの社会貢献活動のさまざまな取り組みについて学ぶ。		
授業内容	<p>講義概要</p> <p>ドラッカーは「非営利組織の経営」の中で、市民社会を構成するセクターとしてNPOは経営学的にも注目される対象であるとして、NPOの運営において、ミッションの重要性を指摘すると共に、マーケティング戦略、人材育成、成果測定といった企業並みのマネジメントの必要性を主張した。</p> <p>その背景には、もはや旧来の事前寄付に頼っては財政的に成り立たないという、米国をはじめとする先進国のNPOが直面する危機があったが、NPOが生き残りをかけて事業展開に力を入れるにつれ、新たなパートナーとして企業に働きかけ、企業と共に地域の問題解決に向けて進む動きが見られるようになった。</p> <p>企業にとってもCSRを果たすべきことが求められ、その流れの中で、NPOと共にコミュニティ支援活動に乗り出す事例が増えてきた。</p> <p>もとよりNPOはその組織使命の遂行のために企業と協力するのであるが、NPOにとって不足しがちな経営資源(資金・人材など)を企業によって補えることから、企業への依存関係が発生するというリスクを抱えている。</p> <p>企業への依存が強まると、資本拡大を目指す企業にとって好都合のように利用される可能性を増すことになるが、これらもとりもなおさず公共的な使命を持つNPOにとっての倫理的基盤が損なわれることを意味する。</p> <p>これら諸問題に関して、本講義では正面から取り上げて展開する。</p> <p>授業計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. フェアトレードと企業のCSRの連携 3. テーマ:未定 4. 紙製飲料容器「カートカン」 5. テーマ:未定 6. 企業とNPOの“本当”のパートナーシップとは? 7. 未定 8. テーマ:未定 9. 企業人も地域社会とのかわり方を求めている 10～13. テーマ:未定 		
教科書	その都度、指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	平常点70%、レポート30%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	講師の派遣		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 城西大学

授業科目名	ヴォランティア活動		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部2年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計5名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	「地域ボランティア論」および「国際ボランティア論」の実習科目として、ボランティア活動の研修を通じて、社会人としてのエチケットを身につけるとか人格の涵養に努めて、奉仕活動や社会貢献・地域貢献の重要性を理解し、社会人としての心構えを学ぶ。		
授業内容	<p>前期</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア活動の研修先(候補・期間) 2. 4月から5月に履修者のボランティア活動計画をたてる 3. 実習先の紹介、実習にあたっての心構えを指導する。 4. 実習に先立っての必要な研修事項等を指導する。 5. 学生個々人のボランティア活動の実習期間は最低1週間 <p>後期</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. ボランティア活動中に本人から活動状況報告を受ける。 7. 活動終了に活動報告書を提出し、報告会を実施する。 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア先からの報告・ボランティア活動報告書・「報告会」での報告により、総合的に評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	鶴ヶ島市社会福祉協議会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部1年次・現代政策学部1年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計180名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	私たちが生活している地域社会は、福祉はもとより自然・環境、国際支援、文化等々のあらゆる領域においてボランティアをはじめとする市民の活動が展開されている。ボランティア活動等市民活動の歴史的意義と役割から地域社会における市民の主体性・自立性等について考える。ボランティアは、自らが考え共感することが大切なので、講義、ワークショップなど参加型を中心とする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティアとは①：自分たちの考えるボランティアについて考える 2. ボランティア活動とは②ワークショップを通じて考える 3. ボランティアセンターとボランティアコーディネーターの役割 4. ボランティア活動者から聞く①：鶴ヶ島に暮らす方々から 5. ボランティア活動者から聞く②：視覚障害者、障害者理解 6. ボランティア活動者から聞く③：高齢者の生活と支援者 7. ボランティア活動者から聞く④：国際理解活動 8. ボランティア活動者から聞く⑤：環境活動 9. ボランティア体験学習①アイマスク体験 10. ボランティア体験学習②知的障害者疑似体験 11. ボランティア体験学習③車椅子体験 12. ボランティアとNPO 13. 振り返り 14. ボランティア活動の現状と課題 15. ボランティア活動宣言 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への出席(40%)と授業時レポート(10%)、筆記試験(50%)		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	鶴ヶ島市社会福祉協議会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部1年次・現代政策学部1年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	今日、国際社会におけるボランティアの重要性が盛んに指摘されている。本講義は、国際社会におけるボランティア活動の重要性について、正しい認識を持つことを目的に設置された。ボランティア活動を実践してみたい学生に対しては、正しい知識とどのような実践活動があるかについての情報および指針を提供することも目的としている。また、国際ボランティア活動が展開されている地域における社会状況、環境についても正しい知識を持つとともに活動の可能性についての探求も行う。なお、ボランティアが展開される地域は広範であるため、対象地域の事例として中国を取り上げる。その社会的な特徴とボランティア活動の実態を明らかにすることとする。講義は複数の講師による講義により構成されており、各講師の方々が実際にされている国際社会における活動を中心として講義は展開される。		
授業内容	<p>講義スケジュール</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 入門：国際社会で展開されるボランティア活動 2 国際社会におけるボランティアニーズ(1)：異文化社会における活動 3 国際社会におけるボランティアニーズ(2)：国際ボランティアとキャリアプラン 4 国際社会におけるボランティアニーズ(3)：国際社会におけるボランティアニーズ事例 5 国際社会におけるボランティアニーズ(4)：国際機関とボランティアニーズ 6 地域からのボランティア発信－民間ボランティア活動の組織と実践(1) 7 地域からのボランティア発信－民間ボランティア活動の組織と実践(2) 8 地域からボランティア発信－民間ボランティア活動の組織と実践(3) 9 国際ボランティア受入れ社会の実態中国の事例(1)改革の成果と諸問題 10 国際ボランティア受入れ社会の実態中国の事例(2)中国における活動の歴史と展開 11 ボランティア活動の実践(1)フェアトレード 12 ボランティア活動の実践(2)NPO組織作りとネットワーク形成 13 ボランティア活動の実践(3)異文化体験と適応 14 ボランティア活動の実践(4)体験の交差とネットワーク 15 国際社会の多様性とボランティアニーズ 		
教科書			
授業の工夫点	複数講師が担当		
授業の評価方法	複数の講師による授業構成となるので、講師のうち3人による試験問題を定期試験において行う。試験は3つの試験の平均点によって評価する。(100%定期試験による)		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

○ フェリス女学院大学

授業科目名	キリスト教Ⅲ(1)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	新約聖書学、キリスト教神学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部、国際交流学部、音楽学部1,2,3,4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計16名(男子学生0名 女子学生16名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	5日間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	障害児に関わることの目的意識をはっきり自覚する。さらに時間を厳守する社会人としての責任感と、実習の全日程を無遅刻・無欠席で持ち堪えるだけの体力を養う。		
授業内容	知的障害児のための施設である学校法人・聖坂養護学校(横浜・山手)で、ボランティア活動実習を行う。学級で担任教師の指導のもと、養護学校の生徒たちと生活を共に体験する。		
教科書	特になし		
授業の工夫点	実習に先立って学内で数回の会合を行なうことにより、履修者の意識を高め、活動現場に対する想像力を高めている。		
授業の評価方法	参加状況(50%)、レポート(50%)		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	学校法人・聖坂養護学校		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	キリスト教Ⅲ(2)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	キリスト教、ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部、国際交流学部、音楽学部1,2,3,4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計4名(男子学生0名 女子学生4名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	4日間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	寿地区での取り組みは、地域諸団体と協力して行なわれており、寿地区センターはこれらの地域活動と教会のボランティアをつなぐ役割を果たしている。ここで実際にボランティア活動を体験し、「隣人を愛する」とはどういうことかを、からだで考えたい。		
授業内容	寿地区は日本の4大寄せ場の一つである。この地域の中でキリスト教を言葉や理念としてではなく、からだで受け止め、実践しようとしたら、どのような生き方・取り組みになるだろうか。日本社会の「最下層」を構成する寄せ場「寿地区」で、差別され、見えない壁に閉ざされた「寿地区」で、日本キリスト教団神奈川教区寿地区センターで行なわれている実践を現場で体験しながら学習する。		
教科書	『最下流ホームレス村から日本を見れば』、居住福祉ブックレット、ありむら潜 著 『釜ヶ崎と福音』、岩波書店出版、本田哲郎著、 『寿地区センター20年 いのちの灯 消さない』、日本基督教団神奈川教区寿地区センター発行		
授業の工夫点	年末年始の休学期間を実習期間を設定することにより、野宿を強いられている「仲間の命をみんなで守る」ことを目的とした活動《越冬》を体験させています。 ※「越冬」とは、一人の死者(餓死・凍死・病死)も出さないでみんなで春を迎えるための活動。		
授業の評価方法	参加状況(50%)、レポート(50%)		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	日本キリスト教団神奈川教区寿地区センター		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	キリスト教Ⅲ(3)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	キリスト教	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部、国際交流学部、音楽学部1,2,3,4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計5名(男子学生0名 女子学生5名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	5日間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	現場で問題を考えることを通して、各自がテーマに沿ってキリスト教・世界・自らの接点を見出しうることを目標としたい。		
授業内容	平和と人権、多文化・多民族共生をキーワードに、横浜・川崎のNPOの活動現場を実際に訪問し、その具体的な活動に学び、自らを振り返ることにより、現代を生きるキリスト教に出会う。		
教科書	特になし		
授業の工夫点	建学の精神“For Others”「他者のために他者と共に」を、生涯を通じて探求する視点を涵養することを目標に、キリスト教信仰に押しだされて市民活動やボランティア活動の現場で働く「現場のキリスト者」との出会いの場を提供し、出会いがもたらす豊かさや各自が持っている可能性に気づいていくことができるようにしている。		
授業の評価方法	レポート(50%)、出席・参加状況(50%)		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	カラバオの会(寿・外国人出稼ぎ労働者と連帯する会)、かながわ・女のスペース“みずら”(女性シェルター)、川崎ふれあい館		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部、国際交流学部、音楽学部1,2,3,4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計前47、後50名(男子学生0名 女子学生前47、後50名)	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	個人に委ねられている。
必修・選択の別	選択		
授業目的	「ボランティア」という言葉は日常の中で何気なく使われているが、その本質的理解はいまだ十分ではない。この授業では、ボランティアの意味を知識のみならず実践的体験によって理解することが目標である。また、バリアフリー社会の実現に向けた取り組みを社会福祉の立場から考えたい。		
授業内容	世界有数の経済大国である日本においても、しょうがい児者、貧困者など社会的弱者が存在しているということを知り、「共に生きる(共生)」という言葉を経験的に理解する。本授業は(1)福祉活動とボランティア活動の違い(2)ボランティア活動への理解(3)社会福祉実践(福祉施設見学)と国際ボランティア活動理解(4)私たちの「内なるバリア」と「バリアフリー社会」の実現に向けて(5)ボランティア実践報告 などの内容をもつ。		
教科書	『いちばんはじめのボランティア』(樹村房)		
授業の工夫点	「ボランティア」の理念、歴史、法制度を学び、現実社会にある様々なニーズを実感させるため、キャンパス内バリアフリー体験など、体験型活動を取り入れ、国内外の現場で活動する人の話を聞く機会をもち、ボランティアの必要性を身近に感じられるようにしている。授業外でのボランティア活動を行ってもらい、リフレクションのレポートを提出させている。ボランティア先について、ボランティアセンターに相談するよう勧めている。		
授業の評価方法	出席状況(40%)、授業内課題(40%)、ボランティア活動に基づくレポート(20%)		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動1		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	その他(本科目の履修は学外でのボランティア活動によってなされるので、時間割外の科目である)
担当教員の専門分野	ギリシア・ローマ文化の中のユダヤ教とキリスト教	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部、国際交流学部、音楽学部1,2,3,4年次	授業のレベル	その他(本科目では国内外における実動45時間以上の活動によって1単位が取得できる)
平成20年度履修者数	計前4、後0名(男子学生0名 女子学生前4、後0名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	実動45時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	学生は、自主的な計画に基づいたボランティア体験によって、自己責任に基づく社会参加の意義を学び、自己の成長につなげることが期待される。		
授業内容	国内外におけるボランティア活動によって単位が取得できるが、この時間をどのように達成するかは学生の自由な計画に委ねられる。また、ボランティアセンターではボランティア活動に不可欠な多くの注意事項を助言するので、情報収集の開始から活動終了まで、つねにボランティアセンターと相談しながら実施することとなる。		
教科書	特になし		
授業の工夫点	活動にあたり、座学による基礎知識を提供できるよう「ボランティア論」を設け、セット履修を推奨している。活動開始前に、ボランティア講習会を受け、ボランティアセンターに活動計画書を提出するなど、ボランティアコーディネーターの助言を受け、活動中は、必要に応じて、ボランティアセンターに相談。活動中の記録や日誌、受け入れ先の方のコメントを受けた活動終了書とレポートを提出した後、履修登録を行い、担当教員の面談を経て、認定される。事前学習～実施の部分をボランティアセンターとの連携で、終了後のリフレクションについては、教員との面談による内容の深まりを期待する体験型授業である。		
授業の評価方法	活動計画書、活動日誌、報告書、面接結果などを総合して評価を決定する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア受け入れ先については、ボランティアセンターとの個別相談の中で、学生の希望をふまえて個別に推薦、学生の選択に基づき、ボランティアセンターが、団体確認、協力依頼をしている。受入協力団体は、国内外、多岐の分野にわたる。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動2		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他（本科目の履修は学外でのボランティア活動によってなされるので、時間割外の科目である）
担当教員の専門分野	平和学、アジア太平洋地域の開発と環境問題	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	文学部、国際交流学部、音楽学部 2,3,4年次	授業のレベル	その他（本科目では国内外における実動90時間以上の活動によって2単位が取得できる）
平成20年度履修者数	計前1、後0名（男子学生0名 女子学生前1、後0名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	実動90時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	学生は、自主的な計画に基づいたボランティア体験によって、自己責任に基づく社会参加の意義を学び、自己の成長につなげることが期待される。		
授業内容	国内外におけるボランティア活動によって単位が取得できるが、この時間をどのように達成するかは学生の自由な計画に委ねられる。また、ボランティアセンターではボランティア活動に不可欠な多くの注意事項を助言するので、情報収集の開始から活動終了まで、つねにボランティアセンターと相談しながら実施することとなる。		
教科書	特になし		
授業の工夫点	活動にあたり、座学による基礎知識を提供できるよう「ボランティア論」を設け、セット履修を推奨している。活動開始前に、ボランティア講習会を受け、ボランティアセンターに活動計画書を提出するなど、ボランティアコーディネーターの助言を受け、活動中は、必要に応じて、ボランティアセンターに相談。活動中の記録や日誌、受け入れ先の方のコメントを受けた活動終了書とレポートを提出した後、履修登録を行い、担当教員の面談を経て、認定される。事前学習～実施の部分をボランティアセンターとの連携で、終了後のリフレクションについては、教員との面談による内容の深まりを期待する体験型授業である。		
授業の評価方法	活動計画書、活動日誌、報告書、面接結果などを総合して評価を決定する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア受け入れ先については、ボランティアセンターとの個別相談の中で、学生の希望をふまえて個別に推薦、学生の選択に基づき、ボランティアセンターが、団体確認、協力依頼をしている。受入協力団体は、国内外、多岐の分野にわたる。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動3		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他（本科目の履修は学外でのボランティア活動によってなされるので、時間割外の科目である）
担当教員の専門分野	時代様式をふまえたオルガンとクラヴィコードの演奏	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	文学部、国際交流学部、音楽学部2,3,4年次	授業のレベル	その他（本科目では国内外における実動270時間以上の活動によって6単位が取得できる）
平成20年度履修者数	計前0、後0名（男子学生0名 女子学生前0、後0名）	授業区分	実習
単位数	6	ボランティア体験の時間数	実動270時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	学生は、自主的な計画に基づいたボランティア体験によって、自己責任に基づく社会参加の意義を学び、自己の成長につなげることが期待される。		
授業内容	国内外におけるボランティア活動によって単位が取得できるが、この時間をどのように達成するかは学生の自由な計画に委ねられる。また、ボランティアセンターではボランティア活動に不可欠な多くの注意事項を助言するので、情報収集の開始から活動終了まで、つねにボランティアセンターと相談しながら実施することとなる。		
教科書	特になし		
授業の工夫点	活動にあたり、座学による基礎知識を提供できるよう「ボランティア論」を設け、セット履修を推奨している。活動開始前に、ボランティア講習会を受け、ボランティアセンターに活動計画書を提出するなど、ボランティアコーディネーターの助言を受け、活動中は、必要に応じて、ボランティアセンターに相談。活動中の記録や日誌、受け入れ先の方のコメントを受けた活動終了書とレポートを提出した後、履修登録を行い、担当教員の面談を経て、認定される。事前学習～実施の部分をボランティアセンターとの連携で、終了後のリフレクションについては、教員との面談による内容の深まりを期待する体験型授業である。		
授業の評価方法	活動計画書、活動日誌、報告書、面接結果などを総合して評価を決定する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア受け入れ先については、ボランティアセンターとの個別相談の中で、学生の希望をふまえて個別に推薦、学生の選択に基づき、ボランティアセンターが、団体確認、協力依頼をしている。受入協力団体は、主に国内外、多岐の分野にわたる。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地球社会現地実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他（活動約2週間）
担当教員の専門分野	各位	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文学部、国際交流学部、音楽学部2,3,4年次	授業のレベル	その他（学生個人の活動に委ねられる）
平成20年度履修者数	計0名（男子学生0名 女子学生0名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2週間を基準とする
必修・選択の別	選択		
授業目的	アジアをはじめとする海外の人々と生活を共にし、対話し、討論するといった体験型学習を通して、従来とは異なる「もうひとつの視点」から地球社会で起こっている政治、経済、文化、開発、人権、環境、及び国際協力等の諸問題について理解と問題意識を深め、国際交流の真の意味について考える。		
授業内容	国連・国際機関、政府機関、NGOが主催するボランティア活動、スタディー・ツアー、セミナー等の国際交流活動に参加し、国籍、文化、宗教、価値観、生活様式の異なるさまざまな人々と交流を図る。		
教科書	準備過程で指導教員または派遣・受け入れ機関が指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	準備作業、現地実習、事後報告書の評価に基づき総合評価をする。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	共生のフィールドワーク		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	多文化共生ネットワーク論、キリスト教学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文学部、国際交流学部、音楽学部 1,2,3,4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計23名（男子学生0名 女子学生23名）	授業区分	演習、実習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	10日間
必修・選択の別	選択		
授業目的	生活・労働の相談や学習支援などの活動に参加して、それらの活動を担っている人々、そこに集う人々との協働と交流の現状を体験的に学ぶ。その体験を通して日本社会における多文化共生の課題が何であるかを実態に即して理解する。		
授業内容	日本に暮らす異文化の背景をもつ人々の生活・労働の相談や子どもたちの学習支援などの活動に参加する。受け入れ側のプログラムや状況に即してフィールドワーク実習をおこない、実施結果を中間報告、最終報告として発表する。		
教科書	各フィールドワーク先の紹介図書など。		
授業の工夫点	サービスマーケティング		
授業の評価方法	実習出席、及びファイナル・レポートに基づいて評価する。		
授業のサポート体制	・現場の指導者との事前相談による、現場での学生へのアドバイス ・授業担当者によるリフレクション指導		
学外の関係機関・団体との連携	YOKE、多文化まちづくり工房、川崎ふれあい館、みずら、外国人生活教育センター信愛塾		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 敬愛大学

授業科目名	ボランティア活動Ⅰ・Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	造形	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	国際学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計140名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	1995年の阪神淡路大震災以降、ボランティア活動の重要性は認識されてきた。しかし、依然として、①個人の意思と自発性に基づくボランティア活動と、②上意下達（じょういかたつ）に基づく奉仕活動の混同が認められます。そこで、この差異をさらに「弱者救済のための自己犠牲的行為」ないし「安価な代替労働力」と考えがちな「日本的常識」の非を、具体的な体験談や事例などを通して理解してもらいます。		
授業内容	第1週 オリエンテーション 第2～10週 文献にみるボランティア論 第11～14週 ボランティア体験者（学外者）の体験 事例報告会—2～3名を予定— 第15週 まとめ		
教科書	金子郁容「ボランティア—もう一つの情報社会—」岩波新書（1997年）		
授業の工夫点			
授業の評価方法	自らのボランティア実践体験を記したレポートの提出と出席状況に総合評価。 その際、①レポート、②実践したところの証明書、③自分が活動している写真、の3点を添えること。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 長野大学

授業科目名	ボランティア活動		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	精神に障がいのある人々の地域生活支援、精神保健福祉ボランティア、ソーシャルワーカーの専門性	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	社会福祉学部(社会福祉学科1年～)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計4名(男子学生1名 女子学生3名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	45時間以上
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>本科目は通常の講義形式の科目と異なり、学内外におけるボランティア活動を計画的・継続的に行い、その実践を自ら分析的に考察して集約するという一連の過程とその成果を評価する。住民の福祉ニーズが複雑多様化する中で、各種公的制度や施策の転換、福祉専門職の質的向上の必要とあいまって、地域住民による自発的な福祉活動への参加がますます重要となっている。その一形態であるボランティアが果たすべき役割は極めて大きく、こうした活動が今後の社会福祉をより重層的なものとし、さらに柔軟性を生み出していくこととなる。本科目は、受講者の主体的・積極的なボランティア活動を奨励し、「今、自分に何ができるか」を具体的に実践する体験を通して、ボランティア活動の本質的意義について学ぶとともに、将来、福祉専門職としてボランティアと連携・協働し、地域における社会福祉を推進していくための基礎的理解と実践力を養うことを目的とする。</p> <p>具体的な実施方法として、次の4コースを設ける(サークル・有償での活動も考慮する)。</p> <p>① 受講者自身が学外で活動先を選定・決定し活動を行うコース(Aコース) ② 障がいのある学生に対する支援、例えばノートテイクなど学内で活動を行うコース(Bコース) ③ 初学者向けとして、担当教員より活動先の紹介・斡旋を行うコース(Cコース) ④ 上級生向けとして、例えば小学校における学習等支援ボランティアなど課題に応じた活動先を担当教員より紹介・斡旋するコース(Dコース)</p>		
授業内容	<p>第1回 1. 科目履修ガイダンス 2. ボランティア活動参加計画書提出 3. 計画書審査・受講許可者決定 4. ボランティア活動に関するミニ・レクチャー 5. 事前指導 6. 計画書に基づくボランティア活動・活動日誌(活動状況報告書)の提出・活動中の指導 7. 中間報告書の作成 8. 中間報告会 9. 事後指導・総括レポートの作成指導 10. ボランティア活動総括レポートの提出 11. 活動結果および成果発表会 12. ボランティア活動レポート等に関する審査</p>		
教科書	<p>1. 各受講者には、活動についての事前指導、活動テーマの選定、具体的な活動の進め方、レポートのまとめ方などについて指導する。その際、必要に応じて関連する基本参考文献を紹介するほか、適宜資料等を提供する。</p>		
授業の工夫点	<p>事前・事後指導時以外の自主学習等については随時指導を行うが、対象となるボランティア活動の範囲等は、4月当初の学年別履修ガイダンスにおいて「科目手引き書」を用いて説明する。</p> <p>活動内容が同一であれ異なる場合であれ、活動の継続性を重視して在籍年次にかかわらず、複数回の受講を認めている。そうした観点から、回を重ねることにより高度な活動密度、ならびにレポート提出が求められる。なお、本科目の履修にあたって、上記A・Cコースについては「ボランティア論」履修済みもしくは同時履修すること、Bコースにおいては原則として「情報保障技術A・B・C」のいずれかを履修済みもしくは同時履修するか、これらに相当する研修等を受けていることが望ましい。</p> <p>Dコースは、子ども、児童心理、教育のいずれかに関わりのあることが求められる。</p>		
授業の評価方法	<p>活動時間45時間をもって1単位とし、活動内容(活動日誌など)とレポート(中間・総括)を審査して評価する。</p>		
授業のサポート体制	<p>障害のある学生への配慮として、障害の内容や程度に応じて個別に相談・対応する。</p>		
学外の関係機関・団体との連携	<p>受講者が計画し活動内容による。</p>		
今後の授業の継続	<p>今後も継続</p>		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域福祉実践、ボランティアと専門職、福祉分野の委員制度	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	社会福祉学部(社会福祉学科1年～)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計56名(男子学生20名 女子学生36名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>本授業は、学生(受講者)一人ひとりがボランティアの理論と知識を学び、実践者としての意識を向上できるように、以下の学習目標を設定する。</p> <p>①ボランティアの概念とボランティア活動の歴史を理解する。 ②ボランティア活動の現状(活動の実態や実践者・組織など)を理解する。 ③ボランティア活動と社会福祉専門職による実践の関係性を理解する。 ④ボランティア・コーディネートの役割と活動内容を理解する。 ⑤地域社会や学校などで取り組むボランティア学習と福祉教育を理解する。 ⑥ボランティア活動が人々の生活や地域社会に果たす役割を理解する。</p> <p>なお、授業は講義とグループ学習・発表を組み合わせたプログラムで進める。</p>		
授業内容	第1回 ボランティアとは何か(1) 第2回 ボランティアとは何か(2) 第3回 ボランティア活動の現状(1) 第4回 ボランティア活動の現状(2) 第5回 ボランティア活動と社会福祉専門職(1) 第6回 ボランティア活動と社会福祉専門職(2) 第7回 ボランティア活動を支援する専門職の実践(1) 第8回 ボランティア活動を支援する専門職の実践(2) 第9回 ボランティアの育成と学習活動(1) 第10回 ボランティアの育成と学習活動(2) 第11回 ボランティア活動が果たす役割(1) 第12回 ボランティア活動が果たす役割(2) 第13回 学習の振り返りとまとめ(1) 第14回 学習の振り返りとまとめ(2)		
教科書	1. ○授業内容に応じた視聴覚教材 ○適宜の資料配布		
授業の工夫点	○積極的な学習態度を重視する。○「ボランティア活動」の履修を奨励する。		
授業の評価方法	○定期試験(総合評価の40%) ○授業内のグループ学習・発表(総合評価の40%) ○出席状況(総合評価の20%)		
授業のサポート体制	障害のある学生への配慮として、授業開始前の対応:障がいのある学生がどのような支援を必要としているのか把握し、支援体制を整備する。 授業期間中の対応:学生の希望に応じて授業前の事前説明、授業後の事後説明をおこなう。また、授業中の支援が不十分な場合は即時対応(改善)する。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	青少年問題とボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	その他(社会教育主事の資格取得科目)
開設学部(学科)及び年次	社会福祉学部(社会福祉学科2年～)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計27名(男子学生15名 女子学生12名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	子ども・青年の自立が遅くなっていると言われます。その背景には日本の社会の構造的な変化が隠されています。子ども・青年たちが自立を困難にさせられている現状、そこから生じてくる様々なゆがみを資料から明らかにします。そして、その現実に立ち、困難を乗り越えて自立を果そうとしている多くの実践、子ども・青年の取り組みを紹介し、若者・子どもたちが世界に直接に働きかけていく可能性を持つボランティア活動を学習します。		
授業内容	第1回 青少年問題とは何か 第2回 課題の設定と学習の道筋 第3回 いじめ問題の現実、その克服の方向を考える 第4回 子どもの成長・発達 第5回 子どもの置かれている状況と解決の方向 第6回 青少年問題とボランティア―実践案 第7回 ①集団の中で生きる力をどのように育てるか 第8回 ②世界に働きかけることと人間の発達 第9回 ③ " 第10回 「子ども館で子どもと遊ぶ」構想、準備 第11回 若者の「働く」問題を " 考えるか 第12回 " 第13回 特別講師 田中真奈美先生「働くことの意味」 第14回 まとめ		
教科書	1. 高垣忠一郎著『生きることと自己肯定感』新日本出版 宮本みち子著『若者が「社会的弱者」に転落する』洋泉社新		
授業の工夫点	1 遅刻、欠席を極力しないよう努力して下さい。(原則5回欠席で不認定) 2 演習的要素をとり入れ、学生自身の発表を重視します。		
授業の評価方法	講座中、2回、評価対象レポート(30%)、出席率重視(70%)		
授業のサポート体制	障害のある学生への配慮として、学生同士のボランティアを組織します。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPOと公共性		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	社会福祉学部(社会福祉学科2年～)、環境 ツーリズム学部(環境ツーリズム学科2年～)、 企業情報学部(企業情報学科2年～)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計10名(男子学生7名 女子学生3名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	私的な利益より、社会の人々の利益を優先した働き方が注目され、NPOやNGOなどにより、そうした働き方が広がることで、社会のあり方に変化をもたらすことが期待されています。本講義では、NPOやNGOの定義や運営、歴史、事例などを基礎知識として学んだ上で、NPOという方法論を学生として展開できそうなNPO活動をワークショップという手法で議論をすすめます。「非営利・協同」の取り組みにおいては、テーマに関する共通認識の形成(学習)とそれを円滑に進めるコミュニケーションの努力が求められます。NPO活動において重要な意味を持つコミュニケーションのあり方について、ワークショップを通じて学ぶことも重視したいと思います。		
授業内容	第1回 NPO・NGO 第2回 NPOの運営 第3回 NPOの活動事例(海外) 第4回 NPOの活動事例(国内) 第5回 非営利活動の伝統 第6回 NPOと協働 第7回 協働とコミュニケーション 第8回 演習:仕事おこしワークショップ① 第9回 演習:仕事おこしワークショップ② 第10回 演習:仕事おこしワークショップ③ 第11回 演習:仕事おこしワークショップ④ 第12回 演習:仕事おこしワークショップ⑤ 第13回 演習:仕事おこしワークショップ⑥ 第14回 ふりかえり		
教科書	1. 傘木宏夫『地域づくりワークショップ入門～対話を楽しむ計画づくり～』(自治体研究社、1,785円)		
授業の工夫点	受講生同士のコミュニケーションを重視した授業となりますので、ワークショップへの積極的な参加を評価の基準とします。毎回、授業の後にアンケートを実施します。		
授業の評価方法	出席&アンケート(80点)、最終レポート(20点)の配点で評価します。		
授業のサポート体制	障害のある学生への配慮として、視覚障害者には点訳レジュメを配布し、聴覚障害者にはレジュメ・資料を板書で補って講義を行います。また、ワークショップでは、障害のある学生を交えたコミュニケーションについて考えていただく機会とします。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	企業・NPO研究プレ・インターンシップ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	労働問題の社会学、教育問題の社会学、アントニオ・グラムシ	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	産業社会学部(産業社会学科2年～、産業情報学科2年～)、環境ツーリズム学部(環境ツーリズム学科2年～)、企業情報学部(企業情報学科2年～)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計50名(男子学生43名 女子学生7名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	大卒者の入社3年以内での退社・転職は全国平均で3割を超えていて、長野県の企業も同様である。こうした就職のミスマッチを解消し、自分に適した仕事をさがす機会として「インターンシップ」がある。本講義は、各企業・業種の若手社員をお招きして、実際に携わっている仕事について語っていただくことで、学生が3年次にインターンシップ先の企業を決める参考にすることを講義の目的としている。毎回の講義では、県内の各業種・企業の中から2社ずつ若手社員に各30分の講義をしていただき、各15分の質疑を行う。また12～14回目の講義は、近年新たな仕事・働き方として増えつつあるNPO(非営利団体)の代表者をお招きして、①NPO起業の経緯、②NPO事業の仕組みや働き方、③NPOの経営上の課題などについて講じてもらう予定である。		
授業内容	第1回 ガイダンス(長島・土田) 第2回 県内各業種の企業の社員による講義(毎回2社) 第3回 同上 第4回 同上 第5回 同上 第6回 同上 第7回 同上 第8回 同上 第9回 同上 第10回 同上 第11回 同上 第12回 NPOやまほうし自然学校について(野外活動教育) 第13回 NPO・(株)ビックイオについて(エコツアーガイド等) 第14回 長野県NPOセンター		
教科書			
授業の工夫点	毎回の授業は、①ゲストスピーカーの話、②コーディネーターによる補足、③質疑応答、④前回の講義に関するミニレポート提出によって構成される。3年次の「インターンシップ」にむけた重要な準備学習として受講すること。		
授業の評価方法	出席50%、毎回のレポート50%で、総合的に判断して評価を行う。		
授業のサポート体制	障害のある学生への配慮として、個別的に事情を聞き、対応について考えます。聴覚障害の者はノートテイクを依頼すること。		
学外の関係機関・団体との連携	長野県内の企業・NPO団体の職員等が講師		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 茨城キリスト教大学

授業科目名	幼児保育演習Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	幼児教育学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文学部児童教育学科幼児保育専攻4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計20名（男子学生2名 女子学生18名）	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	実際に認定こども園、幼稚園、学園託児施設を見学、参加する。個人の進路に応じたボランティア先を見つけそこで実践し、ボランティア活動の成果をまとめ発表する。子どもを取り巻く環境を学びながら個々人の興味関心のあるテーマについて調べ発表しまとめていく。保育現場、地域で活動している方を講師としてお招きし実践ケースから学び、レポートにまとめ理解を深める。進路に応じた実践研究を行い指導案を書いて一人ひとり発表する。		
授業内容	<p>4月～5月 子どもとの関わり方を学ぶ、学園託児施設見学、参加。実践を通して学びを深める。 進路に応じたボランティア先を見つけ学んだことや気づいたことを発表する。</p> <p>6月～7月 認定こども園の見学、認定こども園の制度についても学ぶ。前期学んだことをまとめ発表する。 進路に応じたボランティア先での実践成果をまとめ発表する。</p> <p>9月～10月 幼稚園見学、可能なときは運動会等行事の一部に参加、教材研究、保育形態について学び理解を深める。 保育現場から講師をお招きして実践ケースから学びを深める。</p> <p>11月～12月 紙芝居、手遊び、ゲーム等を行なう中で保育の技術的要素も学び、学んだことをボランティア先や学園託児施設で実践しその成果をまとめ発表する。 一人一人の進路先に応じた指導案を作成し実践発表をする。</p> <p>1月 現在の保育を取り巻く環境についても調べ発表する。 地域から子育て支援等の活動している方をお招きして実践ケースから学びを深める。</p>		
教科書	資料配布、参考文献紹介		
授業の工夫点	1. ボランティア先についても担当教員が相談にのりいろいろな角度からアドバイスを行う。2. ボランティアで学んだことを中間発表という形でゼミ生の前でまとめたことを発表する。その中で課題となるべき点や本人からの質問疑問等について必要なアドバイスを行う。3. ボランティア先での疑問等については担当教員が適宜応じている。4. ボランティア終了後ボランティアで学んだこと等をゼミ生前で発表し、まとめたレポートを教員に提出する。5. ボランティアを通して得た今後の課題等について個別に支援する。		
授業の評価方法	出席状況、提出物、ボランティアへの参加、研究、発表への取り組み等を総合的に判断。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	私立保育園（常陸太田市、石岡市、東京都） 私立幼稚園（水戸市、日立市、ひたちなか市） 3. 社会福祉法人（常陸太田市、高萩市） 以上の関係機関等でボランティアを依頼、必要に応じて意見交換を行っている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	人間福祉実習指導		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ファミリーソーシャルワーク、ボランティア活動	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	生活科学部人間福祉学科2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計54名(男子学生14名 女子学生40名)	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	40時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	後期に行われる人間福祉実習の実施時期を基準にして、事前、実習期間中、事後の3段階を設け、学習課題を達成するための指導を行う。		
授業内容	1. 事前学習 ○実習の意義と目的の理解 ○心理や社会福祉の現場で働いている方による講義 ○実習にあたって必要な社会福祉援助技術や記録技術の確認 ○夏休みを利用したボランティア体験学習(3～5日間) ○実習先施設と利用者理解を深めるための学習 ○実習計画書の作成 ○個人調書、誓約書の作成 ○実習心得の確認 2. 現場実習 ○実習への主体的な取り組み ○記録技術を用いた実習記録の作成 ○実習先の施設職員による指導 3. 事後学習 ○実習の振り返り(実習担当教員との個別面談を含む) ○最終レポートの作成を通じた自己の課題の明確化		
教科書	社会福祉援助技術演習Ⅰ、社会福祉援助技術演習Ⅱのファイルを使う場合がある。		
授業の工夫点	福祉ボランティアの特性である、「人と関わる体験(対人支援の要素)」をふまえ、ボランティアであっても、最低限度の社会福祉の専門性が必要であることを伝えている。特に、相手の呼称、口調など人権を尊重した表現に留意すること。守秘義務は遵守すること、記録物の管理には慎重を期すことなど繰り返し指導している。		
授業の評価方法	授業の出席、参加態度、領域別事前学習、記録技術、ボランティア体験レポート、小テスト、実習後の最終レポートなど総合的に評価。		
授業のサポート体制	①事前打ち合わせ:ボランティア先と事前に充分打ち合わせをし、体験前に担当職員・関係者が来訪し、レクチャーを受けている。②教員の巡回訪問:体験初日には教員が現地に赴き、コーディネートに不足がないか確認している。③連絡・相談対応:実習教育室の助手の協力を得て、随時学生からの連絡・相談を受け付けている。*9:00～17:00		
学外の関係機関・団体との連携	外部の社協・ボランティア・NPOなどの依頼に応じて、授業を履修している学生に対してボランティア活動のコーディネートをしている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 明海大学

授業科目名	社会保障論Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会保障・労働経済	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計114名(男子学生99名 女子学生15名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	現実の社会保障の仕組みとその課題を理解する。		
授業内容	1. 前期の復習と後期の説明 2. 高齢化を巡る虚実 3. 少子化の問題 4. 介護保険は福祉の革命か 5. 年金制度は崩壊するのか 6. 医療保険の理想と現実 7. 失業の増大と雇用の多様化にどう向き合うか 8. 労災の課題 9. 北欧はモデルたりうるか 10. アジアの社会保障 11. 福祉国家はどこへ行くか 12. ボランティアは根付くか 13. NPOって何だ 14. 市民参加型福祉は可能か		
教科書	『安心社会の課題』(下田直樹著)		
授業の工夫点	ビジュアルな教材・資料の使用		
授業の評価方法	確認小試験及び定期試験の点数		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	経済学演習1		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会保障・労働経済	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計17名(男子学生15名 女子学生2名)	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	6時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	身近な地域の福祉の課題を掘り起す。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. テーマ、運営方法などの説明、自己紹介等 2. テキスト、参考書を使った学習 3. テキスト、参考書を使った学習 4. テキスト、参考書を使った学習 5. テキスト、参考書を使った学習 6. テキスト、参考書を使った学習 7. テキスト、参考書を使った学習 8. テキスト、参考書を使った学習 9. テキスト、参考書を使った学習 10. 福祉の仕事に従事している方の話を聞く 11. 福祉施設などの見学 12. 福祉施設などの見学 13. 休暇中の実体験(ボランティア)についての説明 14. 休暇中の実体験(ボランティア)についての説明 15. 後学期のゼミの進め方の説明 16. 休暇中の活動報告 17. 休暇中の活動報告 18. インターネットによる情報収集 19. インターネットによる情報収集 20. インターネットによる情報収集 21. インターネットによる情報収集 22. 福祉の仕事に従事している方の話を聞く 23. 福祉施設などの見学 24. テキスト、参考書を使った学習 25. テキスト、参考書を使った学習 26. テキスト、参考書を使った学習 27. まとめ 28. まとめ 		
教科書	特に使用していない。		
授業の工夫点	活動等についての意義に関する事前学習を徹底する。		
授業の評価方法	レポートを提出させ、その内容で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	浦安市役所、浦安市商工会議所		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	経済学演習2		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会保障・労働経済	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計37名(男子学生33名 女子学生4名)	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	12時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	身近な地域の福祉の課題を発見し、改善・解決法を考える。		
授業内容	<p>前学期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・年間予定の説明 ・昨年度のグループないしは個人研究の成果をふまえ、さらに今年度は各種の資料を用いて全員で「福祉とは何か」や、「福祉の仕事」の意義についての議論を重ねる。 ・不十分な点や再考を要する点などを明確にし、それらをどのように補うか、皆で検討したい。また、夏季休暇中に行う必要のある資料収集や、実地調査、ボランティア活動、ヒアリングなどの活動計画も詰めたい。 <p>後学期</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各人がこれまでの成果をもとにそれを卒論としてまとめる作業に後学期から入りたい。発表会やそのための指導も併せて行う予定である。 		
教科書	特に使用していない。		
授業の工夫点	活動後に必ず報告させる。(レポートにまとめさせる)		
授業の評価方法	レポートを提出させ、その内容で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	浦安市役所、浦安市商工会議所		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	生活経済学 I		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会政策及び家族研究	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部2年次	授業のレベル	その他（広く生活経済にかかわる諸事項を理解する目的で設置された講座の一単位としての位置づけ。（ボランティアに関する内容としては初級・入門程度））
平成20年度履修者数	計252名（男子学生204名 女子学生48名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	住民自治・市民活動の社会的意義や現状について理解することを目的に実施した。		
授業内容	○地方自治法における住民自治 ○住民自治活動のひとつとしての自治会・町内会活動 ○市民公益的な活動としてのNPO活動、ボランティア活動 ○市民活動と行政のパートナーシップによって創る「新しい公共」 ○NPO活動、ボランティア活動を活発化していくために		
教科書	講師レジュメによる		
授業の工夫点	特筆すべきことはありません。		
授業の評価方法	出席、レポート提出、試験を総合的に評価。試験では、論述問題により基礎的な理解と学生一人ひとりの考える力を評価していく。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	キャリア講座 I		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	野外教育・体験教育	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計7名（男子学生1名 女子学生6名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	6時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	本授業では、学生一人ひとりがボランティアについて考え、「ボランティアとはなにか」という根本的な問いに対する独自性のある答えを持ち、それを基にボランティアの条件、ボランティアを別な言葉で表現するとどうなるか、ということを考えていく。		
授業内容	① ガイダンス ② 学生のボランティア観を基に ③ ボランティアの概観 ④ ボランティアの歴史的な流れ ⑤ ボランティアの役割 ⑥ 人との関わり方 ⑦ NPO/NGOとボランティア ⑧ 教育の中のボランティア ⑨ 高齢者・障害者のボランティア ⑩ 自然環境のボランティア ⑪ ボランティアプロジェクト案作成(1) ⑫ ボランティアプロジェクト案作成(2) ⑬ ボランティアプロジェクト案 検討会		
教科書	なし		
授業の工夫点	教室内での講義に特化したものではなく、実際にボランティアをしている人、ボランティアのサービスを受ける人など、体験を通じた学びを重視した。		
授業の評価方法	出席、レポート作成		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地元の自治体、地元の社会福祉協議会、地元の障害者施設		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	キャリア講座Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	野外教育・体験教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部1～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計6名(男子学生1名 女子学生5名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	キャリア講座Ⅰで学生一人ひとりが定義付けをした「ボランティア」を基に、社会に存在する様々な問題に興味関心を向け、その社会問題にどのように取り組むべきなのか、その具体的な方策を考え、計画し、実行し、評価することを目的とする。		
授業内容	① ガイダンス ② 体験することの意義・効果 ③ リスクマネジメント／ボランティアの心得 ④ プロジェクトを進めるに当たって ⑤ プロジェクトのテーマ決め ⑥ プロジェクト検討会(1) ⑦ プロジェクト検討会(2) ⑧ 中間発表会 ⑨ プロジェクト検討会(3) ⑩ プロジェクト検討会(4) ⑪ プロジェクト発表会 ⑫ ボランティアとは(総評)		
教科書	なし		
授業の工夫点	グループ、または個人で計画案を作成し、検討を重ねていく。学生自らが考えることを重視するので、講義形式ではなく、主にディスカッション形式で授業を進めていく。		
授業の評価方法	出席、レポート、プレゼンテーション		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地元の社会福祉協議会、地元の障害者施設		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動A・B		
担当教員(学内又は学外)		授業期間	その他(単位認定科目)
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	外国語学部、経済学部、不動産学部及びホスピタリティ・ツーリズム学部1～4年次	授業のレベル	その他(単位認定科目のため、授業を行っていない)
平成20年度履修者数	計1名(男子学生0名 女子学生1名)	授業区分	実習
単位数	各2	ボランティア体験の時間数	40時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	現実の社会に身を置いて社会性を身につけ、自己形成、自己発見の機会を提供することが目的である。		
授業内容	社会貢献活動(ボランティア活動)の成果に対して単位を認定する科目であり、①事前講習会の受講、②学外施設・団体等における40時間以上の活動、③活動日誌と終了レポートの作成、及び④ボランティア活動報告会への参加の全てを充たすことが要件である。		
教科書	なし		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	全ての要件を充たし、単位認定申請手続きをした者に単位を認定する。		
授業のサポート体制	大学事務局が活動中の相談に随時応じている。		
学外の関係機関・団体との連携	浦安市役所、CIEE(国際NGO)		
今後の授業の継続			

授業科目名	教職総合演習		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	野外教育・体験教育	共通・専門等の別	その他(教職課程科目)
開設学部(学科)及び年次	外国語学部教職課程履修者3年次	授業のレベル	その他(「ボランティア」は学校教員を目指す学生にとって、知識だけではなく、体験からも学ぶことができる手法を経験させるための手法としての位置付けのため、「レベル」で分けることができない)
平成20年度履修者数	計23名(男子学生13名 女子学生10名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	25時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	この授業は、社会の様々な問題を解決するための手段として直接体験を有効な手法と位置付け、近年身近になっている「ボランティア」に着目し、グループ・個別プロジェクト、ボランティア体験を柱とする。この授業は、学生が自主的に、かつ主体的に学びを深めることができるよう、教員が「教える」のではなく、学生が自ら興味のあるテーマを決めて「学ぶ」授業である。		
授業内容	① ガイダンス/アクティビティ体験 ② ボランティアについて考える(一般的な認識を基に) ③ ボランティアについて考える(教育において) ④ プロジェクトを進めるに当たって ⑤ グループプロジェクトのテーマ決め ⑥ プロジェクト検討会(1) ⑦ プロジェクト検討会(2) ⑧ 中間発表会(1) ⑨ 中間発表会(2) ⑩ 自主参加勉強会 ⑪ プロジェクト検討会(3) ⑫ プロジェクト検討会(4) ⑬ 自主参加勉強会 ⑭ 指導者・援助者としての教師のまとめ(講評)		
教科書	なし		
授業の工夫点	学生が自ら気付き、興味関心を持つように、様々なトピックを提供し、さらに肯定的、否定的な側面について解説し、学生が自ら考えて、自らの結論を導きだせるような授業進行である。		
授業の評価方法	出席、レポート、プレゼンテーション、ボランティア体験		
授業のサポート体制	野外体験活動のために、大学の課題探求援助制度の利用		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 獨協医科大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	野外教育・体験学習	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	看護学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計99名(男子学生7名 女子学生92名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	25時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	①「ボランティア」とはなにかを学ぶ②「違い」尊重する姿勢を育む③対人コミュニケーション技術の向上を図る④チームワークに関する知見を深める。		
授業内容	1.2 ガイダンス あなたの「ボランティア」観 3.4 ボランティアの主体・客体 日本・世界のボランティア 5.6 「聴く」ことの重要性 7.8 人との関わり 9,10,11 (学外)施設見学 (学内)グループプロジェクト 12,13,14 (学内)グループプロジェクト (学外)施設見学 15,16 ボランティアとは? これからのボランティア		
教科書			
授業の工夫点	学生の自主性、探究心、コミュニケーション力を育む。		
授業の評価方法	出席率及びレポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地域施設、介護老人福祉施設での活動		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 埼玉工業大学

授業科目名	ボランティアの研究		
担当教員(学内又は学外)	学外教員(非常勤講師)	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部・全学科1～3年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計73名(男子学生59名 女子学生14名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義では、まずボランティアの基本的な理論と歴史を学習する。さらに、対象領域の実践をみる中で、地域や社会に貢献する精神と実践的なスキルを習得していくことを目的としている。		
授業内容	第1講 導入・ボランティア論を学ぶ意義 第2講 ボランティアの理論 第3講 ボランティアの制度 第4講 ボランティアの歴史(欧米) 第5講 ボランティアの歴史(日本) 第6講 ボランティアの歴史(戦後日本) 第7講 ボランティアの形態 第8講 ボランティアコーディネーター 第9講 すべての人が共生できる社会 第10講 地域福祉におけるボランティア活動 第11講 災害支援ボランティアの実際 第12講 海外支援ボランティアの実際 第13講 学校教育の中でのボランティア 第14講 ボランティア論の再構築 第15講 まとめ		
教科書	教科書 指定なし 参考書「ボランティア—もうひとつの情報社会」岩波新書 金子郁容		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	授業への出席、最終試験のほかに、適宜授業中に求める、リアクションペーパーへの記述を通して、授業への積極的な参加と理解度を見て、総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 駿河台大学

授業科目名	まちづくり実践		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	その他
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	その他(副専攻)
開設学部(学科)及び年次	全学部 2～4年生対象	授業のレベル	
平成20年度履修者数		授業区分	
単位数	2	ボランティア体験の時間数	24時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	地元における地域の人達と触れ合い、ボランティアや地域のイベントに取り組み、まちづくりに参加することを通して実践的な企画能力、コミュニケーション能力、報告力、社会感、職業感を高める。		
授業内容	入間市繁華街の中心にある「駿大ふれあいハウス」を拠点として、市民と交流しながら次のような「まちづくり」のプロジェクトを行い、まちを元気にする手伝いをします。 (1) まちおこしイベント企画・運営: おとろうまつり、サマーフェスティバル、万燈まつりなどのまちおこしのイベントを若者感覚で企画し、運営に参加します。(担当: 狐塚・大貫) (2) 子どもパソコンクラブ: ハウスで、主に小学生にパソコンを教えます。教材の作成など学生が自主的に行います。(担当: 安積) (3) 通学合宿サポート: 入間市の地区ごとの小学生の通学しながらの合宿で、一緒に宿泊し、生活指導をします。(担当: 狐塚・松平) (4) 子どもボランティア: 託児指導を受けた後で、託児所や保育園、児童センターなどで育児ボランティアをします。(担当: 佐古) (5) 中国語・韓国語しゃべり場: 地域の人たちと中国語、韓国語で話し合い、交流します。主に留学生対象。(担当: 鎗田) (6) 市民お助け隊、その他、市民や市民組織が行っているいろいろな活動のサポートをします。(担当: 吉田・佐古)(※山尾は地域のコーディネーターとして全般的に学生の指導・助言・支援にあたります。) 科目の性格上、まず、参加する学生を募集します。募集は掲示や授業時での連絡で伝えることになります。次に説明会が開かれ、参加者が登録されます。1～3年次生は科目登録をする必要はありません。 授業のはじめの部分では各プロジェクト担当講師により、実際に活動する「入間市」の特徴や各プロジェクトの内容が説明されます。そのあとでいろいろな活動を行っていきます。		
教科書	教科書は使用しません。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	活動内容(50%)と報告書(50%)とを総合して評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 聖学院大学

授業科目名	NPO・NGO(国際協力)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NGO	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政治経済学部(政治経済学科1年次以上) 人間福祉学部(人間福祉学科2年次以上)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計103名(男子学生70名 女子学生33名)	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	「グローバル化」や「植民地主義」、「周縁化」、「(多文化)共生」や「国際協力」をキーワードに現代世界の問題点について捉える視点を養い、それらと関連して社会におけるNPO・NGOの存在意義と課題について考察できるようになること。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 講義の目的と概要 2. 講義の目的と概要 3. 導入:NGOの活動事例1 4. 導入:NGOの活動事例1 5. 導入:NGOの活動事例2 6. 導入:NGOの活動事例2 7. 「援助」と「連帯」を考える(第3回までの総括) 8. 映像と解説:アジアの近代と植民地主義を考える 9. 日本の国際協力NGOの概況 10. 日本の国際協力NGOの概況 11. 日本の国際協力NGOの概況(続) 12. 映像と解説:アジアの近代と植民地主義を考える(続) 13. 日本の国際協力NGOのこれまでと、これからの課題 14. 映像と解説:難民問題を考える 15. 経済のグローバル化と私たちの生活 16. 映像と解説:「100円ショップ」と「輸入野菜」について 17. 植民地主義・経済のグローバル化と私たちの生活 18. 映像と解説:「コーヒー」と「フェアトレード」について 19. 貧困、環境破壊を考える 20. 映像と解説:「債務問題」と「植林」について 21. 植民地主義とマイノリティー日本の「位置性」再考 22. 映像と解説:「多文化共生」について 23. 人権NGOの活動—「反テロ戦争」の時代に 24. 人権NGOの活動—「反テロ戦争」の時代に 25. NGOの存在意義と課題・授業のまとめ 26. NGOの存在意義と課題・授業のまとめ 		
教科書	プリント配布		
授業の工夫点			
授業の評価方法	毎回の授業で提出するコメントから判断する習熟度合(35%)、学期末に提出するレポート(課題は学期中に提示)(65%)。試験は実施しない。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NPO・NGO(非営利組織)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域社会論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政治経済学部(政治経済学科・コミュニティ政策学科1年次以上) 人間福祉学部(人間福祉学科2年次以上)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計31名(男子学生24名 女子学生7名)	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代社会におけるNPOの全体像を把握することが主要な目的となる。福祉・教育・文化・環境・まちづくり等、社会的・経済的領域を網羅したNPO活動は20世紀末から21世紀にかけてもっとも成長した分野の一つと言われており、その動向を理解しておくことは、とりわけ地域社会を基盤とした労働や生活の未来を構想する上でも有益であろう。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. NPO論の射程 2. NPOとは何かーグループ討論 3. NPOとは何かーグループ報告 4. NPOー行政・企業・NGO・ボランティアとの比較 5. NPOと公益法人制度 6. ドラマにみるNPO(1) 7. NPOの定義 8. ドラマにみるNPO(2) 9. NPO・行政・自治会 10. NPOの活動領域 11. NPO法前史 12. NPOー国家と企業社会を超えて 13. NPO法とNPO法人 14. NPOの経営 15. NPO法人の活動領域 16. 高齢化社会とNPO 17. 子どもとNPO 18. 国際社会とNPO 19. 社会的排除とNPO 20. NPOと大学 21. NPOによるコミュニティ形成 22. NPOとパートナーシップ 23. NPOをめぐる国際的動向 24. 海外の事例ーイギリス 25. 海外の事例ースウェーデン 26. NPOの現在と未来 		
教科書	プリント配布		
授業の工夫点			
授業の評価方法	・試験。 ・出席点について…毎回の出席が大前提となる。それゆえ、出席したからといって成績に出席点が加算されることはない。ただし、欠席は減点の対象となる。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	まちづくり学		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	まちづくり学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政治経済学部 (コミュニティ政策学科1年次以上)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計69名(男子学生52名 女子学生17名)	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	身近なまちの問題や課題、まちづくりの意義、内容、手法を理解し、説明できるようになること。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. まちづくりの概要(まちづくりとは) 2. まちづくりの概要(アイスブレイク) 3. まちづくりの概要(まちづくりの歴史) 4. まちづくりの概要(まちづくりの課題別分類と事例) 5. まちづくりの概要(まちづくりの内容別分類と事例) 6. まちづくりの進め方と方法(都市計画制度) 7. まちづくりの進め方と方法(都市計画制度) 8. まちづくりの進め方と方法(住民参加と協働) 9. まちづくりの進め方と方法(合意形成) 10. まちづくりの進め方と方法(ランキングゲーム) 11. まちづくりの進め方と方法(地域通貨) 12. まちづくりの進め方と方法(地域通貨ゲーム) 13. まちの課題とまちづくり(コミュニティの崩壊と新しいコミュニティの創造) 14. まちの課題とまちづくり(コミュニティ創造の事例) 15. まちの課題とまちづくり(商店街の衰退と中心市街地活性化) 16. まちの課題とまちづくり(中心市街地活性化の事例) 17. まちの課題とまちづくり(地域の衰退と維持・活性化) 18. まちの課題とまちづくり(地域の活性化の事例) 19. まちの課題とまちづくり(ごみとリサイクル) 20. まちの課題とまちづくり(リサイクルの事例) 21. まちの課題とまちづくり(自然環境の悪化と自然再生への取り組み) 22. まちの課題とまちづくり(自然再生への取り組み事例) 23. まちの課題とまちづくり(福祉のまちづくりと事例) 24. まちの課題とまちづくり(少子化と子育て支援の事例) 25. まちの課題とまちづくり(聖学院大学周辺のまちづくり活動) 26. まちづくりの本質 		
教科書	授業の中で指示		
授業の工夫点			
授業の評価方法	課題(授業中の小レポートなどを含む)、中間テスト(あるいはレポート)と期末テスト(あるいはレポート)の結果、出席点などを総合して評価する。配点は、課題が20%、中間テストと期末テストが各35%、出席点10%とする。(予定)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	国際ボランティア入門B		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部(欧米文化学科1年次以上)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計33名(男子学生23名 女子学生10名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	自分なりにどのようなボランティアができるのかを見つけることを目標にしています。できれば何らかのアクションができればと思っています。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 自分を伝える 2. 異なる意見を尊重する 3. ボランティアって何だろう 4. 世界を知る(1) 5. 世界を知る(2) 6. NGOって何だろう 7. NGOの関係者の話を聞く 8. 興味のある分野を探す(1) 9. 興味のある分野を探す(2) 10. 興味のあるNGOを探す 11. 自分でNGOを始めた人の話を聞く 12. 関わり方を考える 13. 何ができるだろう 		
教科書	プリント配布		
授業の工夫点	ボランティアとして関わるために、まず、主体的に動く(授業を受け身ではなく、一緒に作っていく)ことを大切にしたいと思っています。そのために、参加型の授業になるような工夫を考えています。なお、4回目の授業「世界を知る(1)」は東京の広尾にあるJICA地球ひろばへ土曜日に行く予定にしています。		
授業の評価方法	出席(50%)、読書レポート(25%)、授業の終りに時々書いてもらうミニ感想文(25%)で評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間福祉学部（人間福祉学科1年次以上）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計78名（男子学生47名 女子学生31名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	※1コマ分（授業工夫点参照）
必修・選択の別	選択		
授業目的	(1)ボランティアの意義と役割、態度を学び、理解する (2)自己を振り返りながら、一人ひとりに何が出来るのかを考える (3)グループワークを通して、他者への理解と自己を伝える方法について深める (4)机上の学びだけでなく、ボランティア活動を経験しながら、実践力を身につける (5)地域や地球社会の一員として、共に生きるとは何かを考えられるようになる		
授業内容	1. 講義概要の説明・ボランティアとは何か 2. 自分のボランティアスタイルを考える 3. ボランティア活動の種類と情報収集 4. ボランティア活動時の留意点 5. ボランティアコーディネーターの業務（ゲスト講義） 6. 地域を見つめる 7. グループワーク(1)テーマ決定 8. グループワーク(2)プログラム計画・広報案 9. グループワーク(3)広報作成・提出 10. グループ課題発表会 11. 多様なボランティア活動 12. 災害支援のボランティア活動とNPO 13. 国際ボランティアとNGO 14. まとめ 15. (ボランティア体験学習レポート提出)		
教科書	川村匡由『ボランティア論』（ミネルヴァ書房）		
授業の工夫点	1コマ分を各自のボランティア体験学習およびレポート作成時間とします。受講期間中の休日など、都合の良い時間にボランティア体験学習をおこなってください。		
授業の評価方法	ボランティア体験レポート提出50%、グループ課題提出50%、出席状況（1回欠席－5）によって評価します。定期試験の実施はありません。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

○ 新潟産業大学

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	統計学・計量経済学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計9名（男子学生6名 女子学生3名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	45時間以上
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	社会に奉仕する精神を育てる目的		
授業内容	1. ボランティア活動のオリエンテーション 2. ボランティア活動の基本について 3. 福祉施設でのボランティア活動について 4. 教育関連のボランティア活動について 5. イベント・ボランティアの活動について 6. 講話「ボランティア活動について」ボランティア・コーディネーター 7. 第1回ボランティア活動実習 8. 第2回ボランティア活動実習 9. 第3回ボランティア活動実習 10. ボランティア活動中間報告会 11. 第4回ボランティア活動実習 12. 第5回ボランティア活動実習 13. 第6回ボランティア活動実習 14. ボランティア活動最終報告会 15. まとめ		
教科書	特になし		
授業の工夫点	ボランティアセンターのボランティアアドバイザーに講習を毎回実施		
授業の評価方法	45時間以上のボランティア活動とレポート		
授業のサポート体制	活動のための施設、イベントの紹介や斡旋		
学外の関係機関・団体との連携	社会福祉協議会の中にあるボランティアセンターと連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 江戸川大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	教育政策、障害児教育	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	社会学部（人間心理学科3年次、ライフデザイン学科3年次、経営社会学科3年次） メディアコミュニケーション学部（マス・コミュニケーション学科3年次、情報文化学科3年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計18名（男子学生12名 女子学生6名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	56時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	教員免許状取得に必要な介護体験を行う前の事前学習		
授業内容	第1回 ボランティアの位置づけと学習目的の説明 第2回 ボランティアの歴史 第3回 学校の現状とボランティア活動 第4回 児童福祉制度と施設と現状 第5回 障害者福祉制度と施設と現状 第6回 高齢者福祉制度と施設と現状 第7回 特別支援教育制度と施設と現状 第8回 幼児とのコミュニケーション 第9回 障害者とのコミュニケーション 第10回 高齢者とのコミュニケーション 第11回 ロールプレイングによるボランティア理解 第12回 ボランティア体験の報告発表(1) 第13回 ボランティア体験の報告発表(2) 第14回 ボランティア体験の報告発表(3) 第15回 総括・評価		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席・受講態度・介護体験報告・レポート論文をもとに総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	近隣の小学校や養護学校との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 聖徳大学

授業科目名	生涯学習まちづくり演習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	生涯学習/まちづくり	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（生涯教育文化学科1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計8名（男子学生0名 女子学生8名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	授業の成果を地域の中で生かしてみる。そのことによって学習のより高度化、実践化を目指す。地域の人びととの交流によって、成果や身近なまちを、より活性化することを目指す。学習者の軽力ウ的な活動が新たな学習課題を解決することになる。		
授業内容	まちづくりの目標とその実現の方法には、地域の実情によって様々なものがある。その計画・実施の過程と効果的な実現への方法について、具体的に学ぶ。身近なまちづくりの方法や商店街の活性化、もてなしの方法、旅の楽しみ方など、まちづくりの側面として、その実践、方法について学習する。		
教科書	「生涯学習まちづくりの方法」 福留 強 著 [全国生涯学習まちづくり協会]		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート 30%、小テスト 20%、定期試験 50%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア論/NPO/生活経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（生涯教育文化学科1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計10名（男子学生0名 女子学生10名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	生涯学習フォーラムにおけるボランティア体験
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	1. ボランティア活動の役割や意味を理解すること。 2. 内外の多様なボランティア活動の事例から、自らボランティア活動の創造・立案し、これらの作業を通じてチームワークやボランティア・コーディネーション能力、マナー等を形成させること。 3. ボランティア活動とNPO、学校教育におけるボランティア学習、等を学び、ボランティア活動の社会的役割やパートナーシップを構築していくこと。		
授業内容	本授業は、「ヒトは何故ボランティアをするのか」を紐解くため、様々な活動事例から活動の種類やその内容の実情を学びつつ、自らがボランティアの主体者として活躍していけるようなノウハウ、意味づけを行う、またボランティア活動が社会にもたらす影響やその位置の確認も行う。		
教科書	スーザン・エリス著（2001）『なぜボランティアか？』海象社 興相寛（2003）『希望へのカー地球市民社会の「ボランティア学」』光生館		
授業の工夫点	ボランティア体験の導入		
授業の評価方法	レポート40%、臨時試験40%、実技・作品20%		
授業のサポート体制	大学の生涯学習研究所の機能を生かして、初心者向けのボランティアの機会を提供して、内外の関係を体験できるようにしている。		
学外の関係機関・団体との連携	外部のボランティア団体の方のお話を聞く時間の設定がある。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO論 I		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPO/経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（社会福祉学科4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計9名（男子学生0名 女子学生9名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	日本におけるNPOとは、どのようなものかを、体系的に学んでいく。すなわち、NPOの現代的な意義、市民活動の全体像、およびそのマネジメントなど、すなわちNPO自体に関する基礎的な知識を学んでいく。		
授業内容	NPOとは、どのような組織であるのかを、学習していく。なぜ、このような組織が生まれたのか。どのような活動が行われているのか。このような組織は、どのように営まれているのか。などに関して理解していく。		
教科書	山岡義典編『NPO基礎講座[新版]』ぎょうせい、2006年		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート30%、期末試験70%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO論 II		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPO/経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（社会福祉学科4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計0名（男子学生0名 女子学生0名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPOは、企業とは異なる、様々な組織体や人々と係りながら成立している。そのような利害関係者（ステークホルダー）とどのような関係を結び、社会の中でどのような存在であるのかを学んでいく。		
授業内容	NPOは、ボランティア、企業、助成財団、および行政などの支援から成立している。このような組織や人々が、NPOに対してどのように係っているかを学んでいこう。		
教科書	山岡義典編『NPO基礎講座[新版]』ぎょうせい		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート30%、期末試験70%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO概論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア論/NPO/生活経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（生涯教育文化学科2年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計11名（男子学生0名 女子学生11名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	本講義は、現代社会におけるNPO（非営利活動法人）の基本概念、意義と役割を理解し、各分野における活動の実態をNPOの事例を通じて把握し、NPOとボランティア、教育、行政、企業とパートナーシップを構築させるためのマネジメント手法、すなわち、NPOの望ましいあり方を探ることを目標とします。		
授業内容	本授業は、NPOとは何か、どのような活動があるのか、その手法とは如何なる方法があるのか、これらの基本的理解と実践の方法を、講義や演習を通じて学ぶ。21世紀、市民社会を担うために、NPOの職員として、ボランティアとして、さらにはNPOリーダーとして自らを活かす術を紐解いていきます。		
教科書	日本NPOセンター編『知っておきたいNPOのこと』、松原明著『新版・NPO法人ハンドブック』 スーザン・エリス著（2001）『なぜボランティアか？』海象社、山岡義典（2000）『NPOの実践講座—いかに組織を立ち上げるか—』ぎょうせい、山岡義典（2002）『NPOの実践講座②—一人を活かす組織とは—』ぎょうせい、山岡義典（1997）『NPOの基礎講座』ぎょうせい		
授業の工夫点			
授業の評価方法	テスト 50%、レポート 50%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	外部のNPO団体に、学生がNPOの事例を取材できるように依頼している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO活動論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア論/NPO/生活経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（生涯教育文化学科2年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計8名（男子学生0名 女子学生8名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	本講義は、特定非営利活動促進法についての設立や運営・管理の方法についてNPOの望ましいあり方を探ることを目標とする。学生一人ひとりの地域の社会貢献についての意味について問い、その結果自分には、どんな力がつくのかを考える機会にする。		
授業内容	本授業は、特定非営利活動法人の設立及び管理・運営の手引き（目的、事業計画、資金調達、事務局体制、ネットワーク構築、評価方法、リスクマネジメント）を学んだ上で、書類の作成（設立の趣旨、定款、事業計画、役員計画、収支計算書）に取組、地域社会への貢献方法について考える。		
教科書	加藤哲夫（2004）『「NPO」のつくり方』主婦の友社		
授業の工夫点	グループでNPOを創作する準備を体験的におこなう。		
授業の評価方法	グループでレポートを提出、授業の積極性		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	大学の地域交流と社会貢献演習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	ボランティア論/NPO/生活経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（生涯教育文化学科3年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計8名（男子学生0名 女子学生8名）	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	所定の授業外で、イベントの準備・実施をする。行政・NPO等のボランティア支援体験
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	1. 学生が地域貢献に関与する意味を考えます。 2. 大学から発信する学生作成の地域新聞を作成していきます。 3. 子どもが地域に参画させる方法やプログラムの立て方、地域の連携方法、PR方法等を学び、地域交流の実践を行います。		
授業内容	「地域の中に大学はある。私たちが社会貢献する意味とは?」をテーマとする。本授業では、大学を核として学生が地域に貢献する意義を議論していき、自分たちは何が出来るかを考えます。特に、地学連携のプロジェクトとして、地域新聞づくり、地域のイベント作り等を主に行い、地域を動かしていくプロセスを学びます。		
教科書	聖徳大学生涯学習研究所『若者が創るまちづくり』悠雲社		
授業の工夫点	サービスマネージングの実施（夏季期間は、子どもイベント「アート・パーク」を授業内に実施）		
授業の評価方法	授業での積極性、グループ研究ほか		
授業のサポート体制	外部団体及び行政がサイド支援		
学外の関係機関・団体との連携	市内の地域子育て学ネットワーク及び市内の行政・市民活動サポートセンターと連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	生涯学習イベントの企画Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア論/NPO/生活経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（生涯教育文化学科、日本文化学科）、児童学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計16名（男子学生0名 女子学生16名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	授業外の時間を利用して、イベントの準備及び運営をボランティア体験する。
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域の人々の学習ニーズや余暇生活の現状を把握し、生涯学習の場で事業を提供していくための基本的な企画・運営・評価をおこなうプロセスをおこなう。		
授業内容	社会教育主事は、各種イベントの企画・運営・評価を効果的に展開できる資質が求められている。本科目は、グループ単位で学習・講座の学習プログラムについての調査、研究・試案作り・発表・協議・まとめを行ない、基本的な学習プログラム及びイベント企画の技法を体験的に学ぶ。生涯学習施設が開催する学習プログラムを実施に実施・運営する。		
教科書	湯澤明『イベント戦略入門』産業能率大学		
授業の工夫点	イベントの実施（12月のクリスマスイベントを毎年実施）		
授業の評価方法	グループで企画提書を提出。授業の積極性、実地体験・評価		
授業のサポート体制	付属生涯学習研究所		
学外の関係機関・団体との連携	行政との連携、企業との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	人間の心と生き方		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア論/NPO/生活経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	児童学部、人文学部、音楽学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計70名（男子学生0名 女子学生70名）	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	ボランティア体験2日以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	1. ボランティア活動の本質を理解して、自己と他者との関係性を理解します。 2. ボランティア活動を、「探す・みつめる」「人と出遭う」「体験する・考える」プロセスを体感します。 3. ボランティア活動を通じて、現代社会における課題を理解し、自己を見つめなおすことによって、「今の自分に何ができるか」考える力をはぐくみます。		
授業内容	本授業は、「自分には何ができるか…!!」を考え、「無から有を産む」創造的な行動が必要です。「ボランティア」というこれまで経験のなかった活動を通じて、自分をみつめ、新しい出会いを体験し、社会の課題に気づくこと、自分が今まで行動に移せなかったことを見つめるチャンスとします。結果には、そうした試みは、自己のキャリアアップに繋がるものとなるでしょう。		
教科書	岡知史(1991)『知らされない愛について』大阪ボランティア協会・出版部		
授業の工夫点	ボランティア体験学習の導入（授業外で2回以上）		
授業の評価方法	1. 授業および地域交流終業後に、必ず自己の気づきに関するペーパーを提出する。 2. 地域交流・社会貢献では、個人の授業への積極性や態度を評価します。		
授業のサポート体制	外部のボランティア団体等が授業内でボランティア体験を語る。		
学外の関係機関・団体との連携	学生がボランティアをおこなう場合、紹介等を市内市民活動サポートセンターが行なう。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 敬和学園大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	キリスト教死生学・社会福祉学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	人文学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計154名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	必修		
授業目的	21世紀は「ボランティアの世紀」と提唱されるほど、今やボランティアは新時代を迎えています。一人暮らしの高齢者や障がい者が住み慣れた地域での暮らしを続けていくためには、フォーマルサービスだけでは成り立ちません。近所のコンビニや地域のたすけあい活動やボランティアなどインフォーマルサービスも大きな社会資源のひとつです。そしてこれからはますます、ボランティアの意義と役割は大きく、グローバルな視点と地域や人間の暮らしに結びついた実践の中で、新たな可能性を開く力となるでしょう。この講義では、そうしたボランティアの先駆的、開拓的な精神を学びます。また実践を追いながら公私協働や行政との新しいパートナーシップを考察します。さらに、ボランティアの実践として全員「ボランティア実習」を行います。この実習を通して、自己を見つめ、多くの社会問題に気づき、新しい共生社会を創造する力を養うことを目的とします。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティアとは何か 2. ボランティア活動の歴史 3. ボランティア活動の歴史 4. ボランティア思想史 5. キリスト教社会事業とボランティア 6. ボランティアの性格と役割 7. 社会福祉施設とボランティア 8. コミュニティケアとボランティア 9. 国際社会におけるボランティア活動 10. ボランティア実習について 11. 車いすの使い方、簡単な介護(実技) 12. 特別講義 13. ボランティア実習前オリエンテーション 14. ボランティア実習 15. ボランティア実習報告(まとめ) 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席・受講態度・レポート、ボランティア実習をもとに評価します。		
授業のサポート体制	ボランティア実習にあたり、ボランティアセンターのコーディネーターが全面的なバックアップを行います。		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア実習の受け入れ、および特別講義の講師など		
今後の授業の継続	今後も継続 ※ただし、ボランティア実習の行いかたについては実施時期、方法を含めて検討中		

○ 東洋学園大学

授業科目名	現代社会とボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	その他（基本教育科目）
開設学部（学科）及び年次	人文学部(国際コミュニケーション学科2年次、人間科学科2年次)現代経営学部(現代経営学科2年次)	授業のレベル	その他(共通・専門等の別を参照して下さい)
平成20年度履修者数	計114名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>現代の日本社会では、「都市化」の中で、農村や伝統都市の地域集団が崩壊したといわれている。しかし、「阪神大震災」が発生した1995年は「ボランティア元年」と呼ばれ、また現代日本の大都市にも、コミュニティが存在する可能性と必要性があることを示している。それは宿命づけられた「共同体」ではなく、個人の自発性による重要性を増す、ボランティア活動の意味と、現代日本でのコミュニティ再構築の課題を探究することが本講義の自的である。</p> <p>まず「ボランティア」の概念自体について検討したあと、主にイギリスに起源をもつ各種ボランティア活動の経緯と性格を紹介し、現代日本の大都市におけるボランタリー・コミュニティ形成の課題を探究して行きたい。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1.(講義の目的と紹介) 2.「阪神大震災」で見えたもの:ボランティアとコミュニティ 3.「ボランティア」とは何か?:「自発的」コミュニティへの道 4.NGO・NPOとボランティア 5.ボランティアの事例Ⅰ:ナショナル・トラストとオックスファム 6.ボランティアの事例Ⅱ:救世軍とグリーンピース 7.ボランティアの事例Ⅲ:「社会企業」 8.ボランティアの事例Ⅳ:「コープ」消費生活協同組合 9.ボランティアから「得られる」ものⅠ:個人の「ボランティア」活動と人生の意味 10.ボランティアから「得られる」ものⅡ:「ボランティア」活動の社会的役割 11.ボランティアから「得られる」ものⅢ:「ボランタリー・セクター」と都市コミュニティ 12.ボランティアの将来性:「共生社会」とボランティア 13.(前回の継続) 14.(講義の総括) 15.(講義の総括) 		
教科書	教科書は使用しない。毎回の講義で教材・資料を配布する。参考文献は、順次講義中に紹介する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	受講者には毎回、出席票兼用として講義の感想・意見・質問を書いてもらう。評価は、これと学期末の定期試験を総合する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NGO・NPO研究A		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	現代欧州事情	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部(国際コミュニケーション3年次)	授業のレベル	その他(共通・専門等の別を参照して下さい)
平成20年度履修者数	計17名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>NGO、NPOといっても難しい存在ではない。極めて簡単にまとめれば「社会貢献しようとする複数の人間が自発的に集まった組織」のことである。英国、米国の文化、制度を背景に生まれたものだが、手間換え、奉仕などの概念は日本にも古くから伝わっている。具体的には感興、福祉、文化、国際協力・交流、スポーツ、まちづくり、などのあらゆる分野の営利を目的としない民間団体を指す「民間非営利組織」がNPOであり、同じく非営利ながら、国連を発祥の地として政府の立場でないことが強調されたのが「非政府組織」NGOである。その活躍の場は途上国である事が多い。現在、我が国では10万以上のNPO、500ほどのNGOが活動している。どちらも市民が行う自由な社会貢献活動の受け皿であることに変わりはない。95年の阪神・淡路大震災の際のボランティアによる目覚ましい活動をきっかけに各分野での活動に弾みがついたのは記憶に新しい。一時のブームを超え、大きな社会的な潮流になっている。この真新しい川の流れに果敢に乗り出そうというのが当講義の目的である。就職を含めた将来の人生設計を描ききれない3、4年生、すでに何度か自らボランティア活動を体験した上でさらに踏み込んで意義、知識を整理したい学生さん大歓迎である。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1.全体のオリエンテーション 2.ボランティアとは何か 3.企業活動とNPO 4.自治体とNPOの協働 5.地域通貨、エコマネー 6.日本のNGO活動の足跡 7.地域NPOの実践紹介(全体像) 8. " (介護) 9. " (福祉) 10. " (環境) 11. " (まちづくり) 12.国際NGOの実践紹介(全体像) 13. " (開発と女性) 14. " (環境) 15. " (医療) 		
教科書	教科書は特に用意しない。参考になりそうな文献は当方が用意する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況、授業での発表態度、積極性を評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NGO・NPO研究B		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	現代欧州事情	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部(国際コミュニケーション3年次)	授業のレベル	その他(共通・専門等の別を参照して下さい)
平成20年度履修者数	計17名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>前期に基本事項を整理の後、“市民活動の今”をなるべく生きた教材から学んでいきたいと思う。オランダ12.5%、米国7.8%には及ばないが、日本でも総就業者に占めるNPO就業者の割合は4%を超え、大卒者の就職先としてのNGO、NPOへの注目度も上昇中である。純粋な官庁ではなく、かといって民間でもない医療法人、地域生協などの分野も新しい働き場として人気上昇中である。NGOではないが国際協力機構(JICA)が統括する青年海外協力隊についても掘り下げる積もりである。その起源、隊員の選考、活動状況などである。また、そそれの背景として日本の政府開発援助(ODA)、緒方貞子さんについても触れたい。授業の最後で、社会に対し自分なりにどのように関わって暮らしていくか、社会正義をどのように実現していくかを描き切れたかどうか討論したい。2009年までに市民の司法制度への参画、協働を目指した裁判員制度が導入される予定である。NGO、NPOとともに成熟した民主主義の両輪になると思う。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1.ジャパン・プラットフォーム構想 2.青年海外協力隊 3.シニアボランティア 4.日本のODA 5.南・南協力 6.対中国ODAの周辺 7.NPO、NGOを取り巻く法制 8.「生協」とはなにか 9.阪神淡路大震災から学ぶもの 10.新潟県・中越地震から得られたもの 11.米国の人道支援団体 12.英国の市民社会の実態 13.フランスの緊急医療支援団体 14.緒方貞子さんの足跡 15.まとめの討論「自分と社会との関わり」 		
教科書	参考になりそうな資料は当方が用意する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況さらに授業での発言、積極性などで評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NGO・NPO研究ゼミ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	現代欧州事情	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部(国際コミュニケーション3年次)	授業のレベル	その他(共通・専門等の別を参照して下さい)
平成20年度履修者数	計6名	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>NGO、NPOの活動の原動力は「社会のために何かいいことしたい」との市民一人一人のボランティアの心であることは3年次のNGO・NPO研究A、Bで整理してきた。1995年の阪神淡路大震災をきっかけに、日本で大きく花開いたボランティアの心はその後、各地のNGO、NPOへの活動へと引き継がれ、組織も整備され現在では日本の総就業者の4%超を占めるまでに成長したことも学んだ。海外の自然災害の際の日本の緊急援助態勢も充実してきた。</p> <p>当ゼミではこれらを一歩進めて「市民社会(シビルソサエティ)」というものの全体像を再構築する一方、各自の関心の分野を深く掘り下げる作業を積み重ねたい。『元気なNPOの育て方』戸田智弘著 NHK出版、を基礎にテーマを絞りながら卒論、ゼミ論へと展開して行って貰いたい。地域のNPO団体での実地研修、NGO団体への活動参加などを通じた論文作成も検討して欲しい。協力は惜しまない。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1.NPO実践記録購読(高齢者支援) 2. " (障害者支援) 3. " (子供の育成) 4. " (文化・芸術) 5. " (まちづくり、地域通貨) 6.学生によるまとめ・討論 7.学生によるまとめ・討論 8.NPO実践記録購読(地域の安全確保) 9. " (自然・環境の保護) 10.学生によるまとめ・討論 11.学生によるまとめ・討論 12.NPO実践記録購読(災害救助) 13.学生によるまとめ・討論 14.学生によるまとめ・討論 15.市民社会と私、討論 16.ビデオ映像によるNGO/NPO理解 17.「人間の安全保障」という概念 18.NGO実践記録購読(国境を越える廃棄物) 19. " (酸性雨を巡る国際協力) 20. " (インドネシアの経済特区開発) 21.学生によるまとめ・討論 22.学生によるまとめ・討論 23.NGO実践記録購読(インドのダム建設) 24. " (ケニアの試み) 25. " (南米の日系人社会) 26. " (サウジアラビアで柔道指導) 27.学生によるまとめ・レポート発表 28.学生によるまとめ・レポート発表 29.学生によるまとめ・レポート発表 30.総まとめ 		
教科書	参考書 『NPOの時代』山内直人著 大阪大学出版会		
授業の工夫点			
授業の評価方法	ゼミでの積極的な発言を高く評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	国際NGOと国際貢献		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人的資源管理	共通・専門等の別	その他（基本教育科目）
開設学部（学科）及び年次	人文学部（国際コミュニケーション学科1年次、人間科学科1年次） 現代経営学部（現代経営学科1年次）	授業のレベル	その他（共通・専門等の別を参照して下さい）
平成20年度履修者数	計53名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>本科目の目的は地球規模の問題解決に向けて重要な役割を果たす国際NGOの役割ならびに活動を理解することです。この授業では、私達の住む地球を取り巻く地球温暖化、環境破壊、貧困、人口問題や企業の社会的責任への取り組みなどさまざまな地球規模の問題を学習します。次に授業では、20世紀後半に100万人以上の自国民が殺され、国土が荒廃したカンボジアをケース・スタディとして取り上げます。この国の復興過程における国際NGOや国連機関の取り組みについて学習することにより、学生は市民レベルの国際貢献のあり方とその手法についての理解を深めることが出来ます。</p> <p>授業では、学生が授業を理解しやすいように、コンピュータやビデオを適宜使います。受講希望者が多い場合には、第1回目の授業時に抽選を行い、受講者を決定します。必ず第1回目の授業に出席してください。また、この授業では地球規模の問題に対する理解を深めるために、グループ研究・発表を予定しています。コンピュータを頻繁に使用しますので、PCの基本操作（インターネットへの接続、ブラウジング等）を習得していることが前提になります。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1.オリエンテーション —概要、授業の進め方 2.地球の環境 DVD「地球の未来」視聴、討議 3.地球規模の問題 —地球温暖化 4.地球の現状 —先進国 V.S開発途上国 5.識字教育 —UNESCO世界寺子屋運動（インドのイスラム地域での教育） 6.バングラディッシュ・グラミン銀行（NGO）（2006年度ノーベル平和賞受賞） 7.グラミン・フォン、研究発表テーマ決定 8.青年海外協力隊、他の日本のNGO 9.研究発表準備 10.研究発表準備 11.学生研究発表 12.地球の環境保護と企業の社会的責任（1） 13.地球の環境保護と企業の社会的責任（2） 14.カンボジアの歴史、内戦、現在 15.映画「The Killing Fields」視聴、まとめ 		
教科書	<p>ハンドメイドの教材を使用します。</p> <p>参考図書：『地球のなおり方』 ドネラ・H・メドウス他 ダイアモンド社</p> <p>参考Web Site： クリック基金 http://www.dff.jp/ NPO2050 http://www.npo2050.org/ 世界寺子屋運動 http://www.unesco.or.jp/contents/tera/index.html 日本ボランティアセンター http://www.ngo-jvc.net/ 青年海外協力隊 http://www.jica.go.jp/activities/jocv/ ワールドビジョン http://www.worldvision.jp/jworwv/</p>		
授業の工夫点	地球規模の問題に対する理解を深めるために、グループ研究・発表をする。		
授業の評価方法	授業への出席（30点）、グループ研究発表（30点）、レポート（40点）、および授業への貢献度を総合的に判断し評価します。		
授業のサポート体制	学生が授業を理解しやすいように、コンピュータやビデオを適宜使う。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア体験演習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	犯罪心理学、臨床心理学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（人間科学科2年次）	授業のレベル	その他（共通・専門等の別を参照して下さい）
平成20年度履修者数	計9名	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	20～25時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>カウンセラーと言えば、相談室のソファに腰かけて相談に来た人の話に耳を傾けている様子を想像する人が多いかもしれない。しかし、阪神淡路大震災の時のカウンセラーの活躍はまだ記憶に新しい。近年、子育て支援活動、不登校の子どもたちへの支援活動、医療領域でのデイ・ケアの援助等、カウンセラーの相談室から外に出、地域社会のさまざまな場面で援助活動を行っている。このボランティア実習では、カウンセラーや教員、社会福祉士などの専門家のもとで援助活動に参加することで、臨床心理の現場の実際を体験的に学ぶとともに、このような現場でのボランティアの重要性や意義を理解することを目的とする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的には授業時間を利用してボランティア活動を行う(ただし、活動の特殊性から1回の活動時間は2時間～2時間30分程度となる場合が多い) ・本人が希望するれば他の曜日にボランティアを行うことも可能である(この場合でも、オリエンテーション2回と体験発表会2回には出席しなくてはならない) ・ボランティア先の遠足やキャンペーン活動などの行事に参加する場合は、2時間1回の授業と換算する ・単位認定には、オリエンテーションと体験発表会の参加に加えて、最低15時間以上の活動は必須とする。 ・ボランティア活動の報告書はボランティア先の印をもらってから、毎回担当教員に提出する。 		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1.授業の目的および実習の方法について 2.実習の概要とボランティア活動に関する注意事項について 3.実習 4.実習 5.実習 6.実習 7.実習 8.実習 9.実習 10.実習 11.実習 12.実習 13.体験発表会 14.体験発表会 15.レポートの作成 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	活動参加の回数、報告書およびレポートの内容で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	老人施設や教育支援センター等		
今後の授業の継続	未定		

○ つくば国際大学

授業科目名	ボランティア論 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	産業社会学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	ボランティア論 I・II の合計:144名 (男子学生100名 女子学生44名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	必修選択		
授業目的	福祉ボランティアを中心に、ボランティア活動に参加する上で必要な知識と、将来、ボランティアを支援するための知識について概説する。ボランティアとして自発的に活動したり、ボランティアを受け入れる立場になった際に、適切な支援を行うための基礎的知識を習得することを目標とする。		
授業内容	<p>16. ボランティアとはボランティア体験者の話を聞く</p> <p>17. ボランティアの歴史(1):ボランティアが普及してきた歴史について、諸外国を中心に概説する。</p> <p>18. ボランティアの歴史(2):ボランティアが普及してきた歴史について、戦前の日本を中心に概説する。</p> <p>19. ボランティアの歴史(3):ボランティアが普及してきた歴史について、戦後の日本を中心に概説する。</p> <p>20. ボランティアの理念(1):ボランティア活動の定義について概説する。</p> <p>21. ボランティアの理念(2):ボランティア活動の性格・役割について概説する。</p> <p>22. ボランティア活動と心理(1):ボランティアをする側の心理について概説する。</p> <p>23. ボランティア活動と心理(2):ボランティアをされる立場にある人の心理について概説する。</p> <p>24. ボランティアに対する支援(1):ボランティアコーディネーター導入の歴史や役割について学ぶ。</p> <p>25. ボランティアに対する支援(2):学校や企業等におけるボランティアへの支援について概説する。</p> <p>26. ボランティアに対する支援(3):社会福祉協議会におけるボランティアへの支援について概説する。</p> <p>27. ボランティアに対する支援(4):施設等におけるボランティアの受け入れ体制の整備について概説する。</p> <p>28. ボランティア活動と諸問題:現代におけるボランティア活動に関する諸問題について概説する。</p> <p>29. ボランティア活動の心得:ボランティア活動を行う上で必要な事柄について概説する。</p> <p>30. まとめ</p>		
教科書	「現代社会福祉のすすめ」馬場茂樹・和田光一 編著(学文社)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況、授業中のミニレポート、課題レポート、及び期末試験の結果により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	福祉施設		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論 II		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	産業社会学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	ボランティア論 I・II の合計:144名 (男子学生100名 女子学生44名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	必修選択		
授業目的	ボランティア論 I で得た知識をもとに、福祉ボランティアを実際に体験し、ボランティアの意義について理解することを目標とする。		
授業内容	<p>1. オリエンテーション:授業の進め方について</p> <p>2. 事前指導(1):各自、興味のある分野を見つけ、実際に体験する福祉ボランティア活動をしぼる。</p> <p>3. 事前指導(2):コミュニケーション技法を学ぶ。</p> <p>4. 事前指導(3):車イスの使用法等、福祉ボランティアに必要なスキルを学ぶ。</p> <p>5. 事前指導(4):ボランティア体験の際の留意事項の確認</p> <p>6. 事前指導(5):実際に活動するボランティア体験先を決定する。</p> <p>7. ボランティア体験(1):オリエンテーションおよびボランティア活動1日目</p> <p>8. ボランティア体験(2):ボランティア活動2日目</p> <p>9. 中間指導(1):活動記録をもとに、体験した内容を整理する。</p> <p>10. ボランティア体験(3):ボランティア活動3日目</p> <p>11. ボランティア体験(4):ボランティア活動4日目</p> <p>12. 中間指導(2):活動記録をもとに、体験した内容を整理する。</p> <p>13. ボランティア体験(5):ボランティア活動5日目</p> <p>14. 事後指導(1):ボランティア体験報告書の作成</p> <p>15. 事後指導(2):ボランティア報告会</p>		
教科書	「現代社会福祉のすすめ」馬場茂樹・和田光一 編著(学文社)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況、授業中のミニレポート、課題レポート、及び期末試験の結果により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	福祉施設		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 新潟経営大学

授業科目名	経営学実地研究1・2(地域青少年集団経営)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	教育学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経営情報学部(経営情報学科1~4年次、競技スポーツマネジメント学科2~4年次)	授業のレベル	その他(責任感があり、対人関係やコミュニケーション力を自ら高めようという意識を持っているものを対象とする)
平成20年度履修者数	計3名(男子学生3名 女子学生0名)	授業区分	実習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	72時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域に暮らす小・中学生を対象に、遊びや伝統文化、生活、自然体験を享受する機会を与え、心身の健やかな育成をもたらす学習活動を提供する。この活動を通して、地域社会における世代間交流を促し、「ひとづくり」と「まちづくり」を結びつける発想と技法の修得をはかることを目標とする。「次世代育成活動支援ボランティア」を内容とするが、活動プログラムの企画立案、計画、指導などにもコミットすることで、グループマネジメントの基礎を学ぶとともに、対人援助、コミュニケーション、人間関係形成のスキルアップを図ることを期している。		
授業内容	田上町公民館と協同・連携を図りながら実施する。同公民館で毎月一度、土曜日に定期的で開催されている「ゆうゆう教室」および8月に実施されている「青少年リーダーズ研修」等の活動に参画することで、学習を深めていく。基本的に以下のようなサイクルで進めていく。 1. 開講時に、田上町公民館スタッフより社会教育計画に基づいた、各事業計画の趣旨、方針、概要等についてのレクチャーを受ける。 2. 事業計画の計画をふまえ、田上町公民館スタッフと検討協議を図り、本学受講生のアクションプランを策定する。 3. 各月のアクションプランに基づいた準備(プログラムの作成、環境準備、田上町内小中学校への広報等)を進める。 4. 各月のプログラムにリーダー、ファシリテーターとして参画する。 5. プログラムごとにレポートを作成し、田上町教育委員会スタッフと意見交換による(ふりかえり)を行い、活動のまとめを行う。		
教科書	「子どもの参画—コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際」萌文社、2000年 ロジャー・ハート著		
授業の工夫点	プログラムの企画、立案、実施に伴う子供の指導支援、環境の整備等全てのプロセスを学生に主体的に担わせる。		
授業の評価方法	毎月受講生が提出する報告書と学期末レポートで行う。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	田上町公民館と協同・連携を図りながら実施している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	経営学実地研究5・6(プロ・スポーツ運営)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	スポーツ社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経営情報学部(経営情報学科1~4年次、競技スポーツマネジメント学科2~4年次)	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計12名(男子学生7名 女子学生5名)	授業区分	実習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	63時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	アルビレックス新潟、新潟アルビレックスB.C.の公式戦において試合会場での各種運営業務にボランティアスタッフとして参加することで、業務の内容と手順を理解するとともに顧客獲得や顧客満足度を高めるための工夫などを考案する能力を高める。また、球団や施設の日常業務を経験することで、プロ・スポーツ企業運営に関する知見を高めるとともに、スポーツ施設を経営資源として活用し、新たな価値を持った商品を生み出す。		
授業内容	1. 各球団の試合開催時に、各種運営業務にボランティアスタッフとして従事する。 2. 報告会は月1回実施する。 3. 報告書は業務に従事した場合に作成、提出。 4. 学期末にレポートを提出。(反省点、改善点、新たなビジネスチャンスなど総合的に考察した結果をまとめる。)		
教科書	なし		
授業の工夫点	学生が行った先、当該球団の職員から事業運営に対するレクチャーを受け、プロスポーツ球団のゲーム運営場面に学生を派遣し、企画運営に学生を携わせる機会を設ける。		
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	アルビレックス新潟、新潟アルビレックスベースボールクラブ、三条市社会体育課との連携。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	経営学実地研究9・10(地域少年スポーツ集団指導)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	スポーツ指導論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経営情報学部(経営情報学科1~4年次、競技スポーツマネジメント学科2~4年次)	授業のレベル	その他 (中学校運動部活動指導教諭のアシスタント)
平成20年度履修者数	計7名(男子学生7名 女子学生0名)	授業区分	実習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	384時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	中学校の運動部活動に指導者として参加することで、少年期におけるスポーツ技術の指導方法や指導計画の立案方策を実践的に体得する。また、思春期にある生徒やその集団に見られる心理的社会的特長に接することで、指導者としての対応方法を学ぶ。これらを通じて、集団運営の要点や留意点を理解するとともに、教師及び保護者とのコミュニケーション機会を併せて組織管理の能力を養う。		
授業内容	指導の要請を受けた加茂市内の中学校運動部で定期的に実技指導を行う。 実施曜日、役割分担は開始後に決定する。		
教科書	なし		
授業の工夫点	チームのレベルに応じて指導内容を工夫する。個人に適した練習や指導を行う。		
授業の評価方法	学期中3回実施する月例報告会に報告書を提出して概況を口頭で報告し、学期末にレポートを提出する。報告書3本、報告会出席3回、学期末レポート1本が全て達成で単位は認定されない。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	加茂市内の中学校との連携。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○新潟国際情報大学

授業科目名	国際協力		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	情報文化学部3年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計73名(男子学生48名 女子学生25名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義では、国際協力のうち、低開発状態を改善しようとする組織的行為である開発に焦点を当て、①なぜ国際協力が必要であると認識されるのか、②国際協力はいかになされるべきか、③国際協力は実際にいかなる形で進められているのか、という3つの問いを順に検討していく。具体的には講義全体を3分割する。第一部では「発展途上国概論」と題して、発展途上国の現状を関連文献及び担当者の現地調査の成果から説明する。第二部では、「国際協力の思想」と題して、国際協力に対する考え方がどのように変化してきたかを説明する。第三部では「国際協力の実際」と題して、第一部と第二部での講義を踏まえ、実際の国際協力がいかに行われてきたのか、また行われているのかを説明する。これら三つの部分の学習を通して、受講生が開発を中心とした国際協力を総合的に理解することを講義の目的とする。尚、本講義では、国際協力の現場経験が豊富な専門家を外部講師として招聘する予定である		
授業内容	1 講義全体の見取り図:講義の進行・目的、文献紹介 2 発展途上国概論 3 人口問題 4 環境問題 5 農業と開発 6 医療と災害 7 都市化 8 近代化論と従属論:開発の基礎理論 9 反近代化論の潮流 10 政府開発援助の仕組み 11 事例研究①:政府開発援助の実際 12 非政府組織と国際協力 13 事例研究②:非政府組織による国際協力活動の実際 14 考察:政府および非政府組織による国際協力の課題と可能性 15 まとめ		
教科書	教科書は特に指定しない。初回の授業で講義の参考文献を紹介する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	論述形式の期末テスト及び複数回のレポートの点数で評価する。2007年度は、1回のレポートと期末試験(論述試験)の結果で評価を行った(レポートの回数は必要に応じて増減する)。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地方自治論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	情報文化学部3年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計50名(男子学生39名 女子学生11名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>昨年、宮崎で東国原知事、今年は大阪で橋下知事と、タレント出身の知事が相次いで誕生し話題となっています。これらの出来事は、彼らを選んだ地域の人々にどのような影響を与えるのでしょうか。現在、日本の地方自治は、明治以来の伝統的な中央集権的仕組みから「地方分権」的仕組みへと変わりつつあります。それがわたしたちにとって何を意味するのかを理解するためには、みなさん自身が地方自治、さらに広くは政治一般について学ぶ必要があります。みなさんの多くはちょうど選挙権を初めて行使する年代でしょうから、社会的にもみなさんの政治的知識や意志が問われてくる場面も多くなってきます。この地方自治論では、国(中央)の政治のしくみとは異なった、地方のしくみを学び、地方と中央の関係、ひいてはそれらの関係がわたしたちの生活にどのように関わっているのかを学んでいきます。公務員を考えている学生や地元でボランティア・NPO活動に携わっている学生の受講も歓迎します。履修人数等の兼ね合いもありますが、学生のみなさんの積極的参加(発言・討論・自主レポート等)も求めるつもりです。</p>		
授業内容	<p>項目の順番などについては多少、取捨選択や入れ替えを行う予定です。また、その時々選挙や政治的な動きもありますので、そうした新しい事項を取り上げることもあります。それから、担当教員が沖縄出身ということもあり、今年度は沖縄をめぐる問題にも多少触れたいと思っています。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション- 開講にあたって 2. 地方自治はなぜ大切か(1) 3. 地方自治はなぜ大切か(2) 4. 地方自治の制度(1)- 首長と議会 5. 地方自治の制度(2)- 首長と議会 6. 受講生による簡単な課題発表(1) 7. 受講生による簡単な課題発表(2) 8. 住民投票(1) 9. 住民投票(2) 10. 沖縄をめぐる問題(1) 11. 沖縄をめぐる問題(2) 12. NPO 13. 町内会・自治会 14. 地方自治の歴史・まとめ 15. 試験 		
教科書	教科書は特に使用しません。参考文献は講義の中で、その都度紹介します。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席+平常点30%、試験70%を予定しています。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGO論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	情報文化学部3年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計81名(男子学生56名 女子学生26名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代社会の様々な局面で、NGO(非政府組織)やNPO(非営利組織)の活動が目立つようになって久しい。しかし、これを大学の講義などで体系的に論じ、学問的にとらえ直す作業は始まったばかりである。本講義では、これら新たな市民活動のうねりを比較的長い歴史的な観点からとらえ直し、その現代的な意味について考えてみたい。さらに、流動化する世界に呼応して刻々と変化するNGO/NPOの多様な活動の現実をも見据えてみたい。また、これら「自発的結社」の可能性のみならず、実際の活動にともなう構造的・実践的な課題や問題点も明らかにしたい。本講義では、NGO/NPOの諸活動を広く「ボランティア」論や「市民社会」論の文脈に位置づけ、これら市民活動の文明論的な意義についても考察を展開したいと思っている。テーマの性質上、受講者の自発的な参加や招聘講師の講演などにも触発されながら、新しい講義や大学そのもののあり方も探してみたい。		
授業内容	新鮮な題材を多く取り入れたいため細目は限定しないが、以下の内容には触れる予定である。また、反グローバル化運動や環境NGOについての映像資料を多用する他、実際に様々なNGOやNPOで活躍する人を教室に招き、現場の視点から話をしてもらう予定である。 1. NGO/NPOとは何か、その歴史的意味 [2回] 2. NGO/NPOの分類と争点 [1回] 3. グローバル化とNGO/NPO [2回] 4. 国連とNGO [1回] 5. 地方発のNGO [1回] 6. 女性とNGO [1回] 7. 難民問題とNGO [1回] 8. 小火器問題とNGO [1回] 9. 核問題とNGO [1回] 10. アイデンティティ・市民社会・NGO [2回] ※尚、+1回を、資料映像の鑑賞、+1回を招聘講師による講演に充てる。		
教科書	西川潤・佐藤幸男編『NGO/NPOと国際協力』(ミネルヴァ書房)。必読参考文献の一例として、高島通敏編『現代市民政治論』(世織書房)、D.ヘルド『デモクラシーと世界秩序』(NTT出版)、M.ウォルツァー『グローバルな市民社会に向かって』(日本経済評論社)、目加田説子『地雷なき地球へ』(岩波書店)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	しばしば講義の最後に、コメントカード(質問やコメント、感想を書いてもらう)を作成してもらい、それらは講義の改善に役立てるだけでなく、受講者の参加姿勢を見る材料とする。基本的に最終筆記試験の成績により評価を決定するが、課題として作成してもらう「NGO調査レポート」の内容も大きく加味する(レポート35%、試験65%)。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際研究ゼミナール1		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	情報文化学部3年	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計12名(男子学生7名 女子学生5名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修		
授業目的	新潟の民衆史。沖縄や新潟のミクロな地域主義を含んだ「東アジア」のゆくえ。「グローバル化」というものの正体。「グローバル化」にともなう「人権」概念の再構成。原子力発電および核兵器をめぐる政治。遺伝子や臓器をめぐる政治。人間の生活を破壊する地雷の問題とそれにとりくむ各種の活動。民間軍事会社(PMC)や新しい軍事経済について。国際報道のしくみ。「国際世論」はどのように形成されるのか。無数のNGO活動の把握と分類。「ボランティア」型社会の可能性。戦後日本の平和運動の世界史的意味付け		
授業内容	危険や問題がグローバルに展開する現代で、人間がすこしでもよりよく生きぬいていくための方策をいっしょに考えてみようと思います。そのためにはまず、現代の危機や問題の本当の姿をしっかりと知的につかまなければなりません。身近な問題がもつ世界的な意味をおのおのが理解すること。これが第一のねらいです。第二に、このような問題を考えるにあたって、なぜ既存の知的な枠組み＝社会科学だけではダメなのか、いかにこれまでの「勉強」が、人間がいきいき生きていくための「学問」をダメにできたのか、について考えてみようと思います。その意味で、新しい学問運動としての「平和学」の可能性や新しい大学のあり方などについても議論できればと思います。そして最後に、広い世間でさまざまに展開する新しい試みや活動を見ながら、現代でよりよく生きてゆくための新たな方策をともに探求できればと思います。さまざまな市民活動やNGOで活躍する人々をゼミに招いたり、ゼミ生自身が自分たちの力でNGOを設立・運営したり、いろいろなことに挑戦しようと思います。最終的に各自ゼミ論文(3年次)、および卒業論文(4年次)の作成を目指すため、多種多様なテキストを読みこんでゆくだけでなく、さらに必要に応じて調査旅行やフィールド・ワークも行います。また、映画をはじめとする映像資料もできるだけ多く活用する予定です。なお、佐々木ゼミでは毎年、韓国・台湾・中国いずれかの地域に平和研修旅行に訪れるのが慣例になっています。各地の歴史資料館や戦争/平和記念館(韓国では「ナムムの家」)などを訪れ、身体全体で世界の問題を感じ、思考することを目指します。当ゼミでは広い意味での暴力や平和に関する問題を扱いたいと思いますが、細かいことは、参加学生の自由意思にゆだねます。扱うテキストに関しては以下に一例として挙げたものを参考にしてください。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	ゼミへの参加態度や貢献度 + レポートの出来。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 筑波学院大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	情報コミュニケーション学部1～4年次対象	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計33名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	本授業は、ボランティア論の焦点をその心性(ボランティアリズム)にあて、その後にはボランティア組織とマネジメントを考察する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション: 授業の進め方 2. ボランティアの心理とモチベーション 3. 組織における人的資源とボランティア: ボランティアは組織にとっていかなる人々か 4. グループから官僚的組織への成長: 穏やかな仲間から強固な組織へ 5. ビュロクラシーの段階: 組織としての確立 6. ミッション経営とカリスマ: ボランティア組織の目的とリーダー 7. 仕事のルーチン化と理事会の役割: 仕事をいかに分配するのか 8. マネジメント・コントロール: いかに組織を管理するのか 9. 組織デザインの再検討: 仕事の分配を見直す 10. 環境適合: 組織はいかに周りの諸環境と付き合うべきか 11. 経営戦略: 組織強化と目的達成への努力 12. ソーシャルマーケティング: ボランティア組織にとって市場とはどこか 13. サービスミックス: 行政とのパートナーシップ 14. ボランティア組織の活動評価 15. 組織改新と経営管理の要点: 生き残り、さらに充実した組織とするために 		
教科書	ボランティア・NPOの組織論～非営利の経営を考える 田尾雅夫・川野祐二 編著		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業参加度(50%)、レポート(50%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 十文字学園女子大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間生活学部(人間福祉学科2・3年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計49名(男子学生0名 女子学生49名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会福祉の視点からボランティア活動及びボランティアコーディネーションについて学習し、自らがボランティアとして、支援者として実践に臨むことができる力を養うことを理解させる。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティアについて 2. ボランティアをする、される一関係性について 3. ボランティアリズムの根底にあるもの 4. ボランティア活動の歴史的経緯と現状 5. ボランティア活動の役割について 6. ボランティア学習について 7. ボランティア活動プログラムについて 8. ボランティア活動実践から学ぶ 9. ボランティアセンター機能について 10. ボランティアコーディネートについて 		
教科書	「学生のためのボランティア論」(岡本栄一、菅井直也、妻鹿ふみ子著)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席(毎回行う授業に対する評価カード提出)及び授業態度とレポート等の提出物で総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	生活とボランティア活動		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	社会情報学部 (コミュニケーション学科2・3・4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計31名(男子学生0名 女子学生31名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会福祉の視点からボランティア活動及びボランティアコーディネーションについて学習し、自らがボランティアとして、支援者として実践に臨むことができる力を養うことを理解させる。		
授業内容	1. ボランティアについて 2. ボランティアをする、される一関係性について 3. ボランティアの根拠にあるもの 4. ボランティア活動の歴史的経緯と現状 5. ボランティア活動の役割について 6. ボランティア学習について 7. ボランティア活動プログラムについて 8. ボランティア活動実践から学ぶ 9. ボランティアセンター機能について 10. ボランティアコーディネートについて		
教科書	「学生のためのボランティア論」(岡本栄一、菅井直也、妻鹿ふみ子著)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席(毎回行う授業に対する評価カード提出)及び授業態度とレポート等の提出物で総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 宇都宮共和国

授業科目名	NPOコミュニティビジネス論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	シティライフ学部 3・4年次	授業のレベル	
平成20年度履修者数		授業区分	
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	利益を目的としない民間組織のあり方と活動を理解する。NPOは公共的役割を果たす民間組織である。コミュニティビジネスは、「ビジネス」なので、一応利益を求めると、地域の資源や人材の活用、地域社会の活性化等に主たる狙いがある。本講義では、これらの組織の理論と実態を勉強する。		
授業内容	1. 講義の進め方: 講義の狙い・講義方法の解説。評価方法の説明 2. NPOの定義: NPOとは何か。NPOとNGO 3. コミュニティビジネス定義: コミュニティビジネスとは何か。協働型企業 4. 官・民・共の関係(1): 政府・非政府、営利・非営利、組織・個人 5. 官・民・共の関係(2): NPOとNGO、第3セクター企業 6. 官・民・共の関係(3): 協働とは、地域社会と企業 7. 栃木のNPO(1): 栃木のNPOの種類 8. 栃木のNPO(2): 栃木のNPOの活動 9. 栃木のNPO(3): 栃木のNPOへの支援体制 10. NPO活動への参加: NPO活動の実践 11. 地域社会と企業活動: 地域社会における営利追求を第一義としない企業活動 12. コミュニティビジネスの種類: コミュニティビジネスの種類と分野。栃木と全国 13. コミュニティビジネスの活動: 栃木のコミュニティビジネスの活動例。地域振興策の一環、地域社会活動の一環 14. コミュニティビジネスへの支援・助成: 栃木のコミュニティビジネスへの支援と成功例 15. 期末試験		
教科書	開講時に指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験、平常点(受講回数、受講態度、提出レポート等)を総合的に判断する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続			

○ 共愛学園前橋国際大学

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	職務上、学部長が担当	共通・専門等の別	その他（自由科目）
開設学部（学科）及び年次	国際社会学部（国際社会学科、全学年対象）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計76名（男子学生19名 女子学生57名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30日以上ボランティア活動に参加（時間数の限定はなし）
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>ボランティアとは、そもそも、各人が自主的に報酬を得ることなくさまざまな場面で人々の役に立つ活動を行うことをいいます。ですから、本来は、大学で授業として単位を認定するのはおかしいと思う人もいるかもしれません。一方で、自分が行った活動に対して一定の評価が与えられると誰でも嬉しく感じるものですし、また達成感も生まれます。もちろん、いろいろな人々との交流や地域への貢献というボランティア活動を通じて得られる学びは、他では得られない貴重な財産にもなります。「ボランティア実習」を開設し、単位を認定することとなったのは、そのような学びが皆さんにとってとても大切なことであると考えてのことです。皆さんが活動を通して得た学びに対して単位を認定するということになるのです。同時に、多くの皆さんにこのすばらしい経験をしてもらいたいという期待も込められています。</p>		
授業内容	<p>「ボランティア実習」単位取得までの流れ</p> <p>①説明会への出席</p> <ul style="list-style-type: none"> 必ず出席しなければなりません。出席できなかった人は、次年度の説明会からスタートとなります。説明会は年度当初に実施し、開催については掲示にてお知らせします。 登録票を提出し「登録」します。 <p>②「ボランティア講演会」への出席</p> <ul style="list-style-type: none"> 前期に1回、後期に1回開催され、必ず出席しなければなりません。出席できなかった人は、次年度の出席できなかった回に出席します。 講演会の開催通知は掲示とメールで行います。 講演会を聴いていなくてもボランティア活動は行ってかまいません。ただし、この講演会はボランティアを行ううえでの必要な心構えなどを学ぶ機会ですので、登録した年度に出席することを強く勧めます。また、前後期各1回が最低条件ですが、何度聞いてもかまいません。講師の先生が違う場合、いろいろな視点を与えてくれることも期待できますので、ぜひ参加してみてください。 <p>③ボランティア活動</p> <ul style="list-style-type: none"> 30日以上ボランティア活動に参加します。 ボランティア活動は、大学で紹介するもの他、各自で探したものでもかまいません。 1日につき1枚「ボランティア活動報告書」を作成し、そのつど学生センター窓口へ提出します。 あくまでもボランティアですので、1日の活動時間の長短は問いません。 <p>④単位の認定</p> <ul style="list-style-type: none"> 登録者が、前期、後期それぞれの講演会に出席し、30日分の「ボランティア活動報告書」を提出した時点で、その学期末に単位が認定されます。 登録後は、卒業まで、単位を認定されるのに何年かかってもかまいません。（1年生の場合原則4年間のうちに条件を満たせばよいこととなります。） <p>⑤単位認定後</p> <ul style="list-style-type: none"> 単位は認定された以上に取得することはできませんが、ボランティア活動自体はすばらしいことですので、是非続けてください。登録票を更新すれば、各種お知らせと保険の加入は継続されます。 		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	認定される単位と評価について、①説明会に参加し登録をします。毎年度2回開催される「ボランティア講演会」に出席します。30日以上ボランティア活動に参加します。以上の取り組みが完了したら2単位取得できます。②単位は自由科目の単位となります。③評価は「認」です。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	小学校・中学校・公民館など		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東京福祉大学

授業科目名	基礎福祉演習Ⅰ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	社会福祉学部(社会福祉学科1年次、保育児童学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計530名(男子学生217名 女子学生313名)	授業区分	講義、演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	24～40時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	<p>受講生はこの科目の終了時に下記の学習目標を達成する事が期待される。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.個人、家族、課程が直面する様々な社会問題は、その人々が住む地域と環境に密接に関係していることを理解する。 2.社会問題の解決のために、地域と環境を調査士、地域のニーズを探索する技術を習得する。 3.調査したデータの分析法を習得する。 4.分析したデータに基づいて、対象とする社会問題を選び、介入方法を検討する。 5.介入計画の立て方を学ぶ。 6.夏期休校中又はその前後に介入実践をする。 7.実践の成果を正しく評価する技術を体得する。 		
授業内容	4年間の福祉の学習を基礎として、地域社会とそこに住む人々の生活を営む上での福祉ニーズをどのようにとらえるか、その基本を学習し、それに沿った援助方法を検討する。また段階を追って援助計画を立てる訓練とそれを短期間で実践し成果をお互いに評価し、福祉利用者との間により良い人間関係を形成する能力が芽生えるようにする。福祉においては、的確に現状を把握し、冷静に問題に対処する能力とともに、他方では利用者に共感する豊かな人間性が必要となる。この両面を統合的に習得していくことを目標とする。		
教科書	「はじめての社会福祉」編集委員会編 「はじめての社会福祉」 ミネルヴァ書房		
授業の工夫点	グループディスカッション、グループによるニーズ調査、成果発表		
授業の評価方法	授業参加(出席、発言、グループ参加等)40%、調査発表20%、実践20%、個人レポート20% 実践でリーダーシップを取った人は20%加算する。		
授業のサポート体制	オフィシアワーの設定		
学外の関係機関・団体との連携	学校機関、社会福祉施設、行政機関		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	基礎福祉演習Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	社会福祉学部(社会福祉学科2年次、保育児童学科2年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計375名(男子学生164名 女子学生211名)	授業区分	講義、演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	24～40時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	<p>受講生はこの科目の終了時に下記の学習目標を達成する事が期待される。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.個人、家族、課程が直面する様々な社会問題は、その人々が住む地域と環境に密接に関係していることを理解する。 2.社会問題の解決のために、地域と環境を調査士、地域のニーズを探索する技術を習得する。 3.調査したデータの分析法を習得する。 4.分析したデータに基づいて、対象とする社会問題を選び、介入方法を検討する。 5.介入計画の立て方を学ぶ。 6.夏期休校中又はその前後に介入実践をする。 7.実践の成果を正しく評価する技術を体得する。 		
授業内容	基礎福祉演習Ⅰを基礎として、さらにレベルを上げて繰り返し学習する事により、福祉ニーズの調査、問題発見能力、援助方法の検討と決定、計画・実践・評価の過程という福祉学習の基本を確実に習得する。同時に問題点を自発的に深く研究していく能力とリーダーシップを養成する。現実の福祉の現場では、様々な領域の専門家、地域住民、ボランティアや利用者自身との協力を図りながら作業が進められる。新入生との共同授業によって、そのような協働作業の基本を学んでいく。		
教科書	「はじめての社会福祉」編集委員会編 「はじめての社会福祉」 ミネルヴァ書房		
授業の工夫点	グループディスカッション		
授業の評価方法	授業参加(出席、発言、グループ参加等)40%、調査発表20%、実践20%、個人レポート20% 実践でリーダーシップを取った人は20%加算する。		
授業のサポート体制	オフィシアワーの設定		
学外の関係機関・団体との連携	学校機関、社会福祉施設、行政機関		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	リハビリテーション	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部（社会福祉学部1年次、保育児童学科1年次） 教育学部（教育学科1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計51名（男子学生25名 女子学生26名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	1.ボランティア活動とは何かについて理解する。 2.ボランティア活動の自発性について理解する。 3.さまざまなボランティア活動を理解する。 4.ボランティア活動のコーディネート方法について学ぶ。		
授業内容	ボランティアについての基礎理論を学習した上で、現場でのニーズの把握、適切な組織構成などの実践理論を様々なボランティア活動例（災害援助活動、国際交流、社会福祉活動等）を取り上げながら学習する。また、より効果的な活動を行うためのコーディネート方法等を発表、ディスカッションしながら学ぶ。		
教科書	東京福祉大学編「新・社会福祉要説」 ミネルヴァ書房 巡静一、早瀬昇編著「ボランティアの理論と実際」 中央法規		
授業の工夫点	グループディスカッション		
授業の評価方法	出席状況20%、授業時の提出物・参加態度20%、試験レポート60%		
授業のサポート体制	オフィスアワーの設定		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 高崎健康福祉大学

授業科目名	ボランティア・市民活動論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	健康福祉学部（医療福祉情報学科1年次、保健福祉学科1年次、健康栄養学科1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計215名（男子学生58名 女子学生157名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	医療福祉情報学科＝選択、保健福祉学科・健康栄養学科＝必修		
授業目的	ボランティア・市民活動は、今日では自主的な貢献活動により福祉分野に限らず環境や情報、国際協力まで幅広く取り組まれている。この講義では、ボランティア・市民活動の具体的な実践を学ぶことにより、21世紀の高齢・情報・国際社会で必要とされる社会的価値と私たちの生き方について考察を深める。		
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> ●ボランティア・市民活動のすすめ ●ボランティア・市民活動の成り立ちと歩み ●市町村ボランティア・市民活動センターの役割 ●福祉施設・病院とボランティア・市民活動 ●環境問題とボランティア・市民活動 ●災害援助とボランティア・市民活動 ●コミュニケーションとボランティア・市民活動 ●バリアフリー社会とボランティア・市民活動 ●車いすを利用する人々とのボランティア・市民活動 ●学校教育におけるボランティア体験学習・福祉教育 ●ボランタリズムと国際協力・支援活動 ●制度化されているボランティア・市民活動 ●地域福祉型ボランティア・市民活動のすすめ ●市民参加をすすめるボランティア・市民活動 ●ボランティア体験学習ワークショップ 		
教科書	なし		
授業の工夫点	大学ボランティア・市民活動支援センターとの連携		
授業の評価方法	毎回、授業時に課すレポートにより評価する（出席点も兼ねる）。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ゲストスピーカーとして講義に協力		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア・市民活動論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	薬学部薬学科1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計17名（男子学生2名 女子学生15名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア・市民活動は市民の自主的な貢献活動として社会福祉分野のみならず、環境や情報、国際協力まで幅広く取り組まれている。その形態も個人的な活動からグループ・団体活動、さらには特定非営利活動法人（NPO法人）に至るまで多様な組織により実践されており、近年では自治体も行政施策にこれらの活動を組みこむ動きが活発になっている。この講義では、今日までの福祉社会を築き上げてきたボランティア活動の思想や現状、具体的な実践を学ぶことにより、複雑化多様化する社会で必要とされる社会的価値と私たちの生き方について考察を深める。		
授業内容	第1回 4月14日 ボランティア・市民活動とははじめ 第2回 4月28日 ボランティア・市民活動の成り立ちと歩み① 第3回 4月28日 ボランティア・市民活動の成り立ちと歩み② 第4回 5月12日 市町村ボランティア・市民活動センターの役割 第5回 5月12日 市町村ボランティア・市民活動センターの役割 第6回 5月19日 常生活上の課題（福祉課題）とボランティア・市民活動① 第7回 5月19日 常生活上の課題（環境課題）とボランティア・市民活動① 第8回 6月2日 緊急時の課題（天災・人災）とボランティア・市民活動① 第9回 6月2日 緊急時の課題（天災・人災）とボランティア・市民活動② 第10回 6月16日 行政施策とボランティア・市民活動① 第11回 6月16日 行政施策とボランティア・市民活動② 第12回 6月23日 市民自治とボランティア・市民活動① 第13回 6月23日 市民自治とボランティア・市民活動② 第14回 6月30日 気づき、考え、行動する力① 第15回 6月30日 気づき、考え、行動する力②		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポートまたはテストによる評価に出席率や講義での発表等を加味する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 高崎商科大学

授業科目名	地域創造		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	英語・地域関連科目	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	流通情報学部（流通情報学科）2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計58名（男子学生38名 女子学生20名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	3時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	「地域創造」とは、何か、何を目標にしているかを考えることを目的とする。地域創造を目指し思考するためには、文学的な知識と理学的な知識をつなぐことが大事である。そのための基礎となる知識を身につけることを目指す。		
授業内容	1. オリエンテーション 2・3. 地域の歴史・文化・社会 4・5. 環境から見た地域のあり方 6・7. 観光学から地域を見る 8・9. 地域経済をとらえる 10・11. 地域の産業と企業 12・13・14. 地域おこし。むらおこしー最近の新しい展開 15. まとめ		
教科書	「地域創造への招待」奈良県立大学地域創造研究所 晃洋書所		
授業の工夫点	授業では、講義にとどまらず、地域社会へ出て行って、ボランティアとして地域おこしを実践している。		
授業の評価方法	出席30%、授業中の貢献度30%、レポート40%の総合評価とする。ただし、欠席は各期とも3回迄。遅刻は、3回を1回の欠席とみなす。課題レポートをすべて提出していることを評価の前提とする。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地元公民館長との連携により地域創造を実践している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 共栄大学

授業科目名	地域共生活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他（3年間継続履修）
担当教員の専門分野	体育学	共通・専門等の別	その他（実務能力養成科目）
開設学部（学科）及び年次	国際経営	授業のレベル	その他（特に特定せず）
平成20年度履修者数	計6名（男子学生4名 女子学生2名）	授業区分	実習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	120時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	実体験の中で知識、技能を修得するとともに、年齢を超えた共生を学ぶことを目標とする。		
授業内容	大学が指定する地域のボランティアグループ、青少年団、スポーツクラブ、文化サークル等に参加して、ボランティア活動を行う。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	月末履修指導への出席状況、実際の活動への出席状況、レポート等による活動報告にて評価する。		
授業のサポート体制	月末に履修指導を実施。		
学外の関係機関・団体との連携	春日部市等公共団体		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 新潟医療福祉大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域福祉政策	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	医療技術、健康科学、社会福祉学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計66名（男子学生29名 女子学生37名）	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの意義を理解する。		
授業内容	1.ボランティアの意義 2.専門職とボランティア 3.地域のボランティア活動 4.学生のボランティア活動 5.ボランティアの理論 6.まとめ 7.試験		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	①出席 ②提出レポート ③期末試験を総合して評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	北新潟地域づくり学会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域福祉政策	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	健康科学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計33名（男子学生20名 女子学生13名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの意義を理解し、機会をみつけて積極的にボランティア活動に参加できるようになる。		
授業内容	1.ボランティア実習に関するオリエンテーション 2.ボランティア活動		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア実習のレポートと「ボランティア実習実施報告書」の提出で評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今年度のみ		

○ 群馬社会福祉大学

授業科目名	ボランティア活動Ⅰ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会福祉、心理、保育	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計142名（男子学生47名 女子学生95名）	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	150/年
必修・選択の別	必修		
授業目的	社会福祉士取得のための基礎演習		
授業内容	本学独自のボランティアハンドブックを利用し、本学のボランティア活動の取り組み方を実践を交えて学んでいく。車いす体験やブラインドウォークといったボランティアに必要な実践的学習、社会福祉施設でのグループ活動、外部講師・卒業生を招いての講義も実施している。		
教科書	いちばんはじめのボランティア		
授業の工夫点	学生の主体性を尊重し、実施する。		
授業の評価方法	4領域のボランティア活動の状況（継続・依頼・行事・社会貢献）		
授業のサポート体制	担当教員4名のサポート		
学外の関係機関・団体との連携	県・市町村社協、社会福祉施設等		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会福祉、情報、教職、キャリアサポート	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計138名（男子学生39名 女子学生99名）	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	150/年
必修・選択の別	必修		
授業目的	1年生の上に立ったボランティア活動の展開		
授業内容	より主体的にボランティア活動を行っていくための学習と実践となっている。地域社会に貢献するための活動を企画・立案・実施・振り返りをグループで行う。今までの活動実践をまとめ、後輩に伝えていく活動を行うなどしている。		
教科書	ボランティア・ガイドブック		
授業の工夫点	学生の主体性を尊重し、実施する。		
授業の評価方法	4領域のボランティア活動の状況（継続・依頼・行事・社会貢献）		
授業のサポート体制	担当教員4名のサポート		
学外の関係機関・団体との連携	県・市町村社協、社会福祉施設等		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動Ⅲ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	ボランティア学、教員養成、音楽(ピアノ)	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部3・4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計35名（男子学生12名 女子学生23名）	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	4.5/週
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアリーダー、ボランティアコーディネーター養成		
授業内容	1. グループ活動中心 2. 対象は社会福祉施設（障害児・者含む） 3. 特別支援学級 4. NPO法人等		
教科書	特になし		
授業の工夫点	毎月活動報告会を開催（発表資料提出）		
授業の評価方法	1. 発表内容、2. 出席状況		
授業のサポート体制	担当教員の支援		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 千葉科学大学

授業科目名	ボランティア活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	危機管理学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計173名（男子学生133名 女子学生40名）	授業区分	講義、実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	18時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	本学近隣にある施設や団体の協力を得てボランティア活動を体験し環境、医療、福祉、そして地域社会における様々な問題の理解を深め、ボランティア活動の果たすべき役割について体験を通して学ぶ。また災害が発生した際には積極的な活動を推奨し、その活動を通して新しい自己を発見し、さらに社会の多様性を認識して人との繋がりを学ぶ。		
授業内容	1:オリエンテーション 2:ボランティア活動について 3:ボランティア活動の沿革 4:ボランティア活動の内容 5:ボランティア活動の現状と課題 6:ボランティア政策の動向 7:各種ボランティアについて 8:定期試験 9～14:ボランティア活動の実際		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート・試験		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	社会福祉協議会（予定）		
今後の授業の継続	今後も継続(但し、選択となる)		

○ 群馬パース大学

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	英語	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	保健科学部1年生対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計91名（男子学生44名 女子学生47名）	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアとは何か。ボランティア活動実施における問題点。ボランティア活動と心の交流。		
授業内容	1.ボランティアとは エゴグラムテスト 2.ボランティア活動 3.ボランティアの歴史 4.国際ボランティア①～⑤ 5.ボランティアの調査並びにプレゼンテーション①～④ 6.ティンバメイキング①～②		
教科書	特になし		
授業の工夫点	ティンバアの作成		
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 亜細亜大学

授業科目名	ボランティア論 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	倫理学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部(経営学部、経済学部、法学部、国際関係学部)、1~4年次 短大1~2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計86名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	15時間以上
必修・選択の別	選択必修(経済学部)選択		
授業目的	現代社会におけるボランティア・市民活動の意義を考えさせる。		
授業内容	(1)オリエンテーション (2)ボランティアの意義を考える (3)(公開)大学生とボランティア (4)(公開)ボランティア受け入れ先団体大集合! (5)ワークショップ(1)ボランティアって何だ? (6)ワークショップ(2)コミュニケーション技法 (7)ワークショップ(2)各種障害体験 (8)(公開)聴覚障害者の世界とコミュニケーション (9)(公開)視覚障害者として生きる (10)(公開)国際ボランティア入門 (11)(公開)子どもと文化・教育ボランティア (12)ボランティアについて考えたこと(1) (13)ボランティアについて考えたこと(2) (14)(後期第1週目9月30日17時から番外で開催)ボランティア体験活動成果発表・交流会(後期AUAP参加者は免除します)		
教科書	なし		
授業の工夫点	ボランティア活動につながるよう、コミュニケーショントレーニングなどをする。		
授業の評価方法	ABC評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地元の中堅支援機関、NPO、障害者など		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論 II		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	倫理学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部(経営学部、経済学部、法学部、国際関係学部)、1~4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計33名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	10時間程度
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア・コーディネーションの理論と実践を学ぶ。		
授業内容	第1回目の授業で相談して決める。19年度の授業計画を参考までに示す。 1 オリエンテーション 2 ボランティアの理論と実際(1) 3 ボランティアの理論と実際(2) 4 ボランティアの理論と実際(3) 5 ボランティアの理論と実際(4) 6 ボランティアの理論と実際(5) 7 新規企画の相談 8 新規企画の調査・調整・計画 9 新規企画の準備(1) 10 新規企画の準備(2) 11 新規企画の準備(3) 12 新規企画の実施 13 まとめ		
教科書	レポート集		
授業の工夫点	受講生に新規活動企画をつくらせ実施まで運ぶ。		
授業の評価方法	ABC評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	随時		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	災害救援活動論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	倫理学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部(経営学部、経済学部、法学部、国際関係学部)、1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	履修後、いろいろな活動を紹介する。
必修・選択の別	選択		
授業目的	防災・減災の初歩を学び、防災技能を身につける。		
授業内容	<p>救急法講習を受ける学生諸君が増えてきている状況に鑑み、そこで学んだ内容を振り返り、整理し、復習して確実な体験知として習得することを目指す。</p> <p>具体的な達成目標として教師側は次のようなことを考えているので、各自これを参考にして、自分なりの学習目標を設定して受講することを望む。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 災害と防災に関する基礎知識を学ぶ 2 応急手当について幅広い知識を得る 3 応急手当について基本的な技能を身につける 4 災害救援技能について幅広い知識を得る 5 災害救援技能の主なものを訓練し、基本的な技能を身につける 6 学習した内容を整理・発表し、それをもとに討論して知識を深める 7 模擬体験やシミュレーションを通じて災害時の行動の予備知識を得る 8 災害救援活動全般について学習した内容を整理・発表する 9 災害救援活動について市民としての自分なりの見方を考える <p>修了後には、亜細亜大学災害救援隊隊員及び災害時支援ボランティアとして活動することが期待される。</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点	防災館での活動や地元消防隊による訓練を含む。上級救命技能認定証を取得させる。		
授業の評価方法	ABC評価		
授業のサポート体制	機材などの用意を管財課がする。		
学外の関係機関・団体との連携	防災館、東京救急協会、地元消防署		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	現代教養特講(コミュニティとNPO、市民活動)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	倫理学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部(経営学部、経済学部、法学部、国際関係学部)、1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	特になし 希望者が各団体を訪問調査し、活動に参加する。
必修・選択の別	選択		
授業目的	市民活動セクターの現代的意義を学び、コミュニティの課題を考える。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション 2 NPO・市民活動の現状と課題 3 まちづくり活動とコミュニティ(市民まちづくり会議むさしの) 4 吉祥寺まち案内所吉祥寺コンシェルジュ(まちづくり観光機構) 5 防犯活動とコミュニティ(日本ガーディアン・エンジェルズ) 6 NPO法人として四年……“なぜ”と“これから”(武蔵野多摩環境カウンセラー協議会) 7 文化・芸術活動とコミュニティ(伝統芸能むさしの我夢之会) 8 ノーマライゼーションとコミュニティ(サポートネット武蔵野) 9 けやきコミュニティ協議会の成り立ちから新しい展開(けやきコミュニティ協議会) 10 女性のエンパワーメントの拠点として(むさしのヒューマン・ネットワークセンター) 11 NPOの国際支援活動(プロジェクトHOPEジャパン) 12 学習成果発表と市民聴講生修了式(市民聴講生の希望者による発表) 13 学生対象まとめのワークショップ <p>本学学生を対象とするまとめ</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点	市民が上限50名まで参加する。地域のNPO・市民活動団体9つほど、プレゼンをしてもらい、質疑応答する。		
授業の評価方法	ABC評価		
授業のサポート体制	学外講師への連絡、資料準備、講義録作成を教学課が行う。寄付講座なので市の生涯学習スポーツ課も関与する。		
学外の関係機関・団体との連携	今後も継続		
今後の授業の継続	ただし、隔年開講		

授業科目名	街づくり未来塾 I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	倫理学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部（経営学部、経済学部、法学部、国際関係学部）、1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計94名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	5時間程度
必修・選択の別	選択		
授業目的	まちづくりの概念理解と関心をもたせる。		
授業内容	1 オリエンテーション 2 まちづくり入門(1) 3 まちづくり入門(2) 4 インタビュー調査法 5 編集技法入門 6 フィールドワーク 7 編集 8 第1回連続討論会(学外講師) 9 第2回連続討論会(学外講師) 10 第3回連続討論会(学外講師) 11 第4回連続討論会(参加者討論会) 12 第5回連続討論会(参加者ワークショップ) 13 活動成果発表会(まとめと評価)		
教科書	なし		
授業の工夫点	週刊紙を1回分つくること、大学周辺のイベントなどの取材・調査を行うこと、及び公開の連続討論会(4回)を取り込む。		
授業の評価方法	ABC評価		
授業のサポート体制	地域交流課による渉外、資料作成。		
学外の関係機関・団体との連携	商店街や市役所など		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	街づくり未来塾 II		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	倫理学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部（経営学部、経済学部、法学部、国際関係学部）、1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計5名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	5時間程度
必修・選択の別	選択		
授業目的	まちづくりを考える具体的視野をもち、身の回りをふりかえる。		
授業内容	1 オリエンテーション 2 まちづくり概説(1)学外講師予定 3 まちづくり概説(2)学外講師予定 4 タウンウォッチング調査法 5 編集技法中級編 6 フィールドワーク 7 編集 8 第1回連続討論会(学外講師) 9 第2回連続討論会(学外講師) 10 第3回連続討論会(学外講師) 11 第4回連続討論会(参加者討論会) 12 第5回連続討論会(参加者ワークショップ) 13 活動成果発表会(まとめと評価)		
教科書	なし		
授業の工夫点	週刊紙を6号分つくる。公開の連続討論会(4回)を取り込む。周辺の取材・調査を行う。		
授業の評価方法	ABC評価		
授業のサポート体制	地域交流課が連続討論会をサポートする。		
学外の関係機関・団体との連携	地域の企業、交際交流協会。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 大妻女子大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会	共通・専門等の別	共通、その他(教養)
開設学部(学科)及び年次	家政学部・文学部 1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計618名(男子学生0名 女子学生618名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修選択		
授業目的	家政学部・文学部・・・さまざまなボランティア活動について事例を交え、履修者にとってこれから考え、取り組んでいくきっかけを作る。		
授業内容	<p>ボランティアの特質・意義・思想・歴史的背景・現状・可能性などを、事例をまじえて考えてゆく。事例は、様々な対象地域や場所・状況・方法を取り上げる。項目は以下のとおり。</p> <p>1ボランティア(活動)とは 2高齢社会とボランティア活動 3子どもとボランティア活動 4障がいを持つ人とボランティア活動 5地域における活動 6施設・病院における活動 7国際協力・交流 8平和・環境問題 9ボランティアの変遷および諸外国の例 10コーディネートおよびネットワーク 11地域、社会、世界に働きかける力としてのボランティア活動 12共に生きる社会 13その他</p> <p>授業は、上記の内容等に学生の意見や質問を含めて進める。意見や感想を書くことを求める場合がある。 また、映像(短いもの)や視覚的な資料を適宜用いる。意見交換をする時間を持つ可能性もある。 実践的きっかけ(関心を持つ、活動を始めてみるなど)となることも視野に入れた授業であるが、授業の一環として全員ボランティア活動をおこなうことはない。</p>		
教科書	家政学部・文学部・・・必要に応じ参考資料を配付		
授業の工夫点	特になし		
授業の評価方法	レポート提出(学期末)、出席状況、授業の理解度		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会	共通・専門等の別	共通、その他(教養)
開設学部(学科)及び年次	人間関係学部 2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計75名(男子学生0名 女子学生75名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修選択		
授業目的	人間関係学部・・・ボランティアとNPOの社会的主体としての位置づけ、活動をおこなうには課題にどのように取り組むかを学習する。		
授業内容	<p>ボランティアとNPOの活動についての具体的な事例をとりあげ、それらの事例を集団・組織、地域社会などの社会学の基礎概念を使って説明しながら授業を進めていく。</p> <p>授業・全体の構成は、(1)ボランティア・NPOとは何か、(2)ボランティアとNPOの現在、(3)ボランティアとNPOの可能性と課題の3部からなり、以下のような予定で授業を進めて行く。</p> <p>(1)ボランティア・NPOとは何か (2)ボランティアとNPOの現在 (3)ボランティアとNPOの可能性と課題</p>		
教科書	人間関係学部・・・担当教員著書		
授業の工夫点	特になし		
授業の評価方法	レポート提出(学期末)、出席状況、授業の理解度		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 学習院大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	ボランティア学習、教員養成	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学共通科目	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計165名	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの多様性を知ること		
授業内容	ボランティア概論 まちづくりとボランティア 国際協力とボランティア 高齢社会とボランティア 心理学から見たボランティア 情報保障とボランティア 福祉・人権とボランティア 市民社会とボランティア 学校教育とボランティア		
教科書	なし		
授業の工夫点	8人の講師によるオムニバス方式		
授業の評価方法	テスト、レポートなどによる総合評価		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 北里大学

授業科目名	医療ボランティア実習A/B		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他(3年次前期(7~8)・後期(1~3)の月~金までの連続する5日間)
担当教員の専門分野	薬物治療学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	薬学部3年前期・後期	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計46名（男子学生18名 女子学生28名）	授業区分	実習
単位数	各1	ボランティア体験の時間数	5日間
必修・選択の別	選択		
授業目的	医療・福祉現場におけるボランティア活動を通し、豊かな人間性と倫理観を持った医療人となるために、医療人として求められる態度を身につけるとともに、医療ボランティア活動に自発的に参加する態度及び活動に必要な知識/技能を身につける。		
授業内容	1.実習ガイダンス及び講義 ①『医療ボランティア』とは何かを述べることができる ②『医療ボランティア』が求められる背景を述べることができる ③『医療ボランティア』に参加するための方法を列挙できる。 2.実習施設によるボランティア活動 ④『医療ボランティア』を実施するうえで必要となる具体的な技術について説明できる。 ⑤『医療ボランティア』を体験し、医療ボランティアとして求められる態度を学ぶ。 ⑥体験した内容及び体験を下に得られた『医療ボランティア』に対する意見を述べるができる。		
教科書			
授業の工夫点	実習施設での実際の体験活動		
授業の評価方法	出席日数、実習態度、レポートによる総合評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	特別養護老人ホーム、身体障害者施設での実習		
今後の授業の継続	未定		

○ 慶應義塾大学

授業科目名			
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	理論経済学、公共経済学、財政学、経済政策、文化経済学、NPO論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部3・4年次	授業のレベル	初級・入門、中級・応用
平成20年度履修者数	計363名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年、政府の財政における諸々の制約を原因として、政府に代わって民間部門が公共的財・サービスを供給する活動が目ざれている。いわゆるボランティア活動や企業のフィランソピー活動などの非営利公益活動がこれに当たる。これらの活動は個々に行われるだけでなく、むしろそれらの活動が複合した形で様々に組織化されており、各種の財団、社団などの公益法人が存在している。この講義の目的は、これらの民間非営利組織とその活動が全体の経済の中どのように位置づけられるかを理論経済学的に説明し、またこれら非営利部門（第3セクター）に対する全体および個別の制度、政策がどうあるべきかを公共経済学の理論を用いて検討することである。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. マクロ経済におけるNPO 部門 2. 政府部門とNPO 3. 寄付行動とボランティア活動 4. 非営利活動の経済理論 5. 租税制度と非営利活動 6. 公益法人制度 7. 企業のフィランソピー活動 8. NPO と民間営利企業の関係 9. 助成活動と事業活動（ファンド・レイジング） 10. 福祉・医療とNPO 11. 教育とNPO 12. 文化・芸術とNPO（文化経済学） 		
教科書	授業中に指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	・試験の結果による評価 ・平常点（出席状況および授業態度）		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	公共政策論、社会保障論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部3・4年次	授業のレベル	初級・入門、中級・応用
平成20年度履修者数	計442名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	今日、公共サービス改革（行政改革）の進展に伴い、NPO は、福祉（介護、児童、障害者）、教育、環境、貧困（ホームレス、ニート）、地域再生などの多様な分野において、公共サービス提供の担い手として注目されている。本講義では、まず、公共サービス分野におけるNPO の位置づけと特性を理論的に検討し、次に、NPO をめぐる法政策を概説する。続いて、近年の行政改革と関連するNPO の動向に焦点をあてて、日本および海外の事例もとりあげながら考察する。期末には、NPO や協働の事例について学生による報告を行う。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 経済・社会におけるNPO 2. NPO の主要理論（経済・政治理論） 3. NPO の規模・構造、法政策 4. NPO の税制、ガバナンス 5. 英国の行政改革とNPO：行政とNPO のパートナーシップ 6. 日本の行政改革とNPO：福祉改革、地域開発政策と、行政とNPO の協働 7. 日本の行政改革とNPO：民間委託、指定管理者制度とNPO 8. NPO と企業の協働 9. NPO とコミュニティ・ビジネス、社会的企業 10. NPO 及び協働の事例について学生による報告 		
教科書	特定の教科書は使用しない。講義レジュメを用意する予定である。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	・期末の試験（あるいはレポート）、学生報告による評価 ・平常点（積極的な発言、不定期の出欠調査も考慮）		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会学		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学、国際社会学、オーストラリア地域研究、多文化主義・エスニシティ・ナショナリズム論、在豪アジア系移民コミュニティ調査	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	法学部政治学科	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計374名（男子学生235名 女子学生139名）	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修		
授業目的	<p>人間と世の中の関わりについて考えるのが「社会学」です。そして現代社会はますます複雑になり、わたしたちの身近な日常が世界全体の変化と密接に結びつようになっていきます。そこで本講義では、日常生活のさまざまな事柄を社会学的視点から考えることで、自分と世の中がどのようにつながっているのかをイメージする「社会学的想像力」を、学生のみなさんが身につけることをお手伝いします。</p> <p>講義では、わたしたちをとりまく社会（構造）と個人の関係、国民国家と現代日本社会の変容、グローバル化といったテーマに関連するさまざまな事例を取り上げながら、「人と世界をつなげる学問」としての社会学の魅力をお伝えしていけたらと思います。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス(1) 2. ガイダンス(2) 3. 社会学とは何か(1) 4. 社会学とは何か(2) 5. 現代日本の若者：不登校・ニート・ひきこもり(1) 6. 現代日本の若者：不登校・ニート・ひきこもり(2) 7. 現代社会における「自己実現」 8. ボランティアとNGO(NPO) 9. 労働市場とその変容(1) 10. 労働市場とその変容(2) 11. 少子・高齢化 12. 男女共同参画 13. 教育と社会 14. 福祉国家と新自由主義 15. 貧困と格差の拡大：日本(1) 16. 貧困と格差の拡大：日本(2) 17. 貧困と格差の拡大：世界(1) 18. 貧困と格差の拡大：世界(2) 19. グローバル企業と市場の社会的深化(1) 20. グローバル企業と市場の社会的深化(2) 21. 移民・難民・外国人(1) 22. 移民・難民・外国人(2) 23. 多文化主義・多文化共生(1) 24. 多文化主義・多文化共生(2) 25. 講義のまとめ 		
教科書	指定無し		
授業の工夫点	授業目的・授業内容参照		
授業の評価方法	学期末試験、レポート、授業中の小課題		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	総合教育セミナーD「地域との対話」		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	近代日本経済史、産業史、経営史、地域経済論	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	商学部	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計9名（男子学生4名 女子学生5名）	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	キャンパスの後背地である日吉、および他の地域でフィールドワークを行いながら、地域の抱えるさまざまな問題（商店街の活性化、子育て、高齢者、障害者や外国人居住者の支援、地域コミュニティのあり方など）について考察・提言を行います。大学の立地する地域を、単に生活したり消費したりする場所と捉えるばかりではなく、地域の問題・課題を発見し、多様な人々が安心して暮らせる魅力ある「まち」を支える新しい制度や文化を創出しようと試みる意欲ある学生の参加を歓迎します。		
授業内容	<p>学生による研究発表主体のゼミ形式とフィールドワークの技法についての講義を組み合わせで行います。履修者は、個人あるいはグループで課題を調査し、プレゼンテーションを行います。授業で扱うテーマの候補は以下の通りです。詳しい内容は履修者と相談の上で決定します。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 商店街の活性化（消費者・店舗調査に基づく商店街への提言など） 2. 地域における福祉・保健問題（子育て・高齢者・障害者支援などの調査） 3. まちづくりを支える組織（町内会、商店街振興組合、TMO、NPOなどの調査） 4. コミュニティ・ビジネス（地域の問題・課題を解決するスモールビジネス）の現状と可能性 5. 行政の取り組み（横浜市・港北区など）の現状と問題点 6. 地域活性化イベント・プロジェクト（Hiyoshi Ageなど）の企画・実施・効果の評価 		
教科書	適宜、授業中に指示する。		
授業の工夫点	授業目的・授業内容参照		
授業の評価方法	・平常点（プレゼンテーション・ディスカッションへの参加） ・調査・提言をまとめたレポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	体育学演習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	野外教育、レクリエーション	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	体育研究所	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計4名（男子学生0名 女子学生4名）	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	2泊3日
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年、夏休み等を利用した自然体験を中心にしたキャンプ等の活動が各所で行われるようになり、ボランティアとして子供のキャンプ等に参加する学生も増えている。そこで、さまざまな自然体験活動にボランティアとして参加したいと考えている学生を対象に、自然体験活動に関する知識、技術、対人関係トレーニング等を学び、夏休みに行われるキャンプにボランティアとして参加し、OJT(on the job training)を行う。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1) 10回程度の講義及び実技 <ol style="list-style-type: none"> ① 自然体験活動の意義と目的 ② 自然体験活動における危険と安全管理 ③ 対人関係トレーニングの理論と実際 ④ 自然体験活動に関するさまざまな技術の習得 ⑤ 自然解説の意義と実際 2) 夏休みに行われる2泊3日以上以上のキャンプにボランティアとして参加 <ul style="list-style-type: none"> ・ 民間団体が実施する小中学生を対象としたキャンプ ・ 障害者を対象としたキャンプ ・ 大学生を対象としたキャンプ 3) 自然体験活動のトレーニングキャンプに参加し、さまざまな知識・技術を習得する。 		
教科書	適宜、授業中に指示する。		
授業の工夫点	授業目的・授業内容参照		
授業の評価方法	・ 講義、演習の出席状況及び授業態度、実習中の日誌の提出 ・ 実習前、実習終了後のレポート提出		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	夏休み期間中に、野外活動施設、NPO団体、民間の自然学校等さまざまな団体で行われているキャンプにボランティアとして参加する。 過去に提携した団体は以下の通り。 社団法人日本キャンプ協会、財団法人日本アウトワード・バウンド、野外教育事業所ワンバク大学、小学館プロダクション、ファミリーエージェンシー、NPO法人野外遊び喜び総合研究所		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPOの設立と経営		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	総合政策学部・環境情報学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計40名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPOを設立する際に必要となることや、掲げる使命の実現へ向けた持続的な組織経営を行うために必要な観点について実践的に学ぶ。		
授業内容	シラバス非公表		
教科書			
授業の工夫点	ゲストスピーカー、グループワーク、成果発表		
授業の評価方法	個人としての3回の課題レポート(A4 1-2枚程度)、グループとしての成果の発表内容とその最終レポート(A4 10枚程度)及び講義への参加度の総合評価		
授業のサポート体制	TA、SAの配置		
学外の関係機関・団体との連携	授業のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	まちづくり論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域情報化	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	総合政策学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計182名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	自治体、NPO、企業、住民など多彩な主体による各地のまちづくりの最新動向を紹介し、その背景、成功要因、課題、可能性等を明らかにする。		
授業内容	シラバス非公表		
教科書			
授業の工夫点	ゲストスピーカー、ケースディスカッション		
授業の評価方法	成績評価は、出席が30%、クラスへの貢献(発言、レポートの内容など)が40%、最終成果レポートの内容が30%の割合で総合的に判断します。		
授業のサポート体制	TA、SAの配置		
学外の関係機関・団体との連携	授業のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ソーシャルイノベーション(春学期)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ソーシャルイノベーション	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	総合政策学部・環境情報学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計220名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ソーシャルイノベーションは、「私こそが社会をよくする!」という想いをもちながら、事業として軌道にのせ、継続的に社会的な問題を解決してゆくという、新しい生き方、起業の仕方だ。その世界観や求められる発想やスキルについて学び、具体的な学習や実践を促していく。		
授業内容	シラバス非公表		
教科書			
授業の工夫点	ゲストスピーカー、グループワーク、成果発表		
授業の評価方法	中間試験、グループワーク、期末試験など		
授業のサポート体制	TA、SAの配置		
学外の関係機関・団体との連携	授業のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ソーシャルイノベーション(秋学期)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ソーシャルイノベーション	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	総合政策学部・環境情報学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計116名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ソーシャルイノベーションは、「私こそが社会をよくする!」という想いをもちながら、事業として軌道にのせ、継続的に社会的な問題を解決してゆくという、新しい生き方、起業の仕方だ。その世界観や求められる発想やスキルについて学び、具体的な学習や実践を促していく。		
授業内容	シラバス非公表		
教科書			
授業の工夫点	ゲストスピーカー、グループワーク、成果発表		
授業の評価方法	中間試験、グループワーク、期末試験など		
授業のサポート体制	TA、SAの配置		
学外の関係機関・団体との連携	授業のゲストスピーカー		
今後の授業の継続			

授業科目名	ソーシャルビジネスプランニング		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会起業	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	総合政策学部・環境情報学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計44名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	経済性と社会性の両面を追求するビジネスプランのあり方について学んだ上で、実際にビジネスプランを作成し、自らの実践につなげることをめざす。		
授業内容	シラバス非公表		
教科書			
授業の工夫点	ゲストスピーカー、グループワーク、ケースディスカッション、成果発表		
授業の評価方法	出席および授業への貢献(50%)、中間課題(15%)、「マイプロジェクト」プラン(35%)		
授業のサポート体制	TA、SAの配置		
学外の関係機関・団体との連携	授業のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ソーシャルマーケティング		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	公共経営	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	総合政策学部	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計102名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	企業の社会志向や、公共・非営利組織、社会変革キャンペーン、地域経営・政策形成などの領域におけるマーケティング理論やその実践について学ぶ。		
授業内容	シラバス非公表		
教科書			
授業の工夫点	ゲストスピーカー、グループワーク、成果発表		
授業の評価方法	成績評価は以下の1~5により総合的に判断します。 1. 個人プレゼンテーション(パワーポイントでの発表資料作成と発表) 2. テスト(講義時間内に1回実施) 3. 出席(原則として、毎回取ります) 4. グループワーク(成果発表とレポート提出) 5. 講義への貢献(講義時の発言、ミニプレゼンテーションなど)		
授業のサポート体制	TA、SAの配置		
学外の関係機関・団体との連携	授業のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会起業論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会起業	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	総合政策学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計59名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	多様な実践が営まれている社会起業分野に関して、その実践を支える理論や発想、手法などを修得する。		
授業内容	シラバス非公表		
教科書			
授業の工夫点	ゲストスピーカー、ディスカッション、プラン発表		
授業の評価方法	学期中、ほぼ毎回、課題などを提出していただきます。出席とクラスでの貢献、最終レポートから、評価します。		
授業のサポート体制	TA、SAの配置		
学外の関係機関・団体との連携	授業のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	早期体験C		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	心理学 ボランティア論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	看護医療学部看護学科1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計20名(男子学生4名 女子学生16名)	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	5日間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	ガイダンス、夏期休暇中に一定期間おこなうボランティア活動、事後のワークショップで構成される。一連のプロセスを通して、出会った組織や人々との関係性を見直し、ボランティア活動の意味や意義を多面的に考察する機会とする。また翻って、自らのライフプランにおける基礎的な問題を認識する。		
授業内容	1. 事前講習・事前講義 これはボランティア？ボランティアとは何か？ ボランティア活動における注意 2. 履修希望表の提出とボランティア体験先の決定 3. 活動先との事前調整と活動計画書の提出 4. ボランティア活動 5. 事後ワークショップ		
教科書	なし		
授業の工夫点	履修者本人が自力でボランティア体験先を見つけること自体にも重大な意義があると考えことから、できるだけそれを推奨し、大学はそれをサポートする。		
授業の評価方法	実習状況、レポート、ワークショップへの参加内容で総合的に判断する。		
授業のサポート体制	各種情報提供 体験先の確保・調整に関する相談 3. 体験活動に関するトラブルの相談 夏期休業中の活動であるため、担当教員、SAの連絡先を伝え、トラブルには迅速に対応できるようにしている。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	その他(2009年度より授業名を「ボランティア体験」に変更して継続)		

○ 国際基督教大学

授業科目名	サービス・ラーニング入門		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	その他(1学期(3学期制))
担当教員の専門分野	言語学、コミュニケーション	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部全年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計145名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	サービス・ラーニングの基本的理念について学び、サービス・ラーニングの情報に触れる。		
授業内容	地域社会サービス・ラーニング、国際サービス・ラーニング、ワークキャンプなどサービス・ラーニングの活動に学生を動機づけるために、ICUやNGO、地方自治体、国際機関等が行っている様々な活動を紹介し、意味のあるサービス活動を行うための準備をおこなう。		
教科書	サービス・ラーニング研究シリーズ2・3「人はなぜサービスをするのか」「サービス・ラーニングへの誘い」		
授業の工夫点	「入門」から「経験の共有と評価」まで一連のコースとして開講している。		
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制	サービス・ラーニング・センターで外部講師の招聘や学生からの相談受付、資料・情報の提供などを行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	講師としてNPO自治体職員等を招聘		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	サービス・ラーニングの実習準備		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	その他(1学期(3学期制))
担当教員の専門分野	コミュニケーション	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部全年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計62名	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	実習に必要な心構え、ジャーナルのつけ方など実践的準備を学ぶ。		
授業内容	国内、国外を問わず、サービス・ラーニングの実習活動に参加する学生に必要な基礎的知識、心構え、着目点を示し、サービス・ラーニングをより多岐にわたるものとするを目的とする。たとえば、サービス・エージェンシーについての基本的な理解、サービス活動を行うにあたっての基本的な注意事項、研究課題の設定と情報収集方法、日誌や記録の重要性などを事例やディスカッションを通じて学ぶ。		
教科書	なし		
授業の工夫点	「入門」から「経験の共有と評価」まで一連のコースとして開講している。		
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制	サービス・ラーニング・センターで外部講師の招聘や学生からの相談受付、資料・情報の提供などを行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	外部から講師を招聘		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティ・サービス・ラーニング		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	言語学、公共政策	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部全年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計18名	授業区分	実習
単位数	3	ボランティア体験の時間数	240時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	教室で学んだ知識を社会実践に活用する。		
授業内容	コミュニティにおける奉仕活動、インターンシップなどの経験を単位として認めるコースである。最低30日間のフルタイムの実践期間を必要とする。希望者は担当教員と相談の上、活動計画書を作成する。また、活動終了後体験報告書をまとめる。(科目登録は担当教員が行う)		
教科書	なし		
授業の工夫点	「入門」から「経験の共有と評価」まで一連のコースとして開講している。		
授業の評価方法	レポート、プレゼンテーション、活動先からの評価表		
授業のサポート体制	サービス・ラーニング・センターで外部講師の招聘や学生からの相談受付、資料・情報の提供などを行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	活動先として学生の受け入れを依頼		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際サービス・ラーニング		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	言語学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部全年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計57名	授業区分	実習
単位数	3	ボランティア体験の時間数	240時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	教室で学んだ知識を社会実践に活用する。		
授業内容	国内、国外で活動を行っている組織、政府機関、NGOでの活動経験を単位として認めるコースである。最低30日間のフルタイムの実践期間を必要とする。希望者は担当教員と相談の上、準備のための文献購読計画などを作成するとともに活動期間終了後、体験報告書をまとめ提出する。(科目登録を担当教員が行う)		
教科書	なし		
授業の工夫点	「入門」から「経験の共有と評価」まで一連のコースとして開講している。		
授業の評価方法	レポート、プレゼンテーション、活動先からの評価表		
授業のサポート体制	サービス・ラーニング・センターで外部講師の招聘や学生からの相談受付、資料・情報の提供などを行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	活動先として学生の受け入れを依頼		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	サービス経験の共有と評価		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他(1学期(3学期制))
担当教員の専門分野	コミュニケーション	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部全年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計37名	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	実習での経験を振り返り、他者と共有する。		
授業内容	このクラスでは国際インターンシップやコミュニティ・サービス・ラーニングに参加した学生たちが彼らの経験を他の学生と語り合い、ディスカッションを行う。これらの学生のサービス活動の指導を行った教授もディスカッションに加わり学生たちの経験が学びとして深められるよう助力する。		
教科書	なし		
授業の工夫点	「入門」から「経験の共有と評価」まで一連のコースとして開講している。		
授業の評価方法	活動後クエスチョナア		
授業のサポート体制	サービス・ラーニング・センターで外部講師の招聘や学生からの相談受付、資料・情報の提供などを行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	外部から講師を招聘		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	サービス・ラーニング特別研究 I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他(1学期(3学期制))
担当教員の専門分野	コミュニケーション	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部全年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	不明	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	IGUおよび海外連携大学のサービス・ラーニング実習体験の蓄積を分析し、教育効果を検証、また日本高等教育における意味を明らかにする。		
授業内容	データの分析、プログラム評価		
教科書	なし		
授業の工夫点	「入門」から「経験の共有と評価」まで一連のコースとして開講している。		
授業の評価方法	未定		
授業のサポート体制	サービス・ラーニング・センターで外部講師の招聘や学生からの相談受付、資料・情報の提供などを行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	未定		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 国土館大学

授業科目名	ボランティア活動の方法と実践		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	21世紀アジア学部4年生対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計61名	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	180時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の企画から実践までの全過程を、二段階の実習を通して実践的に体験学習する。また、実際の活動に触れ、広域的な問題追求・解決能力の開発を目指す。第一段階では、ボランティアに必要とされる要件などを分析し、自らに身近で実行可能な活動の企画立案・プレゼンテーション・実現性の検討・具体的な実行計画の作成などを行う。第二段階では、活動を行うための関係機関に対する許認可事項への対応、物資・資金調達、運営スタッフの編制、活動の告知、参加者の募集などを含めて作成された実行計画に基づいた活動を実施する。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 駒澤大学

授業科目名	ボランティア経済a		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	協同組合論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部（経済学科、商学科、現代応用経済学科）3・4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計185名（男子学生137名 女子学生48名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	日本を中心に、ボランティアをめぐる経済活動について、その成り立ちと近況、さらにその周辺の活動と、各種の課題についてお話しする予定です。ボランティア経済について、その有用性と限界について冷静に考えてみましょう。		
授業内容	(1～2)はじめに、経済の基礎素養をチェックする (3～7)ボランティアの定義、その歴史的経緯、近年のボランティア活動とその契機、その形態と活動領域、新自由主義とボランティアリズム (8～11)協同組合、NPO、地域通貨、国家・自治体との関係、企業との関係 (12～14)評価と表彰、問題と批判、限界について (15)これから		
教科書			
授業の工夫点	注目すべき学生のコメントについては、全体の場で共有すること。		
授業の評価方法	学期末試験を中心とする。ただし、授業内に提出を求めるコメント票、出席状況も考慮する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア経済b		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	協同組合論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部（経済学科、商学科、現代応用経済学科）3・4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計185名（男子学生141名 女子学生44名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	世界に目を向けて、ボランティアをめぐる経済活動について、いくつかの諸国を抽出し、それぞれの成り立ちと近況、さらにその周辺の経済活動と、各種の課題についてお話しする予定です。ボランティアという表現も、経済活動や国家のあり方に応じて、さまざまな様相を持つことが理解されるでしょう。		
授業内容	(1～2)はじめに、世界経済をめぐる基礎素養をチェックする (3～11)諸国の政治経済事情を踏まえた各国ボランティア事情—アメリカ、イギリス、スウェーデン、フランス、イタリア、スペインほか—キーワードとして、社会的経済論、ノーブレス・オブリージュ、良心的兵役拒否、地域通貨、NPO、NGO、地域通貨、国家・自治体との関係、企業との関係など (12～14)ボランティア活動を受容する側の第三世界諸国とその評価、問題 (15)まとめ		
教科書			
授業の工夫点	注目すべき学生のコメントについては、全体の場で共有すること。		
授業の評価方法	学期末試験を中心とする。ただし、授業内に提出を求めるコメント票、出席状況も考慮する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO/NGOとメディア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	メディアコミュニケーション	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	グローバル・メディア・スタディーズ学部 （グローバル・メディア・学科）2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計130名（男子学生68名 女子学生62名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	この10年、さまざまな社会問題を自分たちで解決し、より良い市民社会を構築しようという市民のボランティア活動が大きな流れとなってきました。こういった社会活動の中心は市民グループ、NPO、NGOが担ってききましたが、最近では営利セクターでも社会貢献（CSR）活動が重要になっています。さらに、社会問題の解決を目的とした企業、いわゆる社会企業家（ソーシャル・アントレプレナー）たちの活躍も注目されています。NPO、CSR、そして社会企業家など、それぞれの実践においてメディアを活用することは重要になっています。講義では、市民、NPO、NGO、企業などの社会活動におけるメディア活用について、最近の事例を交えながらその現状と問題点について考えます。		
授業内容	<p>本講義では社会運動から市民活動についての歴史やパブリック・コミュニケーションといった基本的な知識について学び、さまざまな市民のメディア活用や新しいソーシャル・ムーブメントについて、具体的な事例をもとに分析・考察していきます。また、関連イベントへの参加を通して、実際に体験してもらいます。</p> <p><授業スケジュール></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. NPO、NGOの台頭 3. NPOの現状 4. NPO・NGOによる情報発信～PR パブリック・コミュニケーション／活動と情報発信 5. ゲスト 6. NPO・NGOによる情報発信～PR（2） ネット活用／アテンション・エコノミー 7～8 NPO・NGOによる情報発信～アドボカシー 情報発信と説得／メディア戦略／ セレブレティ・アドボカシー 9. ゲスト 10. 社会変革キャンペーン／ソーシャル・ムーブメント 11. ソーシャル・マーケティング 12. ゲスト 13. チームプロジェクト発表 14. チームプロジェクト最終発表 		
教科書			
授業の工夫点	様々なメディアを使った視覚教材を取り入れたり、NPO、NGOなどからゲストスピーカーを迎え、最先端で活躍する人の話を聞いてもらうことにより、学生の意識を啓発するようにしている。		
授業の評価方法	出席30点、個人レポート30点、チームプロジェクト40点		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	組織との正式な連携ではないが、個人的につながりのあるNPO、NGO関係の人をゲストとして迎える。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	総合Ⅳ【新市民社会論】		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会人類学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	仏教学部、文学部、経済学部、法学部、経営学部、医療健康科学部1～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計21名（男子学生13名 女子学生8名）	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	授業内ではないが、海外ボランティア研修として、約2週間、学生を海外（インドなど）へ派遣している。
必修・選択の別	選択		
授業目的	前期は市民社会と人権、NGO、NPO、まちづくり、コミュニティ開発、などをキータームとして日米の比較により、授業を行う。後期は日本とインドを比較しつつインドの市民セクターと人権、NGOの役割などを学ぶ。JICAと協力して草の根国際援助プロジェクトの実践について学ぶ。		
授業内容	<p>【前期】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 市民社会、NGO、NPOとはなにか。アメリカと日本の比較 2. アメリカにおける市民セクターの進展 3. 日本の非営利セクターの歴史と現状 4. コミュニティ開発とNPOの役割：シアトルのまちづくり 5. シアトル・アジア系住民のまちづくりとNPO 6. アメリカにおけるマイノリティとNPO 7. 日本のNPOとまちづくり：神戸市・横浜市、川崎市事例研究 8. 被差別部落のまちづくり(1) 9. 被差別部落のまちづくり(2) 10. 被差別部落のまちづくり(3) 11. 日本のマイノリティとNPO(1) 12. 日本のマイノリティとNPO(2) 13. 前期まとめと日本の市民セクターの現状、課題 <p>【後期】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. インド社会の基礎知識 2. クラスとカースト 3. ジェンダー、宗教、マイノリティ集団 4. インドの市民社会とNGO 5. インド地縁組織とコミュニティ開発 6. 被差別カーストとコミュニティ開発 7. 行政とNPO、NGO 8. 草の根自立支援と市民セクター：MSSRF研究 9. 日本の海外支援と市民参加：JICAの役割 10. プロジェクトマネージメント研究(1) 11. プロジェクトマネージメント研究(2) 12. グローバル化、人権と市民社会、自立支援と草の根組織 13. まとめと課題 		
教科書	『草の根NPOのまちづくり：シアトルからの挑戦』		
授業の工夫点	外部講師を招へいし、学生に生きた情報を聞いてもらうようにしていること、また海外協力ボランティア研修として、JAICAとの連携をとりながら、学生を派遣している。		
授業の評価方法	出席(25%)、毎回の小レポート(30%)、前期・後期それぞれのレポート(45%)。試験は行わない。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	JAICA、神戸まちづくりNPO、世田谷まちづくりNPOとの協力・連携を行っている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	グローバルシティズンシップ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	市民とメディア、メディアコミュニケーション	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	グローバル・メディア・スタディーズ学部 (グローバル・メディア・学科)2年次生	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計209名(男子学生87名 女子学生122名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	グローバル社会が現実のものとなっていく一方で、国民国家間の境界がますます意識されるようになってきました。戦争やテロ、環境や開発問題、貧困や情報格差など、グローバルな解決が求められるようになってきています。本講義では、グローバルシティズンとして、どのようなアプローチをとるべきかについて、メディアとの関わり、特にNPO・NGOや市民による情報発信の事例などをとらえ、日常的なコミュニティレベルから、地球市民レベルに向けた情報の受発信を考察し、そこから具体的なアクションへつなげていくために何が必要かを議論していきます。		
授業内容	授業では、グローバルシティズンシップとは何かという基礎的な考えについて理解します。また、環境、貧困などグローバルなテーマを教材として、その問題や課題がどのような形でグローバルあるいはローカルにディスカッションされているのかを考察します。メーリングリスト、ブログ、SNS、インターネット新聞や放送、ウェブサイトなど、グローバルなディスカッションや対話を通して現状と問題などを見ていきます。各自が関心あるテーマについて、イベント参加、文献調査、メディア視聴などを通して理解を深めていきます。講義では、様々な立場からグローバルな問題に取り組んでいる実践者の話を聞く機会も設けます。 1. ガイダンス 2. グローバルシティズンシップとは 3～4. グローバルな視点と問題 5. グローバル化された世界におけるシティズンシップ 6. ゲスト 7. 人権 8. ゲスト 9. ゲスト 10. ゲスト 11. 環境と開発 12. 平和と安全 13. 連帯経済 14. グローバルガバナンス		
教科書			
授業の工夫点	様々なメディアを使った視覚教材を取り入れたり、NPO、NGOなどからゲストスピーカーを迎え、最先端で活躍する人の話を聞いてもらうことにより、学生の意識を啓発するようにしている。		
授業の評価方法	平常点、小レポート、最終課題による総合評価 ※ただし、3分の1以上の欠席は不可		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	組織との正式な連携ではないが、個人的につながりのあるNPO、NGO関係の人をゲストとして迎える。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	非営利組織論a		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織の経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部(経済学科、商学科、現代応用経済学科)2～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計473名(男子学生357名 女子学生116名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	経済学科、商学科選択現代応用経済学科 選択必修		
授業目的	非営利組織(非営利セクターに属する組織)には、営利セクター・行政セクターに含まれないNPO法人、社会福祉法人、学校法人、医療法人、協同組合など多種多様な組織が含まれます。非営利組織は、政府・行政や企業活動の行き詰まりが顕在化する中で、最近では介護分野、まちづくり分野、国際協力分野(NGO)など活躍の場は着実に拡大し、雇用創出面における期待も増大し、経済活動の主体としてその役割が無視できない存在に発展しています。また、行政や企業と非営利組織とのコラボレーションも活性化しています。今後、みなさんが非営利組織と関わる機会はますます増大するでしょう。本講義では、非営利組織の現実を踏まえて、営利/非営利組織の共通性/差異性の明確化、国際比較などから、非営利組織とは何か、とくに非営利事業体を含めてその発展の課題や社会的な存在意義に関する理解が深められる授業を行います。		
授業内容	・狭義/広義の非営利組織(1～3) ・非営利組織に関する法、税制度および経済規模(4～5) ・非営利組織の活動分野、医療・福祉、まちづくり、環境等(6～9) ・非営利事業体、社会的企業(10～12) ・非営利組織の国際比較(13～14) ・非営利組織論aのまとめ(15)		
教科書			
授業の工夫点	○ビデオ教材を多めに用いる。 ○非営利組織の最新動向を知るために新聞記事や雑誌などを多めに用いる。 ○非営利組織を実際に運営している方を講師として招く。		
授業の評価方法	成績は、定期試験70%、出席率・授業態度・レポート等30%で、総合的に評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	非営利組織論b		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織の経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部（経済学科、商学科、現代応用経済学科）2～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計452名（男子学生345名 女子学生107名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	経済学科、商学科選択 現代応用経済学科選択必修		
授業目的	非営利組織（非営利セクターに属する組織）には、営利セクター・行政セクターに含まれないNPO法人、社会福祉法人、学校法人、医療法人、協同組合など多種多様な組織が包含されます。非営利組織は、政府・行政や企業活動の行き詰まりが顕在化する中で、最近では介護分野、まちづくり分野、国際協力分野（NGO）など活躍の場は着実に拡大し、雇用創出面における期待も増大し、経済活動の主体としてその役割が無視できない存在に発展しています。また、行政や企業と非営利組織とのコラボレーションも活性化しています。今後、みなさんが非営利組織と関わる機会はますます増大するでしょう。本講義では、非営利組織論aで学習した内容に基づき、「営利／非営利」、「社会的企業」、「社会的起業家」、「コミュニティ・ビジネス」、「ソーシャル・キャピタル」等をキーワードに、非営利組織の経営学を学びます。		
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・非営利組織の存在理由（1～3） ・ソーシャルエコノミー、ボランティア経済（4） ・社会的起業家とは何か（5～6） ・非営利組織のガバナンス、マネジメントの基本的特徴、リーダーシップ、経営戦略、資金調達など（7～11） ・非営利組織のネットワーク、行政・企業とのコラボレーション（12～14） ・非営利組織論bのまとめ（15） 		
教科書			
授業の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ○ビデオ教材を多めに用いる。 ○非営利組織の最新動向を知るために新聞記事や雑誌などを多めに用いる。 ○非営利組織を実際に運営している方を講師として招く。 		
授業の評価方法	成績は、定期試験70%、出席率・授業態度・レポート等30%で、総合的に評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	非営利組織の経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部（経済学科、商学科、現代応用経済学科）2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計14名（男子学生10名 女子学生4名）	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>非営利組織（NPO）とは何か、について学びます。</p> <p>①企業と非営利組織を比較することによって、両者の特徴を学びます。</p> <p>②非営利組織の実際の活動、行政や企業との協働を経営学の視点から考えます。</p> <p>③ゼミ生同士の交流を深め、卒業研究や就職に向けて様々な能力を培います。</p>		
授業内容	<p>講義では、非営利組織に関する基本文献を読み、基礎知識や理論を学習します。また、第一線で活躍している人に話を聞いた現場を見学することで、文献では学べないことを積極的に学びます。</p> <p>同時に、非営利組織の学習を通して、パワーポイントによるプレゼンテーション能力やHP作成能力、ヒアリング調査やゼミ生同士の交流によるコミュニケーション能力を獲得することを目指します。</p> <p>1年間の詳細なスケジュールは、話し合いによって決定します。</p>		
教科書			
授業の工夫点	<p>学生のやる気を向上させるため、実際のNPOの現場に調査に行き、調査内容をパワーポイントを使って発表する。年度末にはゼミ冊子を作成している。</p> <p>世田谷のNPO活動に積極的に参加し、イベントなども企画実行している。</p>		
授業の評価方法	出席およびゼミの活動にもとづいて総合的に評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	世田谷のNPO数団体と連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	非営利組織の経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部（経済学科、商学科、現代応用経済学科）3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名（男子学生13名 女子学生6名）	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	10時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	演習Iで学んだことを基礎に、更に発展した調査および研究を行い、非営利組織（NPO）や社会問題について考え、討論を行います。また、最後まで考え抜く力を養います。		
授業内容	演習と同様に、文献の輪読・討論を行い、非営利組織・行政・企業へのヒアリング調査を実施します。年度末には、卒業研究の基礎となる報告書をまとめます。 1年の詳細なスケジュールは、話し合いによって決定します。		
教科書			
授業の工夫点	NPOや経済の時事問題に関するディベートやディスカッションを行っている。年度末にはゼミ冊子にその様子を掲載している。世田谷のNPO活動に積極的に参加し、イベントなども企画実行している。		
授業の評価方法	出席およびゼミの活動にもとづいて総合的に判断します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 昭和女子大学

授業科目名	福祉環境とボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間社会学部（心理学科1年次、福祉環境学科1・2年次、現代教養学科1・2年次、初等教育学科1・2年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計168名（男子学生0名 女子学生168名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	21世紀は「ボランティアの世紀」といわれています。 本講義は、グローバルな視野から、ボランティア・市民社会の理念や社会システムについて論じるとともに、未来の社会を育む「ボランティア・ネットワーク」の可能性、それを支援するための社会政策や環境づくりなどを、多様な視点から学ぶことを目標にします。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 『ボランティア学』を学ぶために 出会いのワークショップ（討論グループづくり） 人はなぜボランティアをするのか ボランティア・コミュニケーションへの考察 世界のボランティア史と市民社会の誕生 現代社会におけるボランタリズム理念 統計にみるボランティア・NPOの世界 ボランティアマナー・トレーニング① ボランティアマナー・トレーニング② グローバル社会におけるボランティアの展開 国際協力NGOの歴史と課題 生涯学習社会とボランティア活動の役割 学校教育におけるボランティア学習の可能性 ボランティア・NPOと行政とのパートナーシップ 企業の社会的責任とフィランソロピー 		
教科書	『希望への力』-地球市民社会の「ボランティア学」(興裕寛著・光生館発行)		
授業の工夫点	授業では、講義にとどまらず、話しあいや協働作業などとおしたワークショップ、映像による実践の世界を探索するなどの“参加型学習”を展開していきます。		
授業の評価方法	出席・受講態度・レポート論文をもとに評価する。論文の評価は、①テーマ設定の斬新さ、②講義成果の反映、③独創的な論点の展開、④批判的な目による検証力、⑤社会への提案性などを評価基準とする。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	一般教養科目全学部1年次 人間文化学部(日本語日本文学科、英語コミュニケーション学科、歴史文化学科) 人間社会学部(心理学科、福祉環境学科、現代教養学科、初等教育学科) 生活科学部(生活環境学科、生活科学科) 短期大学部(文化創造学科、食物科学科、子ども教育学科)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計47名(男子学生0名 女子学生47名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	21世紀は「ボランティアの世紀」といわれています。 本講義は、グローバルな視野から、ボランティア・市民社会の理念や社会システムについて論じるとともに、未来の社会を育む「ボランティア・ネットワーク」の可能性、それを支援するための社会政策や環境づくりなどを、多様な視点から学ぶことを目標にします。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 『ボランティア学』を学ぶために 出会いのワークショップ(討論グループづくり) 人はなぜボランティアをするのか ボランティア・コミュニケーションへの考察 世界のボランティア史と市民社会の誕生 現代社会におけるボランティア理念 統計にみるボランティア・NPOの世界 ボランティアマナー・トレーニング① ボランティアマナー・トレーニング② グローバル社会におけるボランティアの展開 国際協力NGOの歴史と課題 生涯学習社会とボランティア活動の役割 学校教育におけるボランティア学習の可能性 ボランティア・NPOと行政とのパートナーシップ 企業の社会的責任とフィランソロピー 		
教科書	『希望への力』—地球市民社会の「ボランティア学」(興梠寛著・光生館発行)		
授業の工夫点	授業では、講義にとどまらず、話しあいや協働作業などをおとしたワークショップ、映像による実践の世界を探索するなどの“参画型学習”を展開していきます。		
授業の評価方法	出席・受講態度・レポート論文をもとに評価する。論文の評価は、①テーマ設定の斬新さ、②講義成果の反映、③独創的な論点の展開、④批判的な目による検証力、⑤社会への提案性などを評価基準とする。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	コミュニティサービスラーニング(福祉環境とボランティア)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部(福祉環境学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計6名(男子学生0名 女子学生6名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	「共生知」の世界にようこそ！ コミュニティサービスラーニング『福祉環境とボランティア論』は、講義『福祉環境とボランティア論』を実証的に探求するために、理論学習で学んだ成果を公共の社会の発展のために役立てながら学ぶことを目的にした社会貢献型体験学習です。コミュニティサービスラーニングとは、教室で学んだ理論学習の成果を地域社会の課題に置き換えながら実践的に学ぶ教科学習方法です。学生が地域社会におけるニーズや課題を発見し、自分に可能な社会貢献活動をしなが問題と共有するとともにその成果と反省を理論学習にフィードバックさせることを目標にしています。学習は、①オリエンテーション、②事前学習、③コミュニティサービスラーニングの実践、④総括学習の4つの学習プロセスによって構成されています。		
授業内容	1. 授業概要の説明／コミュニティサービスラーニングへの理解 2. 実践のための情報の収集方法と計画立案の方法／安全学習／『コミュニティサービスラーニング計画書』(同)報告書の記入方法 3. 学習課題共有のためのワークショップ／実践のサポート体制と活用法 ■コミュニティサービスラーニングの実践(20時間) 学びのキャンパスを地域社会に広げて、社会への貢献活動を行います。実践の方法としては、つぎの3つの方法があります。 ●昭和女子大学プログラム ●ボランティアセンタープログラム ●自主企画プログラム 4～12. 実践活動 ■総括学習(後期最終期3コマ・必修) 13. 学びのふりかえりのためのワークショップ 14. リポーティングセッション(実践報告会) 15. 『コミュニティサービスラーニング報告書』の提出と承認／総括講義		
教科書	『希望への力』-地球市民社会の「ボランティア学」(興沼寛著・光生館発行)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	『計画書』『報告書』を参考にレポートの提出によって評価する。評価の観点は①活動先理解②社会課題の分析③実践の検証④社会提案等		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	大学設置のNPO法人運営施設でのサービスラーニングの実施。 世田谷ボランティアセンターとの連携により学生への活動プログラム提供、相談・助言、情報提供を行う。		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	コミュニティサービスラーニング(ボランティア論A)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	一般教養科目全学部1・2年次 受講条件:一般教養科目の「ボランティア論」または人間社会学部専門科目の「福祉環境とボランティア」の単位を取得済みであること	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計3名(男子学生0名 女子学生3名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	「共生知」の世界にようこそ！ コミュニティサービスラーニング『福祉環境とボランティア論』は、講義『福祉環境とボランティア論』を実証的に探求するために、理論学習で学んだ成果を公共の社会の発展のために役立てながら学ぶことを目的にした社会貢献型体験学習です。コミュニティサービスラーニングとは、教室で学んだ理論学習の成果を地域社会の課題に置き換えながら実践的に学ぶ教科学習方法です。学生が地域社会におけるニーズや課題を発見し、自分に可能な社会貢献活動をしなが問題を共有するとともにその成果と反省を理論学習にフィードバックさせることを目標にしています。学習は、①オリエンテーション、②事前学習、③コミュニティサービスラーニングの実践、④総括学習の4つの学習プロセスによって構成されています。		
授業内容	1. 授業概要の説明／コミュニティサービスラーニングへの理解 2. 実践のための情報の収集方法と計画立案の方法／安全学習／『コミュニティサービスラーニング計画書』(同)報告書の記入方法 3. 学習課題共有のためのワークショップ／実践のサポート体制と活用法 ■コミュニティサービスラーニングの実践(20時間) 学びのキャンパスを地域社会に広げて、社会への貢献活動を行います。実践の方法としては、つぎの3つの方法があります。 ●昭和女子大学プログラム ●ボランティアセンタープログラム ●自主企画プログラム 4～12. 実践活動 ■総括学習(後期最終期3コマ・必修) 13. 学びのふりかえりのためのワークショップ 14. リポーティングセッション(実践報告会) 15. 『コミュニティサービスラーニング報告書』の提出と承認／総括講義		
教科書	『希望への力』-地球市民社会の「ボランティア学」(興沼寛著・光生館発行)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	『計画書』『報告書』を参考にレポートの提出によって評価する。評価の観点は①活動先理解②社会課題の分析③実践の検証④社会提案等		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	大学設置のNPO法人運営施設でのサービスラーニングの実施。 世田谷ボランティアセンターとの連携により学生への活動プログラム提供、相談・助言、情報提供を行う。		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	コミュニティサービスラーニング(ボランティア論B)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	一般教養科目全学部2・3・4年次 受講条件:心理学科学生または教職課程履修者に限る。一般教養科目の「ボランティア論」または人間社会学部専門科目の「福祉環境とボランティア」を履修済みまたは履修中であること	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計3名(男子学生0名 女子学生3名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	一般教養科目「ボランティア論」、福祉環境学科専門科目「福祉環境とボランティア」を受講中または既習の学生のために、学校教育現場で特別支援教育対象児童生徒への援助を中心に、ボランティア活動を行う。特別支援教育について理解するとともに、心理学・教職課程などで履修したことを現場で活かしさらに理解を深めていくための実習を行う。		
授業内容	<p>【前期】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.この授業についての説明 2.特別支援教育についての理解 3.対人コミュニケーションについての理解 4.リレーション作りの実習 5.現場における実習 6.中間報告ならびにスーパーバージョン(毎月) 7.前期のまとめ <p>【後期】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.現場における実習 2.中間報告ならびにスーパーバージョン 3.1年のまとめ レポートおよび報告会 		
教科書	必要に応じて資料配布		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への参加・実習・およびレポート提出を持って通年2単位とする。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NPOマネジメント入門		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ドイツ語圏文学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部現代教養学科1・2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計16名(男子学生0名 女子学生16名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	社会の大きな変動の中で、税金で公益サービスを担ってきた行政や、人、モノ、サービスの移動で利益を追求してきた企業のあり方が問われている。その中で注目を浴びているNPOについて特にマネジメントを実践的に講義する。		
授業内容	<p>新しい公益法人法が今年度より施行されるなかで、まず公益とはなにかについて述べた後、NPO法人のあり方、具体的な認証手続き、持続可能な運営の方法について考察する。</p> <p>かつて欧米の歴史において大きな役割を担ってきたNPOが、欧米のひとつのモデルとされた福祉国家とどのような関係にあったか概観した後、日本におけるNPOの辿った道について対比する。その後、具体的なマネジメントのために必要な基本的知識をひとつひとつ実習を加えながら理解する。必要とあらば、さまざまなNPOを紹介し、それぞれの活動領域や苦勞している点などにも目を配りたい。</p> <p>時間があれば「非営利」が強調されすぎた観のあるNPO法人にとって、今後重要な活動となるであろう収益事業の取り扱いについても触れたい。</p> <p>自分のライフスタイルの中でNPOと関わったり、立ち上げたりすることができる基本的知識と行動力を身に付けることを目標とする。</p>		
教科書	開講時に指定する		
授業の工夫点			
授業の評価方法	成績点＋平常点＋テスト		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	福祉NPOマネジメント論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部福祉環境学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計4名(男子学生0名 女子学生4名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	21世紀の“共生社会”を築く社会力として、現代社会の多様な課題を解決し、社会を活性化するNPOの社会的役割は、行政や企業の社会力とは行動原理を異にする“第3の市民力”として、大きな役割を果たしています。本講義では、講義とワークショップをとおして多様なNPO活動の魅力と活動の世界を探るとともに、組織マネジメントの方法や法的制度等について学んでいきます。		
授業内容	I. オープニング・セッション ①授業ガイダンス ②[WS]コミュニケーションセッション「出会いのワークショップ」 II. NPO(市民非営利組織)とは何か ③[講義]市民社会の誕生とNPOの社会的役割 ④[WS]NPOの自画像を描く「NPOvs行政vs企業」 ⑤[講義]NPOが創造する「もうひとつの社会システム」 III. NPO(市民非営利組織)と法制度 ⑥[講義]『NPO法』(特定非営利活動促進法)とは何か ⑦[講義]『NPO法』の法的特性と申請手続き IV. NPO(市民非営利組織)の世界を探検する ⑧[講義]市民社会を構築するNPOの多様な世界 ⑨[WS]グループ研究「NPOの世界を探検する」 ⑩[WS] “ ” ⑪[WS]グループ研究発表「社会を変えるNPOの世界」 V. NPOをマネジメントする ⑫[講義]NPOの運営戦略と組織マネジメント ⑬[講義]NPO支援の社会システムと行政や企業の役割 ⑭[WS]「NPO夢企画」モデルづくり ⑮[WS]「NPO夢企画」NPOモデル発表会		
教科書	①教科書『希望への力-地球市民社会の「ボランティア学」』(著者:興祖・光生館発行)②参考書『NPOの経営-資金調達から運営まで』(著者:坂本文武・日本経済新聞社発行)		
授業の工夫点	授業は、学生ひとり一人が自分の意見を述べあい、共同作業をとおしてグループの合意を構築する参加型ワークショップを行うなどの、学生の主体的な参画を大切にすすめていきます。		
授業の評価方法	レポートまたは試験点、出席点、受講態度などで評価		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NGO/NPOの歴史		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部現代教養学科2・3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計40名(男子学生0名 女子学生40名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	How were NGOs created? How do they work? Who gives them financial support? Who goes to work for an NGO? What is the relationship between an NGO and an NPO (non-profit organization)? Which country is most NGO friendly, and which countries oppose them? This course will cover the history and mission of NGOs and NPOs. It is designed as a survey course on the non-profit sector and the place NGOs occupy in it.		
授業内容	Week 1 ; Introduction to the course ; explanation of lectures and introduction to visiting lecturers; Explanation of the non-profit sector and the role of NGOs within that sector; comparison of environments for NGOs/NPOs in Japan, the US and European countries;Week 2 ; guest lecture by representative of a Japanese development assistance NGO, explaining what countries the organization works in, what it does, how it raises funds, its relationship with governments; Week 3 ; follow-up discussion of international assistance NGOs; their origins and goals; comparison between Japan, the US and Europe; Week 4 ; Ms Lucy Craft, founder of the Kurile Island Network (KIN), a small NGO promoting the protection of the environment on Kunashiri Island. Problems of setting up an NGO and maintaining it in Japan; slide show of work of KIN on Kunashiri; Week 5 ; follow-up discussion on lecture by Ms Craft: the relationship between NGOs and the government; how tax policy helps NGOs in the United States; Japanese tax policies with regard to NGOs in the past and in the present; NGOs working for the environment; who works for NGOs in Japan, in the United States? Week 6 ; International organizations; UNICEF; UNFPA; and other UN-related organizations; their origins and goals; who works for them and what they do;Week 7 ; Foundations: the organizations that provide funds for NGOs and NPOs. How were they created; who works for them? What do they do?Week 8 ; mid-term quiz; mid-term paper due;Week 9 ; One-person NGOs: visit from Soraya Umewaka, who will explain her work publicizing through low budget documentary DVDs the situation of street children in Latin America;Week 10 ; The QUANGO or quasi-NGO; case study: The Asia Foundation, its relationship with the US government; its work in Japan after World War II; its activities throughout Asia today; the advantages and disadvantages of close relations with the government; comparison between US QUANGO-s and Japanese semi-governmental organizations; Week 11 ; advocacy NGOs & the case of the Asian Women's Fund & why it failed. Advocacy NGOs in Europe and the US; the role of European NGOs in promoting peace and reconciliation after World War II; the contribution of European NGOs to European unity; Week 12 ; domestic NPOs in the United States and Japan; discussion of health, welfare, education and cultural organizations and how they are funded in Japan, the US, and Europe; the myth of the volunteer; Week 13 ; review & discussion of careers in NGOs, NPOs and international organizations;Week 14 ; Final papers due & final quiz		
教科書	Textbook need not be purchased; readings, however, will be distributed in advance of each class.		
授業の工夫点	An ability to read and understand English-language material will be helpful for those taking this course. Lectures and discussions will be primarily in Japanese. Reports can be submitted in either English or Japanese.		
授業の評価方法	Attendance and classroom participation 40 percent; reports 20 percent each; quizzes 10 percent each		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	英語で地域貢献		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	高齢者福祉 生活経営	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	一般教養科目全学部1・2・3・4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計22名（男子学生0名 女子学生22名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	英語を通してNPOやボランティア活動の意義や役割、リスクマネジメントを実践的に学ぶ。世田谷区を中心にボランティア団体と提携し、英語を用いてイベントの案内やパンフレットの翻訳、日本に住む外国人のボランティア活動の補助を行いながら、専門分野の仕事で生かせる英語力を養うための環境に慣れる。卒業後の生涯学習、社会参加への扉を開くことにもつなげたい。		
授業内容	第1回 導入授業 第2回 NPO概論 第3回 ボランティア・プランニング 第4回 ボランティア・マナー 第5回～第8回 実習1～4 第9回 中間報告会1 第10回～第14回 実習5～9 第15回 前期のまとめ 第16回 後期導入 第17回 ボランティア・プランニング 第18回～第22回 実習10～14 第23回 中間報告会2 第24回～第29回 実習15～20 第30回 グループ・スーパービジョン及び体験報告会		
教科書	指定せず。適宜プリントを配付。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出欠点、平常点、課題の提出による。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NGO概論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ドイツ語圏文学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	一般教養科目全学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計24名（男子学生0名 女子学生24名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	最近注目を浴びる非営利セクターのなかでも、主に海外を活動対象にしていることで独特な領域を形成するNGOについて、その活動の意義や歴史的経緯について講義する。		
授業内容	最近よく耳にする言葉にNGOがある。こうした非政府組織、非営利組織は以前から存在していたが、この講義では、なぜ今とりわけ脚光を浴びているのかについて考察する。まず非営利セクター一般の役割と機能を概観した後、NGOを次の点から解説していきたい。 ①NGOが脚光をあびる歴史的経緯・国家の限界・市場の失敗・ボランティアの限界・グローバリズムと富の分配 ②NGOが実際におこなっていること・環境・平和・人権・開発 ③政府型援助との比較 ④NGOの政策提言 ⑤NGOの限界とその克服への取り組み ⑥フェアトレードの仕組み		
教科書	必要に応じてプリントを配布する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席点＋平常点＋レポート		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	コミュニティとまちづくり		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	農村計画学、地域環境計画学、環境社会学、生活経営学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	一般教養科目全学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計89名（男子学生0名 女子学生89名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	私たちの生活とコミュニティとの関係は不可欠である。人々が共に支えあい安心して生活できる豊かなコミュニティの形成、さらに今日的課題である環境問題も視野に入れて、コミュニティとまちづくりとの関係やまちづくりの実践方法、住民の主体的関わり等について、具体例を通じて考えていく。		
授業内容	1. 導入授業2. Community の捉え方・定義 3. 日本の Community の変容 Part1 4. 日本の Community の変容 Part2 5. 農村地域のCommunity と生活 6. 都市のCommunity と生活 7. 地域資源・地域の宝探しとまちづくり 8. コミュニティ形成と住民主体、地域力 9. 海外における Community 活動の事例 Part1 10. 海外における Community 活動の事例 Part2 11. 日本における多様な Community 活動の事例 12. 日本におけるまちづくりの事例 13. 試験 14. 「コミュニティとまちづくりのまとめ」		
教科書	なし(参考図書は適宜推薦する)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席点、課題レポート点、平常の受講状況を勘案して評価		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

○ 成蹊大学

授業科目名	トピック・セミナーD		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	その他(総合教育)
開設学部（学科）及び年次	文学部 1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計15名（男子学生3名 女子学生12名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域の活動にボランティアとして参加し、地域の豊かさを実感する。		
授業内容	本授業は、ボランティア活動の理解、地域福祉の理念や共生社会のあり方、国・自治体と住民の役割、身近な地域におけるボランティア・NPO活動などを学習・実態調査・討論する演習形式で展開することによって、コミュニティ・マインドを醸成し、今後に向けて強く求められる地域における市民の役割について考えていく素地を養うことをねらいとする。レジュメの配布、関連VTR、地域の市民参加・ボランティア活動に関する資料、市民ボランティアグループ訪問・討論などによって、授業を展開する。		
教科書	武蔵野市『コミュニティ構想』(1971年)、大久保・見城・高田・中江・飯塚編『公助・共助・自助のちから-武蔵野市からの発信』風間書房(2006年3月)		
授業の工夫点	地域のお祭りに企画段階から参加し、達成する経験を得る。		
授業の評価方法	地域の活動への積極的な参加、要領を得た報告。この授業で得られたことについてのレポート作成。		
授業のサポート体制	地域の集会にも参加している。		
学外の関係機関・団体との連携	けやきコミュニティ協議会、エト研究会(地域通貨エトの発行母体)		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 清泉女子大学

授業科目名	ボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	キリスト教学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	文学部（全学科の1～4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計53名（男子学生0名 女子学生53名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	これまでに各自が経験したボランティア活動および関連する読書に基づいて、ボランティアの意義を考える。学生間の分かち合い、ボランティア活動をしている団体、個人からの話を聞くことも交えながら、わたしたちの課題を見出す事を目的とし、学生と教員とボランティア活動をしている方々で作り上げる授業とする。		
授業内容	1.課題読書の報告とそれに基づくグループ・ディスカッション 2.ボランティア活動をしている団体または個人の授業内講演と質疑応答 3.国内の種々のボランティア活動を知る。 4.ACIボランティア活動および海外ボランティア活動を知る。 5.学内でのボランティア活動への参加 6.市民社会を作り上げるボランティア活動の課題		
教科書	『ボランティア—もうひとつの情報社会』（金子郁容 著）、『ボランティア学のすすめ』（内海成治 著）		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への参加度、レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア活動をしている団体に授業内講演をお願いしている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 高千穂大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	保健学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部3年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計52名（男子学生42名 女子学生10名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	9時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア活動の意義を学び、活動範囲・形態・ダイナミクス等について概要を理解し、現代社会におけるボランティア活動に関連する課題について把握することを目標としている。また、現在展開されている各種ボランティア活動について具体例に触れながら、その問題点と今後の動向を探るための視座を培うことを目指している。		
授業内容	授業時間の中で、実際のボランティア体験をし、その体験を振り返る作業を繰り返していく。学生が相互に討論したり、ボランティア活動の準備を協力して行うことが求められている。実際のボランティア体験の中から、社会的な様々な話題や関連性がある問題に目を向け、自立と協同の視点から物事を考える習慣を身に付けるよう心がけて欲しい。最初にボランティア活動の全分野に関して構造を理解した上で、ボランティアの意義・方法等について知識を習得し、整理する能力を培う。その後、ボランティア活動の実際について事例を分析しながら、ボランティア活動から得た学びを学生個々が自身の発達に結び付けていくことを到達目標とする。ボランティア団体関係者等の外部講師を招いて、実際のボランティアの現場についての講義も予定している。		
教科書	指定なし（必要に応じて資料を配布する）		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験。レポート。出席状況により評価。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 拓殖大学

授業科目名			
授業科目名	ボランティア活動と生涯学習		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	商（経営学科1・2年次、国際ビジネス学科1・2年次、会計学科1・2年次）、政経学部（法律政治学科1・2年次、経済学科1・2年次）、外国語学部（英米語学科1～4年次、中国語学科1～4年次、スペイン語学科1～4年次）、工学部（機械システム工学科1～4年次、電子システム工学科1～2年次、情報エレクトロニクス学科3～4年次、工業デザイン学科1～4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計322名（男子学生239名 女子学生83名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	「ボランティア」とは、自らの自由な意志で行動する人を表現した言葉です。現代社会において、ボランティアが築く「市民社会」は、「行政」や「企業」とは行動原理を異にする共生社会への「社会力」として、人・コミュニティ・地球社会をネットワークングしています。授業をとおして、「私が変わる社会は変わる」をキーワードにしながら、ボランティア社会の現状と課題を学び、自分と社会のよりよい在り方を探究していきます。		
授業内容	1.「ボランティア社会学を学ぶために」（講義ガイダンス） 2.「人はなぜボランティアをするのか」 3.「自分探しの旅の時代へ」 4.「ボランティアの歴史を創った人びと」 5.「ボランティアの理念と市民社会の役割を探る」 6.「はじめてのボランティア活動のために」 7.「共に生きる福祉社会をめざして」 8.「子どもが育つ社会を創造する」 9.「学校はいまボランティア学習の時代」 10.「“地球人”になろう」 11.「地球社会に広がるボランティアネットワークング」 12.「企業の社会責任とフィランソピー」		
教科書	『希望への力 — 地球市民社会の「ボランティア学」』（興裕 寛著・光生館発行）		
授業の工夫点	本授業は、グローバルな視野からボランティア活動の理念や現状と課題、さらには実践方法などについて、社会最前線の事例をとおして学ぶことを目標にしたいと考えています。したがって、講義・参画型ワークショップ・映像学習という構成によってすすめていく予定です。授業をきっかけに、ボランティア活動をぜひ体験してみてください。		
授業の評価方法	①試験方法:講師の提示するテーマにもとづきレポートを提出してもらいます ②成績判定の方法:授業出席率をもとより「講義成果の反映性」「独創的な論文の展開性」「批判性や検証性」「社会への提案性」などを評価基準にして判定します ③出席・授業態度:出席率は厳正に判定し、授業中の教室での無断入退室、居眠り、私語・雑談は厳禁し、強制退去や履修拒否をすることがあります。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
授業科目名	NPO論 I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	商（経営学科2年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計51名（男子学生42名 女子学生9名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代資本主義社会における経済活動は、利益追求を目的とする企業を中心とするビジネスセクターと公益性を追求する政府行政セクターそして市民自身が主体者となって社会的問題を解決していくための非営利組織（NPO）を中心とした非営利セクターあるいはサードセクターという3つの経済セクターによって担われている。授業においては、非営利組織の活動を経営学的視点から捉え、企業との対比によって、両者の相違点と特徴を明かにしていきたい。		
授業内容	1.現代資本主義社会における3つの経済セクターと非営利組織 2.非営利組織の定義と範囲、先進国における非営利組織の現状と実態—アメリカにおけるNPO— 3.イギリスにおけるボランティア・セクター 4.ヨーロッパで発展する社会経済システム 5.日本の非営利組織のあゆみ、公益法人制度の特徴と問題点 6.特定非営利活動法人（NPO法人）の登場と制度の概要 7.非営利組織の経営における特徴（企業システムとの対比） 理念・ミッションの重要性、目標設定と経営戦略のフレームワーク、コーポレート・ガバナンス 8.組織構造の構築と運営 9.経営資源の募集と管理 寄附金・贈与財・ボランティア 10.ボランティアの確保とマネージメント 11.IT革命の進展と非営利組織における可能性の拡大 12.まとめ		
教科書	『経営学の再生』—社会環境問題への挑戦、折橋靖介著・白桃書房		
授業の工夫点	黒板に板書しながら授業を進めます。		
授業の評価方法	期末の試験の結果で評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO論Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	経営学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	商(経営学科2年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計56名(男子学生45名 女子学生11名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	非営利組織(NPO)が期待される活動領域は極めて広範にわたるが、問題は非営利組織活動にとって必要な資源を如何に確保し特に経済的自立をはかっていけるかという課題である。授業においては、事業型NPOの可能性、コミュニティ・ビジネス等NPOの新たな活動領域と可能性について論じていきたい。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1.事業型NPOの生成と発展の可能性。ソーシャルアントレプレナーによる事業創造への期待 2.アメリカによる事業型NPOの発展、事業型NPOが求められている背景 3.ヨーロッパにおける社会的企業の生成 4.社会的企業の発展と今後の可能性 5.日本におけるコミュニティ・ビジネスの発展の可能性 6.社会的企業(協同組合等)の事業展開と経営に学ぶ 7.日本の市民生協におけるCO-OP商品開発の実際と限界 8.企業・行政とのパートナーシップを軸とした戦略展開 9.コラボレーション型パートナーシップの実例研究 10.国境を超えて活躍するNGO 11.21世紀における社会経済システムの展望 12.まとめ 		
教科書	「経営学の再生」—社会環境問題への挑戦、折橋靖介著・白桃書房		
授業の工夫点	黒板に板書しながら授業を進めます。		
授業の評価方法	期末の試験の結果で評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域振興論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行政	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政経学部(法律政治学科1・2年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計53名(男子学生45名 女子学生8名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	行政が作成したプランに沿って、補助金、低利融資、税制優遇、規制緩和などのメニューを使い地域振興する時代から、地域の有形・無形の資産を使い、地域の人々が自らの発想で地域を活性化させる動きが多くみられます。この授業では、さまざまな地域でのそのような動きを、事例紹介を中心に解説し、その本質について検討していきます。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1.授業の方向性と地域振興についての考え方を説明します。 2.観光・グリーンツーリズムと地域振興：観光と言う身近な話題を通して地域の活性化を探ります。特に、農村観光に焦点をあて、観光とは何かを考えます。 3.特区制度による地域振興：小泉前総理の官から民への改革の一つとして特区制度が作られました。規制緩和による民間の活力を地域づくりにどう生かすかを探ります。 4.まちの安全・安心：誰もが安心して暮らせるまちづくりも地域振興のひとつです。割れ窓理論を紹介し、各地で行われている安全・安心に向けた取り組みを紹介しします。 5.地域通貨と地域振興：特定の地域、特定の人々の間だけで通用する通貨があります。それは信頼と互助によって豊かな暮らしを実現するという目的を実現する手法として注目を集めています。 6.コンパクトシティ：少子高齢化、さらには人口減少のなかで効率性と快適性を目指すためのまちづくりの一つとしてその可能性を考えます。 7.地域の担い手：地域振興は、実際に人、社会、企業、行政が相互に連携しながら実践していくものです。それぞれの役割や機能について考えます。 8.地産・地消・食育：食の安全が注目されていますが、地場で取れた食を地元で消費することで、その地域のことを知ることとなります。各地のさまざまな取組みを食育も踏まえ考えます。 9.地域ブランド：十勝ワインや夕張メロンは、産品だけでなく地名にも価値があり、同時に地域の誇りともなります。地域をブランド化し、それを弾みに振興するための方法などを考えます。 10.まちづくりと地域振興：道路や劇場と言ったハードではなく、人や地域での助け合いの仕組みを含めたソフト面でのまちづくりが地域振興にどう影響するかを考えます。 11.過疎・UJターン：人口減少が進み町村は過疎から限界町村へ。一方で、都会で定年を迎える団塊の世代を地域に迎えることが地域活性化の道とする動きがあります。人口減少社会での地域振興を考えます。 12.交通：交流人口が地域振興に欠かせない要素である以上、空港や航路、駅や鉄道などの交通手段や交通拠点が重要な機能を果たすことに注目し、その機能、役割、あり方を考えます。 		
教科書	授業ごとに、レジュメと資料を配布します。参考として、新聞の地域欄を見るようにしてください。		
授業の工夫点	可能な限り、各地で実施されている地域振興策の具体的事例を映像や資料を基に紹介します。		
授業の評価方法	出席態度及び試験結果で評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 津田塾大学

授業科目名	NPO-NGO論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際政治、国際ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	学芸学部2-4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計97名(女子学生97名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	特になし
必修・選択の別	選択		
授業目的	日本で(国際)NGOが本格的に注目を浴び始めてから20年近くの歳月が経ちます。今では、多くの人びとがNGOの役割と限界に注目し、また、研究対象を超えて、社会参加の空間や職業の選択肢として考えるようになりました。欧米と比べたらその規模は小さく、また活動能力は確かに劣っていると云えるでしょう。しかし、日本にも国際NGOが数百単位で存在しており、その数は増加の一途をたどっています。このような国際NGOを理論的かつ実証的、かつ批判的に学ぶことが本授業の目的です。		
授業内容	<p>既存のNGO研究は、NGOの役割を過大評価したり、あるいは逆に過小評価しすぎたりする傾向がありました。冷静に、今日の国際NGOがおかれている現状を分析することを通じて、21世紀の越境するアクターについて考えてみたいと思います。加えて、国際NGOにボランティアやインターン、あるいは有給スタッフとして関わりたいと思う(もしくは、もうすでに関わっている)人びとのために、NGOと国家(政府)、NGOと市場(企業)、そしてNGOと草の根(一般の人びと)との関係に着目しつつ、NGOの戦略や政策提言などについても分析を行う予定です。</p> <p>1. NGOが抱えるアクターとしてのジレンマ 2. 現場からの発信(10月に山田裕史・カンボジア市民フォーラム事務局長の講義を2回行います。) 3. ガバナンス時代におけるNGOの位相(11月に林明仁・JCBL運営委員の講義を2回行います。) 4. 初回と最終回には、(金敬黙・山田裕史・林明仁の合同授業を予定-「実践科学としてのNPO-NGO論を以てして」)</p>		
教科書	金敬黙・福武慎太郎・多田透・山田裕史(編著)『国際協力NGOのフロンティア』明石書店、2007年		
授業の工夫点	実践科学としてのNGO-NPO論を理解するために、実務と研究の両方に関わっている研究者2名(山田裕史・カンボジア市民フォーラム事務局長、林明仁・JCBL運営委員)と分担形式で行ないます。山田氏、林氏はそれぞれ2回ずつ個別に講義を行なう予定であり、最初と最後の授業には3者合同でシンポジウム形式の授業を行なう予定です。		
授業の評価方法	授業への出席・平常点:30%、中間レポートの提出:30%、期末レポートの提出:40%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続(隔年開講)		

○ 東京家政学院大学

授業科目名	NGO/NPO論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ジェンダー論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	家政学部(家政学科2年次)	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計19名(男子学生0名 女子学生19名)	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPO/NGOの活動について、相原地域の農業にたずさわる方々への聞き取り調査や環境に関わる施設への訪問を通じ学びます。またNPO/NGOで活動する人々たちをゲストとして招き、実体験に基づいた話を伺います。この授業を通じ、個人が参加しながら創りあげていく21世紀の社会について考えて行きます。		
授業内容	<p>1.4/11オリエンテーション、グループ分け 2.4/18農村実習に関する説明、P.Pの使い方 3.4/25各自農家でのフィールドワーク 4.5/9各自農家でのフィールドワーク 5.5/16NPOとは、NGOとは？NPO、NGOの歴史(教員説明+ビデオ) 6.5/23各自農家でのフィールドワーク 7.5/30戦後日本の農業政策(GHQが展開した生活改善プログラムより) 8.6/6世界的NGOドイツ平和村について 9.6/13各自農家でのフィールドワーク 10.6/20世界のNGO、NPOの活動:ゲストスピーカー(予定) 11.6/27各自農家でのフィールドワーク 12.7/4環境施設へのフィールドワーク 13.7/11各自農家訪問・報告書の提出 14.7/18グループ発表 15.7/25レポート提出</p>		
教科書	教員のホームページよりダウンロード		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への出席:30%、実習40%、期末レポート30%により総合的に評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア活動	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部(人間福祉学科2年次)	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計14名(男子学生0名 女子学生14名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年わが国においてもボランティア活動に対する社会的な期待が高まり、日常的にもボランティアという言葉が頻繁に用いられている。そこで授業では、地域の機関や福祉施設等でのボランティア体験を通じて、今、求められているボランティア像について考えていきたい。		
授業内容	1~2.ボランティア活動について考える 3~4.ボランティアフォーラム 5.ボランティアを求める当事者グループとの交流 6.ボランティア活動への準備 7~13.ボランティア活動の実際 14~15.ボランティア活動報告 16~17.共同募金活動に向けて(準備) 18~19.共同募金活動(駅前募金) 20.共同募金の活動報告 21.ボランティア活動への準備 22~28.ボランティア活動の実際 29~30.ボランティア活動報告		
教科書	必要に応じて、プリント配布		
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア活動70%、活動報告15%、レポート15%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東京経済大学

授業科目名	NPO論a		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際開発協力	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	経済学部 全学年、経営学部 全学年、コミュニケーション学部 全学年、現代法学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計268名(男子学生213名 女子学生55名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	この講義は概論として、NPO/NGO活動の歴史と現状、政府・企業との違い、活動の社会的な意義、NPO法の概要、ボランティア活動の原則などについて学ぶ。		
授業内容	NPO/NGOとは何か NPO/NGOの活動分野・規模 政府・企業セクターとの違い NPO/NGOの歴史(欧米・日本) 特定非営利活動促進法(NPO法) 認定NPO制度 ボランティア活動とその3原則 NPO/NGO活動の4世代論 NPO/NGOの課題		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験と出席で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティ福祉論a		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	コミュニティ福祉論、環境政策論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部 (経済学科3.4年、国際経済学科3.4年)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計89名(男子学生86名 女子学生13名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代の福祉改革とコミュニティ福祉——市民福祉活動と医療・福祉における「自立支援」		
授業内容	都市社会におけるコミュニティの現在 福祉NPOの現在 ノーマライゼーションとバリアフリー社会 コミュニティ福祉の歴史的展開		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	試験と出席点(授業感想票の提出)の合計点数により成績評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティ福祉論b		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	コミュニティ福祉論、環境政策論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部 (経済学科3.4年、国際経済学科3.4年)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計80名(男子学生68名 女子学生12名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代の福祉改革とコミュニティ福祉——超高齢社会に対するまちづくりと医療・保健		
授業内容	超高齢社会とコミュニティ福祉 医療・保健・福祉のネットワーク 個別事例から考えるコミュニティ福祉 (難病、公害病、ハンセン病、etc.)		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	試験と出席点(授業感想票の提出)の合計点数により成績評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	都市と市民b		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経済学部 全学年、経営学部 全学年、コミュニケーション学部 全学年、現代法学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計205名（男子学生177名 女子学生28名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代の行政は、「大きな政府」の見直しと効率化が課題となっている。そして、行政活動の範囲の縮小とこれに伴う行政需要の抑制のなかで、公・共・私役割分担を含めた行政活動のあり方、その妥当な組み合わせ、それを可能にする条件は何か、といったことが根本的に問われている。そこで、このような観点から、現代の行政の様々な活動を市民生活との関連において検討する。		
授業内容	1. 導入 <ul style="list-style-type: none"> 行政活動の範囲、環境要因の変動と政策対応 自治体による国の政策先導とローカル・ガバナンス コミュニティとボランティア・地域社会と市民 地域社会システムの変動 NPOの活動と社会関係資本の創出 2. 理論的問題設定 <ul style="list-style-type: none"> 行政活動の性格と法律による行政の原理 規制行政とサービス提供行政 3. 規制行政の活動と市民 <ul style="list-style-type: none"> 公共規制行政—公害の監視測定 公証行政—公証事務の処理システムとプライバシー保護 業界単位の規制行政—マンション管理業者の規制と管理組合 4. サービス提供行政と市民 <ul style="list-style-type: none"> サービス行政—廃棄物処理とリサイクル 資金交付行政—生活保護と生活者の自立 施設運営行政—高齢社会と介護 5. まとめ <ul style="list-style-type: none"> 行政活動に対する民主的統制の方法と課題 		
教科書	西尾勝『行政の活動』有斐閣		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東京女子体育大学

授業科目名	社会奉仕体験理論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	野外運動	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	体育学部体育学科 1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計36名（男子学生0名 女子学生36名）	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	大学が果たす社会貢献はその人的資源の豊富さから言って今後大きな期待が寄せられるところである。地域交流センターはその期待に応えるべく、本学学生が社会貢献を果たすための基本的学習「社会奉仕体験活動」を支援する。 本授業では、集中講座（ボランティア講座）で高齢者福祉・児童福祉・障害者福祉に関して講義を通して学び、学生たちが実践活動を果たすための理論的理解を促進することをねらいとする。		
授業内容	オリエンテーション（フレッシュウィーク期間中） 1 ボランティアとは <ol style="list-style-type: none"> ボランティアの理念・組織・法制度とボランティア先での問題解決の技法について理解を図る。 ボランティア社会における学生の役割、国際交流・環境問題等への取組について歴史的経緯・活動の現状を学習する。 2 障害者福祉 <ol style="list-style-type: none"> 障害とは何か、障害者と基本的人権等についての基本的理解を図る。 障害者とスポーツ及びスポーツボランティアについての理論を学ぶ。 聴覚障害者の情報保障について理解を図り、ノートイクの基本を学ぶ。 3 高齢者福祉 <ol style="list-style-type: none"> 高齢者福祉の現状と課題について理解を図る。 4 児童福祉 <ol style="list-style-type: none"> 児童福祉の現状と課題について理解を図る。 		
教科書	資料を配付する。		
授業の工夫点	ボランティア講座として実習の一部と組み合わせて実施することにより、理論だけでなく実践に結び付くようにしている。		
授業の評価方法	出席及び課題提出物を総合的に考慮して行う。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	「障害者福祉」の講義について、地域にある障害者スポーツセンターに会場提供と、講師として職員の派遣を依頼している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会奉仕体験実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	その他(集中講座受講後、年間を通して随時体験活動を行う)
担当教員の専門分野	野外運動	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	体育学部体育学科2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名(男子学生0名 女子学生19名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	15時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	集中講座(ボランティア講座)で高齢者福祉、児童福祉、障害者福祉について6コマ分の演習・実習を行い、実践活動を行うための技術的理解を図る。残り9コマ分を8領域(高齢者福祉、児童福祉、障害者福祉、国際交流、学校教育活動支援、生涯学習活動支援、環境・災害ボランティア、その他)より2領域以上選択して活動することにより、本学学生が社会貢献を果たすための基本的学習を促進することをねらいとする。		
授業内容	<p>1 障害者福祉</p> <p>①視覚障害者・聴覚障害者のスポーツ指導法について実践学習する。</p> <p>②肢体不自由者・知的障害者のスポーツ指導法について実践学習する。</p> <p>③聴覚障害者に対するノートイクの技法について実践学習する。</p> <p>2 高齢者福祉</p> <p>①介護法の実践・演習を行う。</p> <p>②車椅子体験、高齢者介護の実技指導を行う。</p> <p>3 児童福祉</p> <p>①子育て・保育のあり方についてその方法を学習する。</p> <p>②子育て・保育のあり方について、実践・演習を行う。</p> <p>※ 実習単位の履修申請にあたり、理論の単位を修得していることを確認し、申請年度内に必要時間数の実習が完了するように予定を立てる。</p> <p>※ 必要時間数15コマ(1コマ90分)のうち、集中講座で6コマを行い、ボランティア先で9コマの実習を行う。</p> <p>※ 実習先は、地域交流センターで募集している活動の中から選択することを基本にする。</p>		
教科書	資料を配付する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	集中講座への出席と課題提出物および社会奉仕体験活動報告書を総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	「障害者福祉」の実習あたり、地域にある障害者スポーツセンターに会場提供と、講師として職員の派遣を依頼している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東京農業大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	
開設学部(学科)及び年次	農学部	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計360名(男子学生216名 女子学生144名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容			
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	特別活動(ボランティア活動)(一)～(四)		
担当教員(学内又は学外)		授業期間	通年
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	未定	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	45時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容			
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東京理科大学

授業科目名		現代社会事情1	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人間科学分野	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	理学部第一部 (数学科1～4年次、数理情報数学科1～4年次、物理学科1～4年次、応用物理学科1～4年次、化学科1～4年次、応用化学科1～4年次)	授業のレベル	その他 (教養科目のため、特に授業のレベルは設けていない)
平成20年度履修者数	計63名(男子学生51名 女子学生12名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	骨髄バンク運動は1987年に白血病等の血液難病の患者を救うための民間の運動として始まり、1991年以後国の予算が下りる公的事業へと発展したものであるが、その後も民間のボランティアの力を借りねば動かない部分が多く、社会事業における公的機関と民間ボランティアとの役割分担について、多くの問題を投げかけるものとなっている。一方、性同一性障害者運動は、心の性と身体の性が一致しない精神的疾患を抱えた人々に対して、公認された正統医療が治療に関与し、戸籍等においても人権擁護の観点から制度改革がなされるようにと求めた運動であるが、1998年によりやく正統医療の関与が実現し、2004年によりやく戸籍の性別変更の第一例が実現したという、きわめて新しい運動であり、未解決の課題を多く抱えている。明日の社会人として種々の社会問題に直面しなければならなくなる学生の皆さんに、これらの現代的諸問題への理解を深めてもらうのが授業の目標である。		
授業内容	1 二つの運動の概説: 骨髄バンク運動と性同一性障害者運動の要点をビデオによって紹介 2 いのちのボランティアの種々相: ドナー登録推進だけが目標ではない骨髄バンク啓発活動の多様なあり方 3 造血幹細胞移植の医学: 血液難病の治療法の選択肢の中で骨髄移植が占める位置 4 公的骨髄バンクの設立まで: 1980年代に民間での運動が始まってから1991年の骨髄移植推進財団の設立に至る経緯 5 事業の役割分担と問題点: 骨髄移植推進財団と日本赤十字社等の複数の組織が関与して行われている骨髄バンク事業の独特の構図と、それがはらむ問題点を考察し、ネットワーク型事業の難しさについて考える 6 対面問題の光と影: 「知る権利」論による個人情報開示要求をどう評価するか 7 性同一性障害の基礎知識(1): ヒトの胎児の発生と性分化についての医学的知見 8 性同一性障害の基礎知識(2): 「性自認」と「性的指向」の区別、および類似する性的諸現象と性同一性障害との識別基準 9 性同一性障害の基礎知識(3): 「性自認」といわゆる「男脳度、女脳度」との違い、および文化人類学的観点からみた性同一性障害 10 わが国における医療面と法制面での対応: 「ブルーボーイ事件」のために諸外国に比べて著しく対応が遅れていたわが国において、1990年代後半によりやく医学界の真面目な取り組みが開始され、2003年に戸籍の性別変更を可能とする「性同一性障害者の性別の取り扱いの特例に関する法律(GID特例法)」が制定されるまでの経緯 11 GID特例法以後の残された諸問題: 改正が望まれているGID特例法そのものの不備と、立法では解決できないその他の諸問題 12 「ジェンダー・フリー」運動と性同一性障害者運動との微妙な関係: 性別による人の色分けよりも個々人の個性に重きを置いた社会をめざす「ジェンダー・フリー」運動の中には、とすると男女の心の性差を「社会的な刷り込み」の結果としてのみ理解しようとする傾向がみられるが、そのタイプの運動と性同一性障害者の人権運動とのあいだには、共鳴する要素と対立する要素があるという話 13 まとめ 14 予備日 15 期末試験		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート50点、期末試験50点。片方だけでは合格点にはならないので注意。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		総合演習	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教養	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	理工学部 全学科対象 3年次 基礎工学部と同時開講授業	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計169名(男子学生137名 女子学生32名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	今期の学習指導要領の改訂において、新しく「総合的な学習の時間」が、小・中・高等学校に新しく導入されることとなった。その内容は、国際理解・情報・環境・福祉・健康などの横断的・総合的な課題、生徒の興味・関心に基づく課題、地球や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うとされている。総合演習では、こうした時間を担えることを目標として、いくつかの課題について演習をおこなうことを通して、教師としての実践力を養ってほしいと考えている。		
授業内容	1. ガイダンス 2. 総合演習の課題と演習内容について 3. 各課題の演習活動 各課題ごとに、演習形式で行う。		
教科書	各課題・演習の担当者からガイダンスの時に示される。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	必ず2つ以上の課題・演習を選択し、各課題・演習の評価を総合して行う。		
授業のサポート体制	学外教員と施設・生徒の情報交換		
学外の関係機関・団体との連携	養護学校に東京理科大学学生をボランティアとして派遣し、養護学校の生徒を文化祭に招待する。		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	総合演習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教養	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	基礎工学部(全学科・全学年) 理工学部と同時開講授業	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計22名(男子学生12名 女子学生10名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	今期の学習指導要領の改訂において、新しく「総合的な学習の時間」が、小・中・高等学校に新しく導入されることとなった。その内容は、国際理解・情報・環境・福祉・健康などの横断的・総合的な課題、生徒の興味・関心に基づく課題、地球や学校の特色に応じた課題などについて、学校の実態に応じた学習活動を行うとされている。総合演習では、こうした時間を担えることを目標として、いくつかの課題について演習をおこなうことを通して、教師としての実践力を養ってほしいと考えている。		
授業内容	1. ガイダンス 2. 総合演習の課題と演習内容について 3. 各課題の演習活動 各課題ごとに、演習形式で行う。		
教科書	各課題・演習の担当者からガイダンスの時に示される。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	必ず2つ以上の課題・演習を選択し、各課題・演習の評価を総合して行う。		
授業のサポート体制	学外教員と施設・生徒の情報交換		
学外の関係機関・団体との連携	養護学校に理大生をボランティアとして派遣し、養護学校の生徒を理大祭に招待する。		
今後の授業の継続	未定		

○ 二松學舎大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1、2年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	阪神大震災(1995年)やスマトラ島沖地震・ハリケーン被害など、天災害に際しての国際的ボランティア活動が目ざされているが、ボランティア活動の領域は広くその意義についても多くの見解がある。ボランティア活動は、単なる人助けに終らず、新たな人と人との関係を創造したり、コミュニティを活性化させる可能性をもっている。多様なボランティア活動を考察することは、現代の社会の閉塞観を打破し、自分探しや生きがいの発見にも示唆を与えるであろう。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 今、なぜ「ボランティア論」か ボランティア抬頭とその社会的背景。授業ガイダンス 社会変化と私たちの生活の実相 暮らしの視点から家族・地域・社会の変容の実態を検証 ボランティア活動の領域と実際 教育・福祉・医療・環境など領域別に見る多様なボランティア活動 ボランティア活動の歴史 日本におけるボランティア活動の変遷 ボランティア論の構造 ボランティア活動の多機能性の構造を分析 ネットワークとその特質① ネットワークとは何か、アメリカの社会貢献活動を参照 ネットワークとその特質② ネットワークの特徴とボランティア活動 自己形成とボランティア 新たな関係性の創造、自分探し、生きがいの発見 市民社会の形成とボランティア活動 市民運動の新しい形態をボランティア活動のなかに見る コミュニティ再生とボランティア活動 現代社会におけるコミュニティ創造の意義 ボランティア・リーダー論 ボランティア活動におけるコーディネーターとその役割 ボランティア活動と福祉社会の創造 福祉社会の特質と歴史的な位置付け及びボランティア活動の役割 NPOの現状と未来への可能性 日本におけるNPO・NGOの内容と活動の展望を探る ボランティア活動の国際比較 欧米のボランティア活動の特徴と実際 ボランティア活動の展望 ボランティア活動のさらなる発展の要件を探る 		
教科書	興沼 寛『希望へのカー地球市民社会の「ボランティア学」』		
授業の工夫点			
授業の評価方法	テスト、ボランティア体験のレポート提出及び授業出席		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 日本大学(国際関係学部)

授業科目名	NGO/NPO論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際地域開発学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	国際関係学部 3年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計86名(男子学生49名 女子学生37名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	NGO・NPOについての形成理念から実際の現場での活動を通じ、国際協力・国際交流を舞台として活動する中で求められる国際理解力の基礎を学習していきたい。		
授業内容	第1回ボランティア概論(1) 第2回ボランティア概論(2) 第3回政府開発援助の仕組みと課題 第4回国際協力から異文化理解への展開 第5回NPO概説 第6回NPO活動の実例から学ぶ(1) 第7回NPO活動の実例から学ぶ(2) 第8回NGO概説 第9回NGO活動の実例から学ぶ(1) 第10回NGO活動の実例から学ぶ(2) 第11回地域発展と国際交流におけるNPOの存在 第12回行政主導から住民参加型による地域づくり 第13回国際コミュニティ開発におけるNGOの役割 第14回組織マネジメントとリーダーシップ論 第15回NGO・NPOの現状と課題		
教科書	地球型社会への挑戦－国際交流と住民参加		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	出席状況、小論文、ワークショップ討議、授業態度、試験		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア援助技術		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際地域開発学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	国際関係学部 1年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計36名(男子学生13名 女子学生23名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際社会において国際貢献を考える学生にとって「技」とは何かを考え、行動することを学ぶ。		
授業内容	第1回国際ボランティア援助技術概説 第2回国際協力、国際交流におけるNGO/NPO活動 第3回日本における社会福祉の現状I 第4回伝えあってみようI－物の形や動きをとらえて身体表現－ 講義：聴覚障害の基礎知識1 第5回伝えあってみようII－簡単な意思表示を音声に頼らず表現－ 講義：聴覚障害の基礎知識2 第6回自己紹介をしようI－名前を紹介しよう指文字－ 講義：聴覚障害の基礎知識3 第7回自己紹介をしようII－家族を紹介しよう－ 講義：手話の基礎知識1 第8回自己紹介をしようIII－趣味について話しよう－ 講義：手話の基礎知識2 第9回自己紹介をしようIV－誕生日はいつですか数字－ 講義：手話の基礎知識3 第10回自己紹介をしようV－仕事について話しよう－ 講義：聴覚障害者の生活 第11回自己紹介をしようVI－あなたの家を紹介しよう－ 講義：ろう教育について 第12回まとめ1－これまでの学習を駆使して自己紹介をしよう－ 第13回まとめ2－自分でテーマを考え手話で表現する－ 学習の評価 第14回日本における社会福祉の現状II 第15回総括/評価		
教科書	新・手話教室 入門		
授業の工夫点	外部講師を招き手話の講義と実技を行う。		
授業の評価方法	授業態度、小試験、小論文、最終実技試験による総合評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	外部講師を招き講義と実技を行う。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 日本社会事業大学

授業科目名	地域福祉論Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	生涯学習論他	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計118名（男子学生47名 女子学生71名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	4時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	地域福祉推進上の重要な課題について、第一線で活躍している方によるチャーンレクチャーと理論的な問題提起を合わせ、現場がどのような課題を抱えているのかを具体的に理解するとともにその解決策を考える。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域福祉推進の課題と方法 2. ボランティア活動の推進① 3. ボランティア活動の推進② 4. 市民活動支援の方法① 5. 市民活動支援の方法② 6. コミュニティソーシャルワーク① 7. コミュニティソーシャルワーク② 8. コミュニティソーシャルワーク③ 9. コミュニティソーシャルワーク④ 10. 地区社会福祉協議会の組織化① 11. 地区社会福祉協議会の組織化② 12. 新しい寄付の文化の推進と共同募金① 13. 新しい寄付の文化の推進と共同募金② 14. まとめ 15. 試験 		
教科書	適宜プリント		
授業の工夫点	第一線で活躍している方によるチャーンレクチャーと理論的な問題提起を合わせ、現場がどのような課題を抱えているのかを具体的に理解するとともにその解決策を考える。		
授業の評価方法	小課題・定期試験		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	授業工夫点と同内容		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	福祉科指導法Ⅰ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育実習、福祉科指導法他	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計14名（男子学生6名 女子学生8名）	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	福祉教育の歴史と理念、高等学校に教科「福祉」が創設された背景と意義、高等学校および高校生の現状と課題、福祉科教員資質の養成・研修と教員採用、福祉科で学習すべき内容と指導法、福祉教育の現状と展望等について講義する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高校における福祉教育の位置と高校福祉科 2. 高校における福祉教育の位置と高校福祉科 3. 学ぶ高校生への理解 4. 福祉科生徒のキャリア展望と生涯学習 5. 高校福祉科の教育目標と教育内容 6. 高校福祉科の教育目標と教育内容 7. 社会福祉基礎の考え方、内容および展開 8. 社会福祉基礎の考え方、内容および展開 9. 社会福祉制度の考え方、内容および展開 10. 社会福祉援助技術の考え方、内容および展開 11. 基礎介護の考え方、内容および展開 12. 社会福祉演習・実習・情報処理の考え方、内容および展望 13. 福祉教育・ボランティア学習と「総合的な学習の時間」 14. 学校外の社会福祉資源とその活用・連携 15. 諸外国の福祉教育実践 		
教科書	『福祉科指導法入門』大橋謙策・田村真広・辻浩・原田正樹 編著		
授業の工夫点	学内外の講師も登壇していただき展開する。また必要に応じて、演習形式を取り入れる。「福祉」教員の資格のみならず、地域で福祉教育を担う指導者の資質を視野に入れて講義する。		
授業の評価方法	出席(15%)・定期試験(85%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	授業工夫点と同内容		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 日本女子大学

授業科目名	国際ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	
開設学部（学科）及び年次	2～4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計38名（女子学生38名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	世界の貧しい国の人々のために、自分は何ができるんだろうと悩んでいる人、環境、人口、食糧問題などグローバルイシューに関心がある人、ボランティアを始めてみたけれど、これでいいのかと迷っている人…世界的な視野で行動を起こそうと積極的な学生を対象とします。各界の国際ボランティア経験者、専門家をお呼びしての意見交換、受講生自身のボランティア経験を事例としての分析やグループディスカッションなどをおし、国際ボランティアへの認識を深め、求められる知識や態度を養うことが目的です。		
授業内容	<p>第一部 国際ボランティアについて考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何のための、誰のためのボランティアか ・国際ボランティアをとりまく状況 ・国際ボランティアに求められる態度、心構え、資金 ・途上国に行く／先進国に行く ・日本でできる国際ボランティア <p>第二部 国際ボランティアの実際</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアを求める機関（NGO、企業、国際機関、他） ・ボランティアの活躍する分野（環境、教育、保健、他） <p>第三部 キャリア形成と国際ボランティア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どのくらいの期間かかわるか：短期、中期、長期 ・ボランティア？アルバイト？インターン？ ・ボランティアに求められる専門性 ・あなたがしたいボランティアとは？ 		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	①毎回の講義後の感想レポート（50%）授業の理解度や考察力、参加態度などを評価する。②レポートA：ボランティア計画（10%）最終講義までに（おおそ冬休み前後を想定）、自らがやってみたいボランティア活動の計画を立てる。国内外を問わずボランティア活動の内容や方法、期間、活動場所等は自由。目的意識の明確さ、実施可能性などを評価する。③レポートB：ボランティア体験の考察（40%）レポートAに基づき、実際に行ったボランティア体験について考察する。目的の達成度、活動の有効性、自分の影響力などに関する考察力を評価する。提出は最終講義日。それぞれのレポートの詳細は、講義で指示します。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	NPOとNGO		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	2～4年次	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計40名（女子学生40名）	授業区分	講義、演習、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	現在、NPO、NGOは社会で重要な役割を果たしている。まずこの両者の概念から、なぜNPO、NGOが重要な役割を果たすことになったのか、歴史も踏まえて解説する。また、実際に活動している方々をお招きして、現場の話も聞きながら、学生の立場で何ができるかを、ワークショップや実習で考える。知識を得ることが目的ではなく、自分自身で考え、行動するきっかけをつかむことを目標としたい。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション：授業に期待していること、これまでの経験等を出し合う。その内容は、授業計画に反映する。 2. NPO、NGOの意味：ボランティアとNPO、NGOとの関係、組織についての説明 3. 歴史の中のNPO、NGO：現代社会でなぜNPO、NGOが生まれてきたのか、背景を議論する。 4. 社会の中での役割 5. 現場でのNPO、NGOの活動紹介：ゲストスピーカーを招いて、現場の話聞く 6. 活動に参加するには：参加する方法について 7. ワークショップ 		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業での発言、ワークショップでの発言内容、及びレポート提出により評価します。事前に一定のテーマを出して、レポートを提出してもらいますが、知識の量をはかるのではなく、自分がどう考えるのかを問うものです。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	学校教育ボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員, 学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	生涯学習論教育心理学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	1~4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計37名(女子学生37名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	提携校における「学校教育ボランティア活動」を通して、児童理解、生徒理解を深め、実践的指導力を培う。		
授業内容	<p>事前指導、提携校における「学校教育ボランティア活動」、事後指導からなる。</p> <p>【授業計画】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・履修事前指導①教育ボランティアの理念・目的・履修登録(4月中旬) ・事前指導②教育ボランティアの意義(4月中旬) ・事前指導③教育ボランティアのマナー(4月下旬) ・直前指導・配属先の揭示(4月下旬) ・学校教育ボランティア期間(5月~1月 月2回・年間60時間以上) ・事後指導・参加報告会(1月)【成績評価の方法】 <p>成績報告は、登録した学生の学校教育ボランティア実績(日数・時間)、ボランティア先からの報告、訪問指導、学生の報告書を資料として、授業担当者が行う。提携する教育機関において、月2回・年間60時間以上活動した場合、所定の書類審査のうえ、「学校教育ボランティア」を履修したものと、2単位を認定する。</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点	コーディネーターの配置と活用(大学(学生含む)と、小・中学校との連携・調整)		
授業の評価方法	・実践記録およびレポートへの取り組み ・実践校での評価		
授業のサポート体制	担当が複数(様々な専門分野)で授業を行う。担当(コーディネーター)が各小・中学校の巡回相談も行う。		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア実施地区の区役所、地区小・中学校長会		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 武蔵大学

授業科目名	NPOとNGOの社会学		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文・社会学部2・3・4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計71名(男子学生37名 女子学生34名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	民間非営利セクターの概念、歴史、現状を学び、海外の事例との比較も行い、我が国が今後向かうべき方向を一人ひとりが、主体的に考えることができるようになることを目指す。		
授業内容	<p>基礎を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・言葉の定義を理解する NPO・NGO・ボランティア ・日本の地縁組織を振り返る、ムラ、ユイ、スケ ・公益に関わる組織概念の整理 <p>現実を知る</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「なぜボランティアをするのか？」 ・日本の市民活動の歴史 ・特定非営利活動促進法を知る ・日本の市民活動の現状と課題 <p>課題解決を考える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・アメリカの民間非営利活動の歴史 ・アメリカの民間非営利活動を支える制度 ・行政とのコラボレーション ・民間非営利組織の経営 ・民間非営利組織の評価 <p>まとめ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自立した市民とは？ 		
教科書			
授業の工夫点	特になし		
授業の評価方法	レポート評価が中心		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 明治学院大学

授業科目名	D1841ボランティア学1(テーマ:人と出会う)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計99名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアは、市場や国家による人と人との結びつき方とは違い、かけがえのない「わたし(=自己)」とかけがえのない「あなた(=他者)」との関係をつなぐ。そんな認識に立った上で、本講義は「贈与の経済学」、「人間の政治学」という切り口から、ボランティアの入り口となる「出会い」について探求する。そして、自分の価値観・世界観を問い直し、生き方を考える。		
授業内容	<p>【第1回】「人間の政治」、「贈与の経済」としてのボランティア</p> <p>【第2回】ボランティアの起源、市場の起源、国家の起源</p> <p>【第3回】【ケーススタディ】見沼田んぼ福祉農園</p> <p>【第4回】【フィールドワーク】内容未定</p> <p>【第5回】贈与経済と交換経済1:「無償性」をめぐる、或いは市場以前の社会</p> <p>【第6回】贈与経済と交換経済2:「贈与」としてのボランティア、或いは「愛」と「社会的責任」をめぐる</p> <p>【第7回】私的な親密圏から公的な親密圏へ: 家族の変容、『サザエさん』、『団地ともお』、『ひかりのまち』</p> <p>【第8回】【ディスカッション】中間レポートをめぐる</p> <p>【第9回】【映像上映】破壊された日常性をめぐる</p> <p>【第10回】人間の政治1: 社会的排除 社会的少数者をめぐって</p> <p>【第11回】人間の政治2: 社会的排除から包摂へ</p> <p>【第12回】人間の政治3: 奉仕活動の義務化をめぐる</p> <p>【第13回】野生の思考としてのボランティア: 或いはヒトが生まれた場</p>		
教科書	特になし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	1、授業内ディスカッションでの発言とリアクションペーパー、2、自らの「家族」をめぐる中間レポート、3、期末テストの結果をもとに、総合的に評価する。レポート未提出者には、最終テストの受験資格を失う。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	D1841ボランティア学1(テーマ:国内ボランティア・NPO概論)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NGO・CSR等	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計305名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	21世紀は「市民社会」の時代といわれ、政府と市場の役割に限界が見える中、第3のセクター、つまり、ボランティアや非営利組織(NPO)などの活動に注目が集まっている。このボランティア学1では、個人が無償で行う伝統的なボランティアの意味や歴史から入り、それが組織化されたNPOについて、理論と実践の概略を学ぶ。そして、学生自身のこうした活動への参加意欲を醸成するとともに、個々の力を集めた市民社会の積極的な活動が旧来の日本と世界を変革していくものとして、その理解を深める。		
授業内容	<p>【第1回】ボランティアへの招待</p> <p>【第2回】ボランティアの理念</p> <p>【第3回】ボランティアの実態</p> <p>【第4回】非営利民間活動、非営利組織(NPO)の歴史</p> <p>【第5回】NPOの理論と現状</p> <p>【第6回】欧米のNPO</p> <p>【第7回】地域通貨</p> <p>【第8回】ソーシャル・キャピタル</p> <p>【第9回】NPOと行政</p> <p>【第10回】NPOと企業CSR</p> <p>【第11回】社会起業家</p> <p>【第12回】国際協力のNPO</p>		
教科書	毎回の授業でレジュメを配布する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業で書いてもらう感想文と期末の定期試験を中心に理解度を判定する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	D1842ボランティア学2(テーマ:地域と出会う)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計71名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域は、人の暮らしと仕事によって構成される。本講義は、地域をめぐる様々な視点を学びながら、そこに生きる人々の暮らしと仕事が織り成す情景を実体的に捉え、彼ら／彼女らの抱える問題を共感するための方法を学ぶ。その上で、ボランティアという営みの可能性を考える。		
授業内容	【第1回】ガイダンス／「地域」を探る視座 【第2回】講義／中心と周縁理論:ボランティアを探る視座 【第3回】講義／均質化する地域、過防備化する地域:或いは木更津キャッツアイの抵抗 【第4回】講義／路上からの抵抗1:Big Issue Japan 【第5回】講義／路上からの抵抗2:北の屋台 【第6回】フィールドワーク 【第7回】ディスカッション／それぞれの故郷をめぐって 【第8回】学生発表／ディスカッションを踏まえて 【第9回】ゲスト講演／百姓として地域に生きる 【第10回】講義／ボランティアとカミ:無名戦士の墓と、兄の思い出 【第11回】講義／死者との交わる方法:郡上踊り 【第12回】講義／カミの生まれる瞬間:市島・南部領辻の日常から 【第13回】講義／ボランティアとは何か?新たな中心—周縁理論に向けて		
教科書	特になし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業内ディスカッションでの発言とリアクションペーパーの内容(30%)、自らの「出会い」をもとにする6000~8000字程度の中間レポート(40%)、期末テスト(30%)による評価。期日内に中間レポートを提出しない場合は、期末テストの受験資格を失う。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	D1842ボランティア学2(テーマ:国際ボランティア・NPO概論)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NGO・CSR等	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計319名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	「ボランティア学1」が国内のボランティアと非営利組織(NPO)についての概論なのに対し、本講座「ボランティア学2」は国際的に活躍する、いわゆる非政府組織(NGO)の概論を内容としている。グローバル化する世界では国境の壁がどんどん低くなっており、経済的な相互依存が強まっているが、半面、グローバル化の負の側面も顕在化している。NGOが環境、労働、人権など地球規模問題の解決のため、国連や各国政府、企業と協力しながら活動していることを理解する。		
授業内容	【第1回】NGOと国連 【第2回】日本のNGOの歴史 【第3回】世界のNGO 【第4回】先進国(欧米)のNGO 【第5回】アジアなど途上国のNGO 【第6回】国境を超える市民社会(TCS) 【第7回】日本のNGOの分析 【第8回】緊急人道支援 【第9回】NGOと政府開発援助(ODA) 【第10回】人間の安全保障 【第11回】ミレニアム開発目標(MDGs) 【第12回】ジャパン・プラットフォーム—NGOと政府、経済界の協力		
教科書	授業毎回のでレジュメを配布する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業で書いてもらう感想文と期末の定期試験を中心に理解度を判定する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	D1843ボランティア学3(テーマ:市民社会とボランティア)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計30名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	この授業はボランティア・市民活動の現場に関わる実践者のリレー講義によって構成される。日本のボランティア・市民活動の歴史を踏まえながら、社会が抱える諸問題に立ち向かうボランティアやNPO・NGOの活動、CSR(企業の社会的責任)、社会的企業の実態について学び、他者との共生のための「社会的責任」は如何なるものなのか探求する。		
授業内容	<p>【第1回】ガイダンス(猪瀬浩平)</p> <p>【第2回】日本社会におけるボランティア・市民社会活動の展開1(楨ひさ恵)</p> <p>【第3回】暮らしの自給としてのボランティア(小松光一)</p> <p>【第4回】企業とCSR1(森信之)</p> <p>【第5回】企業とCSR2 GEの事例(大塚英之)</p> <p>【第6回】企業とCSR3 マイクロソフトの事例(竹原正篤)</p> <p>【第7回】人と人をつなげるボランティアコーディネーター(柴崎由美子)</p> <p>【第8回】NPOの実践事例1 たんぼぼの家 アートの社会化、社会のアート化(柴崎由美子)</p> <p>【第9回】NPOの実践事例2 見沼たんぼ福祉農園 共生の農業の開拓(猪瀬良一)</p> <p>【第10回】社会的企業+社会起業家(谷口奈保子)</p> <p>【第11回】ボランティア・市民活動への一つの入り口:NPOインターン(宮奈由貴子)</p> <p>【第12回】日本社会におけるボランティア・市民社会活動の展開2(楨ひさ恵)</p> <p>【第13回】まとめ(猪瀬浩平)</p>		
教科書	特になし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	「授業への参加姿勢」、「講義の要約レポート(1200字程度)×3回」、「期末テストOR期末レポート」を総合して評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	D1843ボランティア学3(テーマ:社会企業家とCSR)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計37名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年注目を集める企業のCSR(Cooperate Social Responsibility)や、志と経営の統合を図る社的起業家の取り組みについて学び、これからの企業が行うべき「社会的責任」に対して理解を深めるとともに、企業を含めた市民社会全体が他者との共生のために果たす「社会的責任」は如何なるものなのか探求する。		
授業内容	<p>【第1回】ガイダンスボランティア・エコノミーについて</p> <p>【第2回】CSRとは?</p> <p>【第3回】CSRの実践事例1</p> <p>【第4回】CSRの実践事例2</p> <p>【第5回】CSRの実践事例3</p> <p>【第6回】CSRの実践事例4</p> <p>【第7回】ディスカッション(4社の実践を踏まえて)</p> <p>【第8回】社会起業家・社会的企業とは?</p> <p>【第9回】社会起業家(福祉)の実践1</p> <p>【第10回】社会起業家(保育)の実践2</p> <p>【第11回】社会起業家(環境・農)の実践3</p> <p>【第12回】社会起業家(地域再生)の実践4</p> <p>【第13回】ディスカッション(4人の実践を踏まえて)</p>		
教科書	特になし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	「授業への参加姿勢(講師への質問&リアクションペーパー&ディスカッション時の発言)」、「小レポート×3」、「期末レポートORテスト」を総合して評価。特に講師への質問やディスカッション時の発言については、高く評価する。関連URL		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	D1844ボランティア学4(テーマ:日本手話入門)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	手話	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計61名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	手話の基礎を学びながら、聴覚障がい者に対する理解を深める。		
授業内容	第1回 挨拶の表現 第2回 伝えあってみよう・指文字 第3回 名前の表現・指文字 第4回 家族「何人?」「誰?」・指文字 第5回 趣味 第6回 数詞「いくつ?」「いくら?」「いつ?」 第7回 今までの表現の復習 第8回 職業 第9回 住所「どこ?」・都道府県名 第10回 一日の事・時間「何時?」 第11回 一ヶ月の事・曜日・時制 第12回 一年の事・色 第13回 自己紹介・手話の読み取り練習 第14回 自己紹介・手話の読み取り練習 第15回 期末試験		
教科書	指文字表や都道府県名表など、プリントを配布する。講義は、板書しながら進める。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への参加度、日常の学習態度、試験成績により総合的に評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	D1845ボランティア学5(テーマ:日本手話初級・中級)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	手話	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計33名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	手話の語彙を増やし、手話技術の向上を図ると共に、聴覚障がい者に対する理解をさらに深める。		
授業内容	【第1回】 イメージトレーニング・具体的表現1 【第2回】 具体的表現2 【第3回】 置き換えの表現 【第4回】 表情・強弱・速度 【第5回】 復習 【第6回】 視線の使い方 【第7回】 主語の明確化1 【第8回】 主語の明確化2 【第9回】 復習 【第10回】 旅行のことを話そう 【第11回】 明日の予定は? 【第12回】 お元気ですか? 【第13回】 聞こえない方と話そう 【第14回】 復習 【第15回】 期末テスト		
教科書	指文字表と都道府県名表を持っていない者には配布。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への参加度、日常の学習態度、試験成績により総合的に評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	E1941ボランティア特別研究101		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NGO・CSR等	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計34名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	2年春学期のボランティア実習準備「特別研究102」および夏休みの国内での「ボランティア実習101」に向けて理論学習を行うのが、本講座「ボランティア特別研究101」である。夏休みのボランティア実習が円滑、かつ、効果的に行われるよう、NPOの運営のしかた、いわゆるNPO経営に冠する実践的基礎を学習する。		
授業内容	【第1回】社会的課題とNPO 【第2回】NPOマネジメント—ミッション、中期計画 【第3回】資金調達(ファンドレイジング) 【第4回】NPOと事業開発—社会起業家 【第5回】NPOと人材開発 【第6回】企業との協力 【第7回】行政との協力 【第8回】環境NPOのマネジメント 【第9回】福祉NPOのマネジメント 【第10回】国際協力NGOのマネジメント 【第11回】フィールドワークで現場へ 【第12回】フィールドワークで現場へ 【第13回】		
教科書	授業で毎回レジュメを配る。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業でのプレゼン、感想文、期末のレポートなどで総合的に評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	E1941ボランティア特別研究101		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NGO・CSR等	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計31名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	2009年の夏休みに国内で行う「ボランティア実習101」の事前研修・学習として開講する。「ボランティア」を「稼ぎではない仕事」として捉えた上で、今日ゆらいでいる「働くこと」の意味を問い直し、暮らしと「情景」のあり様を探り、「ボランティア」の持つ可能性と限界について理解を深める。		
授業内容	【第1回】【講義】イントロダクション(この講義の狙い、予定など) 【第2回】【ワークショップ】受講者の「自分語り」 【第3回】【講義+ディスカッション】ボランティア=稼ぎではない仕事/贈与をめぐって 【第4回】【フィールドワーク】戸塚を歩く 【第5回】【ディスカッション】戸塚の情景、戸塚の仕事 【第6回】【ゲスト講演】「共生の農業」とボランティア 【第7回】【フィールドワーク】農業を通じた環境保全ボランティア 【第8回】【ディスカッション】フィールド経験の共有化 【第9回】【ゲスト講演】2008年ボランティア実習101報告 【第10回】【講義+ディスカッション】ボランティアと公共性 【第11回】【映像上映】「みなまた日記」 【第12回】【講義+ディスカッション】ボランティアと知 【第13回】【講義】講義の振り返りと、レポートについての説明		
教科書	なし		
授業の工夫点	仕事としてのボランティアの様々な側面を探る講義やワークショップ、ゲスト講演、実習によって、さまざまな情景のもとで仕事を営む人物と出会い、私たちがその情景に働きかけるための作法や方法論を模索する。		
授業の評価方法	授業内の発言+宿題(50%)、最終レポート(50%)による評価。3回以上の欠席は不可とする。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	フィールドワーク		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	E1943ボランティア特別研究201		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	牧師	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計75名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際的なボランティア活動を成功させるため価値観の異なる異文化世界をワークショップ等を通して実感することを目指す。本講座の履修は2009年夏に実施する海外ボランティア・ワークキャンプ参加(09年ボランティア実習201)履修の条件となるが、本講座のみ単独受講も可。		
授業内容	【第1回】オリエンテーション 【第2回～第7回】国際ボランティア概論講義(2回)、国際経済シミュレーションゲーム(4回) 【第8回】演習:海外に紹介する日本伝統文化(江戸ごま、長唄、茶の湯等) 【第9回、第10回】演習:国際間の緊張発生に関する問題点の整理 【第11回、第12回】演習:文化価値と文化を超えた共通性に関する討論等 【第13回】まとめ		
教科書	随時配布		
授業の工夫点	国際経済シミュレーション・ゲームなどを通して世界情勢と国際間の問題解決法を学ぶ。外国人との交流、折衝のため、日本古来の伝統文化を学ぶワークショップもあわせて実施する。		
授業の評価方法	ボランティアに関連する科目であることから、授業への積極的な参加やグループ運営等をボーナス点として加点する場合がある。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	E2931ボランティア実習101		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計8名	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	10日間
必修・選択の別	選択		
授業目的	日本国内の多様な現場に触れながら、「ボランティア」を取り巻く問題群やその可能性について、頭で理解するだけでなく、身体的にも感じとり、それを共有可能な「作品」とすることを目指す。作品の形式は、映像・写真、アート、音楽、演劇、漫画、テキストの何れでも可(もしくはこれらの複合でも良い)		
授業内容	【第1回】事前ミーティング 【第2回】環境福祉ボランティア1(見沼田んぼ福祉農園) 【第3回】環境福祉ボランティア2(見沼田んぼ福祉農園) 【第4回】環境福祉ボランティア3(見沼田んぼ福祉農園) 【第5回】地域再生・ホームレス支援(横浜寿町) 【第6回】農業を通じた「新しい親密圏」をめぐる営み1(静岡市興津山梨みかんトラストファーム) 【第7回】農業を通じた「新しい親密圏」をめぐる営み2(静岡市興津山梨みかんトラストファーム) 【第8回】マツリとカミ、記憶をめぐる営み1(郡上八幡) 【第9回】マツリとカミ、記憶をめぐる営み2(郡上八幡) 【第10回】マツリとカミ、記憶をめぐる営み3(郡上八幡) 【第11回】アートを通じた地域再生(大阪釜ヶ崎) 【第12回】実習記録の取りまとめ 【第13回】実習反省会		
教科書	森羅万象		
授業の工夫点	ボランティア特別研究101、102を踏まえ、8月の10日間を利用して国内の複数のボランティア・市民活動の現場での実習を行う。様々なヒトやモノとの出会いと対話の中で、その現場の持つ可能性や、その抱えるしんどさを見出しながら、それを異なる現場に如何につなげるのか、安易な一般化を注意深くさけながら探求する。あわせて、どの現場にいても必要とされる身体知(焚き火・飯炊き・聞き書き等)の習得を行う。		
授業の評価方法	毎日提出する実習記録と、終了後につくる「作品」をもとに総合的に評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	実習		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	E2931ボランティア実習101		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	NGO・CSR等	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計5名	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2週間
必修・選択の別	選択		
授業目的	「ボランティア特別研究101」でNPO経営の基礎を学び、「ボランティア特別研究102」履修で事前の準備を積んだ学生を対象にした、夏休みの国内での現場実習がこの「ボランティア実習101」である。これまで授業で学んだ理論、手法を、実際の活動体験を通してさらに深めることを学修目標とする。		
授業内容	以下の中から1団体を選び、現地でボランティア実習を行い、レポートを提出する。 <ul style="list-style-type: none"> ・森の生活(北海道、環境、森林保護活動) ・エリアマネジメント(東京・神田、街づくり、全国の商店街の活性化) ・カタリバ(東京・中野、キャリア教育、高校生を対象にした「語りの場」で生き方アドバイス) ・フォレスト・プラクティス(東京・本郷、福祉、盲ろう者の雇用確保のためオフィス・マッサージ「手がたり」運営) ・ぱれっと(東京恵比寿、福祉、お菓子製造、カレーレストラン経営を通し知的障害者の自立支援) ・さなぎ達(横浜・寿町、福祉、ホームレス支援、生活保護の高齢者支援) ・難民支援協会(東京・四谷、母国の迫害から逃れ日本で難民申請するイラク人、ミャンマー人など支援) ・スローウォーター・カフェ(東京・墨田、国際協力、エクアドルの森林を守るためコーヒーなどのフェアトレードで現地を支援) ・ピースウインズ・ジャパン(東京・笹塚、国際協力、イラク等難民、自然災害被災者を支援する国際NGO) ・ジャパン・プラットフォーム(東京・大手町、国際協力、政府経済界、NGOで組織する緊急援助システム) 		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	NPOでの2週間の現場実習のあと、提出するレポートで評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	実習		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	E2932ボランティア実習201		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	牧師	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計7名	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	10日程度
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア特別研究202で準備したプログラムに基づき、台湾南部での生徒教育ボランティア・ワークキャンプを実施。当該講義受講者はワークキャンプ体験をレポートとしてまとめるためにH2022リサーチ&プレゼンテーション2Bを受講することができる(選択)。		
授業内容	中崙教会(Taiwan Chung Lun Church: 台北市敦化南路1-80-36)の大学生ワークキャンプグループと合流し、8月下旬3日間程度台北にて準備。その後1週間程度台南貧困地域にて小学生に勉強、スポーツなどを教える奉仕活動を通して文化交流をはかる。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	法令遵守、自己安全管理を含むワーク地実務で評価		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	実習		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	E2942ボランティア特別研究102		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計8名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	学生、教員、現場の実践者との多様なコミュニケーションを通して、ボランティア実習を意味のあるものに創りあげていくとともに、ボランティア・市民活動が対峙する社会的課題や、それが生み出す社会的変化について理解を深める。ボランティア特別研究101で見出した「継続性」や「市民知」、「市民的公共性」について具体的な実践の中で問い直すとともに、新たな問題群を見出したい。		
授業内容	【第1回】ガイダンス 【第2回】ワークショップ(写真を撮る) 【第3回】ワークショップ(写真を観る) 【第4回】講義1(ケーススタディ 見沼田んぼ福祉農園) 【第5回】講義2(ケーススタディ 郡上八幡) 【第6回】講義3(ケーススタディ ココローム) 【第7回】グループワーク1(問題意識の誠意) 【第8回】グループワーク2(実習先の事前学習) 【第9回】グループワーク3(実習準備 企画・渉外) 【第10回】グループワーク4(実習準備 企画・渉外 報告) 【第11回】全体現場実習(郡上踊り) 【第12回】全体現場実習(火越し・飯炊き・除草) 【第13回】全体ミーティング		
教科書	適宜指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業の参加姿勢、及び最終レポートを総合的に評価する。なお毎回の授業の感想、レポートは、授業用メーリングに配信し、全体で共有するものとする。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	E2942ボランティア特別研究102		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	NGO・CSR等	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計6名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	秋学期に行われた「ボランティア特別研究101」の単位を取得済みの学生を対象とした講座である。NPO経営について、具体的な団体を取り上げて、分析を行い、よりよいNPOの運営のあり方を研究する。夏休みには「ボランティア実習101」を実施、実際に現場のNPOに入って実習を行うが、この準備の意味も持つ。		
授業内容	研究対象となる団体は以下のようなもので、順次、授業でとりあげる(順不同)。 ・森の生活(北海道、環境、森林保護活動) ・エリアマネジメント(東京・神田、街づくり、全国の商店街の活性化) ・カタリバ(東京・中野、キャリア教育、高校生を対象にした「語りの場」で生き方アドバイス) ・フォレスト・プラクティス(東京・本郷、福祉、盲ろう者の雇用確保のためオフィス・マッサージ「手がたり」運営) ・ぱれっと(東京恵比寿、福祉、お菓子製造、カレーレストラン経営を通じた知的障害者の自立支援) ・さなぎ達(横浜・寿町、福祉、ホームレス支援、生活保護の高齢者支援) ・難民支援協会(東京・四谷、母国の迫害から逃れ日本で難民申請するイラク人、ミャンマー人など支援) ・スローウォーター・カフェ(東京・墨田、国際協力、エクアドルの森林を守るためコーヒーなどのフェアトレードで現地を支援) ・ピースウインズ・ジャパン(東京・笹塚、国際協力、イラク等難民、自然災害被災者を支援する国際NGO) ・ジャパン・プラットフォーム(東京・大手町、国際協力、政府経済界、NGOで組織する緊急援助システム)		
教科書	なし		
授業の工夫点	ボランティア特別研究101を踏まえ、夏休みに行うボランティア実習のための事前学習のために開講する。授業は、1. 教員による講義(訪問先団体の活動とその背景、および記録方法について講義)、2. ワークショップ(デジタルカメラを使用)、3. グループワーク(ガイダンス時のグループ分けによりながら、実習の際に探求する問題意識の探求+渉外・交通等の準備)、4. 全体現場実習(訪問先からのゲスト講師を招いた郡上踊り講習+火越し・飯炊き・除草作業講習)、5. 全体ミーティングによって構成される。		
授業の評価方法	授業におけるプレゼンテーションと感想文、期末のレポートなどで総合的に判断する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	E2944ボランティア特別研究202		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	牧師	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(英文学科・フランス文学科・芸術学科)、経済学部(経済学科・経営学科・国際経営学科)、社会学部(社会学科・社会福祉学科)、法学部(法律学科・消費情報環境法学科・政治学科)、国際学部(国際学科)、心理学部(心理学科)各2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計7名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア実習201にて実施する台湾でのボランティア・ワークキャンプの準備。		
授業内容	【第1回合宿】台湾語初歩、台湾史、プログラム調整 【第2回合宿】台湾語初歩、プログラム調整 【第3回合宿】ワークプログラム準備 【第4回合宿】ワークプログラム準備		
教科書			
授業の工夫点	学校関連施設での1泊2日の合宿を4回行い、その中で実施先の国情、文化、民族性などを学ぶ他、現地とのメール等により現地ワークプログラムを調整する。		
授業の評価方法			
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	公共と市民		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行政学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	社会学部(社会福祉学科)3年次 法学部(政治学科)3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計19名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	政府や企業といった従来の組織原理によらずに、「公共の利益」の実現のために行動する「市民」やそのグループの存在意義は、今日ますます高くなっている。こうしたNGOやNPOといった非営利で非政府の機関や、ボランティアなどの実際の活動を検証しながら、公共性とは何か、社会における市民の果たすべき役割とは何か、を考える。		
授業内容	【第1回】オリエンテーション 【第2回】公共性とは何か 【第3回】官民二元論からパートナーシップへ 【第4回】新しい「公共」の政治学 【第5回】市民と市民社会 【第6回】市民意識と政治参加 【第7回】公益法人の法制度 【第8回】公益法人の公益性の課題 【第9回】NGOとNPOの役割 【第10回】行政と市民団体の協働 【第11回】ボランティアとボランタリズム 【第12回】事例研究 【第13回】「権力と参加」の政治学		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席60点、期末レポート40点。第1回講義の際に詳細を説明。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	その他(今後も維持)		

授業科目名	NPO論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPO論、社会起業家論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	社会学部(社会学科・社会福祉学科)3年次 法学部(政治学科)3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計69名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPO(非営利組織)は、政府、企業に次ぐ第三のセクターとして注目されています。行政、企業、市民とNPOとの関係に着目し、NPOの社会的役割を明らかにすることを目的とします。特に、近年、社会問題の解決に取り組む市民が顕在化しています。NPOに携わる人々やリーダーの人間性に学ぶところは少なくありません。NPO論を通じて各自が緊要な社会の問題に目を向け、市民社会に対する意識を高めることを期待します。		
授業内容	【第1回】序論(NPOとは何を学ぶ学問か) 【第2回】NPOの概念・定義 【第3回】NPOの法制度 【第4回】NPOの法制度改革・公益法人改革 【第5回】NPOと統計 【第6回】NPOの財務 【第7回】NPOのインパクトと課題 【第8回】NPOのマネジメント－NPOの資金源 【第9回】NPOの支援－寄付税制 【第10回】NPOの支援－自治体のNPO政策 【第11回】NPOのマネジメント－NPOとビジネス 【第12回】NPOと企業のCSR 【第13回】支援から協働へ 【第14回】総括 【第15回】定期試験(試験日未定)		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	基本的に、レポート(事例研究)及び、講義中のリアクションペーパー等授業への貢献45%、定期試験55%で評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	その他(今後も維持)		

授業科目名	社会参加実習2		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	都市・地域分析、都市・地域計画	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部(経済学科)2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計9名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	都市づくり、街づくりという行為は、そこで生活する人達が協働して取り組むべきことであるにも関わらず、実態は多くの人が無力感を覚えるか、関心を失ってしまっている状況にある。本講義では、そのような状況を打破し、より積極的に都市づくり、街づくりという社会参画ができる資質を育成することを目的としている。		
授業内容	本講義では、履修者は実際の町を対象として、実践的なまちづくりに参画することとなる。昨年度は、江東区のコミュニティが主催するお祭りへの参画、江東区の環境NPOが主催する子供を対象にした街歩きの企画、運営等を行った。今年も、そのような実践的なコミュニティ活動に参画し、その活動を通じてコミュニティ、まちづくり、事業企画・運営の難しさ、コツなどを理解できるようにする。		
教科書	「まちづくり道場へようこそ」(片寄俊秀、学芸出版社)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	講義の参加姿勢		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	その他(今後も維持)		

○ 立教大学

授業科目名	ボランティアアクティビティー		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	青少年問題	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学共通カリキュラム（全学部・全学年対象）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計78名（男子学生22名 女子学生56名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアを行うことの意味を、新たな社会創造のための必要条件ととらえ、その実践の可能性について現場からの提案を聞きながら共に考える。		
授業内容	ボランティア精神こそすべての社会制度の心であり、社会制度はボランティア精神の身体である。すべての行いは「心」なしには生ずることがなく、思いは「身体」によって実行され初めて形を成す。本授業では、ボランティアをそのようにダイナミックな形で社会に関与するもの、さらに言えば社会を「創造する」ものとして捉える。高齢者・障害者・環境・国際協力など、さまざまな現場でボランティアな活動を通して生きている人々、「障害」をもつ当事者など生の声を聞き、多様な実践について学びながら、共に幸福な社会とは何か、またそれを実現するために何ができるかについて考えたい。授業を通して、受講生一人ひとりが日常生活の中で実践可能なボランティアな活動へと導かれるよう多様な切り口、情報へのアクセスなどを紹介する。		
教科書	なし		
授業の工夫点	毎回現場のゲストスピーカーを招き、中間ではそれらの発題をうけて、授業コーディネーターの討論でより内容を深化させる。		
授業の評価方法	学期末レポート50パーセント、出席および毎回のリアクションペーパーの内容50パーセントの割合で勘案する。		
授業のサポート体制	TAが授業補助としてリアクションペーパーの分類などをし、また視覚障害の教員が1名担当しているため、ペーパー、レポートの朗読を実施。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 立正大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部（社会福祉学科・人間福祉学科1・2・3・4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計165名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	現在ボランティア活動を実践している学生も少なくないであろうし、機会があれば活動に取り組みたいと関心を持っている学生も多いのではないだろうか。また、社会福祉、学校教育、保育などの分野を志す学生にとって、ボランティア活動を実施することは自己の人生経験を深めるためにも、社会活動としても意義深い活動である。本講ではボランティアの定義や理念、現状や課題など幅広く取り上げるとともに、ボランティア教育、企業ボランティア、地域福祉活動を支えるボランティアなど、具体的実践事例や調査結果などを紹介していくことにより、ボランティアへの理解を深めさらに実践への架け橋としたい。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 2. ボランティアの思想と歴史 3. ボランティアの理念と定義 4. 国内のボランティア活動の概要 5. 海外のボランティア活動の概要 6. ボランティア活動の実際 ボランティア教育(福祉教育との関連) 7. ボランティア活動の実際 企業ボランティア(社会貢献活動との関連) 8. ボランティア活動の実際 地域福祉活動を支えるボランティア(高齢者福祉との関連) 9. ボランティア活動の実際 地域福祉活動を支えるボランティア(障害者福祉との関連) 10. ボランティア活動の実際 地域福祉活動を支える ボランティア(児童福祉との関連) 11. ボランティア組織と運営 12. NPO法の概要 13. NPO団体の活動の実際 14. ボランティア推進団体 15. ボランティア活動の意義と課題 		
教科書	なし		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	成績の評価は、試験によりこれを行う。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 早稲田大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計104名	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>本講義では、ボランティアを実践面と理論面の二本立てで学ぶ。前期はボランティアの実践例を中心に、各担当講師の実践例をもとに、1.アフリカでのNGO活動事例、2.保健医療問題に関する支援活動事例、3.学生によるハンセン病問題に対する取り組み、などを学ぶ。</p> <p>後期は前期の実践例を踏まえ、ボランティアを理論的に考察する。具体的には、アイデンティティや自己実現、エンパワメント、公共性などのキーワードをもとに、ボランティアを多面的に講義する。また、肯定的に語られることの多いボランティア活動に対して、その活動が内包する危険性や「見えない落とし穴」も視野に入れて講義する。</p> <p>なお、ボランティアがきわめて多岐にわたる領域で活動していることを鑑み、できるだけ多くのゲストスピーカーを迎えて講義する。</p>		
授業内容	<p><前期></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(授業の進め方について) 2. ボランティア概論1(WAVOC紹介) 3. ボランティア概論2(社会貢献活動とキャリア形成) 4. ボランティアフェア 5. 環境保護活動事例 6. 環境保護とボランティア 7. 環境保護運動がもたらすもの 8. ドメスティック・バイオレンス被害者支援活動—力を取り戻すために 9. DV問題を私たちの問題として考える—学生による活動事例紹介 10. DV被害:聞こえない当事者の声と私たちの社会 11. ハンセン病とは、 12. 中国ハンセン病村ワークキャンプ 13. 交際交流とボランティア—「ハンセン病がアジアをつなぐ」 14. 前期まとめ <p><後期></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティアとは何か？ 2. 夏季ボランティア活動振り返り1 3. 夏季ボランティア活動振り返り2 4. 教育、アイデンティティ形成とボランティア 5. ボランティアのもうひとつの役割—不可視の権力の可視化 6. ボランティアを要請する社会状況(福祉、開発、環境、地域社会) 7. ボランティアと平和構築 8. 環境とボランティア1 9. 環境とボランティア2 10. 国際教育協力とその意義 11. ジェンダーとマイノリティの支援活動をめぐって 12. 病いの意味を考える 13. 「世界を認知し名づけるもうひとつの方法」としてのボランティア 14. 総まとめ 		
教科書	WAVOCブックレット「教育協力」「平和構築」「環境ボランティア」		
授業の工夫点			
授業の評価方法	<p>評価基準:講義における積極性、レポートにおける社会問題に対する洞察力、社会問題に対する知識などを加味して総合的に評価する(レポート80%、講義における積極性などの平常点20%)。</p> <p>重要視する要素:講義での積極性、社会問題にむきあう態度を論理的に記述する能力。</p> <p>予想される課題:レポート</p> <p>提出物:レポート、各講義後に記入するコメントカード</p>		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	環境とボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	環境影響評価・環境政策	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計300名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年、環境への意識が高まる中、環境に関連するボランティア活動はますます盛んになっている。この科目では、環境ボランティアの具体的な活動事例を学びつつ、環境問題の背景にある経済や社会の構造を理解する力を養う。 「環境を保全する」「ボランティアをする」といえば、一般的には「いいこと」と考えられている。しかし、本当にそうなのだろうか？環境は同時に資源でもあり、その利用や管理には常に複数の利害関係者がからみ合う。例えばアフリカでゾウが農作物を荒らし、時には人命を奪っているときに、観光資源や「人類の貴重な財産」としてのゾウの保護はどのようにあるべきなのか？このような現場では「守るべき環境」は固定されておらず、関係者どうしの相互関係や権力関係のなかで「求められる環境」がせめぎあう。そして、この場に入っていきボランティアもまた、関係者の一員として何らかの作用をもたらすことになる。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	毎回の講義へのコメント(出席に相当)(30%)、期末レポート(70%)の総合評価。(1)多角的な問題の理解とよりよい社会変革への建設的な思考ができているか、(2)それが論理的に述べられているか、が重要な要素となる。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	グローバルヘルス		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際教育開発学、教育社会学、比較教育学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計50名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	「人間の心身の健康をどう守るか」は、21世紀の人類が直面する優先課題である。本講義では、グローバルな「人間の健康問題」を医療問題としてだけでなく、「社会・文化的な現象」として理解を深め、社会啓発の実践を行うことを目標とする。特に、講義を通じては、HIV／エイズ、望まない妊娠、ドメスティック・バイオレンスなどグローバルヘルスに関する現代的なテーマを選択し、主に「人権」と「ジェンダー」の視点から、社会構造と個人の疾病、健康との関連を具体的にイメージできるようになることを目指す。また、エイズなど疾病に関わる差別・偏見、および女性、移民労働者、性的マイノリティなど「社会的少数者の権利、健康問題」は、講義における重要課題であり、当事者の視点を持った理解と社会啓発実践の契機としたい。 授業では、支援・援助実践を射的に入れ、担当教官のみならず政府・NGO等、国内外の専門家および、当事者を数回招聘する予定である。		
授業内容	第1回 オリエンテーション、概要説明 第2回 ジェンダー・人権の視点とグローバルヘルス 第3回 プロジェクト研究の方法論I 第4回 プロジェクト研究の方法論II 第5回 支援活動実践事例(外部講師予定) 第6回 「ジェンダー」の視点とは(ワークショップ) 第7回 中間プレゼンテーションI 第8回 中間プレゼンテーションII 第9回 支援活動実践事例(外部講師予定) 第10回 データ収集・フィールドワーク実践 第11回 「人権」の視点とは(ワークショップ) 第12回 社会に向けてメッセージを発信するために 第13回 プレゼンテーションに向けて自主活動 第14回 最終グループプレゼンテーションI 第15回 最終グループプレゼンテーションII		
教科書	「ジェンダーで読と交差する健康／身体」根村直美編 明石書店2005年		
授業の工夫点			
授業の評価方法	グループによる自主研究プロジェクトの最終成果レポート、およびプレゼンテーションの内容を評価基準とする。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際開発援助 理論と実践		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計397名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年、学生の国際協力に対する関心は高く、具体的に将来の職業として国際協力業務を志す者も多い。本授業では、独立行政法人国際協力機構(JICA)、国連機関、NGO等の国際協力に携わる多様な組織の職員を招聘し、主として国際協力の実務に関する講義を提供する。授業形態は、講師による講義形式であり、各授業の後半に質疑の時間をもうけることで学生からのフィードバックを得る。受講生は、一連の講義を通じて、学部での専門的な知識や理論と国際協力の実際的な実務との有機的な関連を理解することを目指す。特に、授業では、平和構築、保健医療、教育、環境、ジェンダー、人間の安全保障等の国際開発の諸分野での講義を提供する予定であり、受講生は、こうした多様な分野における実務のイメージを具体的に持てるようになることを目標とする。また、講師は、将来それぞれの分野で働く上で有用な知識や、いかなる経験を蓄積していくことが望ましいか等、各分野で必要とされる人物像についても適宜触れていく。		
授業内容	1回 4月10日 オリエンテーション 2回 4月17日 JICAの教育協力 3回 4月24日 子どもたちの健康を守るために 4回 5月1日 紛争と平和構築 5回 5月8日 日本の有償資金協力 6回 5月15日 TICADとNGO 7回 5月22日 援助協調の現状と課題 8回 5月29日 国際協力におけるコンサルタント 9回 6月5日 ユネスコ協会連盟の取り組み 10回6月12日 人口・家族計画をどう進めるか? 国際機関の役割 11回6月19日 リプロダクティブヘルスとエイズ 12回6月26日 日本のODAとNGOの役割 13回7月3日 国際協力とボランティア参加 14回7月10日 国際協力援助とキャリアビルディング		
教科書	西川潤(2000)『人間のための経済学』岩波書店、西垣昭・下村恭民・辻一人(2003)『開発援助の経済学(第三版)』有斐閣、内海成治編(2005)『国際協力論を学ぶ人のために』世界思想社		
授業の工夫点			
授業の評価方法	毎回の授業の後、講義についての「問い」を作成(3点×15回=45点) 期末レポート(担当教員が提示する複数の課題の中から1つを選択して論ずる)(55点)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	自己表現論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計99名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	「自分の長所を見つけるために、まず「他人の長所」をいかに見つけるかを学び、次に「意見を言い合う」なかで「譲歩の在り方」を学ぶ。そしてジャーナリストであり組織改革コンサルタントとして、数多くの人々と接してきた経験をもとに、「人間集団の中で自分をいかに表現したらいいのか」について言及する。最終的には、400字30枚以上の原稿(「自分の長所」について)を提出し、「自分の長所を見つけ、他者と共存しながら自己表現することの大切さ」を身につける。サークル活動やボランティア活動、あるいは就職活動で「自己表現できる」人間をめざす。また、社会心理学をベースにした「人間関係論」も学ぶ。		
授業内容	第1・2回 「自分の長所」を見つける、 第3・4回 「他人の長所」を見つける、 第5・6回 「二者」で意見を言い合う、 第7・8回 「多数」で意見を言い合う、 第9・10回 「譲歩」を学ぶ、 第11・12・13回 「自分」を語る、 第14・15回 「自分の長所」を描く。		
教科書	原 孝著『人間関係が一瞬で変わる「自己表現」100』(PHP文庫、514円+税) 原 孝著『その言い方では人はついてこない』(PHP文庫、476円+税) 原 孝著『喋りたい若者たち 喋らせない大人たち』(文真堂、1,500円+税) 原 孝著『大学で「自分」を見つけた』(プレジデント社、1,500円+税)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出欠席および「自分の長所」に関する原稿(400字詰で30枚以上)をもって行う。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際交流と社会貢献		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計100名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動や国際交流活動などの「社会貢献」をする際に最も大切なものは「何か」を学ぶ。そうした活動の企画から終了に至るまでの様々な問題点の「解決手法」を理解し、最終的には受講生各自が「国際交流実践計画案」か「社会貢献実践計画案」を作成し、実践につなげてもらう。在学中に何かを成し遂げたい、自分を深く見つめたい、達成感を得たい、と熱望する学生にとって最適の科目である。また、社会心理学をベースにした「プロジェクト・マネジメント」も学ぶ。		
授業内容	第1・2回 「国際交流」と「社会貢献」って何だろう？ 第3・4回 「リーダーシップ」スキルを学ぶ 第5回 「人の輪」はどうしたらつながるのか 第6・7回 「プロジェクト・マネジメント」スキルを学ぶ 第8回 計画倒れにならないためには何が大切？ 第9・10・11回 あなたなら「何を」やる？ 第12・13回 アイディアをふくらませる 第14・15回 「実践計画案」をつくる		
教科書	原 孝著『人間関係が一瞬で変わる「自己表現」100』（PHP文庫、514円＋税） 原 孝著『その言い方では人はついてこない』（PHP文庫、476円＋税） 原 孝著『喋りたい若者たち 喋らせない大人たち』（文真堂、1,500円＋税） 原 孝著『大学で「自分」を見つけた』（プレジデント社、1,500円＋税）		
授業の工夫点			
授業の評価方法	成績評価は出欠席および「国際交流実践計画案」または「社会貢献実践計画案」の提出をもって行う。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティ論－入門と基礎理論－		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計300名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	工業化とともに地域コミュニティ、伝統、文化がゆらぎ、さらに近年のグローバル化の進展に伴って、国民国家の枠組みが相対化されている。だが、この状況と変容のなかから、新たなコミュニティ形成がはじまりつつもある。人々は「市民」もしくは「個人」として、多様なプロジェクトに参加して様々な人々と関係性をとり結ぶ、つまりは複数のコミュニティ形成に参加・参画するようになってきたのだ。 このような状況下、本講義ではまず、コミュニティが要請される歴史的・社会的背景を考察したうえで、コミュニティの基礎理論を検討する。なぜ、コミュニティなのか？ そもそも、コミュニティとは何か？ そのうえで、ボランティア活動を事例に、コミュニティの具体的諸相を検討することを通じて、現代社会におけるコミュニティの意義と課題を多角的に考察していく。また、ゲストスピーカーを招いて、地域通貨とコミュニティについても等も講義する予定。		
授業内容	1. ガイダンスとイントロダクション 2. 歴史と背景1 モダンと国民国家（権安理） 3. 歴史と背景2ポストモダンと「個人化」（権安理） 4. コミュニティの理論1コミュニティアリズム（権安理） 5. コミュニティの理論2ハーバーマスの公共圏（権安理） 6. コミュニティの理論3ポストモダン・コミュニティ（権安理） 7. コミュニティの現在1新しいコミュニティの形成（西尾雄志） 8. コミュニティの現在2地域通貨とコミュニティ（清家竜介） 9. コミュニティの現在3家族の変容とコミュニティ（田中（斎藤）理恵子） 10. まとめ		
教科書	田村正勝編著『甦るコミュニティ』文真堂		
授業の工夫点			
授業の評価方法	期末レポートと平常点。平常点は、受講者の人数によるが、コメントカードを数回課することを予定している。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティ論－展開と実践－		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計327名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>コミュニティケア、地域活性化、家族、の3点からコミュニティについて多角的に検討する。</p> <p>1. 「福祉国家」体制が行き詰りを迎え、新たに行政、民間企業、ボランティアの三者が連携する「コミュニティケア」体制が築かれた。こうした改革とりわけ日英の動向を通して現在、ボランティアが待望される背景とともに、まちづくりや有償ボランティア、ローカル通貨などの具体例を交えて、市民参加や地域協働のあり方について考察する。</p> <p>2. 現代のコミュニティ再生・コミュニティ形成における様々な実践的活動を取り上げ、それらを支える理論的フレームワークについて多角的な見地からアプローチしていく。特に、グローバル化の進展に伴う地域経済の衰退に注目し、地域活性化へ向けた都市・地域コミュニティと経済社会の新たな関係性の構築について総合的な観点から検討する。</p> <p>3. 現代の家族とコミュニティをめぐる状況について、少子高齢化、家族形態とコミュニティ成員の多様化、地域社会における子育てや介護といった実践的視角より検討する。</p>		
授業内容	<p>1. ガイダンスとイントロダクション(西尾雄志)</p> <p>2. 福祉の観点からみたコミュニティ(中島裕明)</p> <p>3. グローバル化と地域経済の衰退の観点から見た地域コミュニティの再生(田中人)</p> <p>4. 現代の家族とコミュニティ(田中(斎藤)理恵子)</p> <p>5. コミュニティ論総括(西尾雄志)</p>		
教科書	田村正勝編著『甦るコミュニティ』文眞堂		
授業の工夫点			
授業の評価方法	平常点は、受講数にもよるが、コメントカードを数回課することを予定している。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	人権と市民活動・ボランティア		
担当教員（学内又は学外）		授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計20名	授業区分	講義、実習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	一週間程度
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>ハンセン病に関する基礎的な講義を踏まえ、ハンセン病問題の当事者や、それに関わってきたさまざまな立場の人びと(宗教者、映画監督、メディア関係者、国際協力従事者など)を幅広くゲストスピーカーに招き、多面的に講義する。</p> <p>また、ハンセン病問題にとどまらず、今日の他の人権問題にもスポットをあて、人権感覚を養っていくことを目指す。</p> <p>夏季休業中に、履修者がハンセン病問題に直接触れる機会を設け、そのふりかえりを合宿形式で行う。</p>		
授業内容	<p><前期></p> <p>1. ハンセン病概論</p> <p>2. 日本のハンセン病の歴史</p> <p>3. 海外のハンセン病</p> <p>4. 隠喩としてのハンセン病</p> <p>5. illness(病い)、病気(disease)、疾患(sickness)</p> <p>6. 芸術作品とハンセン病</p> <p>7. 報道とハンセン病</p> <p>8. 国際協力とハンセン病</p> <p>9. 日本のハンセン病問題をめぐる運動の現在</p> <p>10. ハンセン病問題と学生の取り組み</p> <p><夏季休業中></p> <p>9月中に1週間程度の合宿を行い、そこで各自発表。</p>		
教科書	<p>和泉真蔵『医者への僕にハンセン病が教えてくれたこと』シーブーアール</p> <p>熊本日日新聞社『ハンセン病とともに 心の壁を超える』岩波書店</p> <p>藤田真一『証言・日本人の過ち ハンセン病を生きて』人と歴史社</p> <p>藤田真一『証言・自分が変わる 社会を変える』人と歴史社</p> <p>徳永進『隔離 故郷を追われたハンセン病患者たち』岩波書店</p> <p>数本雅子『女子アナ失格』新潮社</p>		
授業の工夫点			
授業の評価方法	<p>評価基準:レポート、合宿における発表を加味して評価。</p> <p>重要視する要素:ハンセン病問題に対する主体性。ハンセン病問題と他の社会問題との関連性を洞察する能力。ハンセン病問題を他人の借り物の言葉ではなく、自分のことばで伝える表現力(合宿時)。</p> <p>予想される課題:合宿時における発表、体験を踏まえたレポート</p> <p>提出物:レポート</p>		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	カンボジアの文化遺産の保全と村づくりへの国際協力実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	建築史・意匠	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計21名	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	約2週間
必修・選択の別	選択		
授業目的	(1)クメール美術史・建築史の概説 (2)アンコール遺跡およびプレ・アンコール遺跡の保存修復史と現在の取り組みに関する概説 (3)カンボジアにおける文化政策に関する概説 (4)遺跡公園の整備計画への取り組み (5)サンボー・プレイ・クック村、及びアンコール・クラウ村周辺の特質に関する実地調査		
授業内容	(1)4月と6月に1度ずつ、早稲田大学において実習計画のガイダンスとディスカッション (2)9月3日-9月16日(14日間) プノンベン市(プノンベン国立博物館、クメール美術の見学実習) コンボントム市(コンボントム市、サンボー・プレイ・クック遺跡および周辺の村にて) シェムリアップ市(アンコール遺跡の見学と実習)		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	実習計画書、実習報告書による評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	持続可能な社会と市民の役割		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	環境影響評価・環境政策（学内教員）	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計13名	授業区分	講義、実習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	3週間程度
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>わずか200年ほどの近代の人間の活動によるさまざまな影響が、加速度的に表面化している。地球上の誰もが、そして多様な生命が未来にわたって暮らしていくために必要なことは何か。それを多角的に考え、国際的な視野において体験的に理解し、行動へのスタートラインに立つのがこの科目の目的だ。</p> <p>授業は、前期・後期に6回ずつの計12コマ。他に素潜り実習（選択）、神奈川県丹沢での事前準備キャンプ（週末・必須）。実習として、夏にミクロネシア連邦ヤップ州で2週間、新潟県南魚沼市で祝日を入れた2泊3日。</p> <p>授業では世界の現状を押さえ、「持続可能性」というあいまいな概念について整理し掘り下げる。夏の実習では、半自給自足経済が成立しながらも大きく変化しつつある島で暮らしながら、持続可能な社会の要素を各自の中で具体化する。これは同時に、豊かさや幸福、生きることといった、本質的な価値観を問い直すプロセスでもあり、国際経済の仕組みや現行の開発の問題点にも気づくことになる。</p> <p>現場は日本がかつて占領統治していたミクロネシア連邦ヤップ州の村。参加者はグループとして生活し、自然に近く暮らす地元の人たちから学ぶ中で、自分自身をも深く知ることになる。暮らしには原則として水道や電気、ガスなどはなく、自分の常識を大きく破り価値観にも触れる体験になる。日本では、新潟県南魚沼市の山村の暮らしにおじゃまさせてもらいながら、日本における持続可能な社会のあり方、市民としてどのような貢献が可能なのかの考察を体験と議論によって深めていく。</p> <p>この科目を通して学生は、多様に立脚し多角的に物事を捉える姿勢と、行動への糧を養う。1年を通して、自らの調査と発表を基本とした学生主体の学びの形を取る。授業外での自主勉強や活動が前提とされる。学生の意欲によって結果は変わってくる。</p>		
授業内容	<p>（前期）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 持続可能性という概念の理解と世界の状況（環境、エネルギーなど） 2 夏の実習イントロと週末キャンプ（5月31日ー6月1日を予定）について 3 ミクロネシア連邦ヤップ州についての事前調査と準備（夏の実習） <p>時期：8月30日から9月12日の予定 ※（コンチネンタル航空は夏前にフライトスケジュールを変えることがあります。その場合、1-2日前後します。） 航空便：コンチネンタルミクロネシア航空 成田-グアム-ヤップを予定 主な学習内容：島での暮らしから人と自然の関係、持続可能な社会の要素、豊かさの再定義、伝統的な知識が未来に持つ意味、対人・自然コミュニケーション、観光とは異なる異文化社会とのつながり方、自分自身について、開発の意味、国際経済と政治、地球規模の環境問題と西太平洋の小島の関係、日本の暮らしとミクロネシアのつながり。 学習方法：自分たちで考え判断し共同生活をする。自分たちどうし、島人とのやりとり、暮らし体験を通しての学び。講師のファシリテーションによる議論と考察。</p> <p>（後期）</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 夏の実習の振り返り討論と課題の整理 2 実習体験を元にした持続可能な社会についての討論と考察 3 総成果報告会 4 ゲストを呼び、世界の環境や貧困の現状、開発を巡る問題について討議（秋の実習） <p>時期：10月11-13日を予定 場所：新潟県南魚沼市清水集落を予定 主な学習内容：日本社会の中央と地方の構造、農山村や林業の状況、課題発見、持続可能な社会の概念に照らしての分析と今後の可能性。</p>		
教科書	木俣・藤村共編著「持続可能な社会のための環境学習：知恵の環を探して」倍風館、2005 大前純一「地球、そこが私の仕事場」海象社、2006 田中優『戦争をやめさせ環境破壊をくいとめる新しい社会のつくり方』合同出版、2005 アマルティア・セン著、大石りら訳『貧困の克服-アジア発展の鍵は何か』集英社新書、2002 神野直彦「地域再生の経済学—豊かさを問い直す—」中央公論社、1998 ドネラ・メドウス、デニス・メドウス、枝廣淳子「地球のおおしかた」2005		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業に関連した調査・発表・討論・活動 45%、レポート 25%、実習中の積極的参加 30%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地球体験から学ぶ異文化理解		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	国際教育開発学、教育社会学、比較教育学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計10名	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>2008年、立憲君主制へ歴史的な第一歩を踏み出したブータン王国を訪問する。この国は、国家の目標として「GNP(Gross National Product・国民総生産)」ではなく、「GNH(Gross National Happiness・国民総幸福)」を追求すると宣言している。</p> <p>ブータンでは、現地の学生や学僧との交流、ボランティア活動(以上予定)に加え、現地の町や村などで暮らす人々の文化、宗教、価値観、生活、環境について、実際に生活や活動を共にしながら理解する。またJICAの青年海外協力隊やシニアボランティアの活動現場を訪問し、開発や援助、そして豊かさについて考える。</p> <p>渡航前には全員が「研究テーマ」を決めてプレゼンテーションを重ね、メンバーや国に対する理解を深める。「研究テーマ」は自分のテーマに直結するものであり、研究を通じて内面化している価値や常識を「相対化」する。異文化体験を通じて自分を深く知り、将来の職業、生き方、そして夢の実現に役立ててもらいたい。</p> <p>講義は、受講生が教員・教員補佐とホウレンソウ(報告・連絡・相談)をしながら作り上げる。海外実習に向けての企画・プレゼン・運営を、実践を通して学ぶことが目的のひとつでもあるため、時間外の話し合いや問題解決など苦労は大きいですが、その分得るものも大きい。チームでは自分の得意な役割を担当し、夢や熱い想いが誤解されるのではなく、多くの協力者を得るコミュニケーションを学ぶ。つまり身近な異文化理解と実践が、夢や目標を実現する手段となることを体験を通じて学ぶ。</p>		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	東南アジアの開発問題とNGOの役割		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計31名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>東南アジアにおける開発の問題点を、文化人類学の立場から掘り下げてゆくことを第一の目的とする。本講義は、3つの特徴をもつ。</p> <p>第一に、開発には、多種多様あるということを認識してもらい、それらをひとつひとついねいに見てゆきながら、理論的問題も考えること。第二に、その問題点を理論的課題にとどめず、それらを克服してゆく試みとして、フィールド調査の役割を重視し、実際の現場で検証してみることをめざしている点。受動的に学ぶのではなく、実際の現場に出て、自ら試行錯誤しながら、問題解決に向かう力を身につけてもらうこと。第三に、そうした授業と活動の中からNGOがなにをすべきなのか、また、政府援助とNGOのちがいがどこにあるか、学んでもらうことである。フィールドワークはメコン川流域で行い、教育開発を中心に現場で検証する。</p>		
授業内容	<p>第1部:理論的課題について学ぶ :A)文化人類学の視点-伝統とは?文化とは?開発とは? :B)過去の開発プロジェクトの理論的問題点</p> <p>第2部:理論と実践を結びつけるインターフェイスについて学ぶ :A)応用人類学の様々な分野:B)応用人類学の実際の事例研究</p> <p>第3部:フィールドワーク :A)教室で学んだことの問題点整理:B)その解決策の案作成:C)案を実行に移すこと:D)現地フィールドワークを通してフィードバック</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO実践論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会学(学内教員)	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計35名	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>行政や企業の社会サービスが限界をむかえた今、きめの細かい市民サービスの提供者であるNPO(民間非営利組織)は、安心・健全な市民社会を創造していくために必要不可欠な存在となっております。現在、全国では27,000団体をこえる特定非営利活動法人(NPO法人)が誕生しており、環境保全や福祉、文化芸術、地域防災など、様々な分野において、住民主体の創造的な市民活動が活発に展開されています。</p> <p>しかし、NPOの現状は、総じて、資金、人、情報、場所などに共通の問題を抱え、特定の人達に過度な人的・財政的負担がかかり、NPOのリーダーも長期的視点に立った組織運営の方法論や市民や行政・企業とのパートナーシップの構築など、多くの課題を内在しているのが現実的な姿です。</p> <p>そこで、NPOが内在する複雑で多様な課題や障害を解決するために、その解決方策、方向性、手段を見出すことができる、問題解決型の実践的で専門性の高い講座を開講します。NPOが、持続・発展していくための基礎知識と実践論を学びます。</p> <p>まず、『NPO』についての基本的な知識を学びます。NPOとは何か、ボランティアとの違い、法律的な裏付け、NPO法人とは、海外のNPOの情報等です。また、『NPOの現状と課題』『NPOの実践論』等国内外における具体的な活動を通して、現場感覚にマッチングした実学を学びます。</p> <p>さらに、選択授業として、国内外のNPOの活動現場を訪問し、実践地区の実情を学ぶとともに、具体的な活動を体験したり、スタッフや関係者との情報交換会を設定し、NPOの現実と課題を理解します。</p>		
授業内容	<p>4月-6月:基礎講座「NPOとは何か」(全8回必修)</p> <p>オリエンテーション、グループ分け(NPOの社会的役割とは)／NPO・NGOとは、NPOとボランティアの違い／営利・非営利とは／海外のNPOの現状(イギリス等)／海外のNPOの現状(アメリカ・ヨーロッパ等)／日本のNPOの現状と課題、行政の支援施策等／グループ発表(任意に選択したNPO団体についての調査報告)／グループ発表</p> <p>[実習]</p> <p>4月20日:「グラウンドワーク三島体験学習」(必修)</p> <p>7月12-13日:「現場で学ぶ・ワンデイチャレンジ」(選択)</p> <p>9月中旬(6泊8日):「英国グラウンドワーク視察」(選択)</p> <p>夏期休業中(10日間ほど):「グラウンドワーク三島インターンシップ」(選択)</p> <p>※いずれか1コース以上の選択実習に参加すること</p> <p>(費用の目安 国内:15,000円/海外:300,000円)</p> <p>9月-11月:実践講座「NPO実践論」(全7回必修)ディスカッションも取り入れる</p> <p>グラウンドワーク活動とは／パートナーシップ形成のプロセス／NPOのマネジメント(組織運営・資金調達・人材育成)／人的・組織的ネットワーク構築の手法／課題解決・まとめ／グループ発表(NPO立ち上げのシミュレーション)</p>		
教科書	「清流の街がよみがえった」(中央法規出版 渡辺豊博著)		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	農山村体験実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	農業経済学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計50名	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>1. 日本の社会、経済における農山村、農林業の状況を学び、産業構造変化の仕組み、過疎化の結果などをフォローする。多面的機能の外部経済、不経済の概念を知るとともに、農山村での作業体験、調査等に参加し農林業問題を学習する。多くの学生が都市出身者であるために、地域や農村、そしてそこでの農林業や地域経済の仕組みや、人々の生活を把握することの機会が少ない。この授業は、それを反省して、講義での座学と、農山村での作業の体験実習や農家に世話になることで農家家族との共同生活の機会という農家体験を通じた実学とを、ともに学ぶことができるように工夫してある。各学部から参加するので、専門は異なるが、現実を見ながら、それぞれの専門を生かすなり、現実認識の方法論を共通に学ぶことになる。したがって、講義と作業体験・聞き取り調査・発表報告のフィールドワークの組合せが授業内容である。</p> <p>2. 5月の田植え実習、9月の稲刈り実習を、土日を利用して新潟県十日町市松代で全員で行う。往復バス車中で、あるいは宿泊場所、土曜の講義の枠を超えた学習がなされるであろう。農林中金金庫・農林中金総合研究所の支援による寄附講座なので、松代への往復交通費は基本的に無料だが、セミナーハウスの宿泊料は自己負担になる。</p> <p>3. 候補地(山形県高島町周辺、同県寒河江市田代、岩手県田野畑村、福井県坂井市三国など)のどれかに参加してもらう。夏に原則として実施するが、行く前に学生を候補地のグループに分け、昨年参加した先輩学生等の指導で、現地の状況や内容等を事前に学習し、調査票を作成して実習に臨む。</p> <p>4. 後期は講義に加えて、夏期実習の調査を基にしたグループ発表を行ってもらう。</p>		
授業内容	<p>【前期-総論・実習と課題決定】</p> <p>(1) 授業のガイダンス・夏の実習地の紹介と実習班決定</p> <p>(2) 新潟県十日町市松代で田植え実習(後日、レポート提出のこと)</p> <p>(3) 夏期実習の課題整理。調査表作成</p> <p>講義は(2)の期間を除いて13回程度を予定。授業時間を利用して(1)と(3)のフィールドワーク準備を行ってもらう。</p> <p>【夏期実習】</p> <p>基本的に農家泊を組み込み、農作業、農家との会話や調査聞き取りを行う。1農家・2人の学生の組み合わせとなるが、いずれも学生受け入れに熱心な農家、地域であり、貴重な体験となるであろう。現地では基本的には2泊3日であるが、往復の夜行バス等がこれに加わる。移動費に関しては、引率を担当する学生リーダー(基本的に前年度受講生に頼んでいる)と話し合いながら、実習成果を挙げるように工夫したい。また、後期の初めに、夏期実習のレポートを提出してもらう。</p> <p>【後期-各論・夏期実習発表】</p> <p>(1) 松代で稲刈り実習。この時、松代にて後期発表の準備も行う。</p> <p>(2) 所沢キャンパスで森林調査実習</p> <p>(3) 後期は、夏期実習地ごとに発表をしてもらう(一班15分程度)。現地の方にも来ていただけるよう努力する。なお、講義のみ行う週もあり、詳細な日程は授業開始後に連絡する。全講義は14回程度である。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	食と経済		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	応用経済学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計169名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>オープン教育科目の「食育」の一貫として、日本の食生活の現状を把握し、日本の食生活がどの要素、産業構造、ビジネスで支えられているかを、経済学の視点から理解する目的で講義をする。我が国の食生活を取り巻く環境は大きく変化してきており、食料消費はライフスタイルなどの変化により変容してきている。さらに食料を供給する農業、加工・流通産業も大きな変革を遂げてきている。これらの変化を総合的に理解することは、学部学生にとり重要な知的作業であり、この講義を履修する意義があると考えられる。</p> <p>5人のそれぞれの分野の専門家である講師が、我が国の食生活の変化を、消費生活の変化、産業・社会構造(家族関係の変化も含む)、国際関係の変化から理解するために講義する。経済発展に伴う所得の増大は、コメなど一部の食料消費を減らす一方で、肉や野菜などの消費を増大させる。また社会構造の変化は、食料需要の変化をもたらす。食料供給体制も変容させてきている。我々の食生活を取り巻く経済・社会環境について、総合理解をはかる目的で、最強の専門家チームが講義を担当する。</p>		
授業内容	<p>1 弦間正彦(社会科学総合学術院) 食料消費・生産構造、国際貿易の変化</p> <p>2-5 髙谷栄一(農林中金総合研究所) 農業生産・流通構造の多様化</p> <p>6-9 中嶋康博(東京大学大学院農学生命科学研究科) アグリビジネスの展開</p> <p>10-13 平澤明彦(農林中金総合研究所) 農業金融を取り巻く状況</p> <p>14 堀口健治(政治経済学術院) 現代食生活の特徴と分析及びまとめ</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	(株)電通寄附講座 富士山環境再生コミュニケーション実践		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	農業経済学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計12名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	本ゼミでは、富士山に関するより実践的で専門的な研究を行う。少数精鋭、現場重視のゼミ形式とし、(株)電通社員にアドバイザー役をお願いし、個別指導を受けながら「富士山再生」について研究し、その研究成果や論文を報告書にまとめ、富士学会などで発表するなど積極的な政策提言を行っていく。また、実習(インターン)については、それぞれの研究テーマ別の必要性に応じ、担当教員等の指導のもと実施・具体化される。		
授業内容	共通テーマとしては「私の富士山再生論」とする。ただし、各人ごとに研究テーマを見つけ、担当教員やゲスト、現場での実践者、(株)電通アドバイザーなどの指導・助言を受け、「ゼミ」方式のコミュニケーション重視の問題発見・提案型の授業とする。		
教科書	富士山は生きている(静岡新聞社、1994) 清流の街はよみがえった(中央法規出版、渡辺豊博著、2006)		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	日本サムスン株式会社寄附講座 シルクロード文化財保護		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	考古学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	オープン教育センター	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計100名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	日本サムスン株式会社が社会貢献活動として取り組む、シルクロード文化財保護活動の一環としておこなう寄附講座である。日中韓三カ国にまたがるシルクロードの歴史や文化を探り、東アジアの過去と現在、未来を俯瞰する。 日中韓の学生交流と文化交流を促進し、国際協力を推進できる有能な人材を育成することを目的とする。		
授業内容	ユーラシアの東西南北をつなぐシルクロードをキーワードとし、歴史、社会、文化、芸術などの分野における専門家をゲストスピーカーとして招聘するオムニバス形式の講座である。 本年度からの開講に先立ち、平山郁夫早大名誉博士・ボランティアセンター名誉所長が特別講演を行う。 1回目:シルクロードの考古学(後藤 健助教) 2回目:平山郁夫シルクロード美術館見学と学生の相互交流(後藤 健助教) 3回目:シルクロードと統一新羅の関係(李 成市教授) 4回目:シルクロードの求法僧達(長澤和俊名誉教授) 5回目:シルクロードの世界文化遺産(1)(毛利和雄NHK解説委員) 6回目:シルクロードの世界自然遺産(2)(毛利和雄NHK解説委員) 7回目:シルクロードとアジアの政治動向 政治編(毛里和子教授) 8回目:シルクロードを取り巻く現代と未来 政治編(毛里和子教授) 9回目:シルクロードと社会経済 経済編(堀口健治教授) 10回目:シルクロードの遺跡と調査(宮里 修講師) 11回目:韓国に残るシルクロードの遺跡と遺物(宮里 修講師) 12回目:仏教石窟と壁画の保存(大橋一章教授) 13回目:シルクロード文化財保護フェローシップ(文化財保護・芸術研究助成財団関係者) 14回目:現地に見る文化財保護の実態(後藤 健助教)		
教科書	『シルクロードの考古学』 早稲田大学オンデマンド出版		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 白百合女子大学

授業科目名	ボランティア体験Ⅰ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期 週2回
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部1～4年次	授業のレベル	その他(履修者のレベル。インターンシップだが、1年生から十分に履修可。ただし、信用失墜や業務に穴をあけることになる対人関係能力の欠如や、欠席には厳しいので、中途辞退者が少なくない)
平成20年度履修者数	計24名(男子学生0名 女子学生24名)	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	毎週3～4時間(片道の移動時間含む)
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもや障がいのある人に声かけできる大人になる。 ・子どもや障がいのある人との距離感が変わる。(例)授業中や作業中、様子を見て「どうしました?」と相手の気持ちに寄り添うことで、相手から真意を話してくれた。人なつこい人とばかりと話しがちだが、あまり言葉を発していない人にも話しかけた。すると帰りがけに…。子どもや障がいのある人の個性、表現方法は違うからこそ、みんなに平等に接する大切さが実感できた。 ・今の自分自身を育てる。(例)学校のどこにツバメの巣があるか、ひなが何羽いるか観察力に感動し、学級での話し合いに驚く。互いに励め励ましあう姿に学ぶことも多い。 ・将来子どもや障がいのある人に関わる職に就きたい者にとっては、魅力実感と本気の仲間づくり。 		
授業内容	受け入れ先の指示待ちでは動まらないので、学校経営計画や施設の理解、また教師、施設職員の意図(願いと喜び)を汲み取る積極性が欠かせない。そのうえで支援する機会を阿吽の呼吸でつかむこと。大学が学生を現場指導するため、右項の観点から自己評価できる。「ボランティア体験Ⅰ」「ボランティア体験Ⅱ」は通年で、同内容だが、要求水準は通年で段階的に高めていく。		
教科書	なし		
授業の工夫点	小学校では担任のティーチングアシスタント。一部施設では生活介助有り。体験評価のものさしを学生と共有。受け入れ先と大学の役割分担を明確化。		
授業の評価方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業中の子どもたちや障がいのある人の観察、エピソードが書けるようになったか。支援が見えるようになったか。 2. 子どもたちや障がいのある人と関わられたか。一人一人の個性の違いを実感した上で、他の人と変わらない態度で接することができたか。 3. 見守りができたか。意図をもつアクティブな待ち、その後の引き出す関わりができたか。子どもや障がいのある人は課題に自主的に取り組めたか、意欲を取り戻せたか。 4. 「たいへんだね。」で終わらせず「どうしたの?」と想像し、受入先と相談・共有できたか。 		
授業のサポート体制	私大特別補助により、巡回交通費、巡回相談受付および実践記録・マニュアル等を作成する費用		
学外の関係機関・団体との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校では市教育委員会から学習指導補助の委嘱あり。 ・毎週3～4時間×通年で受入依頼。 受入先は、児童福祉施設7施設、市立小学校2校、特別支援学校1校、他福祉施設2施設。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア体験Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期 週2回
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部1～4年次	授業のレベル	その他(履修者のレベル。インターンシップだが、1年生から十分に履修可。ただし、信用失墜や業務に穴をあけることになる対人関係能力の欠如や、欠席には厳しいので、中途辞退者が少なくない)
平成20年度履修者数	計21名(男子学生0名 女子学生21名)	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	毎週3～4時間(片道の移動時間含む)
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	近隣の小学校や福祉施設などのボランティア体験を通じ、理解を深められることが目的。将来子どもや障がいのある人に関わる職に就きたい者が対象。職務としての責任を持ちつつ、専門職(教員や施設職員)の姿から学ぶインターンシップである。地域にとっては、学生が人的サービスとして役立つこと、子どもに寄り添える存在となることが目的。学生にとっては、将来にむけた「動機付け」「履歴・実績づくり」、自分を考える機会。対人関係、指導法、実習にむけての示唆に富む経験になる。大学(共通科目)にとっては、地域の学校や施設と大学との連携による地域貢献として位置づける。この単位を設定するのは、先方の使命や目的に賛同する自発的な取り組みのきっかけづくりであり、責任ある行動や継続性を確保、支援するためである。		
授業内容	小学校においては、児童の学習活動観察、プリント・ノートなどの確認、評価・採点補助、班活動への参加、配慮を要する児童に寄り添う。また、授業や行事等の準備作業や習熟度別の授業補助なども視野に入れる。施設などの活動時間にあわせボランティア体験を設定し、半日(午前中または夕方)という時間的なまとまりと、半期や通年で毎週という継続性を確保。1年以上の長期継続を希望する施設もある。また先方は大学の前期後期とは関係ない年間計画で動いているので、学生も年度当初から通年で関わる(単位登録)することが望ましい。ただし半期のみ履修登録も妨げない。必要に応じて次の演習等を行う。オリエンテーション、学生間引継、受け入れ先との連絡体制づくり、演習(集合・巡回)、事前・事後指導等。		
教科書	なし		
授業の工夫点	小学校では担任のティーチングアシスタント。一部施設では生活介助有り。体験評価のものさしを学生と共有。受け入れ先と大学の役割分担を明確化。		
授業の評価方法	ガイダンスで評価を説明。毎月、目標設定・自己評価カードの提出。毎週、体験カードを提出。子どもや障がいのある人の活動、教員や施設職員の支援、学生の支援に、分けて記録をつけることができるようになり、自分の関わりがその中に関連づけられること。単なる観察記録では不可。		
授業のサポート体制	私大特別補助により、巡回交通費、巡回相談受付および実践記録・マニュアル等を作成する費用		
学外の関係機関・団体との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校では市教育委員会から学習指導補助の委嘱あり。 ・毎週3～4時間×通年で受入依頼。 受入先は、児童福祉施設7施設、市立小学校2校、特別支援学校1校、他福祉施設2施設。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 日本女子体育大学

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人文社会学系	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	体育学部1年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計245名（男子学生0名 女子学生245名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	時間制限なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	実際にボランティア活動を体験しながら、現代社会におけるボランティア活動の意義を考察し、自らの市民参加や社会貢献に結び付けて行くことを目標とする。		
授業内容	<p>ボランティアセンターの協力を得て学習を進め、適宜ワークショップ形式を取り入れる。ボランティア活動計画書の作成、ボランティア体験活動、活動レポートの作成を行う。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション(趣旨、学習の進め方) 2. ボランティア活動事例の紹介(1) 3. ボランティア活動の留意点 4. サービスラーニング 5. ボランティア活動事例の紹介(2) 6. ボランティア活動の役割と背景 7. ボランティア活動の歴史 8. ボランティア活動事例の紹介(3) 9. ボランティアセンター 10. 大学の地域貢献 11～14. ボランティア体験活動と報告 15. まとめ 		
教科書	資料プリント、ビデオ教材		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への参加度重視、授業内レポート、ボランティア活動内容、活動レポート等による総合評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 和光大学

授業科目名	福祉のまちづくりと教育		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	現代人間学部(心理教育学科2～4年次) 人間関係学部(人間発達学科2～4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計30名（男子学生21名 女子学生9名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	福祉のまちづくりと生涯学習の関連について論じる。住民参加型福祉が必要になった理由、福祉と教育の歴史的関連、教育福祉と福祉教育の今日的な課題、参加民主主義の課題などについて考える。		
授業内容	住民参加型福祉が求められる状況、福祉のまちづくりへの主体形成の視点、福祉と教育の歴史的関連、戦後社会福祉と社会教育の展開、困難を抱えた人への教育機会の提供、地域リハビリ交流会と生き方の学びあい、参加による福祉の学びと「ゆらぎ」、等。		
教科書	辻浩『住民参加型福祉と生涯学習』(ミネルヴァ書房、2003年)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	毎回のミニレポート50点、期末レポート50点で評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済経営学部(経営メディア学科3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計29名(男子学生21名 女子学生8名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義では、NPO(非営利組織)の意味や実態についての理解を深めるとともに、その他のセクター(行政・企業)との相違などについても同様に理解することを目的とする。そのために、NPOの広義から狭義の概念まで検討し、NGO(非政府組織)の概念上の違いなどについても検討することになる。なお、NPOの現実の活動のみならず、その歴史的活動の変遷を振り返ることにより、時代の流れのなかからNPOの存在意義についても考察を加える。また、NPOの事例研究として、ある特定の事業領域からいくつかを紹介し、それらの実際の活動内容や組織運営の実態などについても考察していく。さらに、今日的にその活動が注目を集めている、「コミュニティ・ビジネス」という場面に焦点を当て、その活動主体としての「社会起業家」の実際の活動にも触れていく予定である。そして、最後に私たちのこれからの生活場面について、職場におけるキャリアだけでなく、その他の生活場面におけるキャリア形成のあり方を踏まえて検討を加える。		
授業内容	<p>授業計画としては、以下のスケジュールに基づき、授業を進めていく予定である。</p> <p>①オリエンテーションとして、NPOの基本的な知識を概説する。</p> <p>②NPOの広義の概念および狭義の概念との関係、地縁型組織との関係について検討する。</p> <p>③NPO活動の歴史の変遷を探っていく。</p> <p>④NPOと行政との関係について、組織間関係の理論的視点を踏まえて検討していく。</p> <p>⑤NPOと企業との関係について、組織間関係の理論的視点を踏まえ、中間支援組織の介在などについても検討を加える。</p> <p>⑥NPOの組織内マネジメントについて、事務局スタッフ、理事・ボランティア会員などの参加者の動機付けなどの視点を踏まえて、そのマネジメントのあり方を探っていく。</p> <p>⑦国際協力領域のNPO(NGO)の活動の実際を考察していく。</p> <p>⑧社会福祉領域のNPOの活動の実際を考察していく。</p> <p>⑨生涯学習領域のNPOの活動の実際を考察していく。</p> <p>⑩コミュニティ・ビジネスの概念およびその活動の実際について検討する。</p> <p>⑪コミュニティ・ビジネスの活動主体である「社会起業家」の仕事内容およびその事例を研究する。</p> <p>⑫NPO活動におけるキャリア形成のあり方について検討する。</p> <p>⑬NPO論の総括として、NPOにおける雇用問題やボランティアとしての関わり方などを取り上げながら、私たちが社会に出てからの社会・地域における市民・ボランティア活動のあり方について検討を加えていく。</p>		
教科書	山内直人著、『NPO入門(第2版)』、日本経済新聞社(日経文庫)、2004年(830円+税)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	履修条件としては、授業に出席しての学習が前提となることを十分に理解しておくことが要求される。特に、授業中に提示されるNPOに関するケース・スタディについてのレポート課題を提出することも成績評価に含まれることに留意されたい。なお、成績評価の基準は、以下の3つの評価要素を設定し、それらを総合して学習成果の成績評価を行う。すなわち、成績評価の基準の3要素は、①出席状況:(20%)、②レポート課題への取り組み:(30%)、③学期末試験(ペーパーテスト)の得点:(50%)、を設定する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 杏林大学

授業科目名	ボランティア活動		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域看護学、母子看護学、助産学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	保健学部(看護学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計21名(男子学生3名 女子学生18名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの3原則として、自主性、無報酬(時に有報酬)、公共性のすべてが当てはまることがボランティアと定義される。さらに、ボランティアに取り組むことで自己成長の可能性が高められるなど、人生を充実させる活動の一つでもある。主に対人サービスを目指す学生にとって、さまざまな体験をすることによって視野を広げ、地域社会の一員としての自覚と能力を養い、実際の体験から生きた知識を学ぶことを目的とする。		
授業内容	<p>1. 事前学習 ボランティア活動とボランティア教育の基本理念、意義、効果について活動に参加するにあたっての注意事項、マナー、リスクマネジメントについて</p> <p>2. ボランティア活動 ボランティア活動の実践</p> <p>3. 事後学習 ボランティア活動経験と自己並びに専攻学問との関連について活動報告書の作成およびグループワーク 活動報告のプレゼンテーション</p>		
教科書	適宜紹介		
授業の工夫点	計画書作成時及び実施後レポートの作成の指導。体験終了後の発表会による学びの共有。		
授業の評価方法	出席、ボランティア実践、活動報告レポートなどを総合して評価。		
授業のサポート体制	ファイリングによる継続的な情報の提供。教員が関わるボランティア活動を優先的に紹介している。		
学外の関係機関・団体との連携	児童館、高齢者施設、教育機関(小・中学校)、大学病院、親の会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	母子保健学、社会福祉学、公衆衛生学、環境保健学	共通・専門等の別	その他（総合領域）
開設学部（学科）及び年次	保健学部（健康福祉学科）1年～4年次 平成20年度は1・2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計10名（男子学生0名 女子学生10名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの3原則として、自主性、無報酬（時に有報酬）、公共性のすべてが当てはまることがボランティアと定義される。さらに、ボランティアに取り組むことで自己成長の可能性が高められるなど、人生を充実させる活動の一つでもある。主に対人サービスマスを目指す学生にとって、さまざまな体験をすることによって視野を広げ、地域社会の一員としての自覚と能力を養い、実際の体験から生きた知識を学ぶことを目的とする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 事前学習 ボランティア活動とボランティア教育の基本理念、意義、効果について 活動に参加するにあたっての注意事項、マナー、リスクマネジメントについて ボランティア活動 ボランティア活動の実践 事後学習 ボランティア活動経験と自己並びに専攻学問との関連について 活動報告書の作成およびグループワーク 活動報告のプレゼンテーション 		
教科書	適宜紹介		
授業の工夫点	<ol style="list-style-type: none"> 外部講師の講演を聞き、ボランティア活動とは何かについて考えさせる。 ボランティア活動を行う前に、その活動に対する注意点、習得すべき知識や技術等をレポートに纏めさせ、提出させる。上記により、ボランティア活動の意義や到達目標などを考えさせた後に、実際の活動に参加させるようにしている。 		
授業の評価方法	出席、ボランティア実践、活動報告レポートなどを総合して評価。		
授業のサポート体制	教員が紹介しているボランティア活動については、活動によって、事前学習の時間を設けている。また、ボランティア活動終了時に提出する報告書に加え、報告会を設定し、履修者全員で、各個人の活動内容や体験、ボランティア活動を通して学んだこと等を共有する機会を設けている。		
学外の関係機関・団体との連携	ネットワーク多摩の学生教育ボランティア、教員が関わっているボランティア活動などを積極的に紹介している。また、ボランティア募集の依頼があった施設については、科目担当教員が施設の組織概要や活動内容等を確認した後、学生へ紹介している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 川村学園女子大学

授業科目名	市民参画論(1)		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア、NPO・NGO、人口統計、高齢化問題	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間文化学部2～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計39名（女子学生39名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	少子高齢化が進む中で、ボランティア活動が重視されています。ボランティア活動の性格は自主性、社会性、無償制、先駆性などと分析される。幅広い活動の重要性を理解し、参加について考えます。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> オリエンテーション ボランティアとは何か？（ボランティアは恋人に似ている） ボランティア活動の歴史 ボランティア活動の実例(1)日本海重油流出事故 ボランティア活動の実例(2)学生の途上国支援のボランティア活動がNPO法人へ発展 ボランティア活動の実例(3)病院ボランティア 「ボランティア国際年(2001年)」の意義 ボランティア活動が注目される背景 ボランティア活動に参加するには 地域のつながりとボランティア活動 企業の社会的責任(CSR)とボランティア活動 「思い」をつなぐボランティアコーディネーターの役割 貧困、飢餓など地球規模問題解決とボランティア活動 まとめ 		
教科書	安藤雄太監修「ボランティアまるごとガイド」(ミネルヴァ書房)随時、プリントを配布します。		
授業の工夫点	①ボランティアについての認識を共有するため、黒板に内容を書かかせて、発表させる②ボランティア活動を身近に感じてもらうため、それに関する新聞記事の概要や感想を書かせ、ポイントを印刷して配布し、活動をシェアする③授業の後、コメント、感想を書かせ、ユニークなものを紹介する④映像を見せて、参加を促す一などの工夫をしています。		
授業の評価方法	①出席状況②授業中のミニレポートや感想文③期末試験で総合的に評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	市民参画論(2)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア、NPO・NGO、人口統計、高齢化問題	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間文化学部 2～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計17名(女子学生17名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	営利を目的とせず、社会的使命を掲げて活動している非営利組織(NPO)や非政府組織(NGO)が重視されています。その背景、現状を学び、参加する方策を考えます。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. NPO、NGOとは。ボランティアとの関係は？ 3. 特定非営利活動促進法(NPO法)のあらまし 4. NPO法人の活動の実際 5. 「もし世界が100人の村だったら」と北海道洞爺湖サミット 6. ミレニアム開発目標とNGO(1)＝貧困削減への取り組み 7. ミレニアム開発目標とNGO(2)＝生涯にわたる女性の健康と乳幼児死亡 8. ミレニアム開発目標とNGO(3)＝HIV/エイズへの取り組み 9. ミレニアム開発目標とNGO(4)＝援助から共生へ 10. 政府開発援助(ODA)とNGO 11. コミュニティービジネスとNPO 12. NPOと行政、企業との協働 13. 市民がつくる新たな社会 14. まとめ 		
教科書	テキストは、定めません。授業ごとにプリントを配布します。		
授業の工夫点	NPO、NGOの活動を認識してもらうため、上記市民参画論(1)に記載した①②③④に加えて、10月に日比谷公園で開かれた「グローバルフェスタ2008」、代々木公園での「NPOまつり2008」のチラシを配布、会場へ出掛けてNPO、NGOのスタッフ、ボランティアと話しをすることを勧めました。		
授業の評価方法	①出席状況②授業中のミニレポートや感想文③期末試験で総合的に評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	総合講座(1)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	哲学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部、教育学部、人間文化学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計24名(女子学生24名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	本学の建学の精神－感謝の心 女性の自覚 社会への奉仕－を、創立者の伝記とともに学び、その現代的意義を考察します。その上で、それぞれの自己理解と女性の生き方を検討します。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 建学の精神…感謝の心 女性の自覚 社会への奉仕 2. 創立者 川村文子先生の伝記 3. 感謝の歌 4. 感謝の舞 5. 現代社会と女性の自覚 6. 自覚ある女性と社会への奉仕 7. 地域社会への奉仕－市内道路清掃の実践 8. 女性の感性と花を愛する心 9. 女性の健康と食物 10. 女性の装いと気品 11. 女性と言葉遣い－敬語を中心に 12. 社会福祉とスポーツレクリエーション 13. 高齢者のレクリエーション－折り紙 14. 女性と趣味－「椿姫」の鑑賞と解説 15. 建学の精神を学んで 		
教科書	特に定めません。講義の中で資料を配布します。		
授業の工夫点	講義だけでなく、実際に学外へ出て、清掃作業をすることによって、その意義を体験する。		
授業の評価方法			
授業のサポート体制	学外へ出て清掃を行う場合は、10名位の教員と職員が出てサポートをします。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 恵泉女学園大学

授業科目名		ボランティア入門(クラス数:4)	
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部(1,2年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計199名(男子学生0名 女子学生199名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	現代社会において、ボランティアが築く「市民社会」は、行政や企業とは行動原理を異にする、共生社会を築くための“社会力”として、人・コミュニティ・地球社会をネットワークしています。本講義では“私が変わる社会は変わる”をキーワードにして、ボランティア社会の現状と課題を学び、自分と社会のよりよい関係の在り方を探っていきます。		
授業内容	第1回「ボランタリー社会学を学ぶために」①講義ガイダンス②ジャーナリスト・ボランティア推進機関で何を経験したかを解説/第2回「出会いのワークショップ」①発見！私のボランティアタイプ②コミュニケーション・トレーニング③討論グループづくり/第3回「人はなぜボランティアをするのか」①ボランティアの“自己啓発力”を考える②「ボランティア動機」の自己診断/第4回「自分探しの旅の時代へ」①“意味ある自分”と出会う②心理学的考察と“内発的動機”③自己実現の世界/第5回「ボランティアの歴史を築いた人びと」①アレック・ディクソンの夢見た世界②ボランティアの誕生と歴史③統計からみた姿/第6回「ボランティアの理念と市民社会の役割」①ボランティア理念を考える②市民社会とは何か③ボランティアとNPOマネジメント/第7回「はじめてのボランティアのために」①ボランティアイメージの自己診断②情報の探し方③ボランティアセンターを10倍活用する方法/第8回「ボランティアマナー・トレーニング」①ボランティアマナーを提案する②グループでつくる“オピニオンパネル”/第9回「ボランティアマナー・トレーニング」①“オピニオンパネル”の完成②グループによる発表会③ポスターセッションのふりかえり/第10回「共に生きる福祉社会をめざして」①いのちの最前線から②社会福祉問題に挑戦するボランティア・NPOの現状と課題を探る/第11回「子どもが育つ社会を創造する」①子どもに何が起きているか②“地域の居場所”冒険遊び場③“心の居場所”チャイルドライン/第12回「学校はいまボランティア学習の時代」①生きる力とボランティア学習②イギリスの市民教育③アメリカのサービスマナー/第13回「地球社会に広がるボランティアネットワーク」①国際ボランティアのすすめかた②食料支援の現場から③国連ボランティア/第14回「企業の社会責任とフィランソロピー」①企業はなぜ社会貢献するのか②日本企業の取組の現状と課題③ボランタリー社会への提案		
教科書	『希望へのカー地球市民社会の「ボランティア学」』(興相 寛著・光生館発行)		
授業の工夫点	授業においては、理論的な学習だけでなく、ボランティア活動の最前線をレポートした映像資料による事例研究をもとに、活動をはじめするための基礎知識や、現場で役立つ実践方法などについても探究していきたくと思います。 また、グループワークやポスターセッションなどの参画型ワークショップをとおして、学生が主体的に考え判断し、意見を交換し共有することを大切にする授業をすすめていきたくと考えています。 このような、理論学習・参画型ワークショップ・映像探訪によってカリキュラム構成されている講義は、なによりも学生諸君の積極的な参加意識が大切です。		
授業の評価方法	講師の提示するテーマにもとづきレポートを提出してください。成績評価の方法は、授業の出席率や参加態度はもとより、①授業の理解度と成果の反映性②論文の独創性③批判的視点や検証性④社会への提案性などを基準にして判定します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		サービスマナー方法論(クラス数:2)	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	環境・コミュニティサービスマナー	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部(国際社会学科1,2,3年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計52名(男子学生0名 女子学生52名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	3時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	私たちの生活の基盤である地域社会にはさまざまな課題があります。市民による自発的な活動を手がかりに、コミュニティの課題を発見し、解決方法を探る実践的な知識と能力を学びます。		
授業内容	総論的な講義の後、フィールドワークを含むワークショップで多摩の地域課題及び、課題と取り組む市民活動の研究、体験学習を実施します。授業は演習、グループワーク形式で行います。 (1)サービスマナーとは何か。 (2)現代社会とコミュニティの課題。 (3)多摩地域での市民活動を知る どこで、誰が、どのような活動をしているか。 (4)地域課題の発見の実習 (5)多摩地域の市民活動の体験 (6)体験のふりかえりと分かち合い		
教科書	特定のテキストを用いません。随時プリントやワークシートを配布します。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業参加40点、レポート30点、自発性、積極性など態度・意欲30点		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地域の市民活動に入って作業体験を行う。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティサービスラーニングⅠ、Ⅱ、Ⅲ(各2クラス)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	環境論・コミュニティサービスラーニング	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部(国際社会学科2,3,4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計14名(男子学生0名 女子学生14名)	授業区分	実習
単位数	各1	ボランティア体験の時間数	各50時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代社会諸問題を解決するうえで、市民による自主的な活動が目立っています。CSLⅠでは、地域の市民活動に参加することにより、講義では得られない気づきや学びを促し、実践的な知を身につけます。		
授業内容	受講者が自らの関心と適性に応じた地域での活動に参加し、そこで得た学びと気づきをふりかえり、社会と自分のつながりをつくります。実習計画書を作成した後、50時間以上の体験と、1時間のふりかえりを行います。実習の時期は、受講者の都合によって、土日や授業の無い日に行うことも、春休みや夏休み期間に集中的に実施することもできます。実習の際は、大学や自宅の近くなど受講者の活動しやすい所を選ぶことができます。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポートと面接により以下の内容を評価します。1)体験を通じた学びの深まり40点、2)コミュニケーションや規範の遵守など社会的能力の獲得40点、3)自発性や積極性など、態度・意欲30点		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地域の市民活動に入って作業体験を行う。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	平和構築論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部(国際社会学科2,3年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計94名(男子学生0名 女子学生94名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	21世紀になって国際ボランティア活動は、ますます重要になってきている。グローバル化が進む一方で、貧困や環境など地球規模の課題はますます解決から遠ざかっている。この深刻な状況に対し、社会開発分野での活動を中心に担う国際ボランティアへの期待が高まっている。しかし、国際ボランティアの存在が大きくなり、実際に社会に対する影響が高まるにつれ、NGO・NPOのアカウントビリティや正統性が議論される様になってきた。海外では、国際ボランティアの存在意義を根底から問い直す議論も起こり始めている。この授業では、具体的な事例をもとに国際ボランティアの基礎から最新の動向まで幅広く紹介し、国際ボランティアの意義とその現代社会における役割について理解する。		
授業内容	講義中心であるが、概念学習に終わらず、国内外の様々なNGO・NPO活動の事例を紹介することで、具体的な実践的な知識が身に付くように学んでいく。まずは国際ボランティアが取り組む地球規模の課題とは何かを理解する。その上で、その課題に政府や企業に取り組むことの可能性と限界について理解する。ボランティア活動の紹介では、実際の現場では何が問題かを的確に把握すること、それに対する答を仲間と共に導き出す能力が必要なることを体験的に理解できるよう、学生が主体的に考えての意見発表や質疑応答、グループディスカッションに多くの時間を割く。		
教科書	プリント及び映像資料を活用する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業態度、出席状況、討論参加、中間・期末レポートなどで総合的に判断する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際ボランティア組織論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	平和構築論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部(国際社会学科2,3年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計68名(男子学生0名 女子学生68名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア活動の基本的価値は、個人の自主性・自発性にあるが、個人として限界のある社会貢献活動の効果を高めるために組織が必要となる。しかし、組織というものには本質的にはボランティアの特性と相容れない点があるのも事実である。市民社会において、ボランティア組織が成長していくためには、これらの課題を組織自らの創意工夫のみならず、社会全体でどのように環境を整えていくかが問われている。国内外の事例に基づき、様々な課題への取り組みを紹介しながら、今後の日本のボランティア組織のあり方を考えていく。政府や企業と異なるボランティア組織が持つ特徴を踏まえながら、組織論の基礎を体系的に学ぶことを目的とする。		
授業内容	前半は講義中心であるが、概念学習に終わらず、NGO・NPOが直面する具体的な現在の課題についてグループディスカッションしながらボランティア組織の特性についても学んでいく。後半は、活動の内容と組織的課題の関係について事例を紹介すると同時に、グループ毎にボランティア組織の課題の解決策についてグループ作業をし、最後にその結果を発表してもらう。		
教科書	毎回、プリントを用意する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業での態度、出席状況、レポートなどで総合的に判断する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGO・NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	平和構築論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間社会学部（国際社会学科2,3年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計135名（男子学生0名 女子学生135名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	国際協力NGOとは、一体何か。国内外の様々なNGO・NPOの活動事例を紹介しながら、私たちが暮らす社会で不可欠な存在となってきたNGO・NPOというものの意義と役割を理解します。		
授業内容	NGO・NPOの大事な特徴のひとつは多様性です。従って、この授業では、できるだけ多くの具体的なNGO・NPOの活動を紹介していきます。毎回の基本構成は、取り組む課題の概説とNGO・NPO活動の紹介という組み合わせです。講義中心ですが、授業時間の約1/3は質疑応答にあてて、一方的な情報提供にならないようにします。また、NGO関係者を外部講師として授業に招いて、直接話を聞く、質問する機会を設けます。		
教科書	「[連続講義]国際協力NGO」(今田克司・原田勝広編著、日本評論社、2004年)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への参加状況(出席、コメントカードへの記入など)とレポート・感想文によって総合的に判断する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東洋英和女学院大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間福祉学科3・4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計44名（男子学生0名 女子学生44名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講座では、多様なボランティア活動の事例を取上げながら、現代社会におけるボランティア活動や市民活動の意義と可能性について検討する。 また、ボランティアのあり方、ボランティアの組織化、ボランティア活動を支援する仲介支援組織の役割やコーディネーションの重要性についても触れる。		
授業内容	第1回 オリエンテーション ・ ボランティアを考える現代的視座について 第2回 コミュニティとボランティア活動 第3回 現代社会とボランティア活動 第4回 家族とボランティア活動 第5回 人権思想とボランティア活動 第6回 アメリカ合衆国における公民権運動とボランティア活動 第7回 発展途上国支援とボランティア活動 第8回 沖縄の歴史・現状とボランティア活動 第9回 障がい者理解とボランティア活動① 第10回 障がい者理解とボランティア活動② 第11回 ホームレスの自立支援とボランティア活動 第12回 人権擁護とボランティア活動 第13回 趣味的活動とボランティア活動 第14回 ボランティア支援組織(ボランティアセンター等)の役割とボランティア活動 第15回 試験		
教科書	池田幸也著『現代ボランティア論』(久美株式会社,2006年9月)		
授業の工夫点	ボランティア活動経験の有無に関わらず、ボランティア活動について何らかの興味をもっていることが望まれる。また、講義を参考に、ボランティア活動をはじめ地域社会における活動や調査・研究などに学びを活かすような積極的学習態度を期待する。		
授業の評価方法	毎回提出するミニレポート及び試験により評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 駒沢女子大学

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	法学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部国際文化学科3.4年	授業のレベル	初級・入門、中級・応用、上級
平成20年度履修者数	計17名（男子学生0名 女子学生17名）	授業区分	講義、実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際協力NGOの果たす役割と方向性などについて学習する。		
授業内容	1.ボランティアの思想、活動、歴史的背景を学ぶ 2.緊急人道支援、難民救援 3.開発協力、環境協力 4.平和関連協力 5.政府との関係、NGO間のネットワーク（課題と方向性） 6.NGO、NPO団体訪問		
教科書	特に使用せず		
授業の工夫点	在京NGO団体を訪問する実習後に総括討論とレポートとりまとめを行う。		
授業の評価方法	出席30%、小論文30%、実習40%で評価		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 学習院女子大学

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	国際文化交流学部（日本文化学科1年次～、国際コミュニケーション学科1年次～、英語コミュニケーション学科1年次～）	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計10名（男子学生0名 女子学生10名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	9時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	災害、戦争などの緊急支援活動などを通じ、また近年の環境問題において話題になるNGO (Non-Governmental Organizations) = 非政府組織だが、日本では社会のセクターとして認知されてまだ日が浅く、その幅広い活動や考え方は、十分に知られていない。 そこで、長くラオスで識字教育分野の協力支援を続けている、「特定非営利活動法人ラオスのこども」の活動を実際に体験することで、NGOとは何か、どのようなことを考えているのか、何を目的にしているのか、どのような活動をしているのかを学び、ボランティア活動を理解した上で、自らがボランティアとして担うイベントを立ち上げる。 具体的には、NGOの活動分野、スタイル、さまざまな考えなどを授業で学んだ上で、「ラオスのこども」東京事務所でも業務補助体験をおこなうとともに、学内でのイベントプログラムを企画立案し、準備活動を経て実施する。 この授業は、教室での講義と学外での活動とにより構成される。学外での授業は、一回に約2コマ分の時間をかけるものとする。		
授業内容	授業計画は、変更になることがある。学内での講義以外は、基本として大田区にある特定非営利活動法人ラオスのこどもの事務所にて、実務体験をおこなうことになる。 第1週 体験的ボランティア論 講義 第2週 さまざまなNGO活動 講義 第3週 教育支援NGOの活動とは 講義 第4週 活動計画を作成する 講義 第5週 実務体験とイベント企画 学外 第6週 ↓ 以下の期間は、毎週定期的の実習をおこなうとは限らない 第7週 ↓ 第8週 " 第9週 " 第10週 " 第11週 " 第12週 " 第13週 " 第14週 " 第15週 活動を総括し評価する 講義		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への参加態度による。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	特定非営利活動法人ラオスのこども		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
授業科目名	ボランティア論 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際開発論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	国際文化交流学部 (国際コミュニケーション学科2年次～)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計34名 (男子学生0名 女子学生34名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	阪神大震災後、ボランティア活動が大きく浮き彫りにされており、「ボランティア」という言葉がまさに市民権を得たと言える。共生がキーワードの21世紀、共に生きる社会を実現する働きがこのボランティア活動にある。ボランティアというものが一体何なのか、自己満足のための活動であるのか、あるいは双方向の経験であるのか、を考える講義とする。		
授業内容	第1週 インTRODクシヨン 第2週 ボランティアを考える - その思想とことばの変遷(1) 第3週 ボランティアを考える - その思想とことばの変遷(2) 第4週 ボランティア活動とは何か(1) 第5週 ボランティア活動とは何か(2) 第6週 なぜボランティア？ 第7週 教育とボランティア(2) 第8週 ボランティアの責任(1) 第9週 ボランティアの責任(2) 第10週 フィランソロピー(1) 第11週 フィランソロピー(2) 第12週 ボランティアの展望 第13週 まとめ		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業後の小ペーパー(複数回・出欠席確認を含む)、レポートあるいは試験を総合的に評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名			
授業科目名	ボランティア論 II		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際開発論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	国際文化交流学部 (国際コミュニケーション学科2年次～)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計41名 (男子学生0名 女子学生41名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	今日、社会の多様な分野で積極的な市民参加が行われており、NPO(非営利組織)やNGO(非政府組織)などの非営利・非政府の新しい社会セクター(市民セクター)が目ざされている。こうした市民組織の存在が今後のよりよい社会づくりに向けて不可欠であるとの認識は一般化しつつある。しかし、組織数やその役割が増大しながらも、欧米の組織と比較すると、組織・資金力ともに貧弱であり、こうした市民組織の強化が必要である。本講義では、NPOが存在する意義や背景を検証しながら、その活動の役割や現状と課題について理解を促すことが目標である。		
授業内容	第1週 インTRODクシヨン 第2週 どの組織がNPOか 第3週 日本のNPO 第4週 なぜNPOなのか 第5週 " 第6週 NPO法人(1) 第7週 NPO法人(2) 第8週 アメリカのNPO(1) 第9週 アメリカのNPO(2) 第10週 先進国のNPO 第11週 途上国のNPO 第12週 NPOが直面する課題 第13週 まとめ		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業内で書く小ペーパー(複数回実施・出欠席確認をかねる)、レポートあるいは試験を総合的に評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際文化交流実習ⅩA(海外ボランティア)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	英米映像文化論	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	国際文化交流学部(日本文化学科1年次～、国際コミュニケーション学科1年次～、英語コミュニケーション学科1年次～)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計46名(男子学生0名 女子学生46名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	15時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	語学研修と同時に、現地大学スタッフ等の協力の下、環境・文化・教育などに関連するボランティア活動を行う。授業とは違う環境で、様々な体験学習をしてもらうのが目的である。もちろん事前指導が現地で行われる。日本では経験できない体験を機に、新たな視点、考え、認識が生まれる可能性を秘めた実習になるよう心がけたい。		
授業内容			
教科書	なし		
授業の工夫点	事前打合せを現地と綿密に行なっている。		
授業の評価方法	レポートと実習態度		
授業のサポート体制	事前・事後のサポートを行なう。		
学外の関係機関・団体との連携	現地の教育委員会やNGO		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際文化交流実習ⅩB(海外ボランティア)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	英米映像文化論	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	国際文化交流学部(日本文化学科1年次～、国際コミュニケーション学科1年次～、英語コミュニケーション学科1年次～)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計49名(男子学生0名 女子学生49名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	15時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	語学研修と同時に、現地大学スタッフ等の協力の下、環境・文化・教育などに関連するボランティア活動を行う。授業とは違う環境で、様々な体験学習をしてもらうのが目的である。もちろん事前指導が現地で行われる。日本では経験できない体験を機に、新たな視点、考え、認識が生まれる可能性を秘めた実習になるよう心がけたい。		
授業内容			
教科書	なし		
授業の工夫点	事前打合せを現地と綿密に行なっている。		
授業の評価方法	レポートと実習態度		
授業のサポート体制	事前・事後のサポートを行なう。		
学外の関係機関・団体との連携	現地の教育委員会やNGO		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東京女学館大学

授業科目名		ボランティア活動と政策	
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際教育協力	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	国際教養学部（国際教養学科1～4年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計6名（男子学生0名 女子学生6名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	3時間
必修・選択の別	必修選択		
授業目的	ボランティアの意義の理解		
授業内容	第1週 授業の説明 第2週 ボランティアの思想 第3週 ボランティア活動の歴史的背景 第4週 ボランティア団体の組織と運営 第5週 教育とボランティア 第6週 災害とボランティア 第7週 高齢者とボランティア 第8週 障害者とボランティア 第9週 開発・人権とボランティア 第10週 開発NGOとボランティア 第11週 難民・災害医療とボランティア 第12週 青年海外協力隊と国連ボランティア 第13週 ヨーロッパのボランティア・セクター 第14週 アメリカのボランティア・セクター 第15週 評価・筆記試験		
教科書	世界思想社の「ボランティア学を学ぶ人のために」(内海成治他編)		
授業の工夫点	サービスラーニングを3時間以上課している。		
授業の評価方法	準備40%、参加40%、筆記試験20%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東京医療保健大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	医療保健学部（看護学科・医療栄養学科・医療情報学科）1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計291名（男子学生45名 女子学生246名）	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修		
授業目的	<p>こんにちは、ボランティア活動に対する国民の関心は高くなり、多様な人々がボランティア活動に参加する機会を得るようになってきた。とはいえ、誰もが気軽にボランティアに参加できるようにするためには、活動推進の方策が必要とされている。この授業を通じてコミュニティワークや地域福祉の推進にとって不可欠な、ボランティアについて理解を深める。「ボランティアの究極の娯楽」という考えもあります、何故なのか一緒に考えていきましょう。</p>		
授業内容	<p>出来るだけ一方通行の授業ではなく、学生とやり取りしながら進めていく参加型授業を目指します。さらに、時々視聴覚教材（ビデオ）を活用した解説をしたいと思います。 文字斜体は教科書第三章のタイトルです、事前に読んでおくこと。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 科目説明、ボランティア活動のイメージ 大学等におけるボランティア活動支援の実態と課題 ワークショップ「ボランティアって何色」「ボランティアにみそ汁の差し入れ」 ② ボランティアの理念とサービスマンシップ 多文化共生社会の形成とボランティアの役割 ワークショップ「ボランティアにとって大切なものは何」 ③ ボランティア活動の現状と課題 地域福祉推進における連携のあり方 ワークショップ「100人の避難所に50個のリンゴ」 ④ ボランティア情報の検索とコンタクト インターネットを使って＜パソコン持参＞ 持続可能な地球環境のための環境ボランティア活動 分野別のボランティア活動と団体紹介（社会福祉／環境／災害／文化・教育／国際／地域づくり） 選択で「ボランティア活動」をとる人は活動体験先を探しましょう ワークショップ「私のエコロジー生活宣言」 ⑤ ボランティア活動に関する制度や政策動向とフルタイムボランティア 青年長期ボランティア計画について（DVDを使用） ワークショップ「ビデオの感想を聞く」 ⑥ 新しい公共を創り出す 「新しい公共を創り出す」協議・協働を促進する中間支援組織の役割 ボランティア活動・NPOの概念と各国のボランティア事情 ⑦ ボランティア推進機関とコーディネーター 日本におけるVコーディネーターの現状と課題 市民自治を目指して 		
教科書	「ボランティア白書2007」日本青年奉仕協会		
授業の工夫点			
授業の評価方法	3分の2以上の出席、レポートにより評価 毎回ミニレポートがあり、試験に加味して評価する。 ＜試験＞ミニ論文「私の考えるボランティア論 ボランティアって何」といくつかの用語解説		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 愛知大学

授業科目名	ボランティア入門(ボランティア活動論)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉方法論	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部(人文社会学科)、経済学部(経済学部)、国際コミュニケーション学部(言語コミュニケーション学科、比較文化学科) ※各学部とも2年次以上	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計285名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	従来わが国ではボランティア活動という「立派な人」による「高い志」を掲げた「奉仕活動」というイメージが強く、取り組むには敷居が高かったように思う。しかし阪神大震災などを契機としてボランティア活動へ参加する人や活動分野が広がりをみせ、その敷居も低くなりつつある。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ボランティアの基本を理解する 3. ボランティアの活動領域と活動状況 4. さまざまなボランティア活動①-国際ボランティア組織・NGO 5. さまざまなボランティア活動②-環境保全・自然保護 6. さまざまなボランティア活動③-災害対策 7. さまざまなボランティア活動④-文化・芸術 8. さまざまなボランティア活動⑤-児童の育成・教育 9. さまざまなボランティア活動⑥-平和・人権・民主主義の擁護 10. さまざまなボランティア活動⑦-ハンディキャップを持つ人の支援 11. ボランティア活動を支える制度や組織 12. ボランティア活動をめぐる諸問題 13. 私たちとボランティア活動 14. 講義のまとめ 		
教科書	<テキスト>指定しない		
授業の工夫点			
授業の評価方法	原則として学期末試験によって評価する。受講態度に問題のある場合は評価に反映させる。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 愛知学院大学

授業科目名	国際ボランティア入門		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部グローバル英語学科	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	受講者が国際ボランティアについて認識を深め、自分にあった国際ボランティアを見つけ、行動できるための素養を身につける。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「ボランティアとは？」 2. 世界の現状概観 3. 国際協力概論 4. 国際ボランティア概論 5. 隊員OBOGの話その1 6. 青年海外協力隊の仕組み 7. NGOとは？ 8. NGOの話 9. 地球のステージ 10. 海外のボランティア 11. 隊員OBOGの話その2 12. NGOの話 13. まとめ・その1 14. まとめ・その2 		
教科書	随時指示		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

○ 金城学院大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域福祉・社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部・全学年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計176名（男子学生0名 女子学生176名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	1 「ボランティア活動入門」として、ボランティア活動に参加するために必要な知識を得る。 2 実際にボランティアに参加する学生は、ボランティア体験をまとめ、授業で学んだ知識と照らし合わせることで、サービス・ラーニングを行う。		
授業内容	まず、ボランティアとは何か、動機と成果などボランティアについての基本的な考え方を学び、次いで貧困や高齢者など分野別でボランティアについて学ぶ。そして最後にボランティアの現実と課題やボランティアセンターの活用の仕方などを学ぶ。 第1回 オリエンテーション 第2回 マザー・テレサを見る 第3回 ボランティアとは何か 第4回 ボランティアの動機と成果 第5回 ホームレスとボランティア 第6回 高齢者とボランティア 第7回 「こんな夜更けにバナナかよ」を読む 第8回 AJU自立の家の話 第9回 子どもとボランティア 第10回 災害ボランティア 第11回 国際ボランティア 第12回 ボランティアの現実と課題 第13回 ボランティアセンターに行こう 第14回 社会を変えるボランティア		
教科書	授業で資料を配布する。		
授業の工夫点	サービス・ラーニングを行う。		
授業の評価方法	1.出席は毎回とるが出席点としてはカウントせず、試験受験(レポート提出)の資格の有 無を判断するために用いる。 2.14回中5回の授業でミニレポートを課す。各レポート10%×5=50% 3.最終レポート50%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 椋山女学園大学

授業科目名	福祉ボランティアⅠ・Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	保育学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	教育学部1・2年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計70名（男子学生0名 女子学生70名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	学生の多様な経験の場を提供し、経験に裏打ちされた実践力を身に付けた教員を養成するため。		
授業内容	<p>1.授業ガイダンス 2.ボランティア先ガイダンス 3.書類（ボランティア活動登録書）提出 4.ボランティア活動 5.書類（ボランティア活動報告書・ボランティア活動証明書の作成）提出 6.中間報告会（年間3～4回実施） 7.最終報告会 8.最終レポートの提出</p> <p><注意事項> 1. 次の諸施設でボランティアを希望する者は「福祉ボランティア」に登録すること *保育所 *幼稚園 *社会福祉施設 *児童館 *子育て支援関連のもの *学童保育 *その他 以上以外で希望があれば担当教員に相談すること</p> <p>2. ガイダンスや中間報告会の日程はS*mapおよび掲示板にて指示するので、確認のうえ必ず出席 すること。 3. ボランティア活動場所が決まったら、「ボランティア活動登録書」を担当教員に、その写しを教務課に提出すること。書類が不備の際は、単位認定されないことがあるので注意すること。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	各幼稚園、保育所と連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	教育ボランティア I・II		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	教育学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	教育学部1・2年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計119名(男子学生0名 女子学生119名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	学生の多様な経験の場を提供し、経験に裏打ちされた実践力を身に付けた教員を養成するため。		
授業内容	<p>1.授業ガイダンス 2.ボランティア先別ガイダンス 3.書類提出(ボランティア活動登録書) 4.ボランティア活動の実施(ボランティア活動報告書・ボランティア活動証明書の作成) 5.中間報告会(年間3~4回) 6.最終報告会 7.最終レポート(報告書用原稿)の提出</p> <p>【注意事項】 1.次の諸施設でボランティアをすることを希望するものは「教育ボランティア」に登録すること。 *名古屋市「トワイライトスクール」 *名古屋市「ふれあいフレンド」 *夏休みに実施される「子どもキャンプ」 *相山女学園大学附属小学校の「野尻湖生活」 *名古屋市以外の学校ボランティア</p> <p>2.ガイダンスや中間報告会の日程はS*mapおよび掲示板にて指示するので、確認のうえ、必ず出席すること。 3.活動場所が決まったら、「ボランティア活動登録書」を担当教員に、その写しを教務課に提出すること。書類不備の場合は単位認定されない場合があるので注意すること。</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	名古屋市主催のボランティア事業との連携、附属小学校との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 中京大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	環境・健康社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	現代社会学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計65名	授業区分	講義とグループワーク併用
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>1.「ボランティアはやってはいけない!」というメッセージの含意。今日の社会運動の代表例とされるボランティアに関して批判的考察を通じて、現状を知ってもらう。 2. 現代の私たちが自明視するさまざまな権利や社会制度が、どのような運動を通じて成立してきたのかを、歴史のなかの具体例を通じて学習する。 3. 現代のさまざまな社会運動の実践例を、映像資料と現場の声(テキストのコラム欄)を通じて知ること。</p>		
授業内容	<p>1 社会運動は社会をつくる? 2 未来の「預言者」としての社会運動 リスク社会の啓示 3 社会問題を「発見」する社会運動 4 なぜ人は社会運動に関わるのか? 5 ボランティアから反戦デモまで 6 国際NGOの組織戦略 7 「住民投票」という名の常識へ 8 社会運動と政治 9 社会運動とメディア 10 非日常と日常のはざままで 11 社会運動から政党へ? 12 自由の夢 13 社会運動のあゆみ 14 現代世界の構造変動と社会運動の潜勢力 15</p>		
教科書	大畑嗣ほか編著 2004『社会運動の社会学』有斐閣		
授業の工夫点	基本的には、講義とグループワークによる報告会を併用する。初回・最終回以外は、すべて学生グループによる共同報告を中心に、教員が適宜、補足説明と資料提供などを行う。		
授業の評価方法	学生グループによる共同報告(70%) 講義時間中のワークシート(30%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域社会論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	現代社会学部2・3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計92名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地縁組織である町内会・自治会や住民組織をその存立基盤である日常生活の共同性から理解する。「住む」ということから生まれる共同性と地方自治制度という国家編成のつながりを具体的に理解すること。		
授業内容	1 平成の合併と地域社会の再生 2 地域社会の重層性 3 地域社会の機能1 4 同2 5 同3 6 同4 7 町内会・自治会の歴史1 8 町内会・自治会の歴史2 9 高度成長とシビルミニマム論 10 コミュニティ政策 11 地縁組織の特徴と評価 12 分権化政策と協働概念 13 地域社会と社会参加「参加する社会」とは 14 まとめ 15		
教科書	参考文献等はその都度紹介する。また配布資料として提示する。		
授業の工夫点	テキストを基本にして、地域生活の共同性(その仕組みと活動)の具体的事例を提示して、これが地方自治制度と結びついており、現在はその結びつきの変革期にあることを理解できるように努める。理解度と出席の確認を兼ねたミニレポートを5回以上課す。		
授業の評価方法	定期試験(80%) 出席状況(20%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際理解教育論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際理解教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	現代社会学部2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計44名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	私たちを取り巻く問題、すなわち平和や環境、他者との共生や未来について、知識だけではなく、問題に取り組むための意欲・態度・技能を養います。 具体的には3つの分野に関わる力 ・自分に関わる力: 自尊、自己理解など ・他者に関わる力: コミュニケーション力、他尊、相互理解など ・社会に関わる力: 協力、対立解決能力、社会的提言能力など		
授業内容	国際理解教育とは何か「国際」「理解」「教育」という3つの視点から国際理解教育のめざすものを確かめます。 2 相互理解とコミュニケーション 3 自立と共生・自尊感情と他者理解 4 人権のために人権を学ぶ 5 人権が尊重される社会を築くために 6 豊かさと貧困 7 援助とは何か 8 環境感度 9 地球の有限性と持続可能性 10 共有物「地球」の使い方 11 対立から学ぶ 12 平和を創り出す私たちⅠ 13 平和を創り出す私たちⅡ 14 参加の多様性 15		
教科書	ありません。		
授業の工夫点	講義形式ではなく、全回ワークショップ(双方向の対話形式、参加体験型)で進めます。受講者ひとりひとりが安心していられる信頼感のある場で、「考える」「伝える」「聴く」「関わる」など「自分をふりかえり他者から学ぶ」ことをていねいに積み上げ、授業目標の力を育成します。		
授業の評価方法	平常点(50%) 課題・レポート(50%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		市民活動各論Ⅱ	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会人類学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	現代社会学部2・3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計35名	授業区分	演習、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	4時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	1 キャンパス内だけでなく、キャンパス近くの施設等へかけて行って、市民活動に関わる方々のお話をうかがい、市民活動に関する知見を深める。 2 インタビューの仕方や成果のまとめ方など、市民活動にとって大切な方法を身につける。 3 市民活動ができる身体を作る。		
授業内容	1 知り合いになろう 2 市民活動ってなんだろう？ 3 市民活動の学び方 4 大根鉄砲をつくろう 5 インタビューをしてみよう 6 エコマップを作ってみよう 7 保見交流館の仕事 8 中間ふりかえり 9 保見団地へ行こう 10 日進市の市民活動 11 豊田市の市民活動 12 エコ生活ってなに？ 13 まちづくりと市民活動 14 成果を語り合おう 15		
教科書	なし。授業中に指示することがあるかもしれません。		
授業の工夫点	参加型の授業を主とし、すぐれたまちづくりコンサルタントである加藤栄司さん、加藤武志さん、川合真二さんの3人が、みなさんを楽しませるまちづくりの世界へご案内します。		
授業の評価方法	毎回作成する受講レポート(50%) 最終回に提出する課題レポート(50%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	保見交流館、とよた市民活動センター等でインタビューを行う。		
今後の授業の継続	今後も継続(学外の関係機関・団体は、毎年変更)		

授業科目名		多文化共生フィールドワーク	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	比較文化論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	現代社会学部1～4年次	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計0名	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	15時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	この科目は、自身の身体を動かして活動するフィールドワークの実践科目です。まず現場を体験し、そこからグローバル化する現代社会を文化の観点から考える端緒とすることが、この科目の目標です。フィールドワークの成果をまとめるためには、日々の活動記録をきちんと取っておくことが必要です。履修許可を得て活動を始めたら、その日の内に記録を作成するようにしてください。記録は活動期間中も、フィールド・リサーチ・センター(FRC)の職員や科目担当教員に見せて、指導を受けてください。単位取得条件の一つは「30時間以上活動すること」ですが、これは、「きちんとした活動記録のある活動時間が30時間以上」という意味です。活動を始めた直後から、記録作成の指導を受ける必要があります。お世話になった団体には、活動報告をするべきです。この科目の単位取得のために作成された活動報告書は、お世話になった団体にも提出することになります。		
授業内容	1～15 実習科目です		
教科書	菅原和孝『フィールドワークへの挑戦』世界思想社 宮内泰介『自分で調べる技術』岩波アクティブ新書 その他・鯨岡峻『エピソード記述入門』東京大学出版会		
授業の工夫点	学外の団体でフィールドワークを実施します。受け入れ団体によって活動内容は異なります。活動時間は30時間以上で、活動期間中時折フィールド・リサーチ・センターに活動記録を提出し、記録の書き方などについて指導を受けます。活動期間終了後「活動記録」(4000字以上)と「活動を終えて考えたこと」(1200字以上)を提出し担当教員の指導に従って修正した上で合同報告会で発表して下さい。		
授業の評価方法	「活動記録」(60%) 「最終レポート(活動を通して考えたこと)」(20%) 合同報告会での発表(20%)		
授業のサポート体制	履修者の希望する団体へ受入れをお願いします。		
学外の関係機関・団体との連携	履修者の希望する団体にてフィールドワークを実施します。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	仕事と自由時間の社会学		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会思想史	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	現代社会学部2・3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計225名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	若者たちの「自分探し」・「適職探索行動」、フリーターの急増やニート現象を、職業労働をめぐる社会的・経済的状況の急速な変容のなかで考える。併せてかれらの希求する「自由と喜びのある自己実現」は、社会的なかわりのなかで、創造的仕事と自由時間における創造的な精神的・肉体的能力の向上の統合に存することを論じる。この授業が一人ひとりに「働く意味」・「自由時間の重要性」について考えるきっかけになることを願う。		
授業内容	1 若者の就労とキャリア開発の問題 2 グローバル化と急変する雇用労働 3 「日本的経営」とその評価の変遷 4 非正規雇用の拡大と階層化 5 労働時間の短縮と成果主義 6 労働組合運動の低迷と新たな動き 7 男女雇用機会均等法と間接差別 8 仕事と生活の両立 9 高齢者の雇用と自由時間の問題 10 「労働」過剰と「労働」忌避 11 過労死・ホームレス・外国人労働者 12 仕事の質と自由時間の機能との関連 13 スロー・ライフと「新しい労働」 14 「働く」ことの意味 15 まとめ		
教科書	R.ドーア著『働くということーグローバル化と労働の新しい意味』中公新書、2005年 大沢真知子著『ワークライフバランス社会へー個人が主役の働き方』岩波書店、2006年		
授業の工夫点	講義形式でおこなう。そのなかでテーマごとに各人が考える時間を少し設ける。		
授業の評価方法	小テスト(10%) 定期試験(90%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 同朋大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際社会福祉論	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計49名（男子学生21名 女子学生28名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアとは何か？ーボランティアの世紀”を作るためにー 2001年は「ボランティア国際年」であった。1997年11月の国連総会で123カ国の世界各国の代表と、多くのボランティアによるこの提案が採択された。21世紀をボランティアの世紀に・・と様々な国では地道な努力が続いている。日本でも1995年の「阪神・淡路大震災」の時に、全国各地から若い人々を中心に140万人を超える人々が被災地へかけつけた。物資を送ったり募金をしたりと「後方支援」に善意を注いだ人々を加えるとその数は計り知れない。こうした市民の力は、その後、日本や世界各地で次々に起こる大きな災害時にいかされていく。この講義では、私たちの身近にあるボランティアをはじめ、世界の国々のボランティアの実態を調べ、ボランティアとは何か、なぜ今ボランティアなのか、ボランティアのこことは何か等を共に考えていく。自分たちでゼロから出発し道を作っていくむつかしさと、楽しさをあじわうために、グループによるボランティア体験を企画・実践し、その報告を通してお互いの経験をわかちあう。		
授業内容	・ボランティアとは何か ・ボランティア活動ー歴史と現状 ・様々なボランティア活動 ・ボランティア各国事情(アメリカやアジアの国々) ・「阪神・淡路大震災」「中越地震」などに学ぶものー日本の実態 ・やってみようボランティア-グループ体験 ・国際ボランティア-国連とボランティアの活動 ・ボランティア体験報告①② ・ボランティア精神-よりよく生きる ・”ボランティアの世紀”を作るために ・ボランティアの発展のための今後の課題①②		
教科書	適宜指示		
授業の工夫点			
授業の評価方法	平常点(出席・授業への積極的な参加・小レポート)50%、ボランティア体験(グループ別)とその報告発表30%、前期試験(レポート)20%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	障害者福祉論	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名（男子学生8名 女子学生11名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>ボランティア実践-真のボランティアとは— 本授業ではボランティアとは何かについて実践的に学ぶ。ボランティアは自発性を重んじること、対象者のためにあること、ボランティアをする側の動機が重要である。結果的にその行為がボランティア自身に返ってくるものだということを実践的に学ぶ。ボランティアは実践することによってその本来の意味が理解できるのであり、実践した行為を振り返ることによってその質を高めていくことを体験的に学ぶ予定である。実践、事後学習（振り返り）といった一連の流れを重んじる。対象者のことを第1に考え学生参加型の楽しい活動にしたいと考えている。尚、長年ボランティア実践を継続的にしておられる専門家の特別講師をお招きし、ボランティア実践のエッセンスをお話いただく予定である。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 事前学習 （・オリエンテーション ・動機について—なぜボランティア活動を受講しようと思ったのか— ・ボランティアとは ・特別講師の講義 ・立案、計画 ・事前準備） 実践活動 事後学習（実践の振り返り①②） 		
教科書	適宜指示		
授業の工夫点			
授業の評価方法	実践活動へ取り組み姿勢、態度、ボランティア実践活動報告書（レポート）により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 名古屋商科大学

授業科目名	国際ボランティア論(概論)・国際ボランティア(実践)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	その他(7週(概論)・3週(実践))
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部・全年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計21名(男子学生12名 女子学生9名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	3週間
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際ボランティアの現状を学ぶこと。国際人としての自己の確立を図ること。		
授業内容	<p>第1回 ガイダンス ボランティア活動とNUCB・ボランティアスピリッツ ボランティアの理論と歴史 国際ボランティア活動 レポート課題:「あなたはなぜ国際ボランティア(実践)に参加するのか」</p> <p>第2回 ワークショップ 「わたしはなぜ国際ボランティア(実践)に参加するのか」 参考資料:人はなぜボランティアを目指すのか(第7章) 報告・討議・総括(以下、毎回全員参加による「報告」「討議」「総括」を行う。</p> <p>第3回 ワークショップ 日本人のボランティア観(第2章) ・ボランティア活動のイメージ ・ボランティア活動の結果に対する評価 ・社会への貢献意識</p> <p>第4回 ワークショップ 日本の国際ボランティア事情(第1章) ・歴史的背景 ・ボランティアのNGOそしてNPO</p> <p>第5回 ワークショップ 日本の国際貢献の歩み(第4章) ・日本のNGO ・欧米のNGOの現状と問題点</p> <p>第6回 ワークショップ 国際NGOと政府の関係の推移(第3章) ・政府“対”NGOから、政府“と”NGOへ ・NGO支援はODA大綱にも謳われる ・NGOと政府の協力関係は</p> <p>第7回 海外支援NGOの現状(第6章) ・日本のNGO ・欧米のNGOの現状と問題点 ・日米国民のボランティアさんか状況の比較 2006年国際ボランティア(実践)参加者の体験報告と質疑・応答</p>		
教科書	山本敏晴著『世界と恋するおしごと—国際協力のトビラ』小学館 2007		
授業の工夫点	ワークショップ形式により、コミュニケーション能力を高めること。		
授業の評価方法	授業への参加態度(平常点)50%、期末レポート50%		
授業のサポート体制	国際交流担当(事務局)との連携		
学外の関係機関・団体との連携	国際教育交換協議会(CIEE)日本代表部		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 日本福祉大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉マネジメント学	共通・専門等の別	その他（社会教育主事任用資格科目）
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部、福祉経営学部、経済学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計823名（男子学生476名 女子学生347名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>ボランティア活動・市民活動の支援システム 内容の要約</p> <p>あなたは「ボランティア活動」と聞いてどのような場面を思い浮かべるでしょうか。もしかしたら、自分は常に支援をする側と思っ てはいないでしょうか。本講義では、私たちが共に生きる社会を創出する原動力としてのボランティア活動について、歴史的 背景を学び、今日的役割と課題について考察します。ボランティア活動は新たな出会いや発見の宝庫です。本講義を、そ の喜びや活動の多様性、あなたと社会とのつながりなどを考えるきっかけとしてほしいと思います。</p> <p>学習目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ボランティアの性格である「主体性」「公共性」「無償性（非営利性）」の意味を理解し、今日的なボランティア活動の役割、 課題を理解する。 ・ボランティアマネジメントに関する現状を理解する。 ・ボランティア活動に参画する意欲を持つ、あるいは活動のきっかけを掴む。 		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 人はなぜボランティア活動をするのか 2. ボランティア活動を支える理念・思想 3. ボランティア活動の歴史① 4. ボランティア活動の歴史② 5. 生活を支えるボランティア活動 6. ボランティア活動の今日的役割 7. 市民活動と NPO・NGO 8. 災害とボランティア活動 9. 地域の主体形成とボランティア活動 10. ボランティアセンターの機能と役割 11. 地域社会にかけよう ～地域の課題を発見してみる 12. 住民の視点から解決を探る 13. ボランティア活動の展開方法、組織運営の課題 14. ボランティア活動 ～自ら選択するもう一つの生き方 15. まとめ 		
教科書	『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会（岡本榮一・菅井直也・妻鹿ふみ子編）		
授業の工夫点	自分自身の生活に引きつけて学習を進めてください。できれば、学生のみなさんもボランティア活動に実際に参画していただ くとよいと思います。ボランティア活動の場さかしも積極的に応援します。		
授業の評価方法	講義中に課す課題への取り組み状況、講義への参加態度、出席状況、期末試験などから総合的に評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	学部によって開講内容が異なるが福祉経営学部では「ふわり」というNPO団体が講師として講義をしている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 皇學館大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	社会福祉学部（1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計22名（男子学生14名 女子学生8名）	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア活動の意義と役割等を理解する		
授業内容	<p>テーマ:ボランティアについて理解し、自分にできることは何かを考え行動するための準備を行う。</p> <p>講義目的:ボランティア活動の現状を知り、ボランティア活動の地域社会に果たす役割について理解する。また、ボランティア の理論と実践について学ぶことを通じてボランティア活動の意義と役割、ボランティアにのつての教育的意義について理解する。</p>		
教科書	岡本榮一監修『ボランティアのすすめ』ミネルヴァ書房		
授業の工夫点	実習科目である「福祉と体験」との連動を目指している。		
授業の評価方法	出席10%、定期試験90%の配点で評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 名古屋学院大学

授業科目名	地域活性化研究A1,A2,B1,B2		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	文化・観光・余暇を中心とする地域政策に関する研究	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部2,3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計67名（男子学生57名 女子学生10名）	授業区分	実習
単位数	各4	ボランティア体験の時間数	7.5時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	①陶磁器産地の理解を深めること、②熱田区の地域資源を理解すること、③名古屋市民に陶磁器文化を広く理解してもらうこと。		
授業内容	<p>この科目は、講義科目ではありません。自らが主体的に地域の課題を発見し、解決のために政策を立案する科目です。少人数のグループで積極的に議論して、実際に考え行動していく意識が必要です。講義内容は、春学期は、熱田区の資源の編集とマップ作成です。住民の前で発表する機会もあります。秋学期は、イベントの企画実施を行います。イベントのテーマは、陶磁器文化を広く名古屋市民に知ってもらうものです。陶磁器の文化や歴史を、実際の産地で学ぶ機会もあります。これらの実習は、土曜日は日曜日に行くこともあります。そのため、土曜日等が出席できない学生は、出席不足となるので注意が必須です。まちづくりや文化イベントに興味があり、是非、自らの能力を実践の場で鍛えたいと思う学生の履修を薦めます。</p> <p>(A1,A2)</p> <p>この授業は、名古屋キャンパス周辺・熱田地区・堀川でのまちづくり活動と連携した講演＆ワークショップの企画・実施など、まちづくり事業・コミュニティビジネスの考察・参画・実行・研究を行う。そして、この授業の目的は、まちづくりやビジネスに対する理解を深め、社会の担い手側の視点を学ぶとともに、社会に関わる力をつけることである。</p> <p>この授業は講義、フィールドワーク、成果まとめ（研究報告書作成・プレゼンテーション）からなる。</p> <p>2007年度に実施する予定のプランは以下の通り。</p> <ol style="list-style-type: none"> 堀川まちづくり活動 （堀川での水上バス観光ツアーでの観光ボランティア育成と活動） 地域イベント（11月陶街道交流フェスティバル）への参画 商店街活性化・マイルポスト支援活動 <p>(B1,B2)</p>		
教科書	必要に応じて指定。(A1,A2)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	議論への参加、発表、講義中のレポート、取組姿勢。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO・NGO実践論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	開発社会論・国際移民問題	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	外国語学部3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計21名（男子学生8名 女子学生13名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	33時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	東南アジアの社会の実態について学び、そこに生きる人々との交流を深める。それにより、日本の社会に暮らす者の責任を考えるようになること。		
授業内容	<p>日本や各国の非政府機関(NGO)は多くの分野で活動を行っている。それを知るために最も良い方法は、そうした活動が行われている現場に足を運ぶことである。</p> <p>本年は日本とマレーシアでの実態について学ぶためにマレーシアへの研修旅行を行う予定である。本講は、そのための事後学習として設定するものである。具体的には現地での記録を元に、詳細なレポートを作成する。そのための学習、発表を行う。マレーシアへの研修は8月の後半実施する。なお、春学期の「国際協力実践論」では研修の事前学習と事前準備を行うもので、この2科目は一連のものである。</p>		
教科書	授業中に適宜に指示する。		
授業の工夫点	8月下旬にマレーシア研修実施		
授業の評価方法	出席、レポート発表、内容に基づく。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO・NGO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	開発社会論・国際移民問題	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	外国語学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計52名（男子学生32名 女子学生23名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	NGO、NPO活動に関して理解を深める。		
授業内容	NGO（国際協力に関わる民間団体）、NPO（非営利活動団体）について、理解を深める。その現状、歴史、意義、政府との関係、課題を検討する。 国際文化協力学科の開講科目であることを踏まえ、国際協力、開発教育、フェアトレード、異文化理解・教育などに関わる団体を中心に取り上げる。 また、市民運動、社会運動、ボランティア精神といったNGOやNPO活動を支える原理も考察したい。		
教科書	「学び・未来・NGO」池住義憲他		
授業の工夫点	スタディーツアー実施		
授業の評価方法	出席、平常点、レポート		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	まちづくり論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	文化・観光・余暇を中心とする地域政策に関する研究	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計155名（男子学生138名 女子学生17名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	心豊かなコミュニティ形成を支える理論的背景や都市／コミュニティづくりの思想を理解する。まちづくり活動の主体となる自治体やNPOなどの役割を理解する。それらを検証することで、総合的なまちづくりの体験的理解を深める。		
授業内容	まちづくりの主体は、様々である。地方自治体の職員、商店街の店主、住民組織、学生などである。本講座では、まちづくりの実践者をゲストに招き、毎回、その内容についての纏めのレポートの提出を義務付ける。ゲストは、自治体関係者、NPO関係者、商店主、民間開発業者、まちづくりコンサルタント等幅広いゲストを招き、議論を深める予定である。		
教科書	必要に応じて資料を配布		
授業の工夫点	毎回、まちづくりの実践現場で活動する方をゲストに迎え講演をして頂く。		
授業の評価方法	ゲストの意見を踏まえたレポート、レポート試験		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア学		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	財政政策・地域政策論	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経済・商・外国語・人間健康学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計180名（男子学生148名 女子学生32名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアをさまざまな学術視点から学ぶと共に、ボランティア実践者の生の声から、ボランティア活動から得る、気づき・学びについて体感する。		
授業内容	大学生において社会的関心の喪失、無気力、孤立化などの傾向が徐々に目立つ存在となる一方で、それらの処方箋のひとつとして、ボランティア活動などの社会参加体験が教育的な評価を受けるようになってきた。他方、我が国でも、阪神・淡路大震災以降、ボランティア活動という実践だけでなく、活動そのものを様々な学術的観点から捉えての評価や議論が活発となってきている。 そこで、本授業は、まずキリスト教学の視点からボランティアというものを捉えるとともに、社会学や経済学からのアプローチを学び、ボランティア活動の学術的な意義を理解することを目的とする。 また、各分野で活躍されているボランティアリーダーの方々をゲストとして迎え、それぞれの立場からボランティアを語ってもらったり、ケーススタディとしてのボランティア実践を授業時間内に行い、その楽しみ方や意義について学ぶ機会も持ちたい。		
教科書	「高校生のボランティア学習」		
授業の工夫点	第一線で活躍するボランティアリーダーをゲストとして迎える。		
授業の評価方法	定期テスト・レポート		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	NPO法人 good!		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	財政政策・地域政策論	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	経済・商・外国語・人間健康学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計6名(男子学生5名 女子学生1名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	5日間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアとして公共的な社会活動に参加し、体験を通じて人間関係のあり方を学ぶとともに、関連する社会問題についてもヒアリング・調査等を通じて関心を高め、社会の担い手側の視点を育むこと。		
授業内容	この授業では、ボランティアとして公共的な社会活動に参加し、体験を通じて人間関係のあり方を学ぶとともに、関連する社会問題についてもヒアリング・調査等を通じて関心を高め、社会の担い手側の視点を育むことを目的とする。 この授業は、事前学習(研修:5時限)、中間学習(当該施策研究:3時限)、事後学習(成果発表会:2時限)、実習とからなる。 また、実習後に、実習成果報告書と実習日誌を作成し提出しなければならない。 2008年度の実習先は、授業の最初に説明するが、原則5日以上の実習期間を必須とする。 昨年度実習先は、以下の通りである。 ・デイサービスセンター ・身体障害者通所授産施設 ・知的障害者入所更生施設 ・熱田区内小学校トワイライトスクール		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業・実習への参加意欲・出席態度 実習成果報告書の提出内容、成果発表会での発表内容などの総合評価		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	・デイサービスセンター ・身体障害者通所授産施設 ・知的障害者入所更生施設 ・熱田区内小学校トワイライトスクール		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 愛知学泉大学

授業科目名	ボランティア活動の研究Ⅰ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	地域社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	コミュニティ政策学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計23名(男子学生16名 女子学生7名)	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	この科目では、学外での学生各自のボランティア活動への参加に対し、所定の条件を定めて単位認定をおこなう。 実際のボランティア活動を30時間、活動の事前・事後を合わせた指導時間を30時間おこなうことによって、単位を認定することになる。30時間の指導時間のうち、10時間までは外部での指導(ボランティアコーディネーター養成講座など)を含めてもよい。 実際の単位認定は、「ボランティア活動の研究Ⅰ」(指導)という科目において1単位、「ボランティア活動A」(活動)という科目において1単位、合計2単位となる。 ボランティア活動の原理や、ボランティアの社会的意義について理解しながら、実際に社会で活動する。		
授業内容	1回ガイダンス 講義 科目履修・単位認定についての説明 2回ボランティア活動の起源 講義 社会福祉の歴史とボランティア活動 3回ボランティア活動とは(1)講義 必要性を考える 4回ボランティア活動とは(2)講義 活動領域を考える 5回ボランティア活動とは(3)講義 社会的役割と意義を考える 6回ボランティア活動とは(4)講義 日常生活とのかかわりを考える 7回ボランティア活動の今日的課題(1)講義 ボランティア・コーディネーターについて考える 8回ボランティア活動の今日的課題(2)講義 ボランティアのためのカウンセリング 9回ボランティア活動の今日的課題(3)講義 「共感」の活動について考える 10回市民活動(1)講義「協働」の論理について考える 11回市民活動(2)講義 市民参加のイベントについて考える 12回市民活動(3)講義 地域自治の担い手と行政の役割について考える 13回市民活動(4)講義 企業の社会貢献活動について考える 14回市民活動(5)講義 誰がコミュニティ政策を考えるのか？ 15回まとめ 指導・活動報告書の整理		
教科書	特に指定しない。		
授業の工夫点	サービスマーケティング		
授業の評価方法	教員との面談		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	社会福祉協議会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動の研究2		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	地域社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	コミュニティ政策学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計23名（男子学生16名 女子学生7名）	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	この科目では、学外での学生各自のボランティア活動への参加に対し、所定の条件を定めて単位認定をおこなう。（「ボランティア活動の研究1」を参照） 実際の単位認定は、「ボランティア活動の研究2」（指導）という科目において1単位、「ボランティア活動B」（活動）という科目において1単位、合計2単位となる。 この科目終了後の活動については、個別登録によって、30時間ごとに「ボランティア活動C」、「ボランティア活動D」、「ボランティア活動E」、「ボランティア活動F」と1単位ずつ積上げていくことが可能となる。 さらにボランティア活動を深めるために、キーワードの理解を深める。		
授業内容	1回ガイダンス 講義 科目履修・単位認定についての説明 2回活動を深めるためのキーワード(1)講義 「優しさ」について考える 3回活動を深めるためのキーワード(2)講義 「正義」について考える 4回活動を深めるためのキーワード(3)講義 「悲哀」について考える 5回活動を深めるためのキーワード(4)講義 「豊かさ」について考える 6回活動を深めるためのキーワード(5)講義 「感性」について考える 7回活動を深めるためのキーワード(6)講義 「良心」について考える 8回活動を深めるためのキーワード(7)講義 「信念」について考える 9回活動を深めるためのキーワード(8)講義 「存在」について考える 10回活動を深めるためのキーワード(9)講義 「勇気」について考える 11回活動を深めるためのキーワード(10)講義 「自立・自律」について考える 12回活動を深めるためのキーワード(11)講義 「受容」について考える 13回活動を深めるためのキーワード(12)講義 「信頼」について考える 14回活動を深めるためのキーワード(13)講義 「感動」について考える 15回まとめ 指導・活動報告書の整理		
教科書	特に指定しない。		
授業の工夫点	サービスマーケティング		
授業の評価方法	教員との面談		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	社会福祉協議会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	非営利組織論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	コミュニティ政策学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計33名（男子学生30名 女子学生3名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	1998年に特定非営利活動促進法（通称NPO法）が制定され、ボランティア活動をはじめとする市民・住民が行う自由な社会貢献活動をおこなう団体が、法人格を取得することが可能となった。NPOは、地域社会が直面する高齢者・障害者介護、リサイクル、防災・防犯対策、環境保全、外国人の雇用定住対策など地域生活の様々な領域において、専門性を活かした実践を展開している。NPOの活動原理を理解し、自らがNPOをつくる場合にどのような準備をおこない、運営していくかを考えることを本講義の目的とする。		
授業内容	1回ガイダンス 講義 ・カリキュラムのなかでの位置づけ ・講義の流れについて 2回非営利活動とは？ 講義 ・営利活動と非営利活動の理解 ・ボランティア活動の意義 3回NPOの社会的役割 講義 ・NPOが目目されるようになった時代背景の理解 ・企業の社会貢献活動の意義 4回今日の社会問題 講義 ・NPOが必要とされる活動領域の整理 5回組織をつくる(1) 講義・作業 ・活動の目的を考える 6回組織をつくる(2) 講義・作業 ・規約づくり ・役員の決定 7回組織を運営する(1) 講義・作業 ・活動計画を考える ・活動予算を考える 8回組織を運営する(2) 講義・作業 ・新規事業を計画する(目的と概要) 9回助成申請をする(1) 講義・作業 ・新規事業の「必要性」を考える 10回助成申請をする(2) 講義・作業 ・新規事業の「公益性」を考える 11回助成申請をする(3) 講義・作業 ・新規事業の「発展可能性」を考える 12回助成申請をする(4) 講義・作業 ・新規事業の「実現可能性」を考える 13回助成申請をする(5) 講義・作業 ・新規事業の「費用の妥当性」を考える 14回助成申請をする(6) 講義・作業 ・申請書の再検討 15回まとめ 講義・質疑 ・申請書の完成と提出		
教科書	特に指定しない。		
授業の工夫点	申請書作成練習		
授業の評価方法	出席と申請書内容		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 金沢星稜大学

授業科目名	ボランティア概論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	身体教育学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経済学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容	<p>“ボランティア”、この言葉を聞いたことがないという人はいないと思います。現代社会において様々な分野でボランティア活動が行なわれています。私たちを取り巻く社会環境の変化に伴い、人々の生活や地域社会への関わり方にも変化が見られ、次世代を担う若者たちへの社会の期待はより大きくなっています。ただ単に社会に奉仕するのではなく、これからの社会が何を求め、どのような方向性を示しているのか、それに対して自ら考え、そして自分の出来ることを出来る範囲で積極的に対応していく姿勢が望まれます。本授業では、現在そしてこれからの我々を取り巻く社会環境について考え、地域社会におけるボランティア活動を紹介しながら、「ボランティアとは何か？」を共に考え、生涯にわたって社会的な生活を過ごせるようにすることを目的とします。本授業を通して自分自身のボランティア活動について考えてください。</p>		
教科書	使用しません		
授業の工夫点	<ul style="list-style-type: none"> ・地域社会の諸問題について考える。 ・自分自身を振り返る。 ・ボランティアに関する基礎知識を習得し、出来る範囲で実践を試みる。 ・自分にとってのボランティアを意識する。 		
授業の評価方法	筆記試験は実施せず、授業への取り組み姿勢と小レポート及び課題レポートで行う。毎回講義開始時に小レポート用紙を配布、その用紙を授業終了時に提出。用紙の記入内容は、表面がその日の講義内容についての意見、感想、コメント等、裏面が自分自身の学生生活における身近なボランティア活動についてです。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 岐阜経済大学

授業科目名	ボランティアA		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	地域福祉論、ボランティア論	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経済学部、経営学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計22名（男子学生16名 女子学生6名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動は、個人の生きがいを生み出したり、自己の成長、自己実現を図ったりする効果があります。本講義では、さまざまなボランティア活動の楽しさを体験して、ボランティア活動の目的について考えていきます。		
授業内容	<p>第1回 ボランティアとは何か 第2回 ボランティア活動の社会的位置づけ 第3回 ボランティア活動の実際を事例から学ぶ ①社会福祉協議会・まちづくりプラザ 第4回 ボランティア活動の実際を事例から学ぶ②HIGE☆BU・昨年度活動した学生 第5回 ボランティア活動を体験する「目的」を考えるボランティア活動先を選定し、計画書を作成、提出します。＜受講生にボランティア活動に行ってもらいます＞ 第6回 ボランティア体験を振り返る(グループワーク) 第7回 事後指導</p>		
教科書	ボランティアテキストシリーズ11「ほんのすこしの神に近い部分」岡知史 著 価格：735円(税込)ボランティアテキストシリーズ10大阪ボランティア協会		
授業の工夫点			
授業の評価方法	①7回の講義をすべて受講すること。欠席は認めません。②講義を受講しボランティア活動へ参加した上で、レポートを提出してもらいます。「ボランティアA」は1200字程度、「ボランティアB」は2400字程度のレポートによって評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアB		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	地域福祉論、ボランティア論	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	経済学部、経営学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計2名(男子学生1名 女子学生1名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	AとBで合計60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動は、個人の生きがいを生み出したり、自己の成長、自己実現を図ったりする効果があります。本講義では、さまざまなボランティア活動の楽しさを体験して、ボランティア活動の目的について考えていきます。		
授業内容	第1回 ボランティアとは何か 第2回 ボランティア活動の社会的位置づけ 第3回 ボランティア活動の実際を事例から学ぶ ①社会福祉協議会・まちづくりプラザ 第4回 ボランティア活動の実際を事例から学ぶ②HIGE☆BU・昨年度活動した学生 第5回 ボランティア活動を体験する「目的」を考えるボランティア活動先を選定し、計画書を作成、提出します。<受講生にボランティア活動に行ってもらいます> 第6回 ボランティア体験を振り返る(グループワーク) 第8回 事後指導		
教科書	ボランティアテキストシリーズ11「ほんのすこしの神に近い部分」岡知史 著 価格:735円(税込)ボランティアテキストシリーズ11大阪ボランティア協会		
授業の工夫点			
授業の評価方法	①7回の講義をすべて受講すること。欠席は認めません。②講義を受講しボランティア活動へ参加した上で、レポートを提出してもらいます。「ボランティアA」は1200字程度、「ボランティアB」は2400字程度のレポートによって評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 藤田保健衛生大学

授業科目名	アセンブリ・医療ボランティア班		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	遺伝子検査学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	医学部1・2年次 医療科学部1・2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計40名(男子学生9名 女子学生31名)	授業区分	講義、演習、実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	6時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	将来の医療人としての人間作りを目指す。		
授業内容	新しい仲間とグループを作り、「ボランティアとは何か」について話し合う。 ボランティアのあり方や心構え、介助法などについて必要な知識を得て、自由にボランティア活動する。		
教科書	なし		
授業の工夫点	情報をメーリングリストで流し、その中から自由に自分で選ぶ。 グループ活動とし、仲良しグループにならないように学部に偏らないようにしている。		
授業の評価方法	出席点、発表会の内容を評価		
授業のサポート体制	付属の大学病院職員によるサポート		
学外の関係機関・団体との連携	豊明市社会福祉協議会		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 朝日大学

授業科目名	社会と基礎生活																																		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期																																
担当教員の専門分野	複数教員が担当	共通・専門等の別	共通																																
開設学部(学科)及び年次	各学部共通教育科目	授業のレベル	初級・入門																																
平成20年度履修者数	計286名(男子学生228名 女子学生58名)	授業区分	講義																																
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし																																
必修・選択の別	必修																																		
授業目的	大学で学ぶものとして身につけておくべき社会生活の基礎的事項について学習する。一般学生は①社会人としてのマナー②ボランティア活動や福祉・介護③環境問題④職業に関する基本事項について幅広く体験的に学び職業に対する自覚を体得する。留学生については日本文化、日本での生活習慣やマナーを体得する。																																		
授業内容	<table border="0"> <tr> <td><一般学生></td> <td><留学生></td> </tr> <tr> <td>1. マナー演習</td> <td>1. 日本文化①</td> </tr> <tr> <td>2. 環境問題</td> <td>2. 日本文化②</td> </tr> <tr> <td>3. 環境問題</td> <td>3. 日本文化③</td> </tr> <tr> <td>4. 文章表現</td> <td>4. 日本文化④</td> </tr> <tr> <td>5. 文章表現</td> <td>5. 日本文化⑤</td> </tr> <tr> <td>6. 文章表現</td> <td>6. 文書の書き方①</td> </tr> <tr> <td>7. ボランティア入門</td> <td>7. 文書の書き方②</td> </tr> <tr> <td>8. 手話入門</td> <td>8. 文書の書き方③</td> </tr> <tr> <td>9. 手話入門</td> <td>9. 文書の書き方④</td> </tr> <tr> <td>10. ユニバーサルレーニング</td> <td>10. 消費生活講座①</td> </tr> <tr> <td>11. 職業研究</td> <td>11. 消費生活講座②</td> </tr> <tr> <td>12. 職業研究</td> <td>12. 生き生き健康学①</td> </tr> <tr> <td>13. 消費生活講座①</td> <td>13. 生き生き健康学②</td> </tr> <tr> <td>14. 消費生活講座②</td> <td>14. 日本地理①</td> </tr> <tr> <td>15. 異文化コミュニケーション</td> <td>15. 日本地理②</td> </tr> </table>			<一般学生>	<留学生>	1. マナー演習	1. 日本文化①	2. 環境問題	2. 日本文化②	3. 環境問題	3. 日本文化③	4. 文章表現	4. 日本文化④	5. 文章表現	5. 日本文化⑤	6. 文章表現	6. 文書の書き方①	7. ボランティア入門	7. 文書の書き方②	8. 手話入門	8. 文書の書き方③	9. 手話入門	9. 文書の書き方④	10. ユニバーサルレーニング	10. 消費生活講座①	11. 職業研究	11. 消費生活講座②	12. 職業研究	12. 生き生き健康学①	13. 消費生活講座①	13. 生き生き健康学②	14. 消費生活講座②	14. 日本地理①	15. 異文化コミュニケーション	15. 日本地理②
<一般学生>	<留学生>																																		
1. マナー演習	1. 日本文化①																																		
2. 環境問題	2. 日本文化②																																		
3. 環境問題	3. 日本文化③																																		
4. 文章表現	4. 日本文化④																																		
5. 文章表現	5. 日本文化⑤																																		
6. 文章表現	6. 文書の書き方①																																		
7. ボランティア入門	7. 文書の書き方②																																		
8. 手話入門	8. 文書の書き方③																																		
9. 手話入門	9. 文書の書き方④																																		
10. ユニバーサルレーニング	10. 消費生活講座①																																		
11. 職業研究	11. 消費生活講座②																																		
12. 職業研究	12. 生き生き健康学①																																		
13. 消費生活講座①	13. 生き生き健康学②																																		
14. 消費生活講座②	14. 日本地理①																																		
15. 異文化コミュニケーション	15. 日本地理②																																		
教科書																																			
授業の工夫点																																			
授業の評価方法	出席80%、レポート20%																																		
授業のサポート体制	車いす利用者でも利用しやすいように講義室の移動や机の配置などに配慮をおこなっている。																																		
学外の関係機関・団体との連携	ない																																		
今後の授業の継続	今後も継続																																		

授業科目名	ボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	その他 (在学中のボランティア活動の総和が60時間以上)
担当教員の専門分野	統計学	共通・専門等の別	その他(総合教育科目)
開設学部(学科)及び年次	経営学部ビジネス学科・総合教育科目	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計0名(男子学生0名 女子学生0名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	1995年1月の阪神・淡路大震災以降、日本においてもボランティア活動に対する認識が高まってきた。これまでは主として国際交流や福祉の分野に限られていたボランティア活動が、この災害を契機にさまざまな分野のボランティア活動を刺激するようになった。 特に大学生がこうしたボランティア活動に参加することは、日頃薄れがちな地域および社会とのかかわりを密にする上で、大きな意味を持っている。こうした活動を積極的に奨励し、評価していくことが、この科目を設けた目的である。		
授業内容	ボランティア活動を行おうとするものは、通常の履修登録とは別に、事前に学事課に届けること。 活動後は、各楽器の授業終了日までにレポートおよび活動を証明する書類(活動責任者が作成)を学事課へ提出すること。 面接はレポート等が提出された学期の定期試験期間中に行い、当該学期に履修したものとして評価を行う。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	活動レポートおよび活動を証明する書類1/2、面接1/2の割合で評価する。		
授業のサポート体制	車いす利用者などが活動を行う際は教員・学生などが補助を行う。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 愛知淑徳大学

授業科目名		コミュニティ・サービスラーニング I A(社会貢献実習)	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計36名	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>私たちが暮らす地域(コミュニティ)には、多様なニーズに対応した地域活動(サービス)が展開されています。本講義では、受講生全員が実践を通じて、地域社会の一員としての自覚と能力を育成していきます。</p> <p>具体的な実践活動としてIAでは、EXPOエコマネーを活用した環境活動の他、地域で活躍するボランティア団体等と協働したボランティア啓発活動などの企画を行い、後期のIBの運営へ繋げていきます。</p> <p>受講生全員が地域に貢献しつつ地域活動に参加し、社会への参画体験を積むことによって、自主的に考え行動する力や責任感、判断力などを養い、健全な社会構成員に求められる資質や能力を育てることを目標とする。</p>		
授業内容	<p>1. オリエンテーション (本講義の目的とスケジュール、ラーニングI~IIIの内容等の説明)</p> <p>2. ラーニングI 1) 地域活動とは? 2) 地域活動の意義とその役割 3) 地域活動参加にあたっての心構え 4) 参加学習と各自の専攻との関連</p> <p>3. ラーニングII 地域活動参加学習(活動期間は、内容により異なる)</p> <p>4. ラーニングIII 活動を振り返りながら参加学習と各自の専攻との関連を考えます。</p>		
教科書	適宜、参考文献の紹介、参考資料やプリントを配布する。		
授業の工夫点	地域ニーズを掘り起こし、学生のチャレンジ力と調整しながら関連機関と協働して地域を舞台にした参画型学習を展開しています。		
授業の評価方法	出席状況、各課題(レポート、発表)により、「合」「否」として評価する。なお、ラーニングI・IIIへの参加(出席)、およびラーニングIIでの所定期間の活動参加を行った者について、単位を認定する。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		コミュニティ・サービスラーニング IB(社会貢献実習)	
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計25名	授業区分	演習
単位数	3	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>私たちが暮らす地域(コミュニティ)には、多様なニーズに対応した地域活動(サービス)が展開されています。本講義では、受講生全員が実践を通じて、地域社会の一員としての自覚と能力を育成していきます。</p> <p>コミュニティ・サービスラーニング IBでは、IAでの企画を受けて、EXPOエコマネーを活用した環境活動の他、地域で活躍するボランティア団体等と協働したボランティア啓発活動などの具体的な運営を行います。</p> <p>受講生全員が地域に貢献しつつ地域活動に参加し、社会への参画体験を積むことによって、自主的に考え行動する力や責任感、判断力などを養い、健全な社会構成員に求められる資質や能力を育てることを目標とする。</p>		
授業内容	<p>1. オリエンテーション (本講義の目的とスケジュール、ラーニングI~IIIの内容等の説明)</p> <p>2. ラーニングI 1) 地域活動とは? 2) 地域活動の意義とその役割 3) 地域活動参加にあたっての心構え 4) 参加学習と各自の専攻との関連</p> <p>3. ラーニングII 地域活動参加学習(活動期間等は内容により異なります)</p> <p>4. ラーニングIII 活動を振り返りながら参加学習と各自の専攻との関連を考えます。</p>		
教科書	適宜、参考文献の紹介、参考資料やプリントを配布する。		
授業の工夫点	地域ニーズを掘り起こし、学生のチャレンジ力と調整しながら関連機関と協働して地域を舞台にした参画型学習を展開しています。		
授業の評価方法	出席状況、各課題により、「合」「否」として評価する。なお、ラーニングI・IIIへの参加(出席)、およびラーニングIIでの所定期間の活動参加を行った者について、単位を認定する。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティ・サービスラーニングⅡA(企業のCSR活動)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	医療政策	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計17名	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>現代社会では積極的にCSR活動に取り組む企業が増加している。 また、企業の不祥事が相次ぐ中、CSR活動の重要性が高まっている。 本講義では、受講生が特定企業におけるCSR活動の企画立案に参加し、プレゼンテーションを行なう。学内の講義と学外での実践を通してCSR活動の重要性を習得する。 授業前半でCSR活動の基本的知識の習得を目指し、授業後半では、前半で養った知識を活かし学外場で発表をする。講義と学外活動を通してプロジェクトの企画・提案を創出するプロセスを把握し、必要な能力を養うことを目標とする。</p>		
授業内容	<p>1 ガイダンス 2 CSR活動とは 3 企業のCSR活動(事例報告) 4 CSRに関する調査活動 5 CSR活動の企画立案 6 プレゼンテーション 7 総括</p>		
教科書	必要に応じて資料を配布。		
授業の工夫点	講義の他、ディスカッションや協働作業などとおしたワークショップ、プレゼンテーション等の参画型学習をおこなっています。		
授業の評価方法	出席状況と授業中の態度による。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティ・サービスラーニングⅢA(地域メディア実習)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	教育社会学、メディア論	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計14名	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>・さまざまな産業の労働者として、日本にも多くの外国人が暮らすようになりました。しかし、私たちは、買い物や交通機関などで、彼らと日常的に顔を合わせながら、その生活がどのようなものなのか、よく理解できずにいます。そして残念ながら、こうした文化や思いへの無理解や行き違いが、ときに地域社会において問題化したりします。 ・この演習では、地域において、その地域に暮らす住民たちと在住外国人が、よりよくお互いを理解するために、写真や文章、声などを用いてそれぞれの思いを伝えるお手伝いをしようと思います。具体的には、外国人(主に、ブラジル、フィリピン)の中高生たちとみなさんとが、普段の暮らしのなかで伝えたいことを写真やことばを用いて映像作品にし、それをケーブルテレビやウェブサイトなどの地域のメディアで表現することでより多くの人びとに視聴してもらい現場実践型プログラムです。 ・この演習では、自分たちがそれぞれの学部や専攻において、これまでの授業のなかで学んだことを積極的に生かしてほしいと思います。(たとえば、語学、映像編集、異文化コミュニケーション、資料アーカイビングなど) ・本年度はこの実習の一年目にあたります。失敗もあるかもしれませんが、すべては参加者の皆さんにやる気次第です。このプロジェクトを面白いと思い、夏休みの一週間をそれにあててみようとする積極的な学生さんにぜひ集まってほしいと思っています。 1) 日本の地域における外国人をめぐる状況を把握する。 2) 地域におけるメディアやコミュニケーションの重要性、可能性について考える。 3) 大学での学習と、地域の現場との往復を通じて、実践型参加型の学習、研究のありかたについて考える。 4) 参加者間のコミュニケーションを通じて、自らプロジェクトを立案し、遂行する能力を身につける。</p>		
授業内容	<p>プレセミナー プレ1日目 4月22日6限(場所等、詳細はCCCにて掲示) 授業内容詳細の提示、サービス・ラーニング準備 プレ2日目 7月9日6限(場所等、詳細はCCCにて掲示) 事前調査発表 8月集中講義日程(18日~22日) 1日目 アイスブレイキング グループ分け メディア技術研修(長久手キャンパス) 2日目 参加学生作品制作 3日目 現地ワークショップ1日目 4日目 現地ワークショップ2日目 5日目 地域メディア研修 振り返り (6,7日目)有志にて地域住民とのワークショップ</p>		
教科書	<p>「在日外国人―法の壁、心の溝」岩波新書 田中 宏(著) 「日本の中の外国人学校」明石書店 月刊『イオ』編集部(編集) 「メディア・ワークショップ」東京大学出版会(2008年出版予定) 「メディア・プラクティス」せりか書房</p>		
授業の工夫点	地域ニーズを掘り起こし、学生のチャレンジ力と調整しながら関連機関と協働して地域を舞台にした参画型学習を展開しています。		
授業の評価方法	出席、授業態度/参加意欲、授業をめぐるレポートなどで総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域活動総合演習 IA		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	医療政策	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計26名	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>現代社会において医療を取り巻く環境は激しく変化している。 本講では、医療制度や医療現場の問題を様々な視点から学ぶ。 また、病院施設の現場見学や老人保健施設でレクリエーションの企画・発表を行い、地域における医療機関のあるべき姿を考察する。 現在の医療に関する基本的な問題を学習する。 また、学外活動やグループワークを通して、学生の課題発見・探求能力の向上を目指す。</p>		
授業内容	1 ガイダンス 2 医療を取り巻く環境について 3 現代の医療の問題 4 病院見学 5 レクリエーションの企画・発表 6 グループワーク		
教科書			
授業の工夫点	講義の他、ディスカッションやグループワーク、レクリエーションの企画運営等、参画型学習をおこなっています。		
授業の評価方法	出席と授業態度の評価による。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域活動総合演習 IIA		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計31名	授業区分	演習
単位数	3	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>日本社会は急激に多民族多文化社会が進んでいます。特に私たちが暮らす愛知県は、ブラジル、ペルーなどを中心とした中南米出身の外国人住民の占める比率が全国で最も高い地域です。このような現状から、外国人住民と共に暮らす地域づくりは、今後ますます重要な課題になると考えられます。 本演習では「多様な文化や背景を持つ外国人住民との共生社会」という具体的なテーマに関する実践を通じて、地域社会に対する興味、関心、問題意識という力を養っていきます。 本演習テーマに対し、主体的かつ積極的に取り組む受講生を歓迎します。 地域に暮らす外国人コミュニティでのフィールドワーク、ボランティア活動を通じ、地域に暮らす外国人住民と共生をめざした地域づくりに必要な視点および事業企画・運営能力を養います。</p>		
授業内容	<p>本演習では、まず学生一人ひとりが地域社会にある課題を発見し、課題解決を考える力を培うことを目的とした課題探求型講義を行います。特に、「行政とまちづくり」「外国人コミュニティ」「地域住民とボランティア活動」などの多角的視点から、地域社会を社会的に見る方法を学習します。 また実際に外国人住民が多く暮らす地域へ一緒に出かけ、地域住民と外国人住民との共生社会をめざした行政やNGO/NPOなどの取り組みについてフィールドワークを行い、実践方法について学習していきます。 これらの学習を通じ、各受講生が事業企画を行い、IBの実践的な活動運営まで発展させていきます。 なお、具体的な活動運営内容は、公立学校における外国人児童生徒の学習支援、ブラジル政府認可校におけるブラジル人の子どもたちを対象にした日本語学習支援や日本文化紹介などを予定しています。</p>		
教科書	適宜、参考文献の紹介、参考資料やプリントを配布します。		
授業の工夫点	地域ニーズを掘り起こし、学生のチャレンジ力と調整しながら関連機関と協働して地域を舞台にした参画型学習を展開しています。		
授業の評価方法	出席状況、授業内のディスカッションへの参加、レポート等を総合的に判断して評価します。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域活動総合演習 II B		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計34名	授業区分	演習
単位数	3	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>日本社会は急激に多民族多文化社会化が進んでいます。特に私たちが暮らす愛知県は、ブラジル、ペルーなどを中心とした中南米出身の外国人住民の占める比率が全国で最も高い地域です。このような現状から、外国人住民と共に暮らす地域づくりは、今後ますます重要な課題になると考えられます。</p> <p>本演習では「多様な文化や背景を持つ外国人住民との共生社会」という具体的なテーマに関する実践を通じて、地域社会に対する興味、関心、問題意識という力を養っていきます。</p> <p>本演習テーマに対し、主体的かつ積極的に取り組む受講生を歓迎します。</p> <p>地域に暮らす外国人コミュニティでのフィールドワーク、ボランティア活動を通じ、地域に暮らす外国人住民と共生をめざした地域づくりに必要な視点および事業企画・運営能力を養います。</p>		
授業内容	<p>本演習では、まず学生一人ひとりが地域社会にある課題を発見し、課題解決策を考える力を培うことを目的とした課題探求型講義を行います。特に、「行政とまちづくり」「外国人コミュニティ」「地域住民とボランティア活動」などの多角的視点から、地域社会を社会的に見る方法を学習します。</p> <p>また実際に外国人住民が多く暮らす地域へ一緒に出かけ、地域住民と外国人住民との共生社会をめざした行政やNGO/NPOなどの取り組みについてフィールドワークを行い、実践方法について学習していきます。</p> <p>これらIAの学習を通じ、実践的な活動運営を行います。なお具体的な活動運営内容は、公立学校における外国人児童生徒の学習支援、ブラジル政府認可校におけるブラジル人の子どもたちを対象にした日本語学習支援や日本文化紹介などを予定しています。</p>		
教科書	適宜、参考文献の紹介、参考資料やプリントを配布します。		
授業の工夫点	地域ニーズを掘り起こし、学生のチャレンジ力と調整しながら関連機関と協働して地域を舞台にした参画型学習を展開しています。		
授業の評価方法	出席状況、授業内のディスカッションへの参加、レポート等を総合的に判断して評価します。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	障がい者支援ボランティア入門		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計45名	授業区分	講義
単位数	3	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>大学で学ぶ学生の中には、視覚障害、聴覚障害、肢体障害などにより制限を受けているために、授業や学生生活においてノートテイク、手話通訳等の授業支援を必要とする人たちがいる。そこで、本授業では、これら障害のある人についての基本的な理解と初歩的な支援技術を学び、障害のある人への学生支援ボランティア活動の活性化と充実及び共に学ぶ場を作り出していくことをめざすことを目的とする。</p> <p>(1) 障害学生支援について関心を持ち、障害のある人たちのニーズについて学ぶ。 (2) 障害のある人たちへの支援技術を身につけ、共に学ぶ実践を実行できる。 (3) 授業で学んだ内容を実際の支援ボランティア活動に結びつけ、共に学ぶ場を作っていく。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業のガイダンス 2. 現代社会と障害のある人を取り巻く環境 3. 肢体に障害がある人の理解と支援方法 <ol style="list-style-type: none"> (1) 肢体障害者の理解 (2) 肢体障害者の支援方法(生活介護とノートテイク) 4. 視覚障害者の理解と支援方法 <ol style="list-style-type: none"> (1) 視覚障害者の理解 (2) 視覚障害者の支援方法(点字、移動問題、授業の解説) 5. 聴覚障害者の理解と支援方法 <ol style="list-style-type: none"> (1) 聴覚障害者の理解 (2) 聴覚障害者の支援方法(手話通訳・ノートテイク) 6. 障害学生支援ボランティア活動 <ol style="list-style-type: none"> (1) 愛知淑徳大学における支援のシステム (2) ボランティア活動の実際 7. 共に生きる社会を目指して 		
教科書	毎回の講師が指定する資料やレジュメがテキストとなる。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	<ol style="list-style-type: none"> 1.出席を評価の中心とする。 2.時々、小テストを実施して、理解度を確認していく 3.ボランティアの体験レポート 4.最終レポートの提出 		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	入門ボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計437名	授業区分	
単位数	3	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	1997年11月の国際連合総会において、日本の提案に基づき122カ国の共同提唱国を得て、「2001年ボランティア国際年 (International Year of Volunteers)とすることを宣言する」という決議が採択されました。1995年の阪神・淡路大震災以後、日本国内においてはボランティア活動に対する関心と理解が高まり、各地に多種多様なボランティア活動が展開されています。本講義では、ボランティア活動についての理解と認識を深め、地域での実践事例を通じ、「ボランティア活動の魅力」について学びます。なお、地域で活躍するボランティア活動実践者をゲストスピーカーとしてお招きする予定です。ボランティア活動の「魅力」を学び、ボランティア活動の「楽しさ」を知り、実践活動への「参加」へ繋げることを目指します。		
授業内容	1. オリエンテーション 2. ボランティア活動に参加することの意義を考える 3. 基本的な用語とキーワードを学ぶ 4~8. 地域で活躍するボランティア活動から学ぶ ・社会教育・まちづくりの推進を図る活動 ・情報化社会・経済発展を図る活動 ・保健・医療または福祉の増進を図る活動 ・環境保全・地域安全を図る活動 ・人権の擁護・平和を推進を図る活動 9~11. 企業の社会貢献とは？ ※企業の社会貢献事業を学ぶ場として学外活動を予定しています 12. 行政とボランティア団体とのコラボレーションとは？ 13. ボランティア団体の抱える課題とは？ 14. 地域にあるボランティア・市民活動推進機関とは？ 15. 総括		
教科書	適宜、参考文献の紹介、参考資料やプリントを配布します。		
授業の工夫点	ボランティア論を学んだ上で、履修者全員で実践活動に参加し、より理解が深まるようにしています。とりわけ、地域で活躍する実践者を招き、生きた学びをめざしています。		
授業の評価方法	毎回出席確認を兼ねた感想文の他、授業態度、レポート課題により、総合的に評価します。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	入門ボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計83名	授業区分	講義
単位数	3	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティアの現場を取り巻く状況に視点をあて、ボランティアとは何か、なぜボランティアが必要とされているかなどを考えながら、ボランティアの世界に踏み出す心構えと作法を身につけることをめざします。		
授業内容	1-2 生死と関わるボランティア- ボランティアの責任 / 国境なき医師団の活動 3-4 住まうこととボランティア- 宅老所の実践 / ホームレスの自立支援 5-6 自然災害と向き合うボランティア- 災害救援活動 / 災害復興・まちづくり 7 ボランティアの現代(中間まとめ) 8-9 自然環境と向き合うボランティア- 霞ヶ浦での自然再生 / 風力発電への取り組み 10 ボランティアと企業との協働 11 ボランティアとNPO・市民事業～ボランティアとして働く 12-13 ボランティア活動のマネジメント 資金調達の世界/ボランティア組織のガバナンス 14 さあボランティアの世界へ 15 試験		
教科書	授業毎に資料を配布します。		
授業の工夫点	自分自身の周りにある壁を破って、ボランティアの世界に入って行くことを「入門」と位置付けてみます。ボランティア活動の実際を紹介することで、そこにある問題を自分の力で発見し、どのような活動につなげていってほしいか、ボランティア発想を鍛える自問型授業とします。		
授業の評価方法	授業にもとづくレポート提出を数回求め、その提出状況を評価の基礎に置きます(25%程度)。期末試験を実施し、学習の成果を確認します(75%程度)。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際ボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1-4年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計130名	授業区分	講義
単位数		ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>地域市民社会形成のキーワードとしての国際ボランティアとNGOの理念、目的、役割、さらに日本の現状を具体例を通して学ぶ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国際ボランティアの意義・役割・活動内容が理解できる。 ・国際ボランティアが活動する組織(国連、JICA、NGO)の理解ができる。 ・学生自らが(国際)ボランティア活動に参加できるきっかけをつくる。 		
授業内容	<p>授業では、国際ボランティアの理念、活動主体と活動分野の現状と課題について学ぶ。また、NPO・NGOで活躍している卒業生や専門家をゲストスピーカーとして招き講義を受ける。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ガイダンス 用語解説 2. NGO、ボランティア活動の活発化の背景 3. ボランティアとは何か？ <ul style="list-style-type: none"> (1) ボランティアの基本的条件と活動動機 (2) ボランティアコーディネーター 4. NGOとは何か？ <ul style="list-style-type: none"> (1) 国連とNGO (2) 日本のNGOの現状と課題 5. 国際ボランティアとは？ <ul style="list-style-type: none"> (1) なぜ国際ボランティアをするのか？ (2) 国際ボランティア活動のタイプ (3) 日本の国際ボランティア団体 <ul style="list-style-type: none"> ・スタディツアーを実施している団体 6. 国際ボランティアの活動 <ul style="list-style-type: none"> (1) 国連ボランティアと青年海外協力隊 (2) 開発NGOとボランティア (3) 難民・災害医療ボランティア 7. 海外のボランティア事情 <ul style="list-style-type: none"> (1) アジア (2) アメリカ (3) ヨーロッパ 		
教科書	テキストは使用しない。その都度プリントを配布する。「国際協力・ボランティア用語集」		
授業の工夫点			
授業の評価方法	課題レポート(50%)、中間レポート(30%)、出席状況と授業への参加度(20%)の総合評価による。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGO・NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	現代社会学部1・2年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計78名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>昨今、政府や企業とは異なる行動原理によって行動し、営利のためでなく、市民的公益の実現を目指して活動する組織＝非営利組織（NPO・NGO）の役割が注目されている。では、その行動原理の独自性はどんな点にあるのか？ 市民的公共とは、社会でどんな意味を持ちえるのか？ といった問いを掲げながら、NPOの具体的な活動を紹介しながら、その社会的役割を考察する。同時に、社会から信頼足りうるセクターに育っていくために、どんな課題があるのかも浮き彫りにしたい。</p> <p>* ボランティアとNPO・NGOとの相違を理解すること * 日本のNPO・NGO活動の特徴を理解すること * 日本社会におけるNPO・NGOの役割、課題、展望を理解すること * NPO・NGOを取り巻く行政や企業の動向を理解すること</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 NPOの基礎知識、今、なぜNPOなのか 2 NPOの実際 具体的な活動を見てみよう 3 ボランティア活動の特性とNPO法の誕生 4 福祉NPO ①組織化プロセスを切り口に 5 福祉NPO ②人のマネジメントを切り口に 6 国際交流・協力NPO ①非政府を切り口に 7 国際交流・協力NPO ②アドボカシーを切り口に 8 国際交流・協力NPO ③市民教育を切り口に 9 自治体とNPOの協働の必要性 10 自治体とNPOの協働の課題 11 企業の社会貢献活動 12 評価・アカウンタビリティ・PR 13 NPOの中間支援組織 14 NPOの社会的役割を考える、授業のまとめ 15 試験 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席率、試験、授業中の小レポートにて評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 常葉学園大学

授業科目名	ボランティア活動		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	教育学部(生涯学習学科2年)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計8名(男子学生5名 女子学生3名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアは身近なところで社会を支える重要なネットワークをつくっている。多岐にわたる活動内容からその意義について理解を図ることを目的とする。近年、ボランティア活動の領域は、これまでの福祉分野中心から生涯学習に関連した教育・文化関係のボランティア活動、地球環境の保全や国際的な貢献に関する活動にいたるまで急速に拡大してきている。あわせて非営利の市民活動も活発になってきている。授業では、ボランティア刈るどうの理念や歴史などにふれるとともに身近な地域社会の諸課題と様々な活動事例や体験をもとにボランティア精神や活動の意義について理解を深めたい。またこれからの共生の社会を構成する一員として担うべき役割を考えたり自発的な活動を促したりする契機となることを期待したい。		
授業内容	第1回 恋愛に似たボランティア活動 ボランティア活動の性格と役割 第2回 最初のボランティアは自警団 西欧のボランティア活動の歴史 第3回 社会福祉事業の祖「聖徳太子」わが国の活動の歩み 第4回 指一本でできるボランティア ボランティア活動の主体と領域 第5回 一人暮らし老人と詐欺師 高齢者問題とボランティア活動 第6回 子どもの「新三無主義」 児童問題とボランティア活動 第7回 「ボランティア拒否宣言」 障害者理解とボランティア活動 第8回 車椅子利用者や視覚障害者が一緒に学ぶとしたら 第9回 「宇宙船地球号」的な態度 環境問題とボランティア活動 第10回 世界とのつながりの中で 国際ボランティア 第11回 阪神淡路大震災と「ボランティア元年」 災害支援とボランティア活動 第12回 企業市民としてのフィランソピー 企業の社会貢献 第13回 有償のボランティア ボランティア活動の新しい形 NPOやNGO 第14回 ボランティア活動にあたって 関係機関や体験学習		
教科書	使用しない		
授業の工夫点			
授業の評価方法	1.出席状況や授業への取り組み、レポート、定期試験を合わせ総合的に評価する。 2.体験報告やアンケート、小レポートを求める。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	教育学部(心理教育学科)1年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計70名(男子学生16名 女子学生54名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動は、相手を思いやる心やさしさといった人間愛を基本に、問題解決や心豊かな生活づくりのための自発性を共通項とする行為である。この精神と行為は、とりわけ子どもの成長・発達を助ける教師に求められる資質といえる。ボランティアに関する理解を深め、そうした資質向上に資することを目的とする。授業では、ボランティア活動の理念や歴史、制度等その基本的なことから学ぶとともに、様々な分野の活動にふれながらその意味や多様性について理解を図る。また学校教育の中における福祉教育やボランティア体験学習の意義と方法についてもふれる。		
授業内容	第1回 ボランティア論を学ぶにあたって 第2回 ボランティア活動の理念 基本的性格や役割 テキスト 第1章 第3回 ボランティア活動の歴史 起源と歩み テキスト 第2章 第4回 ボランティア活動の担い手 テキスト 第4・5章 ボランティア活動の主体と活動領域や形態 第5回 地域社会とボランティア活動 テキスト 第6・7章 児童問題や高齢者問題とのかかわり 資料等による 第6回 障害者問題とのかかわり 第7回 障害等の理解と支援のための技術 第8回 環境問題とボランティア活動 資料等による 第9回 国際社会とボランティア テキスト 第12章 第10回 災害支援とボランティア活動 テキスト 第9章 第11回 企業の社会貢献とボランティア活動 テキスト 第10章 第12回 ボランティア活動の新しい形 テキスト 第3・11章 NPOほうじんや有償ボランティア 第13回 学校教育とボランティア活動 テキスト第8章 第14回 ボランティア活動をめぐる課題 テキスト第4・14章		
教科書	『いちばんはじめのボランティア』小倉常明・松藤和生 編著 ミネルヴァ書房		
授業の工夫点			
授業の評価方法	1.出席状況や授業への取り組み、レポート、定期試験を合わせ総合的に評価する。 2.体験報告やアンケート、小レポートを求める。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGOと海外援助A		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	外国語学部 （グローバルコミュニケーション学科）3年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計39名（男子学生17名 女子学生22名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	Think globally.自分の日常と世界の動きがどのようにつながっているか振り返り、グローバル化のもんぢてんを理解することを目的とする。国際協力に携わる国際NGOの活動の実態と課題を把握し、各自が市民として問題解決に係る態度を養う。		
授業内容	以下のようなテーマを取り上げ、授業の前半は講義、後半は疑似体験活動やグループに分かれて発表や討論を行う。当該のテキストの各章のレジュメの発表、国際協力NGOの調査などの課題が与えられる。1.NGOとは何か 2.国際開発におけるNGOの歴史 3.国際開発におけるNGOの役割 4.貧困・途上国における地域開発 5.戦争・難民 6.遠くから来る食べ物 7.温暖化 8.世界の人権問題 9.NGOによる緊急人道支援活動		
教科書	『連続講義 国際協力NGO』今田克司ほか 日本評論社		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席と態度(20%)、グループワークやアクティビティでの貢献度(20%)、課題の提出(20%)、期末テスト(40%)などを総合的に評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGOと海外援助B		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	外国語学部 （グローバルコミュニケーション学科）3年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計39名（男子学生17名 女子学生22名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	Act locally.静岡県内や身近な地域社会で起きているグロー張りゼーションの現状と課題を理解し、自らの市民活動への参加可能性を考えることを目的とする。		
授業内容	以下のようなテーマを取り上げ、静岡県内の国際交流や国際協力のNPO団体や市町村の活動の現状とかだいを把握し、学生自身の活動への参加方法を考える。外国人やマイノリティの問題を考えるために、グループでのディスカッション及びシミュレーション・ゲームを行う。		
教科書	「草の根の国際交流と国際協力」毛受・榎田・有田 監修 明石書店		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席と態度(20%)、グループワークやアクティビティでの貢献度(20%)、課題の提出(20%)、期末テスト(40%)などを総合的に評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 三重中京大学

授業科目名	キャリア支援 I (社会活動)		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	その他(基礎教育科目)
開設学部(学科)及び年次	現代法経学部2・3・4年生	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計84名 (男子学生82名 女子学生2名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	45～60時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア活動を実際に体験することにより、その意義や方法を学びます。		
授業内容	<p>活動内容: 大学が紹介するボランティア(松阪市福祉協議会ボランティア、スペシャルオリンピックス、小学生野球チームのコーチ、サッカースクール、三重中京大学学内ボランティア、など)、又は学生自らが見つけてきた、大学生が行うに相応しいボランティアの実践。</p> <p>活動時間: 実働6日間程度(1日8時間として)、即ち45時間以上の活動体験</p> <p>活動期間: 夏期休業や冬季休業、及び履修登録した講義・演習などと重複しない時間帯で活動可能な時期。但し、この期間中であっても、学校行事などに影響を及ぼす場合は活動を認めません。</p> <p>事前説明会: 4月にボランティアに関する説明会を数回開催する予定です。履修者は、この事前説明会への出席が履修に当たっての必須要件となります。</p> <p>レポート: 活動終了後2週間以内に、活動日誌と体験レポートを教務センターへ提出すること。なお、最終的なレポート提出期限は2009年1月31日とする。</p>		
教科書	使用しません。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	<ol style="list-style-type: none"> 1. 活動内容(ボランティア団体から大学へ送られてくる活動証明書と活動内容を担当者が確認) 2. 活動日誌(各回ごとの時間数と活動内容を記載したもの)。 3. 体験レポート(2000字以上) 以上、3点の書類によって評価を行います。		
授業のサポート体制	ガイダンスを必要に応じて行う。		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア内容により異なる。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 富山国際大学

授業科目名	国際ボランティア論		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	地域学部1-3年次、現代社会学部1-2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計40名 (男子学生33名 女子学生7名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際ボランティアの実像、意義、内容について理解を深め、ボランティア組織の活動のあり方や国連援助機関の課題について理解を深めるよう、様々な地域や状況のもとで活躍する国際ボランティアの現状と問題点について解説する。また、NGO・NPOと政府系ボランティアの活動内容や状況について講義し、それぞれの意義について考察を深める授業とする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 国際ボランティアの歴史的背景 2. 発展途上国の抱える問題 3. 「政府の限界」とNGOの「機動性」 4. 日本の災害緊急ボランティアNGO 5. 国際ボランティア活動と日本社会のあり方(過去と未来) 6. 諸外国のNGO活動と社会システム(市民の意識や資金) 7. 政府系及び国連ボランティア 8. 国連とNGO・NPO 9. 分野別ボランティア活動(教育、環境、保健医療など) 10. 女性と開発について考える 11. 援助される側の論理 12-14. 国際ボランティア活動の事例研究 		
教科書	現代国際ボランティア教育論 勉誠出版		
授業の工夫点	問題提起をして、学生に考えさせること、又、青年海外協力隊やNGOボランティアの実際の活動をビデオや体験談などを交えて紹介している。自分が当事者だったらどうするかをイメージさせるようにしている。		
授業の評価方法	毎回の小テスト(60%)、出席状況(40%)。但し、3分の1以上の欠席は評価の対象外とする。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	JICA、富山県青年海外協力隊OB会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	海外ボランティア演習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	地域学部 I-3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計8名（男子学生6名 女子学生2名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	海外実習の事前及び事後演習としておこなう。事前指導では実習計画内容の理解と、実践に必要な知識と応用力を養う。また、事後指導では、実習の成果発表を基に学習強化を図る。実習内容の理解とともに、実習先の国事情（治安・生活習慣など）について把握させ、模擬実習することによって応用力を養う。事後は実習の成果と反省点に基づいて、より理解を深めるための指導を行う。		
授業内容	1. オリエンテーション(実習概要) 2. 国事情 3. 各自の実習目標・計画の具体化 4-8. PCM 9. 渡航準備 10. " 11. 成果発表 12. " 13. 将来の課題 14. 実習の総括		
教科書	FASIDのPCMテキスト		
授業の工夫点	授業の半分程度は、実際に行う海外でのボランティア実習のための事前準備とまとめて費やす。あとの半分は途上国理解と国際協力を理解するために、PCM手法をつかったワークショップを行っている。		
授業の評価方法	出席・ワークショップへの貢献度・レポートをもとに評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	海外ボランティア実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	地域学部 I-3年次	授業のレベル	応用
平成20年度履修者数	計8名（男子学生6名 女子学生2名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2週間
必修・選択の別	選択		
授業目的	実習を通して地域と世界の共生について、より広い視野に立った思考力と行動力を身につけることを目的として以下のことを実施。夏休み中に約2週間、南太平洋にある人口約17万人の後発開発途上国である「サモア」に出かけ、1) サモアの伝統を重んじ、相互理解を深める。2) 青年海外協力隊の活動現場視察及び意見交換する。3) 現地の生活向上につながる調査研究を行う。		
授業内容	<p><事前授業></p> <ul style="list-style-type: none"> ・現地事情(文化・言語・習慣など) ・各自の現地活動テーマ設定:ねらいは生活(環境)改善 ・現地での活動計画作成 ・日本文化紹介のための準備 <p><現地活動></p> <ul style="list-style-type: none"> ○アピアからバスで20分ほど離れたTuanai村で集団生活 ○午前中はサモア語とサモア文化の授業 ○午後は、伝統文化の体験授業 ○夕方はサモアダンス交流、日本文化紹介など ○協力隊員の職場見学やサモア大学見学・交流など ○各自村の生活(環境)改善を考え、現地の人々と話し合って実施計画の策定・実施 ○実習に当たって下記の注意点 1) その地域住民の生活と心情を理解する。 <p>*聞き取り調査などの事前調査(ライフスタイルなど)を十分に行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> 2) 地元ボランティアとの綿密な打ち合わせ。 *実習期間中は、朝夕のミーティングを励行し、状況に合わせて随時、計画変更を行う。 3) 実習最終日には、地域住民及び地元ボランティアと共に、各自の目標達成度や地域貢献度、今後の活動計画について検討する。 		
教科書	なし		
授業の工夫点	受け身のボランティア活動ではなく、能動的なボランティアを行う。つまり、現地の問題点を把握し、どんな支援が可能かを検討し、実行させる。従って、現地での調査、関係者との協議を行わせる。		
授業の評価方法	実習への取り組み姿勢(60%)、レポート(30%)		
授業のサポート体制	海外での実習のため、教員旅費、現地受け入れ先への協力金などの財政的支援。それに加えて、大学が参加者全員を対象として海外総合危機管理(CGS)に加入し、安全面の側面支援を行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	JICA、現地NGO		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO実習		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPO	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	地域学部 I-3年次	授業のレベル	応用
平成20年度履修者数	計12名（男子学生6名 女子学生6名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	45時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPO活動に参加し、NPOの社会的使命や営利組織との違い等について理解するとともに、実践活動をととして実務能力を身につける。		
授業内容	芸術創作総合プロデュースを行っているNPO法人「日本文化交流センター」で地域創生にかかわる企画・運営について学ぶ。また、日本海学文化事業を行っているNPO法人「環・日本海」で学術事業の運営について実習を行う。		
教科書	なし		
授業の工夫点	学生グループ独自の地域貢献活動の計画を立て、富山県などの助成金を獲得させ、計画を実行させる。実践的な授業としている。		
授業の評価方法	実習への取り組み姿勢(60%)、レポート(30%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 静岡理科大学

授業科目名	創造・発見1創造・発見2		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	複数多分野	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	理工学部2・3・4年次対象	授業のレベル	初級・入門、中級・応用
平成20年度履修者数		授業区分	講義、実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	平均7コマ(1.5時間×7)
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>【達成目標】</p> <p>a) 活動分野およびテーマの中で指導者の指導に従って積極的に活動を行う。</p> <p>b) 自発的に活動を立案・計画し遂行する能力を養成する。</p> <p>c) 新しい工夫や独自の発想を生みだしそれを活動の中に生かす。</p> <p>d) グループの構成メンバーと協調しながら活動を遂行する能力を養成する。</p> <p>e) 必要に応じて学問的な分析、解析、設計、などの手法を利用または応用する。</p> <p>f) 活動の成果について、努力、工夫、新しい発想などが認められる。</p>		
授業内容	<p>【講義概要】</p> <p>もの作りと創作活動や研究活動によるアイデアの発見、ボランティア活動による社会の発見、「創造・発見」はこのように、皆さんの多方面の創意あふれる活動によってたくさんの発見を体験するプログラムです。「創造・発見1・2」は「インターンシップ」と合わせて「やらまいかプログラム」を形成し本学のカリキュラムを特徴づける科目となっています。「やらまいかプログラム」の中で少なくとも1単位を取得することが奨励されています。</p> <p>【授業計画】</p> <p>次のような分野に分かれて活動を行います。</p> <p>(1)もの作りと創作活動 新しい機械や装置、ロボット、電子回路、ソフトウェア、CG、アニメ、ゲーム、HP、アート作品、などあらゆるジャンルのもの作りと創作に挑戦しよう。</p> <p>(2)テーマ研究 特定のテーマについて研究を行いその成果をまとめて報告します。研究の題材は、自然科学、工学技術、社会科学、人文科学などあらゆる分野から選ぶことができます。</p> <p>(3)ボランティア活動 ボランティア活動で地域社会との「ふれあい」を体験しよう。教育アシスタント(小中高校の教育の補助)、福祉施設等におけるボランティア、NPOにおけるボランティア、ボランティア指導者養成講座などがあります。</p>		
教科書	各選択分野ごとに指定する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	活動状況(履修状況や履修態度、積極性や自主性、創意工夫の姿勢や開拓精神、協調性)と報告書をそれぞれ100点満点で点数化して評価する。		
授業のサポート体制	指導者は、本学教員に限らず、学外の有識者、経験者、地域企業の在職者またはそれらのOBの中から学生の指導に熱意のある方に協力を求めることもある。		
学外の関係機関・団体との連携	袋井市社会福祉協議会、袋井市教育委員会、静岡県立袋井特別支援学校、エコハウス		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 鈴鹿医療科学大学

授業科目名		ボランティアワーク I	
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	障害者分野	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	保健衛生学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計30名 (男子学生18名 女子学生12名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	16時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの思想と歴史、組織・コーディネーター、現代社会における意義など基礎的な内容を学習する。同時に、地域でのボランティア活動の実際を学び、その具体的実践の企画、準備の作業を行う。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティアとは何か。 2. ボランティアの思想 (1) 3. ボランティアの思想 (2) 4. ボランティアの歴史 (1) 5. ボランティアの歴史 (2) 6. ボランティアの組織とコーディネーター (1) 7. ボランティアの組織とコーディネーター (2) 8. 現代社会とボランティア活動 (1) 9. 現代社会とボランティア活動 (2) 10. 地域のボランティア活動—企画・準備 (1) 11. 地域のボランティア活動—企画・準備 (2) 12. 地域のボランティア活動—企画・準備 (3) 13. 地域のボランティア活動—企画・準備 (4) 14. 地域のボランティア活動—企画・準備 (5) 15. まとめ 		
教科書	教員が用意した資料等を使用する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への取り組み姿勢とレポートにより評価を行う。		
授業のサポート体制	学科教員によるサポート		
学外の関係機関・団体との連携	鈴鹿市社会福祉協議会との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		ボランティアワーク II	
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	障害者分野	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	保健衛生学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計名 (男子学生名 女子学生名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	16時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアワーク I での基本的知識を踏まえ、地域のボランティア活動に取り組む。実践に検討を加え、理論化する方法を理解する。地域からさらに視野を広げ、災害ボランティア、環境ボランティア、国際ボランティアなどの現状と課題を理解する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域のボランティア活動—検討・理論 (1) 2. 地域のボランティア活動—検討・理論 (2) 3. 地域のボランティア活動—検討・理論 (3) 4. 地域のボランティア活動—検討・理論 (4) 5. 地域のボランティア活動—検討・理論 (5) 6. 地域のボランティア活動—検討・理論 (6) 7. 災害ボランティア (1) 8. 災害ボランティア (2) 9. 環境ボランティア (1) 10. 環境ボランティア (2) 11. 国際ボランティア (1) 12. 国際ボランティア (2) 13. 国際ボランティア (3) 14. ボランティア活動の将来 15. まとめ 		
教科書	教員が用意した資料等を使用する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への取り組み姿勢とレポートにより評価を行う。		
授業のサポート体制	学科教員によるサポート		
学外の関係機関・団体との連携	鈴鹿市社会福祉協議会との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 愛知みずほ大学

授業科目名	社会と文化VI(ボランティアと人権)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	人間科学部1～4年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計18名(男子学生9名 女子学生9名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の担い手と受け手の間に生じ権利・義務関係などを通し、人権問題を考える。		
授業内容	<p>第1. 授業計画や評価方法等について説明</p> <p>第2. ボランティアとは、受講生の意識も調べる。</p> <p>第3. 世界や日本におけるボランティアの歴史について。</p> <p>第4. なぜ、自分自身がボランティアに参加したのか。</p> <p>第5. 自身が活動していた「助け合い名古屋」とは、どんな組織か。</p> <p>第6. 日常活動の実態を説明。</p> <p>第7. 有償ボランティアの利点と問題点。</p> <p>第8. 点数制度や移送ボランティアとその問題点。</p> <p>第9. 地域通貨制度とは。国内外の実態や歴史についても。</p> <p>第10. ゲーム形式で地域通貨制度を実際に体験。</p> <p>第11. 人権とは①具体的事例を中心に考察。</p> <p>第12. 人権とは②同</p> <p>第13. 人権とは③同</p> <p>第14. ボランティアの受け手と担い手との関係について。年間の総括。</p> <p>第15. 定期試験。</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	期末テストとレポートの提出を求める。出席状況も考慮。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今年度のみ		

○ 鈴鹿国際大学

授業科目名	NPO論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力・開発	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	国際学部2年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計16名(男子学生11名 女子学生5名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	1時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>今日、社会の様々な分野で市民参加が重要な課題となっており、行政や企業、地域住民にくわえてNPO(非営利組織)やNGO(非政府組織)が着目されている。これらのセクター間による協働はより社会作りのために不可欠であるという認識がますます広まっており、これまでも地場産業の振興や都市と山村の連携、まちづくりなどで大きな成果をあげてきた。そこで、本講義では「台頭する市民社会セクターの意義と役割」を検討する。すなわち「政府、企業と並ぶもう一つの社会の担い手であるNPOやボランティア活動をどう理解するか」を講義テーマとし、三重県を中心とするNPOの活動事例を通して市民参加活動に対する理解を深めることを目的とする。</p>		
授業内容	<p>第一回 イントロダクション:開発教育とは何か</p> <p>第二回 台頭する市民社会セクター:市民活動のはじまり</p> <p>第三回以降は下記テーマについて、講義形式とワークショップ形式による討論・発表形式をとる。また、参加者の関心に応じて随時テーマを追加する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・多文化共生社会のありかた:三重県の在住外国人をめぐって ・農村振興とまちづくり:エコ・ツーリズムをめぐる取り組み ・日本の外国人研修制度:研修制度の現状と制度改革の潮流 ・ホームレス支援をめぐって:NPOの果たす役割 ・暮らしのなかのNPO:MPOの存立基盤を考える ・アドボカシーを考える:市民社会の構築にむけて 		
教科書	なし		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	<p>期末考査(50%)、課題・出席・ワークショップへの参加度(50%)により評価する。具体的には、講義で理解したことを適切に文章表現できること(課題)、講義で理解した内容を他の学生と共有・議論を経て発表できること(ワークショップへの参加度)、そして以上の過程を経て獲得した理解を自らの生活の文脈の中で捉え直し、考察することができること(期末考査)の三点を評価基準とする。</p>		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今年度のみ		

授業科目名	国際ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力・産業開発	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	国際人間科学部1年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計103名(男子学生68名 女子学生35名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	1時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>「国際ボランティアと発展途上国」</p> <p>世界的に見ると経済面における格差が激しくなっている現状の中で、一部の国は開発国、もう一部の国は開発途上国、或いは発展途上国として名付けられるようになっている。しかし、各々国は強い総合依存関係を持っていることは事実である。その一つには、経済的に豊かな国々が、まだ発展途上にある国々、即ち発展途上国を対象として行われている国際協力活動がある。本授業では、そのような課題を、日本とアジアの発展途上国を対象として議論をすることを目的とする。</p> <p>授業内容として日本の政府が行っている国際協力活動の特徴を紹介し、特に近年世界的にも関心が高まっている民間団体の国際ボランティア活動、即ち、途上国の発展に関する地域住民の貢献などの課題を中心に討議する。</p> <p>さらに、現状評価を踏まえ、国際ボランティア活動の将来について検討する。本時間内において、理論的な説明のほか、現状を理解してもらうための具体例を紹介していきたい。</p>		
授業内容	<p>①～②発展途上国に於ける地域開発と国際協力活動全般(スライドでみる発展途上国を含む)</p> <p>③国際ボランティアワークショップ2</p> <p>④～⑤ミレニアム開発目標について</p> <p>⑥国際ボランティアとはなにか</p> <p>⑦～⑧民間側としての国際協力について:NGO,NPO</p> <p>⑨～⑩日本国政府としての国際協力について:国際協力事業団(JICA)を中心に</p> <p>⑪～⑫ODAからみる国際協力と発展途上国:日本との関係を中心に(ビデオを含む)</p> <p>⑬～⑭NGO(民間団体)の国際ボランティア活動と発展途上国:日本を中心とした具体例紹介(スライドで見る発展途上国)</p> <p>⑮国際ボランティアワークショップ2</p>		
教科書	なし		
授業の工夫点	<p>発展途上国に関するスライド・ビデオなどを使い、日本国内にいないだけでは理解しにくい、様々な実態について紹介する。受講者が中心となるワークショップも予定している。授業に積極的に参加したがる受講生を大歓迎。また、学外からも講師を招き、上記の課題に関する情報を幅広く提供したいと考えている。</p>		
授業の評価方法	<p>本授業では、授業を理解するための受講者の努力及びその理解度を基準にして成績評価を行いたい。具体的に、日常的な努力を評価するために出席回数やワークショップへの参加を基準に50点、そして授業内容の理解度を評価するために期末考査を基準に50点を割り当て、総合的に成績評価をする。</p>		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ		
担当教員(学内又は学外)		授業期間	その他
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	国際人間科学部1年次対象	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計2名(男子学生2名 女子学生0名)	授業区分	実習
単位数	各1	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	実際の活動を通して現状の理解を深める。		
授業内容	ボランティア・社会貢献実施計画書を作成、実施し30時間相当の活動を行う。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	報告書の提出		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 静岡文化芸術大学

授業科目名	NGO論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	NGO活動	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文化政策学部（3年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	後期集中授業のため未実施	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	NGOが注目される背景にある世界的な潮流を理解する。		
授業内容	1. 日本社会の特質 2. 日本社会の価値変化とNPO・NGO 3. NPO・NGOの資金調達 4. フェアトレード 5. 日本のNGOの実態 6. NGOのスタッフ 7. 途上国の課題の歴史的背景 8. コミュニティレベルの国際協力活動 9. 地域に根ざした活動の構想演習		
教科書	地球市民ネットワーク		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	出席を重視し、レポートなどにより総合的に評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 愛知東邦大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経営学部（1.2年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2～3
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容			
教科書	『ボランティア学を学ぶために』		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 静岡英和学院大学

授業科目名	ボランティア・NPO論（ボランティア・市民活動論）		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	子ども家庭福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間社会学部（人間社会学科3年次、地域福祉学科1年次）	授業のレベル	初級・入門 中級・応用
平成20年度履修者数	計112名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域社会の変遷とともに、人々の生活にどのような支えあいの必要が生じてきたかを捉える。さらに、住民が生活の中から問題を発見し、学習する中で実践する活動集団へ展開する姿を通して、個人からグループ・団体への組織化を考える。		
授業内容	これまでのボランティア活動の歩みを追ひ、ボランティア活動の意義と役割を習得する。多様な領域でのボランティアの実態や課題を把握するとともに、ライフステージにおけるさまざまなボランティア活動を考える。また、近年のNPO（特定非営利活動法人）の意味、全国で展開されている実践活動、課題について学ぶ。さらに、NPOの具体的な活動事例を通して、今後の方向性を探る。また、学生独自の仮装NPO団体設立までを行う。		
教科書	なし		
授業の工夫点	ゲストスピーカーとしてNPO団体の現場の方や、行政のNPO担当者を招き、現実の事例を聞く機会を設ける。		
授業の評価方法	出席状況と期末にレポート及び仮想NPO団体の設立書類の作成を課し、その総合で評価する。		
授業のサポート体制	学内ボランティアセンターから、ボランティアセンターの機能や働きについての説明や情報提供を行う。		
学外の関係機関・団体との連携	NPO団体、行政市民活動担当等の連携を図る。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会福祉基礎Ⅰ・Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	I. こども家庭福祉・NPO II. 地域福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間社会学部(地域福祉学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計80名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	必修		
授業目的	「社会福祉とは何か」について基礎的な理解をする。		
授業内容	「社会福祉とは何か」について、社会福祉の意味や役割、制度や体系、援助の方法、援助者の役割などの基礎について導入としての学習をする。あわせて社会福祉について関心を持ち、学習意欲が向上するように、ボランティア活動体験をする。また、社会福祉の法律や制度をふまえ、社会福祉を担う人材や資格、福祉専門職のあり方、社会福祉の援助技術や方法、福祉サービス利用者の権利擁護、ボランティアをはじめとする住民参加の必要性などの講義や事例などを通して学習する。		
教科書	なし		
授業の工夫点	福祉への住民参加の必要性をボランティア体験として学習する。		
授業の評価方法	出席状況、課題レポート、学期末の試験で評価する。		
授業のサポート体制	体験調整の窓口を学内ボランティアセンターとし、学内全体として取り組んでいる。		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア協会、社会福祉協議会、市・町ボランティアセンター、施設、団体と、体験受け入れに関して連携を図る。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 星城大学

授業科目名	事業貢献論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	経営学部1年後期	授業のレベル	
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	経営学を学ぶ意義を理解し事業貢献を実践しうる要素を獲得してほしい。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 事業貢献論とはなにか 2. 科学的管理論 3. 人間関係論 4. 経営者の役割 5. 人を活かす組織 6. 戦略論 7. 組織間関係論 8. トヨタ生産方式 9. グローバル・マネージメント 10. 地域と経営 11. 企業社会貢献論 12. 非営利組織論 13. 文化と経営 14. 享受能力と需要創造 15. 事業貢献の展望 		
教科書	パワーポイント教材		
授業の工夫点			
授業の評価方法	テスト・レポート・出席状況・受講態度		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア演習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	経営学部2年後期	授業のレベル	
平成20年度履修者数		授業区分	講義、演習
単位数		ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア活動を体験する事により、資質を高める、理解を深める事を目標としている。		
授業内容	1.開講の意図と目的 2.ボランティアとは何か 3.本業とボランティア 4.金子郁容「ボランティア」① 5.金子郁容「ボランティア」② 6.活動をはじめる場合の注意点 7～13.実習 14.体験レポートの作成 15.体験報告		
教科書	プリント配布		
授業の工夫点			
授業の評価方法	テスト・受講態度・出席状況・レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続			

授業科目名	社会貢献論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	経営学部2年前期	授業のレベル	
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	1.社会貢献とは個人や企業や団体等の社会全体に対し貢献する事であり、いかに有効かつ、継続的な社会貢献活動のためのシステムを構築するかについて理解を深める。		
授業内容	1.オリエンテーション 2.社会貢献活動の実際 3.NGO/NPO論 4.社会貢献活動のための組織構築 5.社会貢献論Ⅰ(演習) 6.社会貢献論Ⅱ(演習) 7.継続的な社会貢献活動 8.まとめ		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	テスト・受講態度・出席状況・レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続			

○ 四日市看護医療大学

授業科目名	ボランティア論(NPO論)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	市民活動、NPO論、市民教育	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	看護学部・1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計12名(男子学生0名 女子学生12名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	今世界中で、元気な市民によるボランティア活動が行われ、それを組織化したNPOが増加している。この講義では、ボランティアやNPOについての基礎的な理解と、自治体レベルの公共領域でこれらの主体が果たす役割について、豊富な事例に基づき、理論・実践両面からの理解を深める。		
授業内容	1～3.ボランティア・NPOの基本概念 4～10.ボランティア・NPOの現状と課題 11～14.新しい公共とNPO 15.試験		
教科書	ない		
授業の工夫点	ない		
授業の評価方法	毎回授業中に課すミニレポート(出席点を兼ねる)40%、レポート60%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 北陸学院大学

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	その他(展開科目社会福祉系科目群)
開設学部(学科)及び年次	人間総合学部社会福祉学科	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計9名(男子学生1名 女子学生8名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	21世紀は、共生の時代である。「いつでも、どこでも、誰でも、気軽に、楽しく」ボランティア活動に参加できるような社会づくりを目指し、ボランティア活動の基本的な理論と実践のあり方を学ぶ。また就職(病院・施設など)後にも受け入れ側として役立つ手法を研究する。		
授業内容	1.「ボランティアとは」、作文(ボランティア体験等) 2.「ボランティア活動の歴史」 3.「ボランティア活動の性格と役割」 4.「ボランティア活動の契機とボランティアセンターの活用」 5.「ボランティア活動の形態」 6.「施設でのボランティア活動」「家庭・地域でのボランティア活動」 7.「実践したいボランティア活動(施設編)」 8.「実践したいボランティア活動(家庭・地域編)」 9.「実践したいボランティア活動」まとめ・総括 10.「来てほしくないボランティアとは」 11.「ボランティアグループの種類と特性」 12.「ボランティアコーディネーターとは」 13.「NPO・NGOとは」 14.課題研究、活動論総括 15.試験		
教科書	「ボランティア論」(中央法規出版)		
授業の工夫点	グループディスカッション、ビデオ学習、課題研究		
授業の評価方法	提出レポート、試験による総合評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域活動セミナー		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	情報	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	短期大学部コミュニティ文化学科	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計48名（女子学生48名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	8時間
必修・選択の別	必修		
授業目的	地元金沢の特徴である「伝統文化を活用した街の活性化」という点を理解した上で、ボランティアの活動を通して「自信が地域とどのように関わるか」を考える。		
授業内容	1.科目の目的 2.ボランティア活動のオリエンテーション(その1) 3.ボランティア活動のオリエンテーション(その2) 4.ボランティア活動のオリエンテーション(その3) 5.ボランティア活動のオリエンテーション(その4) 6.ボランティア実習(8時間相当。以下から一つ選択) ①介護等体験(中学校教諭二種免許取得希望者) ②金沢市百万石祭りでの美化ボランティア ③ゴミ不法投棄に対するキャンペーンのボランティア ④自主申告ボランティア		
教科書			
授業の工夫点	地域との積極的な交流を図る。		
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	金沢市との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 種智院大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉全般	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部全年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計50名（男子学生41名 女子学生9名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	人間性豊かな社会すなわち福祉社会を創造するためには、制度的保障体系のみならず市民(住民)の福祉社会創造に向けた参加が重要である。 その形態として改めて注目されているのが市民(住民)の主體的な参加による活動、すなわちボランティアによる社会参加活動である。 社会がますます多様化し、社会的課題も複雑に変化してきている中で、ボランティアなど市民活動への期待が高まっていることを踏まえ、ボランティア活動やNPOなど市民活動の本質的意義や今日的な動向と課題、そして今後のあり方に関して講義やワークショップを用いて、またビデオ教材などを使用して学習する。		
授業内容	1. オリエンテーション 2. ボランティア活動の基本的な考え方 ① 3. ボランティア活動の基本的な考え方 ② 4. ボランティア活動の基本的な考え方 ③ 5. ボランティア活動の歴史の変遷 6. ボランティア活動の実際 ① 7. ボランティア活動の実際 ② 8. 福祉教育・ボランティア学習 ① 9. 福祉教育・ボランティア学習 ② 10. ボランティアコーディネート ① 11. ボランティアコーディネート ② 12. インターメディアリとしてのボランティアセンター 13. ボランティア活動に参加するにあたって 14. 授業のまとめ 15. 試験		
教科書	『学生のためのボランティア論』（大阪ボランティア協会 2006年）岡本栄一・菅井直也・妻鹿ふみ子 編		
授業の工夫点			
授業の評価方法	期末試験を基本とし、授業の出席状況や受講態度などもあわせて評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

○ 同志社大学

授業科目名	演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方自治論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計24名 (男子学生18名 女子学生6名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地方自治や「まちづくり」に関して、基礎的学習をしつつ、自ら課題を発見して、解決に向けて議論をしていく。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、小レポート、クラスでの発表など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	自治体議会・行政あるいはNPOとの交流、実態調査		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	政策過程論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計26名 (男子学生13名 女子学生13名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	国・地方・グローバルなレベルで起こっている問題について分析し、現に実施されている政策を評価し、課題を明らかにし、具体的な解決策を提示することを目的とする。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末レポート・論文、クラスでの発表、クラスへの貢献度など		
授業のサポート体制	TA配置		
学外の関係機関・団体との連携	自治体へのインタビューなど		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行政学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計27名 (男子学生23名 女子学生4名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	大学院生と一緒に実施している京都府南丹市園部地域のまちづくり活動に参加し、具体的な計画提案と、地元行政やタウンマネジメント会社、そして地元有志(園部未来づくり研究会)とともにその実現に向けた活動を行う。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果等		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地元行政、タウンマネジメント会社、地元有志とともにまちづくり活動		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	観光文化政策	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計29名 (男子学生12名 女子学生17名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域社会をフィールドにしなが、「観光」「まちづくり」「地域学習」「生涯学習」「協働」などをキーワードに、“草の根”的な文化政策の在り方を学ぶ。		
授業内容			
教科書	水曜社の『まちづくりと共感、協育としての観光－地域に学ぶ文化政策－』（井口 貢 著）		
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末レポート・論文、クラスでの発表、クラスへの貢献度など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	公共政策	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計22名 (男子学生7名 女子学生15名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	内外の社会起業によるソーシャル・イノベーションの事例を通して、ソーシャル・イノベーションの意義、方法、課題等について学習することを目的とする。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、クラスでの発表、クラスへの貢献度など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習 II		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方自治論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計23名 (男子学生16名 女子学生7名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地方自治や「まちづくり」に関して、基礎的学習をしつつ、自ら課題を発見して、解決に向けて議論をしていく。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、小レポート、クラスでの発表など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	自治体議会・行政あるいはNPOとの交流、実態調査。全国大学政策フォーラムin登別、全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺への参加。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	政策過程論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名（男子学生13名 女子学生6名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	国・地方・グローバルなレベルで起こっている問題について分析し、現に実施されている政策を評価し、課題を明らかにし、具体的な解決策を提示することを目的とする。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末レポート・論文、クラスでの発表、クラスへの貢献度など		
授業のサポート体制	TA配置		
学外の関係機関・団体との連携	国、自治体やNPOなど関連機関へのインタビュー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行政学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計21名（男子学生9名 女子学生12名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	大学院生と一緒に実施している京都府南丹市園部地域のまちづくり活動に参加し、具体的な計画提案と、地元行政やタウンマネジメント会社、そして地元有志（園部未来づくり研究会）とともにその実現に向けた活動を行う。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果等		
授業のサポート体制	TA配置		
学外の関係機関・団体との連携	市、タウンマネジメント会社、地元有志とともにまちづくり活動を行う。全国大学政策フォーラムin登別、全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺への参加。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅱ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	観光文化政策	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計26名（男子学生12名 女子学生14名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域社会をフィールドにしながら、「観光」「まちづくり」「地域学習」「生涯学習」「協働」などをキーワードに、“草の根”的な文化政策の在り方を学ぶ。		
授業内容			
教科書	ミネルヴァ書房の『入門・文化政策』（井口 貢 著）		
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末レポート・論文、クラスへの貢献度		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	公共政策	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計20名(男子学生17名 女子学生3名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	内外の社会起業によるソーシャル・イノベーションの事例を通して、ソーシャル・イノベーションの意義、方法、課題等について学習することを目的とする。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、クラスでの発表、クラスへの貢献度		
授業のサポート体制	TA配置		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅲ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方自治論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計23名(男子学生16名 女子学生7名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地方自治や「まちづくり」に関して、基礎的学習をしつつ、自ら課題を発見して、解決に向けて議論をしていく。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、小レポート、クラスでの発表など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	自治体議会・行政あるいはNPOとの交流、実態調査		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅲ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	政策過程論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名(男子学生13名 女子学生6名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	国・地方・グローバルなレベルで起こっている問題について分析し、現に実施されている政策を評価し、課題を明らかにし、具体的な解決策を提示することを目的とする。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末レポート・論文、クラスでの発表、クラスへの貢献度など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	国、自治体やNPOなど関連機関へのインタビュー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅲ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行政学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計21名（男子学生9名 女子学生12名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	大学院生と一緒に実施している京都府南丹市園部地域のまちづくり活動に参加し、具体的な計画提案と、地元行政やタウンマネジメント会社、そして地元有志（園部未来づくり研究会）とともにその実現に向けた活動を行う。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果等		
授業のサポート体制	TA配置		
学外の関係機関・団体との連携	市、タウンマネジメント会社、地元有志とともにまちづくり活動を行う。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅲ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	観光文化政策	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計26名（男子学生12名 女子学生14名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域社会をフィールドにしながら、「観光」「まちづくり」「地域学習」「生涯学習」「協働」などをキーワードに、“草の根”的な文化政策の在り方を学ぶ。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末レポート・論文、クラスでの発表、クラスへの貢献度など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	演習Ⅲ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	公共政策	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計20名（男子学生17名 女子学生3名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	内外の社会起業によるソーシャル・イノベーションの事例を通して、ソーシャル・イノベーションの意義、方法、課題等について学習することを目的とする。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、クラスでの発表、クラスへの貢献度		
授業のサポート体制	TA配置		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	卒業研究演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方自治論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科4年次	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計25名 (男子学生10名 女子学生15名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地方自治や「まちづくり」に関して、基礎的学習をしつつ、自ら課題を発見して、解決に向けて議論をしていく。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、クラスでの発表など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	自治体議会・行政あるいはNPOとの交流、実態調査。全国大学政策フォーラムin登別、全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺への参加。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	卒業研究演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	政策過程論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科4年次	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計26名 (男子学生10名 女子学生16名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	国・地方・グローバルなレベルで起こっている問題について分析し、現に実施されている政策を評価し、課題を明らかにし、具体的な解決策を提示することを目的とする。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、クラスでの発表、クラスへの貢献度など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	国、自治体やNPOなど関連機関へのインタビュー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	卒業研究演習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行政学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科4年次	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計25名 (男子学生17名 女子学生8名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	大学院生と一緒に実施している京都府南丹市園部地域のまちづくり活動に参加し、具体的な計画提案と、地元行政やタウンマネジメント会社、そして地元有志(園部未来づくり研究会)とともにその実現に向けた活動を行う。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果等		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	市、タウンマネジメント会社、地元有志とともにまちづくり活動を行う。全国大学政策フォーラムin登別、全国大学まちづくり政策フォーラムin京田辺への参加。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	卒業研究演習Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方自治論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科4年次	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計26名(男子学生11名 女子学生15名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地方自治や「まちづくり」に関して、基礎的学習をしつつ、自ら課題を発見して、解決に向けて議論をしていく。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末レポート試験・論文など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	自治体議会・行政あるいはNPOとの交流、実態調査		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	卒業研究演習Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	政策過程論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科4年次	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計27名(男子学生10名 女子学生17名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	国・地方・グローバルなレベルで起こっている問題について分析し、現に実施されている政策を評価し、課題を明らかにし、具体的な解決策を提示することを目的とする。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末レポート・論文、クラスでの発表など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	国、自治体やNPOなど関連機関へのインタビュー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	卒業研究演習Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行政学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科4年次	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計24名(男子学生16名 女子学生8名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	大学院生と一緒に実施している京都府南丹市園部地域のまちづくり活動に参加し、具体的な計画提案と、地元行政やタウンマネジメント会社、そして地元有志(園部未来づくり研究会)とともにその実現に向けた活動を行う。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	フィールドワーク、合宿		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果等		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	市、タウンマネジメント会社、地元有志とともにまちづくり活動を行う。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティ政策		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方自治論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計550名（男子学生362名 女子学生188名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域社会のさまざまな課題やそれを解決するための政策等について、多様な視点から分析を行う。		
授業内容			
教科書	第一法規の『地域力を高めるこれからの協働－ファシリテータ育成テキスト－』（今川 晃・山口 道昭・新川 達郎編）		
授業の工夫点	グループ作業		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末試験など		
授業のサポート体制	TA配置		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域政策		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方自治論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計747名（男子学生474名 女子学生273名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	市民のイニシアティブでまちづくりが進められ、そのことが地域活性化の基盤となっている場合が多くなってきている点に着目して「協働時代の地域政策」を考える。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	グループ作業		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末試験など		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	京都市出前講座		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGO・NPO組織		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会心理学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計587名（男子学生352名 女子学生235名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会問題を解決していく実践主体の運営方法を学び、具体的な実践に携わっていく際の基本的な発想とスキルの修得を目指す。		
授業内容			
教科書	日経文庫の『NPO入門＜第2版＞』（山内 直人 著）		
授業の工夫点	グループ作業		
授業の評価方法	期末試験		
授業のサポート体制	TA配置		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域創造政策		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地方自治論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	政策学部政策学科3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計676名(男子学生438名 女子学生238名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	先進的な自治体、NPO等の実践活動から学びつつ、各自治体のこれからの政策のあり方を追求していく。		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点	グループ作業		
授業の評価方法	出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果、期末レポート・論文など		
授業のサポート体制	TA配置		
学外の関係機関・団体との連携	自治体やNPO等から外部講師を招聘。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	学際科目2「心のバリアフリー」をめざして一障がい学生支援の視点を通して一		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	複数担当のため個別	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学共通教養教育科目	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計26名(男子学生12名 女子学生14名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	障がい学生を取り巻く状況・実情を踏まえつつ、(主として)聴覚障がい学生の講義保障の実際を理解し、「コミュニケーションのバリアフリー」をキーワードとして、障がい学生とそれを支援するスタッフ双方の気付きに着目しながら、自律的な成長の実現を目指す。		
授業内容	第1講 障がい学生への支援についてー同志社大学障がい学生支援の現状と課題、京都および日本の大学の障がい学生支援の動きー 第2講 援助するということについてー支える支えられるの関係を考えるー 第3講 聴覚障がい学生とその支援方法ー聴こえない立場の体験をとおしてー 第4講 障がい者スポーツの現状と課題ならびに同志社大学における取り組み 第5講 障害者自律支援法と社会参加 第6講 障がい者当事者からみた支援政策の課題と展望 第7講 コミュニケーション概論ー情報保障とは・伝えることと伝わることの違いー 第8講 「聴覚障害」についてー聞こえのしくみ、聴覚障がい者(聾、難聴、中途失聴)への理解ー 第9講 聴覚障がい者とのコミュニケーションにおけるバリアーー学生・企業人・研究者の視点からー 第10講 聴覚障がい学生による講話「大学で学んで思うこと」 第11講 聾文化と手話通訳について 第12講 大学生のコミュニケーションについてークラブ・サークル、地域社会との関わり、コミュニケーションの生成プロセスについてー 第13・14講 「自分の中の気づきや変化」、「心のバリアを取り除く」などをテーマとしてのグループディスカッション 第15講 報告会		
教科書	授業中に指示		
授業の工夫点			
授業の評価方法	平常点(出席、クラス参加、発表、グループ作業の成果等) 50% 期末レポート試験・論文		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	大学コンソーシアム京都単位互換科目として提供。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会福祉実習 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	老人福祉 医療福祉論	共通・専門等の別	専門
開設学部 (学科) 及び年次	社会学部 (社会福祉学科1年次～)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計120名 (男子学生35名 女子学生85名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修		
授業目的	社会福祉学科に入学した学生の必修オリエンテーションコースであり、現代社会における社会福祉についての基礎的理解と今後4年間の学習への指針を得ることを目的とする。現代の多様な社会福祉ニーズを、体験学習と担当及び特別講師による講義を通して学ぶ。特に障害や疾病、生活上の困難を経験している当事者の語りから、社会福祉ニーズを具体的に自分自身の感覚と生活の延長線上に捉えることを企図している。		
授業内容	1 オリエンテーション①/担当者紹介・授業スケジュール配布・実習報告集、福祉研究配布・「学生カード」配布、記入説明・「レポート①社会福祉と私」の提出について・「社会福祉実習 I・II」専用ファイルの配布 2 オリエンテーション②/小クラス発表小クラスでのオリエンテーション・「レポート①社会福祉と私」回収・「学生カード」回収 3 講義:身体障害者の生活と福祉について 4 クラス討議①(前回の講義をふまえて) 5 体験学習:車イス介助とキャンパスチェック・「レポート②障害者福祉と車イス体験」の提出について 6 講義:制約を持った子どもたち 7 クラス討議②(車イス体験および前回の講義をふまえて)・「レポート②障害者福祉と車イス体験」回収 8 講義:視覚障害者の生活と福祉について 9 クラス討議③(前回の講義をふまえて) 10 ブラインド・ウォーク・「レポート③ブラインド・ウォークと視覚障害者福祉」の提出について 11 講義:デンマークの社会福祉・「レポート③ブラインド・ウォークと視覚障害者福祉」回収 12 講義:児童福祉施設で暮らす子どもたち 13 クラス討議④(前回、前々回の講義をふまえて) 14 夏期休暇中のボランティアに基づく体験学習について・体験学習の注意事項・前年度履修学生による体験学習報告・「レポート④夏休みボランティア課題レポート」の提出について		
教科書	授業中に指示する。		
授業の工夫点	「障害」はその個人に存する疾病や身体的条件そのものではなく、当該の社会環境との関係において形成されるものであり、歴史的に変遷があり、また異なる国・地域や文化によりとらえ方にも違いがある。このような障害に関する考え方や社会福祉実践をめぐる理念や価値観をも学び、学生が自分自身の価値観と照らし合わせながら考えを発展させて行けるように、全体クラスでの授業と小クラスでの討議を併せて行う。また、夏休み課題として、ボランティア活動を課す。各学生が自分でボランティア先を探し、ボランティアとして活動し、その体験をレポートにまとめて提出する。		
授業の評価方法	出席重視。平常点 40% 毎回出席を取る。小レポート 40% その他 20% 研究発表の内容、研究発表時のクラス討議への積極的な参加など。		
授業のサポート体制	ボランティア活動の際の危機管理として、事務及び平日連絡先と緊急連絡先を設け、学生及びボランティア受入先へ周知。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO・ボランティア活動論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	発達人間福祉学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	社会学部（社会福祉学科1年次～）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計153名（男子学生71名 女子学生82名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>様々な社会的課題に対して主体的にかかわっていくNPO・ボランティア活動の意義は大きい。本講では、まずNPO・ボランティア活動の史的展開・基礎的理論・意義・役割について考察する。大学で、ソーシャルワークを学び始めた諸君にとって、ソーシャルワークの理念・価値や役割及び社会福祉に関する諸問題を自分自身の問題として考える第一歩としたい。</p> <p>また後半には、福祉教育・ボランティア学習および、ボランティアコーディネーションの意義や実際について事例を挙げて考察する。ボランティアを必要とする人とボランティア活動を希望する人を対等につなぎ・結ぶ役割が、ボランティアコーディネーションである。ボランティアコーディネーションの意義・役割を学ぶなかで、地域福祉の推進におけるNPO・ボランティア活動の現状と課題についても考察していきたい。ボランティア活動を通して体験する苦しさや楽しさを分かち合いながら、ボランティア活動の生命であるボランタリズムについても共に学んでいきたい。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 オリエンテーション: 受講生の意識調査「ボランティアって何？」 2 キーワードから学ぶNPO・ボランティア活動の定義 3 NPO・ボランティア活動の基本理念～ボランタリズムとは～ 4 NPO・ボランティア活動の歴史 5 施設におけるボランティア活動の意義 6 地域でのボランティア活動（小地域NTW活動） 7 体験学習としてのボランティア活動～短期体験型ボランティア活動の事例から学ぶ～ 8 受講生が語る！活動レポート1～ボランティア活動実践から学んだこと～ 9 受講生が語る！活動レポート2～ボランティア活動実践から学んだこと～ 10 地域福祉の推進における福祉教育・ボランティア学習の役割1 11 地域福祉の推進における福祉教育・ボランティア学習の役割2 12 ボランティアコーディネーションのめざすもの 13 ボランティアコーディネーションの実際～事例から学ぶ 14 まとめ・期末レポート 		
教科書	<p><テキスト> 新崎 国広 『社会福祉施設ボランティアコーディネーションのめざすもの第2版』（久美出版株式会社）</p> <p><参考文献> 岡本 栄一 『ボランティア 参加する福祉』（ミネルヴァ書房） 岡本 栄一監修 『ボランティアのすすめ』（ミネルヴァ書房）</p>		
授業の工夫点	<p>本講では、一般論としてのNPO・ボランティア活動論について学ぶだけでなく、ソーシャルワークにおけるNPO・ボランティア活動の意義や役割を中心に学習する。講師が、肢体不自由児施設でボランティアコーディネーターであった頃、障害がある子ども達や保護者・ボランティアから多くのことを学んだ。そのような経験を通し気づき・学んだことにも触れる。また、ソーシャルワーカーとしてのボランティアコーディネーターの役割についても伝えたい。本講は、受講生に主体的で積極的な参加を期待し、受講生と共に創っていきたいと考えている。</p>		
授業の評価方法	<p>平常点 30% 授業への積極的な参加を期待する。 小レポート 20% 毎回、講義の感想・意見等を書いてもらい、評価する。 中間レポート試験 20% ボランティア活動の経験・活動から学んだことについて。 期末レポート試験 30% 最終日に、授業のまとめ・ふりかえりも兼ねてレポートを提出する。</p>		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 同志社女子大学

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	自然環境体験論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	現代社会学部、2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計9名（男子学生0名 女子学生9名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の特質・意義・思想・歴史的背景・現状・可能性などを学ぶとともに、ボランティアの課題を考察する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティアとは 2. ボランティアの歴史・現状 3. 様々なボランティア活動 4. ボランティアコーディネーター 5～6. 小学校でのボランティア活動 7～13. 小学校でのボランティア活動の実践方法 14. ボランティア活動の課題 		
教科書	なし		
授業の工夫点	「小学校におけるボランティア活動」に焦点を当てている。		
授業の評価方法	出席を基本に、発表・質疑応答・レポートなどを総合して評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	小学校		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 京都ノートルダム女子大学

授業科目名	ボランティア概論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員※クラスにより異なる	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	人間文化学部、心理学部、生活福祉文化学部（各学部1～4年次生）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計293名（男子学生0名 女子学生293名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の理念について理解する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2～3. ボランティアとは 4～5. ボランティアと聖書。 6. 日本国内ボランティア活動の種類 7～8. NGOとNPO 9. ホスピスボランティア 10. ボランティア活動の心得え 11. ボランティアを受ける立場 12. ボランティア・コーディネーターとは 13. 自立への援助とは 14～15. まとめと補充 		
教科書	なし		
授業の工夫点	授業は講義形式とする。		
授業の評価方法	レポート・授業態度・出席状況・テスト等で総合評価とする。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア実践		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他（事前事後指導2回ボランティア参加）
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	人間文化学部、心理学部、生活福祉文化学部（各学部2～4年次生）	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計約10名（男子学生0名 女子学生約10名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	学生ボランティア・学校サポート事業等の活動に参加し理解する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 『学生ボランティア』学校サポート事業』及び「学生パワー活用事業」についてのオリエンテーション及び事前事後指導に出席すること 2. 『学生ボランティア』学校サポート事業』及び「学生パワー活用事業」への参加 3. まとめと補充 		
教科書	なし		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	レポート・各教育委員会からの報告書・体験30時間参加により評価する。		
授業のサポート体制	ある		
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 立命館大学

授業科目名	社会とボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	その他(学部により異なる)
開設学部(学科)及び年次	全学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計50名（男子学生28名 女子学生22名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	到達目標 / プログラム全体を通じて、ボランティア・地域活動コーディネーターとして、地域社会の問題を主体的にとらえ、その解決を目指し、地域でのボランティア活動を企画、調整、支援できる人材となることを目指す。		
授業内容	授業の概要 / 本講義は、ボランティアコーディネーター養成プログラムの講義科目であり、「ボランティア情報・調査演習」と連動しながら行われる。講義では、ボランティア活動の実態と動向、社会的な意義と課題、そしてボランティアコーディネーターの役割と実践のあり方について学ぶ。また、国や自治体などの政策動向等の社会状況を踏まえつつ、ボランティア活動の固有性について考えるとともに、求められるボランティアコーディネーター像を検討する。 http://online-kaikou.ritsume.ac.jp/2008/syp/show.php?course_code=16731		
教科書	書名:ボランティアマネジメント 著者:桜井政成		
授業の工夫点	サービスラーニング手法を取り入れて運営		
授業の評価方法	日常的な授業に対する取組状況等の評価:100 % 出席、授業への積極性、レポート課題の提出等を加味して判断		
授業のサポート体制	TA(ティーチングアシスタント)		
学外の関係機関・団体との連携	地域NPO・NGO、行政機関のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアマネジメント論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	その他(学部により異なる)
開設学部(学科)及び年次	全学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計50名（男子学生28名 女子学生22名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	到達目標 / プログラム全体を通じて、ボランティア・地域活動コーディネーターとして、地域社会の問題を主体的にとらえ、その解決を目指し、地域でのボランティア活動を企画、調整、支援できる人材となることを目指す。		
授業内容	授業の概要 / 本講義は、ボランティアコーディネーター養成プログラムの講義科目であり、「ボランティア活動支援演習」と連動しながら行われる。講義では、ボランティア活動を組織し、調整、推進していくうえでコーディネーターに求められる役割と業務および倫理について学ぶ。ボランティア振興に関わるイベントの企画運営と展開のあり方、ボランティアの登録や管理、ボランティア活動の相談から調整と評価までの需給調整、社会資源の活用と開発などについての基本的な考え方、知識や技術をとりあげる。 http://online-kaikou.ritsume.ac.jp/2008/syp/show.php?course_code=16745		
教科書	書名:ボランティアマネジメント 著者:桜井政成		
授業の工夫点	サービスラーニング手法を取り入れて運営		
授業の評価方法	日常的な授業に対する取組状況等の評価:100 % 出席、授業への積極性、課題提出及びその内容を踏まえて評価		
授業のサポート体制	TA(ティーチングアシスタント)		
学外の関係機関・団体との連携	地域NPO・NGO、行政機関のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア情報・調査演習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	その他(学部により異なる)
開設学部(学科)及び年次	全学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計50名(男子学生28名 女子学生22名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	到達目標 / プログラム全体を通じて、ボランティア・地域活動コーディネーターとして、地域社会の問題を主体的にとらえ、その解決を目指し、地域でのボランティア活動を企画、調整、支援できる人材となることを目指す。		
授業内容	授業の概要 / 本演習は、ボランティアコーディネーター養成プログラムの演習科目であり、「社会とボランティア」「ボランティアインターンシップ」と連動しながら行われる。ボランティアコーディネーターの業務では、常に様々な情報を取り扱う。演習では、インターンシップの事前準備と絡めながら、ボランティア活動に関わる情報の収集・管理・提供の方法について学ぶ。また、様々な課題についての状況把握、計画、実行、情報発信に関わる演習活動とおしてコーディネーターの役割について理解を深める。 http://online-kaikou.ritsumei.ac.jp/2008/syp/show.php?course_code=16735		
教科書			
授業の工夫点	サービスラーニング手法を取り入れて運営		
授業の評価方法	日常的な授業に対する取組状況等の評価:100% 出席、授業態度、提出物の提出状況等により判断。		
授業のサポート体制	TA(ティーチングアシスタント)		
学外の関係機関・団体との連携	地域NPO・NGO、行政機関のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動支援演習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	その他(学部により異なる)
開設学部(学科)及び年次	全学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計50名(男子学生28名 女子学生22名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	到達目標 / プログラム全体を通じて、ボランティア・地域活動コーディネーターとして、地域社会の問題を主体的にとらえ、その解決を目指し、地域でのボランティア活動を企画、調整、支援できる人材となることを目指す。		
授業内容	授業の概要 / 本演習は、ボランティアコーディネーター養成プログラムの演習科目であり、「ボランティアマネジメント論」と連動しながら行われる。ボランティア、ボランティアグループ、ボランティア推進機関などの状況や連絡調整および支援のあり方、地域や市民の生活実態やニーズについての理解を深める。インターンシップの振り返りや事例研究などを通じ、ボランティアコーディネーターとしての実践的な力量を身に着けることを目的とする。 http://online-kaikou.ritsumei.ac.jp/2008/syp/show.php?course_code=16751		
教科書			
授業の工夫点	サービスラーニング手法を取り入れて運営		
授業の評価方法	日常的な授業に対する取組状況等の評価:100% 出席、授業態度、提出物の提出状況等により判断。		
授業のサポート体制	TA(ティーチングアシスタント)		
学外の関係機関・団体との連携	地域NPO・NGO、行政機関のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアインターンシップ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業(夏期休暇期間中)
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	その他(学部により異なる)
開設学部(学科)及び年次	全学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計50名(男子学生28名 女子学生22名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	90時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	到達目標 / インターンシップ先により異なる。		
授業内容	授業の概要 / Course Outline 本講義は、ボランティアコーディネーター養成プログラムの講義科目であり、講義科目、演習科目と連動しながら行われる。主に夏期休暇中で90時間以上のインターンシップをおこなう。 http://online-kaikouritsumei.ac.jp/2008/syp/show.php?course_code=20389		
教科書			
授業の工夫点	サービスマーケティング手法を取り入れて運営		
授業の評価方法	日常的な授業に対する取組状況等の評価:100% 活動時間、計画作成、提出物、報告内容等から判断する。		
授業のサポート体制	TA(ティーチングアシスタント)		
学外の関係機関・団体との連携	地域NPO・NGO、行政機関受入れ先のコーディネーター(協定の締結による)		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域参加活動入門		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	その他(学部により異なる)
開設学部(学科)及び年次	法学部、産業社会学部、政策科学部、文学部、映像学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計387名(男子学生152名 女子学生235名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	到達目標 / 地域参加活動の意義・現状・課題や、地域参加活動の方法を学ぶことで、地域参加活動を行うための準備となることを目指す。本講義を終え、地域に参加する受講者が一人でも多く現れてほしいと望んでいる。		
授業内容	授業の概要 / 大学生の学びの場はキャンパス内にとどまるものではない。ボランティア活動などの、地域へ参加する活動を通じて、かけがえのない学びを得ることができる。人間的な成長や、専門知識への関心を高めることができる。地域参加の活動は、地域に貢献するだけでなく、参加する学生にとっても、得るものが大きいのである。 しかし、地域参加活動の魅力や、そこで得られる学びは、活動を行っていない者にはなかなか理解しがたい。また、社会的な活動であるため、事前に諸々の注意事項を理解しておく必要がある。本講義は、そうした地域参加活動へ誘う動機付けと、参加のための心構えを身につけることを目的に開講する。 本講義では多くのゲストスピーカーが登場する。いずれも日常の学生生活では出会えない人ばかりなので、臆せずに質問等を行ってほしい。 http://online-kaikouritsumei.ac.jp/2008/syp/show.php?course_code=16767		
教科書			
授業の工夫点	サービスマーケティング手法を取り入れて運営		
授業の評価方法	レポート試験:50% 与えられた設題について十分に論じられているか。文章は論理的か。誤字脱字やインターネット丸写しはないか 学習到達度を最終的に確認する「検証テスト」:50% 中間まとめのときに、レポート課題を課す。		
授業のサポート体制	TA(ティーチングアシスタント)		
学外の関係機関・団体との連携	地域NPO・NGO、行政機関のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域活性化ボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	その他(学部により異なる)
開設学部(学科)及び年次	全学部	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計149名(男子学生67名 女子学生82名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	40時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	到達目標 / ボランティア活動を通じて地域に貢献しつつ、地域社会の一員としての自覚と能力を育成し、自身の学問的専門領域への関心を高めること。		
授業内容	<p>授業の概要 / ボランティアセンターでは複数の地域と連携し、ボランティア活動を通じて地域に貢献しつつ、参加者にとって地域社会の一員としての自覚と能力を育成し、専門知識の応用的な理解を促す機会となる「地域活性化ボランティアプログラム」を実施している。これは、お祭りやまちづくりの支援活動、里山保全活動、子育て、災害援助活動など、さまざまな地域のさまざまな課題に対して取り組むものである。活動の期間は2日から1週間程度の集中的な活動から、半年近く活動するものまで様々である。この「地域活性化ボランティアプログラム」に所定の時間以上参加し、なおかつ事前学習・事後学習に参加し、さらに所定の提出物を提出したのものについて、単位を認定する。</p> <p>http://online-kaikouritsumei.ac.jp/2008/syp/show.php?course_code=16759</p>		
教科書			
授業の工夫点	サービスラーニング手法を取り入れて運営		
授業の評価方法	日常的な授業に対する取組状況等の評価:100% 事前学習、活動、中間振り返り、事後学習、活動報告会のすべてに参加し、かつ必要な提出物および評価対象物(レポートなど)をすべて提出すること。		
授業のサポート体制	TA(ティーチングアシスタント)		
学外の関係機関・団体との連携	地域NPO・NGO、行政機関受入れ先のコーディネーター(協定の締結による)		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	教養教育特殊講義(近江・草津論)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	経済学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	経済学部、経営学部、理工学部、情報理工学部、薬学部、生命科学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計494名(男子学生241名 女子学生253名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	プログラムによる
必修・選択の別	選択		
授業目的	到達目標 / 近江・草津の地域とはどのような特徴のある地域であり、どのような課題に直面しているかを、経済人、行政関係者、市民組織の代表から概説してもらったと同時に、フィールドワーク(FW、実地体験学習)の場におけるボランティア活動への参画を通して発見・体得してもらう。そのうえでかかる課題をどう解決したらよいのか、学生と住民、BKCと地域・企業とが共存共栄する関係を築くためにはどうしたらよいかを探究し、滋賀県民・草津市民の心に刺さるような「提言レポート」を完成してもらう。		
授業内容	<p>授業の概要 / BKCの建設にあたって、滋賀県と草津市とは140億円もの税金を投入してくれた。BKCとは、このように地域住民と立命館とが協同して作り上げてきたキャンパスである。大学で私たちは、専門的学問を修得するのであるが、学んだ成果をため込んでいただけではだめである。「世のため、人のため」に使ってみることで、学ぶ意味も自覚できるし、知識も定着していくものだ。とくにBKCの創立事情に思いを致すと、学んだ成果を、まずは近江・草津の住民の直面する問題の解決のために使いこなすことが望まれる。もとよりこの課題は、学生課程全体のなかで追求すべきものであるが、本講義は、そのための第一歩として、問題意識と基礎体力とを身に付けてもらうことを目標とする。</p> <p>講師の仲野・藤岡が、地域づくり・街づくりの基礎理論と技法を解説する講義を3回程度行うが、それ以外には、地域の発展に貢献しようとする努力されている方々をゲストとしてお招きし、リレー講義を行っていただく。毎回の講義のなかに、レポート作成のための素材やヒントが豊かに見出せるはずである。</p> <p>http://online-kaikouritsumei.ac.jp/2008/syp/show.php?course_code=53907</p>		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート試験:90% 5回程度のレポートを期日までのWEB-CTに提出してもらう。 日常的な授業に対する取組状況等の評価:10% 毎回の授業の質問・感想カードの提出		
授業のサポート体制	TA(ティーチングアシスタント)		
学外の関係機関・団体との連携	地域NPO・NGO、行政機関のゲストスピーカー		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 大阪学院大学

授業科目名	研修ボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	生徒指導の研究	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計0名（男子学生0名 女子学生0名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア体験を通じて、自己の適性を把握する機会を持ち、人間的成長や社会意識の向上を目的とする。高校、小中学校、幼稚園等の学校現場での教育活動の補助をはじめ、種々の体験を積んだ学生の人間的成長は著しく、自分より年下の者に接して年長者としての義務と責任を自覚し、その達成に向けて努力することは人間的成長を促す意味での教養教育となる。また、昨今、少子化と地域コミュニティの崩壊から、若い世代が触れ合う機会が減少しており、これらを少しでも是正するために、異なる学校現場で活動することは、地域との連携も併せて期待することができる。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業のはじめに ボランティアの概念と心理 2. 社会的役割と存在意義 3. 研修活動時のマナー（体罰、いじめ、不登校、セクシュアルハラスメント等） 4. 学校・家庭・地域社会（情報交換、基本的生活習慣） 5. 学校における健康、安全管理（自己管理を含む） 6. 研修（ボランティア）活動 7. 活動記録作成 8. 活動の記録修正 9. 授業内活動報告会① 10. 授業内活動報告会② 11. 授業のまとめ 		
教科書	なし		
授業の工夫点	講義はグループワークを中心に行われる。実習では活動日誌を作成、受講者の活動内容に加え、実習校担当教員のフィードバックを記載してもらい、実習に活かしている。		
授業の評価方法	レポート60%：評価対象物等、日常点（出席・小テスト等）40%、その他、追加課題を提出させる場合がある。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	吹田市・箕面市・京都市の各教育委員会		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 関西大学

授業科目名	21世紀の人間支援		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	法・文・経済・商・社会・政策創造・システム理工・環境都市・化学生命工学部(1～4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計421名（男子学生212名 女子学生209名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	わが国の少子高齢化は急速に進行しており、高齢化や少子化に伴う多様な問題が発生している。一方で、家族や地域機能の弱体化が一層進行しており、それは多発する社会問題の解決をさらに困難にしている。このような社会状況の中で、社会や地域でのボランティアネットワークの構築が求められ、また多様な活動が実践されている。本講義では、ボランティア活動に対する関心を深めるために、様々な領域でのボランティア実践活動を紹介するとともに、個々の受講生がボランティア活動に参加する機会を提供したい。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現代社会とボランティア活動の意義 2. 福祉分野とボランティア活動 3. 企業と社会貢献事業 4. 子どもの自然教育とボランティア 5. セレブヘルプグループ活動 		
教科書	(参考書) 川口清史・田尾雅夫・新川達郎編 『よくわかるNPO・ボランティア』 ミネルヴァ書房		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験を行わず、出席・レポート・臨時試験など(平常成績)で総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	経済学特殊講義4(NPOボランティア論)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア・NPO	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部(3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計177名(男子学生118名 女子学生59名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	民間の手で取り組まれる公益非営利活動(ボランティア活動、NPO活動、企業市民活動など)の特性についての理解をはかるとともに、行政との協働も含むその現状、実践上の課題とその解決方策などについて、最新の動きも含めて紹介する。		
授業内容	①震災でボランティアが活躍した理由(民間公共活動の特性) ②災害時のボランティアコーディネーション ③市民活動を進める際の課題Ⅰ(「善意」が効果を生み出す保証はない) ④市民活動を進める際の課題Ⅱ(活動の課題を乗り越え、仲間を広げるためのポイント) ⑤「自立」への応援ということの意味(私たちの「人間観」「自立観」が鍵ということ) ⑥ボランティア活動と「見返り」の関係(「有償ボランティア」活動の課題と、市民活動の広がり) ⑦市民活動の制度的位置の変遷(近代日本における市民活動を取り巻く歴史、「NPO」は何を解決したか? 認定NPO法人制度改善にあたっての課題など) ⑧企業が社会貢献活動に取り組む理由(営利組織が非営利活動に関わるのは、なぜか?) ⑨企業市民活動の実際(CSRが広がる背景) ⑩市民活動団体の経営と市民活動を支えるシステム整備 ⑪自治体の市民活動活性化・協働策の動き(自治体と市民活動団体との関係) ⑫「コーディネーション」という役割(ボランティアコーディネーターとは何か?) ⑬施設・機関における市民参加の可能性 ⑭地域通貨、エコマネー、時間貯蓄 ⑮コミュニティビジネスの広がり などについて、質問・希望をふまえて講義。		
教科書	(参考書) 早瀬昇『企業人とシニアのための市民活動入門』大阪ボランティア協会、岡本榮一・菅井直也・妻鹿ふみ子編『学生のためのボランティア論』大阪ボランティア協会		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験を行わず、出席・レポート・臨時試験など(平常成績)で総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	専門演習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	社会学部(3年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計20名(男子学生11名 女子学生9名)	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域福祉は、身近な「子育て支援」や「老親介護」といった生活問題の解決を専門的な福祉機関・施設や職員に委ねるだけでなく、当事者家族を中心に近隣住民・ボランティア・NPO…といった公私協働の「参加型」もつとえば、「自治型」の福祉の展開をめざす営みです。とはいえ、実際の地域社会は、「上&下という垂直の階層格差」に加えて「イン&アウトという水平の社会的包摂と排除」が交錯する、結構ハードボイルドな「パワーゲーム」の舞台でもあります。(例:新/旧住民・町内会・PTA・社会福祉協議会・子育てサロン・介護予防事業・当事者の会(ex.患者会・家族会・断酒会)NPO(ex.ニート・野宿者・異文化共生・海外支援))本ゼミでは、3年次に、関心領域でのフィールドワーク(現地踏査)プロジェクトに取り組み、その経験と問題意識を4年次に発展させて、各人の卒業研究レポート作成へとつなげたいと考えています。内外の地域福祉政策の動向を追うと共に、身近な事例やトピックスを通して、地域福祉実践のグローバルなオモシロさを味わってください。		
授業内容	前期 基本テキストの講読 ★夏季休暇を中心に関心領域でのフィールドワーク 後期 フィールドワークレポートのプレゼン&フィードバック ★春季休暇を中心にフィールドワークを発展させて卒業研究レポートの構想		
教科書	久田則夫編『社会福祉の研究入門』中央法規出版 上野谷加代子他編著『よくわかる地域福祉』ミネルヴァ書房		
授業の工夫点			
授業の評価方法	平常点で行う。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	学校参加とフィールドワーク1		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	学校教育学、教育心理学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部(1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計27名（男子学生11名 女子学生16名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	この授業では、スクール・ボランティアやフィールドワークなど学校参加の活動を通して、子どもの学習と発達、小学校における教育活動や教師の仕事について実際に理解するとともに、子どもとのコミュニケーションや関係のとりかたについて体験的に学ぶことをめざします。 なお、必要に応じて授業期間外にフィールドワークを行うことがあります。		
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の仕事と学校の役割(講義) ・学校参観 ・連携協力校における学校参加とフィールドワーク (授業や個別指導、特別支援教育、学校行事、その他業務の補助など) ・活動のふりかえりとカンファレンス ・活動報告会 		
教科書	指定しません。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験を行わず、出席・レポート・臨時試験など(平常成績)で総合評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	学校参加とフィールドワーク2		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	学校教育学、教育心理学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部(1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計28名（男子学生11名 女子学生17名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	この授業では、「学校参加とフィールドワーク1」に引き続き、スクール・ボランティアやフィールドワークなど学校参加の活動を通して、子どもの学習と発達、小学校における教育活動や教師の仕事について実際に理解するとともに、子どもとのコミュニケーションや関係のとりかたについて体験的に学ぶことをめざします。 なお、必要に応じて授業期間外にフィールドワークを行うことがあります。		
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・教師の仕事と学校の役割(講義) ・学校参観 ・連携協力校における学校参加とフィールドワーク (授業や個別指導、特別支援教育、学校行事、その他業務の補助など) ・活動のふりかえりとカンファレンス ・活動報告会 		
教科書	指定しません。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験を行わず、出席・レポート・臨時試験など(平常成績)で総合評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	高槻市と関西大学		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	公共政策	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	総合情報学部(1~4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計62名(男子学生31名 女子学生31名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>この講義は、「高槻学－高槻の魅力とまちづくり」をテーマとして、古代からの歴史文化や豊かな自然に恵まれたわがまち高槻の魅力と、社会環境の変化や多様化する市民ニーズに応えるまちづくりの理念や方向性について学ぶことを目的に開講されます。</p> <p>三位一体改革など地方分権改革が進み、国と地方の役割分担が明確にされてきている今、地方自治体は「自治体経営」といった観点から公共サービスに対してどのように提供していくかを精査、検証する時代に差し掛かっています。さらに本市は中核市移行5周年を迎え、地方自治体の先導役として、また、中核市として移譲された権限を活用した施策の展開など期待されている部分も大きいと思われます。</p> <p>そのような中、持続可能で地域の特性を活かした魅力あるまちづくりに取り組む本市職員を講師として、現場での実践事例を交えながら、生(なま)の行政運営について学んでいただきます。</p> <p>社会貢献、地域との連携といった分野は、公務員を目指す学生さんはもちろん、あらゆる社会生活の中で活用していただけるとおもいます。関西大学と包括協定を結び、総合情報学部やアイスアリーナの立地する高槻市に愛着を持ち、高槻市で継続的に社会活動を営んでいただけたらと期待しています。</p>		
授業内容	<p>第1回 ガイダンス 第2回 高槻市政と市勢全般:高槻の概要、施政方針、総合計画 第3回 市の財政と行財政改革:財政状況、行財政改革の取組、行政評価 第4回 子育て食育:食育の取組、子育て支援の取組 第5回 教育:教育現場の現状 第6回 歴史①:古代歴史(埋蔵文化財調査センター) 第7回 歴史②:中世歴史(しろあと歴史館) 第8回 安全安心①:市全体の危機管理への取組、安全安心への取組 第9回 安全安心②:地域防災活動、共助の重要性 第10回 まちづくりと環境:駅前再開発、第二名神、新エネ対策、ゴミ分別・透明化 第11回 福祉・医療:地域福祉政策、保健所の仕事、健康保険、年金制度 第12回 市民参加・市民協働:コミュニティ・自治会活動、生涯学習、NPO 第13回 公営企業:水道部、交通部</p>		
教科書	特に用いない。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	定期試験を行わず、出席・レポート・臨時試験など(平常成績)で総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 近畿大学

授業科目名	NPO論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	公共経済学 NPO論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計26名(男子学生19名 女子学生7名)	授業区分	講義、演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	90年代はボランティアの時代、フィランソピーの時代と呼ばれたが、現在はさらにNPOの時代と言われている。21世紀の世界において、NPOの役割と機能、重要性を学生に理解させ、現実への関心を高めさせることを目的としている。		
授業内容	授業概要を参照。講義とゲスト・スピーカーによる実践報告を組み合わせる。また、聴講者による実践例を素材にして、ディスカッションも行う。NPO活動の実態について、希望者が多ければ、現地学習を行う。		
教科書	有斐閣の「テキストブックNPO」(雨森孝悦著)		
授業の工夫点	毎回学生に教科書を報告させると共に、その都度解説を行い、理解を深めるように努めている。		
授業の評価方法	学生が関心を持つNPOについて、それぞれレポートを提出させて評価する。中間報告、出席状況等も加味する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	社会奉仕実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他（・導入講義は、5月および10月の2回行う。 ・実習は夏休み春休みに集中して行うことを原則とする。）
担当教員の専門分野	位相幾何学 他	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	理工学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計0名（男子学生0名 女子学生0名）	授業区分	講義、実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	・単位認定には講義、実習および発表会を含め30時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	・倫理観や社会貢献の精神、公共性や社会性の意識を身につけることを目標とする。		
授業内容	第1回導入講義(社会奉仕実習をスムーズに実施するための講義) 第2回導入講義(社会奉仕実習をスムーズに実施するための講義) 第3回社会奉仕実習 第4回社会奉仕実習 第5回社会奉仕実習 第6回社会奉仕実習 第7回社会奉仕実習 第8回社会奉仕実習 第9回社会奉仕実習 第10回社会奉仕実習 第11回社会奉仕実習 第12回社会奉仕実習 第13回社会奉仕実習実施発表会 第14回社会奉仕実習実施発表会 第15回社会奉仕実習の総括		
教科書	・「社会奉仕実習実習簿」を受講者に配布		
授業の工夫点	特になし		
授業の評価方法	・プレゼンテーション30% ・レポート30% ・実習の状況40%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会福祉論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	薬学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計54名(男子学生31名 女子学生23名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会福祉の基本的理念は、すべての人々の「QOL」の向上を目指し、「well-being」を追求するものである。しかし長い間社会福祉の制度政策は、貧困問題等を持つ特定の人のためのものであった。そしてそのサービス利用者は、権利としてではなく、「お上の世話になる」という意識でサービスを利用してきた。しかし、本来社会福祉は、特定の人のためだけのものではない。すべての人々の生活の安寧のためにあるものである。この授業では、上記のことをふまえ、薬学部の学生が修得しておくべき社会福祉の基本的な視点について理解を深めることに主眼をおく。そのため、出来るだけ具体的で分かりやすい講義を行うように努めていくこととする。授業方法としては、講義形式のみではなく、ビデオ等の視聴覚教材も適宜利用し行う予定である。		
授業内容	第1回オリエンテーション、福祉の基本的な考え方 第2回社会福祉及び福祉関連性度の利用の仕組み 法律やサービス利用の際の基礎知識 第3回社会福祉に働く人びとと援助のしかた 専門的な援助の方法 第4回社会福祉の関連職種とボランティア 福祉の現場ではたらく様々な職種 第5回こども虐待と援助 児童虐待の親子への支援 第6回こどもの成長と地域における子育て支援 家庭児童相談室、保育所、児童館の機能 第7回少年非行の法と臨床 少年非行の動向、法、理解 第8回家族と高齢者介護 介護の社会化 第9回高齢期のお金と暮らしのデザイン 高齢期の暮らしと年金、医療保険制度 第10回高齢者居住施設のこれから 老いをいかに美しく生きるか 第11回障害を持つ人とのかかわりを通して 障害がある人の理解と支援 第12回障害乳幼児の療育と家族支援 障害児の理解と支援 第13回精神障害を持つ人の自立と社会参加 精神障害者の自立支援 第14回これからの社会福祉 今後の課題について及びこれまでの講義のまとめ 第15回定期試験		
教科書	ミネルヴァ書房の「くらしに活かす福祉の視点ーボランティア・学生がしておきたい基礎知識」(2006)(宮本義信著)		
授業の工夫点	講義の中で実際にビデオやDVDを使い、現場の雰囲気に入れてもらうことを心がけている。		
授業の評価方法	定期試験(70%)、出席点(30%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際ボランティア論A		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	タイ、カンボジアをはじめとする東南アジアの文化、政治、歴史論。国際ボランティア論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文芸学部(文化学科1・2・3・4年次、英語多文化コミュニケーション学科2・3・4年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計66名(男子学生28名 女子学生38名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし。ただし、毎年夏に文芸学部が行うインターンシップ「タイの『生き直しの学校』を訪ねる旅」に希望者は参加し、現地研修をする。
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	「多文化共生・地球市民の時代」と期待されている21世紀をひらく試みの一つとして国際的なボランティア活動を位置づけ、その歩みと現状、そしてこれからの課題と展望を探るのを目的としている。具体例として、タイのクロントイ・スラムで40年にわたって子どもたちたちの教育支援を続けているドゥアン・ブラティブ財団の活動に焦点をあて、夏休みに行うインターンシップと連動させている。		
授業内容	第1回 ガイダンス(受講生へのメッセージと授業の進め方) 第2回 プロローグ「文化」とボランティア活動の接点 第3回 ブラティブ・ウンソンタム・秦の思想と行動(1)「生き直しの学校」にかける願い① 第4回 同(2)～「生き直しの学校」にかける願い② 第5回 同(3)～「スラムの人間は、怠け者だから貧しい」のか？ 第6回 同(4)～ドキュメント「アジアの青春・片すみの闘い」 第7回 同(5)～ 阪神・淡路大震災とブラティブ 第8回 同(6)～「善意は大きければ大きいほど、相手の心が見えなくなる」 第9回 同(7)～ 作家、大江健三郎とブラティブ 第10回 同(8)～ 歌劇「夕鶴」とブラティブ 第11回 シャンティ国際ボランティア会(SVA)創設者、有馬実成に学ぶ(1) 第12回 同(2) 第13回 同(3) 第14回 同(4) 第15回 総まとめ		
教科書	なし(資料配布)		
授業の工夫点	受講生は「私のボランティアノート」を作成する。日々の新聞やテレビで「ボランティア」はどのように報じられているか、週の一つ、ニュースを見つけて切り抜きなどをして書き留め、理解を深める。		
授業の評価方法	「私のボランティアノート」の作成内容と期末試験等を総合評価する。		
授業のサポート体制	過去のインターンシップに参加した経験者が、授業で体験を発表したり、助言を行う。		
学外の関係機関・団体との連携	タイ国のNGO組織「ドゥアン・ブラティブ財団」		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	国際ボランティア論B		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	タイ、カンボジアをはじめとする東南アジアの文化、政治、歴史論。国際ボランティア論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文芸学部(文化学科1・2・3・4年次、英語多文化コミュニケーション学科2・3・4年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計78名(男子学生29名 女子学生49名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし。ただし、年一回開催の「21世紀を生きる国際理解セミナー」に特別講師としてタイから招く上記学校の創設者、ブラティブ・ウンソンタム・秦氏の連続2日間計10時間の講義「タイのスラムに生きる私の願い」を受講する。
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	後期に行う本授業では、国内外を問わず、ボランティア活動を進める上で根拠に据えてきた「非暴力」の思想と「人権の視点」を二本柱として進める。		
授業内容	第1回 ガイダンス(受講生へのメッセージと授業の進め方) 第2回「非暴力」の思想と歩み(1)～ガンディーに学ぶ(1) 第3回「非暴力」の思想と歩み(2)～ガンディーに学ぶ(2) 第4回「非暴力」の思想と歩み(3)～ガンディーに学ぶ(3) 第5回「非暴力」の思想と歩み(4)～ガンディーに学ぶ(4) 第6回「非暴力」の思想と歩み(5)～ガンディーに学ぶ(5) 第7回「非暴力」の思想と歩み(6)～ガンディーに学ぶ(6) 第8回「非暴力」の思想と歩み(7)～キング牧師に学ぶ(1) 第9回「非暴力」の思想と歩み(8)～キング牧師に学ぶ(2) 第10回「非暴力」の思想と歩み(9)～マザーテレサに学ぶ(1) 第11回「非暴力」の思想と歩み(10)～マザーテレサに学ぶ(2) 第12回「人権」を考える視点～作家、住井すゑに学ぶ① 第13回「人権」を考える視点～作家、佐井すゑに学ぶ② 第14回 総まとめ：国際ボランティア活動の課題と展望(1) 第15回 総まとめ：国際ボランティア活動の課題と展望(2)		
教科書	なし(資料配布)		
授業の工夫点	受講生は「私のボランティアノート」を作成する。日々の新聞やテレビで「ボランティア」はどのように報じられているか、週の一つ、ニュースを見つけて切り抜きなどをして書き留め、理解を深める。		
授業の評価方法	「私のボランティアノート」の作成内容と期末試験等を総合評価する。		
授業のサポート体制	過去のインターンシップに参加した経験者が、授業で体験を発表したり、助言を行う。		
学外の関係機関・団体との連携	タイ国のNGO組織「ドゥアン・ブラティブ財団」		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	その他(ボランティア活動先による)
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	農学部1年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計3名（男子学生2名 女子学生1名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	40時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	広く社会を見渡せる視野、的確な判断力、問題処理能力を備えた人材の育成		
授業内容	<p>【単位認定までの過程】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・導入講義 共通教養科目「住みよい社会と福祉」を受講する ・活動先の選択: 6月頃に配布する「ボランティア実習ノート」に記載の各都道府県の社会福祉協議会でボランティア活動先を紹介してもらう。 ・活動計画の提出・実行 単位認定に必要な活動時間は、40時間以上とする。なお、海外活動は認められない。 ・報告書の提出 活動先の確認署名を受けた報告書(実施した活動内容を記載したもの)を提出し1月中旬(予定)に行うボランティア実習報告会に出席し認定を受けなければならない。 		
教科書	なし		
授業の工夫点	特になし		
授業の評価方法	活動状況、報告書、実習簿、報告会発表により総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	社会福祉協議会		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会奉仕実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	政治学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	生物理工学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計37名（男子学生20名 女子学生17名）	授業区分	講義、演習、実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	22時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>本講座は、事前導入授業(講義とワークショップ)の後、大学が指定した実習施設(社会福祉施設もしくはNGO・NPO・ボランティア団体)において、ボランティア活動としての実習(合計22時間以上)を行い、その参加体験を通じて市民的公共精神を育もうとします。事前導入授業では、ボランティア＝実習に取り組む際の基本的な認識について言及するとともに、ボランティア＝実習から如何にして学びを深めるかというボランティアラーニングの方法についても触れたいと思います。また、本講座は、短期間ながら、実践的な指導に基づいた本格的なボランティア＝実習に取り組む関係から、実質上、社会福祉施設・NGO・NPO等におけるインターンシップとなります。受講生には、本講座の履修を通じて、市民的公共精神に裏打ちされた技術者となることが大いに期待されています。</p>		
授業内容	<p>[授業内容]</p> <ol style="list-style-type: none"> 1.オリエンテーション 2.「社会奉仕実習」の履修方法と実習施設の紹介 3.ボランティア概論 4.NGO・NPO概論 5.福祉・環境・スポーツ・国際協力ボランティア論 6.コミュニケーション・スキル 7.コラボレーション・スキル 8.ボランティア・ラーニング 9.ワークショップ① 10.ワークショップ② 11.ワークショップ③ 12.実習施設におけるガイダンス 13.実習① 14.実習② 15.実習③ 		
教科書	「2008年版社会奉仕実習簿」を配付		
授業の工夫点	演劇ワークショップ、アサーティビネス・ワークショップやフィールドワークなどの事前授業を行い、実習へのレディネスを高める。		
授業の評価方法	「社旗奉仕実習簿」の「実習日誌」「実習レポート」、並びに実習施設の指導員による実習評価に基づき評価する。		
授業のサポート体制	オフィス・アワーなど個別に学生の相談に応じている。		
学外の関係機関・団体との連携	学部が指定した実習施設としてNGO、NPOおよび社会福祉施設において実習を行う。		
今後の授業の継続			

授業科目名	東広島学		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	建築、数学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	工学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計66名(男子学生61名 女子学生5名)	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	5時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域貢献のために地域を知る。ボランティア参加を通して社会活動の意義や生き方を学ぶ。		
授業内容	1 オリエンテーション:本講義受講のための注意事項等の確認 2 東広島市の紹介Ⅰ:賀茂台地の歴史 3 東広島市の紹介Ⅱ:21世紀の新しいまちづくり 4 教育分野の新たな取り組み:新たな東広島教育について 5 最先端の研究活動:採れたて宇宙と東広島天文台 6 治安の現状と防犯:安全なまちづくり 7 ボランティア体験Ⅰ:福祉ボランティア体験 8 福祉活動の現状と課題:障害者福祉の体験学習 9 青少年の現状と課題:青少年をとりまく危険や犯罪の実態 10 地球環境の変動と東広島市民の課題 11 都市計画:東広島市の都市づくり 12 東広島市の企業活動:企業活動の見学 13 ボランティア体験Ⅱ:酒蔵通り観光ボランティア体験 14 試験研究機関の活動:東広島市の酒と酒類総合研究所の役割 15 終了式:意見交換会		
教科書	なし		
授業の工夫点	各講師陣による講義とフィールドワークを行う。一般受講者と学生が交流する。		
授業の評価方法	出席とレポート及びフィールドワーク実習状況によって判断する。		
授業のサポート体制	欠席者は、録画映像を見て、授業を知ることができる。		
学外の関係機関・団体との連携	東広島市		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	社会奉仕実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	産業理工学部(生物環境化学科2・3年次、電気通信工学科2・3年次、建築・デザイン学科2・3年次、情報学科2・3年次、経営コミュニケーション学科2・3年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計82名(男子学生62名 女子学生20名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会奉仕活動を通して企業の社会貢献や個人における社会奉仕の意義と重要性を理解する。		
授業内容	第1回:導入講義:実習の進め方と概要および成績評価法の説明 第2回:外部講師による社会奉仕活動についての講義(第1回)を聴講する。 第3回:外部講師による社会奉仕活動についての講義(第2回)を聴講する。 第4回:外部講師による社会奉仕活動についての講義(第3回)を聴講する。 第5回:社会奉仕実習先で決められたスケジュールに従い実習を行う。 第6回:社会奉仕実習先で決められたスケジュールに従い実習を行う。 第7回:社会奉仕実習先で決められたスケジュールに従い実習を行う。 第8回:社会奉仕実習先で決められたスケジュールに従い実習を行う。 第9回:社会奉仕実習先で決められたスケジュールに従い実習を行う。 第10回:社会奉仕実習先で決められたスケジュールに従い実習を行う。 第11回:社会奉仕実習先で決められたスケジュールに従い実習を行う。 第12回:社会奉仕実習先で決められたスケジュールに従い実習を行う。 第13回:社会奉仕実習先で決められたスケジュールに従い実習を行う。 第14回:報告書の作成とプレゼンテーションに関する説明を受ける。 第15回:定期試験(プレゼンテーション時間は前回に指定する)		
教科書	なし		
授業の工夫点	講義では、実習および事前事後指導にかかわらず、外部講師による社会奉仕活動の講義も行なっている。さらには、実習報告会でプレゼンテーションを行っている。		
授業の評価方法	社会奉仕実習報告書(50%)および実習報告(プレゼンテーション)の内容(50%)によって評価する。		
授業のサポート体制	各学科に1名ずつ担当教員を配置している。		
学外の関係機関・団体との連携	NGO、NPO、社会福祉法人等		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 相愛大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計109名（男子学生52名 女子学生57名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアは、障害者、高齢者、児童といった社会福祉の分野を中心に、地域の教育支援、防犯から、さらには国際協力に至るまで、様々な分野への広がりを見せている。ボランティアの担い手も、一部の有志者から、企業人をふくむ一般市民にまで及んでいる。ここでは、授業計画に沿って、基礎的なボランティアに関する知見を得ることによって、学生自身による自発的、主体的なボランティア活動につながるよう授業を進めてゆきたい。		
授業内容	1～3 ボランティア活動とは 4～5 ボランティアとバリアフリー 6～7 ボランティアと障害者 8～9 ボランティアと高齢者 10～11 ボランティアと児童 12～13 ボランティアとNPO、企業フィランソロピー 14 授業のまとめ 15 試験		
教科書	大阪ボランティア協会『基礎から学ぶボランティアの理論と実際』中央法規出版を主として、関連するプリントを配付する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	期末試験、授業時のミニレポートを総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア体験A		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期、集中授業
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計10名（男子学生5名 女子学生5名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	18時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ここでは、1年次開講の「ボランティア論」の単位既得者を対象に、受講生自身がボランティアについて、計画し、実践し、そして評価・反省してもらうものである。ボランティアを自ら体験活動することによって、「ボランティア論」で学んだ基礎知識を具体的・現実的に展開する実践力を培ってもらいたい。 ボランティア体験活動については、次のことをふまえること。 1. 受講生は、事前指導あるいは中間指導において活動計画書を提出する。 2. ボランティア体験活動は、授業がないときに（平日の空き時間、週末、長期 休暇等）、合計18時間以上あるいは終日3日間以上行なうものとする。		
授業内容	1～2 事前指導（教室で2回） 中間指導（教室で2回） ボランティア体験活動の発表とレポート提出（教室で1回） なお中間指導とボランティア体験活動発表の日時については、事前指導時に通知する。		
教科書	授業時に適宜プリントを配付する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア体験活動レポート（400字3～4枚）。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア体験B		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期、集中授業
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計3名(男子学生1名 女子学生2名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	18時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>ここでは、1年次開講の「ボランティア論」の単位既得者を対象に、「ボランティア論」で学んだ基礎知識を体験活動に結びつけてもらうことを目的とする。受講生自身が、ボランティアを計画し、実践し、そして評価・反省することによって、ボランティアについてのPLAN-DO-SEEという方法論を体得してもらいたい。</p> <p>ボランティアの体験活動については、次のことをふまえること。</p> <ol style="list-style-type: none"> 事前指導あるいは中間指導において、活動計画書を提出する。 ボランティア体験活動は、授業がないときに(平日の空き時間、週末、長期休暇等)、合計18時間以上あるいは終日3日間以上行なうものとする。 		
授業内容	<p>1～2 事前指導(教室で2回)</p> <p>中間指導(教室で2回)</p> <p>ボランティア体験活動の発表とレポート提出(教室で1回)</p> <p>なお中間指導とボランティア体験活動発表の日時については、事前指導時に通知する。</p>		
教科書	授業時に適宜プリントを配付する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	ボランティア体験活動レポート(400字3～4枚)。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 桃山学院大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育分野	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	社会学部 1998年度より開講 2年次より履修可	授業のレベル	「初級・入門」「中級・応用」「上級」を混ぜあわせたもの
平成20年度履修者数	計384名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	約8時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	市民社会を形成する新しいセクターとして、その社会的地位を確立しつつあるボランティア活動、市民活動、社会貢献活動、NPO等についての基本的理解を中心に、その実態、社会的意義等、ボランティア活動概念の変化、及びその多様な活動内容を検証していく。		
授業内容	<p>1ボランティアと市民社会の関係</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)市民という概念／市民性 (2)市民活動ボランティア活動 (3)市民社会という概念の変化 (4)公益性について <p>2NPO(非営利組織)とは何か</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)組織運営について (2)NPO法・制度 (3)社会的役割 (4)その他 (5)多様な活動領域 <p>3ボランティアの新しいあり方</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)連携・協働 (2)企業の社会貢献・社会的責任 (3)教育とボランティア <p>4その他</p> <ol style="list-style-type: none"> (1)ボランティアコーディネーター (2)ネットワーキング (3)活動の評価 (4)ボランティアのケア (5)ひとはなぜボランティア活動をするのか 		
教科書	指定なし		
授業の工夫点	ゲスト講師の招へい		
授業の評価方法	レポート(ボランティア体験報告)、試験、出席より総合的に評価する		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 聖トマス大学

授業科目名	ボランティア学習論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	人間文化共生学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計34名(男子学生22名 女子学生12名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	自らの存在とそのあり方を人は一生問い続けなければならない。人間教育は未完の旅そのものである。その旅に光りあるものとして照らし出してくれるのは、君が向き合う「人と自然」である。その関わり合いを通して、君自身が自らの人間性を育み、そして向き合う様々な人が、その人らしく豊かに幸せに生きるための「共生共存の社会」を創り出すエネルギーを、「ボランティアの世界」から学ぶ。その上で、ボランティアへの興味関心を強め、ボランティア活動への参加意欲を高めたい。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 『ボランティア学習』を始めよう(ガイダンスを含めて) 2 「ボランティア拒否宣言」に見るボラの姿と世相 3 「メダカのメグ」から学ぶ貧しい福祉観 4 ボランティアの理念 5 ボランティアの歴史 6 ボランティアの世直し 7 なぜボランティアを学校で? 8 ドラえもんはボランティア? 9 奉仕とボランティアの違い 10 ボランティアコーディネーションって何ですか? 11 ボランティアセンターに行ってみよう! 12 ボランティアネットで世界が豊かに! 13 どんな体験学習があるのだろうか? 14 「わたしとボランティア」をテーマに 15 ボランティア学習の楽しさを子どもに伝えよう 		
教科書	子どもと学ぶボランティア～こっちょのボランティア授業論 大阪ボランティア協会08年5月 鳥居一頼著		
授業の工夫点	グループワーク、模擬授業、ワークショップ、授業で記載させたノートを共有(全員分の資料)		
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制	大学ボランティアセンターのボランティアコーディネーター		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 神戸女学院大学

授業科目名	ボランティア論(1)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部全学年児対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計134名(男子学生0名 女子学生134名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	市民が主体的に社会の問題に関心をもち、取り組み、積極的に「参加」して社会を創っていくというボランティア活動の理解と、一人の市民として自発的な自由意志のボランティア活動とらえ方を学ぶ。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティアの歴史 2. ボランティアとは 3. ボランティアとは(演習) 4. 障がい者とボランティア活動 5. 知的障がい者とボランティア活動 6. 視覚障がい者、精神障がい者とボランティア活動 7. 障がい者の生活について学びますーメインストリーム協会ー 8. 児童とボランティア活動 9. 高齢者とボランティア活動 10. 施設とボランティア活動 11. 学区福祉委員会とその他のボランティア活動 12. ボランティアガイダンス 13. 自然災害とボランティア活動 14. 企業・労働組合・シニアボランティア活動 15. NPOとNGO 		
教科書	なし		
授業の工夫点	ボランティアガイダンスで様々な活動を紹介する。		
授業の評価方法	出席とレポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	メインストリーム協会の方々にご協力いただいている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論(2)		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部全学年児対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計32名(男子学生0名 女子学生32名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	7時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	車いす、手話、要約筆記、点字、手引きなどそれぞれのコミュニケーションの方法を学びます。とともに障がい者自身の生活を学びます。実際に授業に外部講師の方をお招きして行う予定です。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 実習のガイダンス 2. 視覚障がい者ー点字の演習 3. 視覚障がい者ー手引き演習 4. 肢体障がい者ー車いすの介助の演習 5. 6. 聴覚障がい者ー要約筆記の演習 7. 8. 9. 聴覚障がい者ー手話の演習 10. 体験のふりかえり 11. ボランティアガイダンスーボランティアするにはどうしたらよいの? 12. 障がい者について(演習) 13. 障害者について 14. ボランティアとは(演習) 15. ボランティアについて 		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席とレポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	メインストリーム協会の方々にご協力いただいている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPOマネジメント論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPOマネジメント	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部2年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計30名(男子学生0名 女子学生30名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	持続可能なまちづくりを地域において進めていくために、市民・事業者・行政がどのように協力し合い、協働で様々な社会的課題に取り組んでいかなければならないかを西宮市における環境学習を通じたまちづくりの事例を下に理解する。また、こうした地域活動を進めていくにあたり、NPO(特定非営利活動団体)の果たす役割や現状についても理解する。		
授業内容	(1)NPOって何だろう 法律の趣旨、全国の状況 (2)西宮市におけるNPO事情 (3)事例紹介 NPO法人こども環境活動支援協会(LEAF)の成り立ち (4)事例紹介 LEAFの活動と運営 (5)NPOが社会の中で果たす役割は (6)西宮市に関する理解(1) 環境まちづくりの取り組み (7)西宮市に関する理解(2) 学校や地域における教育は (8)グループワーク 持続可能な暮らし方を考える (9)市民社会への参画・協働(1) 市民参画の制度と条件整備 (10)市民社会への参画・協働(2) 西宮市におけるエココミュニティ会議等の実践 (11)グループワーク 持続可能な地域づくり (12)これからの社会に求められるもの 持続可能な発展のための教育(ESD)		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	・様々な社会的課題を自分ごととして考える姿勢を持って講義を受講すること。 ・グループワークにおいて他者とのコミュニケーションを積極的に行うこと。 ・自分自身の考えをしっかりと表現すること。		
授業のサポート体制	NPO法人こども環境活動支援協会		
学外の関係機関・団体との連携	NPO法人こども環境活動支援協会		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 武庫川女子大学

授業科目名	生きがい探しのボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	共通教育(全学部、全学科、全学年)	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計71名(男子学生0名 女子学生71名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	生きがいとは、本来自分自身で見つけるものです。他人に強制されるものではありません。人生の入り口にいる若い皆さんが、ボランティアという行為を通じて少しでも自分自身の長所に気づき他者への温かい眼ざしが持て、また自分で考え行動できる人になれることを望んでいます。		
授業内容	1. 生きがいとは？－生きることの意味について 2. 社会福祉とは？ 3. ボランティアの歴史と意義 4. ボランティアの活動の場と範囲(平常時と非常時の対応－阪神・淡路大震災を例に) 5. ボランティアの心構え－マナーとエチケット 6. グループワーク～自己覚知－自分を知らう 7. グループワーク～コミュニケーションスキル①～ 8. グループワーク～コミュニケーションスキル②～ 9. ボランティアに行く前に－障害を持つ人とどう付き合えばいいの 10. ネパールで学校を建てた身体障害者の人がいる 11. ボランティア実践論① 12. ボランティア実践論② 13. グループワーク～振り返りの授業(まとめ)		
教科書	[福祉キーワードシリーズ]ボランティア・NPO(雨宮孝子・山谷直道・和田敏明)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	・レポート[作品含む](50点) ・平常点等(50点) 配点内訳: 毎回の講義終了時に出席票を兼ね、感想と質問を書かせる。 ・レポートは、最終講義日に課題を提示、後日に提出。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部(心理・社会福祉学科2年次)	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計125名(男子学生0名 女子学生125名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアに関する基本的な知識を深めながら、「福祉」という枠にとらわれず、さまざまな主体によるボランタリーな活動を構造的にとらえ、自己、他者、社会への理解を深める。また、ボランティア活動(市民活動)を組織する立場に立ってボランティア活動の可能性を考察する。		
授業内容	1. ボランティア活動についての基本理解 (1) 自己理解—ボランティアリズムを探る (2) 人間理解—利己的か利他的か (3) 地域理解—多様な主体を探る 2. ボランティア活動の展開 (1) 地域の課題を発見する (2) 多様なボランティア活動を知る (3) ボランティア活動の始め方 (4) ボランティア活動の課題 (5) ボランティア活動と教育とのかかわり (6) 国際ボランティアとNGO 3. ボランティア活動を組織する (1) ボランティアマネジメント (2) ボランティアコーディネーター (3) 市民社会と新たな公共		
教科書	学生のためのボランティア論(岡本榮一・菅井直也・妻鹿ふみ子)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	・試験期間中に試験を実施(20点) ・レポート[作品含む](50点) ・平常点等(30点) 配点内訳:出席状況とクラス参加状況 ・レポートは、個人課題とグループ課題を設ける。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	短期大学部(人間関係学科2年次)	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計75名(男子学生0名 女子学生75名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	誰もが安心して暮らすことのできる『まちづくり』のために、地域住民としてのボランティアへの参加が求められている。しかし、ともすれば知識と理屈の先行するボランティアにならないためにどうあるべきかを考える機会とする。		
授業内容	1 ボランティアに関わる青年像 2 点字ブロックは誰のため? 3 手話歌は先入観が… 4 ボランティアと国際理解 5 プルタブ・ベルマーク・古切手…どこへ行くの? 6 いきいきサロンと認知症予防 7 自然災害とボランティア 8 学校教育でのボランティア学習 (1) 子どもたちにこそ知ってほしいボランティア (2) 子どもたちへの、ボランティアかるたをつくろう!(2回) 9 児童館などでの子育てボランティア 10 こうのとりのプランと地域おこし 11 NPOって何だろう? 12 ボランティアによる『まちづくり』 13 ボランティア社会の将来		
教科書	ボランティア みんな知ってる?[ジュニア版](全国社会福祉協議会)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	・レポート[作品含む](40点) ・平常点等(60点) 配点内訳:授業中に実施する小テスト(2回、各20点)、出席点・課題(20点)		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	未定		

○ 天理大学

授業科目名	学校教育支援		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	教職課程(教育学、心理学等)	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部2. 3. 4年次生対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計51名(男子学生34名 女子学生17名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	45時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	学校の教育活動を、教科指導補助や部活動の指導補助を通して体験し、教育の現場を体験し、教職を目指すものとしての自覚を高める。		
授業内容	<ul style="list-style-type: none"> ・学校教育支援とは何か ・学校教育概論・ボランティア概論学校教育支援概論 ・支援活動希望校のエントリー・各学校園での支援活動 ・総括と評価 		
教科書	特に使用しない。プリントで教材を配布		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への出席、学校園の講評及び支援活動終了後に提出するレポートにより総合的に評価します。		
授業のサポート体制	市町村ごとに担当教員が支援活動の相談を適宜行う。		
学外の関係機関・団体との連携	天理市教委、奈良市教委と連携協力に関する協定を締結		
今後の授業の継続			

○ 高野山大学

授業科目名	自主企画		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計16名(男子学生15名 女子学生1名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	90時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	各自が自主的にボランティア活動に参加し、自己の献身的な奉仕による社会的貢献を体験する。それにより、ボランティア活動の意義と目的、助け合いの重要性、社会的組織や人間関係等を学び、今後の人生に生かせる有益な糧となることを目的とする。		
授業内容			
教科書	特になし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポートで評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 梅花女子大学

授業科目名	ボランティア・NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	現代人間学部人間福祉学科1～4年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計22名（男子学生0名 女子学生22名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア・NPOの理解と実践		
授業内容	<p>ボランティア活動とNPOの理解を軸にして、ボランティア活動のための環境造りと自らのボランティアプログラムの開発を試みる。そしてグループごとに地域社会におけるボランティア活動の実践を目指す。また、市民組織と活動の理解とともに、NPO法人設立に関する知識を実践同様の手順を踏まえながら演習を行い、その評価と課題を考える。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業の概要 2. ボランティアの理解1 3. ボランティアの理解2 4. ボランティア活動の理解 5. ボランティア活動の実践 6. ボランティア活動の実践報告 7. ボランティア活動の評価 8. 市民組織と活動の理解1 9. 市民組織と活動の理解2 10. 市民組織と活動の現場調査 11. 市民組織と活動の調査報告 12. NPO法人設立1 13. NPO法人設立2 14. NPO法人設立3 15. 定期試験と総括 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業参加30%、レポート30%、定期試験40%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 大阪体育大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	健康福祉学部健康福祉学科1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計117名（男子学生88名 女子学生29名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>阪神・淡路大震災時におけるボランティアのめざましい活動により、ボランティア活動が社会の活性化や個人の成長・生きがいにとって重要な役割を果たしていることが明らかになってきた。そうした中で特定非営利活動促進法（NPO）法が制定されたり、企業の社会的貢献活動（フィランソフイー）等も注目されてきた。本講義では、個人が自由な意思によって、多くは金銭的对価を求めずにさまざまな社会的貢献を行い、連帯するというボランタリズムの理論と方法や活動分野・活動内容について学ぶものとする。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現代社会とボランティア 2. ボランティア活動の歩み 3. ボランティアの意味と原則 4. 社会福祉施設とボランティア 5. 地域社会とボランティア 6. 災害とボランティア 7. 教育・医療とボランティア 8. 文化・芸術・スポーツとボランティア 9. 環境・平和とボランティア 10. 企業とボランティア 11. 身近にできるボランティア 12. 住民参加型在宅福祉活動 13. 特定非営利活動促進法とNPO活動 14. ボランティアセンターの役割と機能 15. ボランティアコーディネーターの役割 		
教科書	「ボランティア いきいきと生きる」渡辺武男監修		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	定期試験と出席状況・受講態度により総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 阪南大学

授業科目名	ボランティア実践		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会人の方	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部1～4年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計23名（男子学生9名 女子学生14名）	授業区分	講義
単位数	4	ボランティア体験の時間数	24時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の実践を通じて、その意義と役割を学ぶことが目的です。さらに、ボランティア活動の経験を踏まえて、多様な物のとらえ方、見方を身につけ、多様な人と自信をもってコミュニケーションができるようになることを目的とします。		
授業内容	本科目では、松原市内の学校教育の現場を主な実践先とし、子供たちと接するボランティア活動を行います。そしてボランティア活動について振り返りを抗議の仲で行います。ボランティア活動実習と抗議がセットになっているため、5月半ばから毎週、実習のために、授業時間以外の時間帯で、午前（3時間程度）あるいは午後（3時間程度）の時間をあける必要があります。実習が始まるまでは、「ボランティア活動」についてや、学校教育や学校現場で特に支援が求められている「不登校」や「発達障害」についての講義をし、実習現場で経験する可能性のある事柄に備えます。実習が始まってからは、グループワークなどを取り入れながら、実習の振り返りを行います。子供にかかわる仕事、教育にかかわる仕事に関心のある人はもちろんのこと、「自分には何が向いているのかわからない」、「将来何になりたいのか模索中」という人にも受講できるよう工夫します。		
教科書	なし		
授業の工夫点	①講義と実習への出席重視です。10分以上の遅刻は認めません。 ②講義内では、学生同士のコミュニケーションを大切にします。 ③ボランティア活動に興味がある人の履修を望みます。 ④実習は毎週1回3時間程度、計8回程度を予定しています。		
授業の評価方法	定期試験は行いません。講義と実習への参加およびレポートで成績を評価します。ボランティア活動についての理解が目的なので出席しているだけでは評価をしません。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 芦屋大学

授業科目名	学校ボランティア I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教職課程	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	臨床教育学部 （教育学科1年次・児童教育学科1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計25名（男子学生21名 女子学生4名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	教職を目指す者にとって、教育現場の実態を知ることは非常に重要である。その貴重な体験・実践を本講座では連続的に行い、教員としての資質や教育現場の現代的使命について考える。従って、学校でのボランティア実践が中心となるので、免許取得だけでなく、教員採用試験を考えている学生に限定して本講座は開講する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業のオリエンテーション 2. 学生ボランティアとは何か？ 3. 学生ボランティア実践 4. 学生ボランティア実践 5. 学生ボランティア実践 6. 学生ボランティア実践 7. 学生ボランティア実践 8. 実践の成果と課題について 9. 学生ボランティア実践 10. 学生ボランティア実践 11. 学生ボランティア実践 12. 学生ボランティア実践 13. 学生ボランティア実践 14. 実践の成果と課題について 15. まとめとレポート 		
教科書	なし		
授業の工夫点	ボランティア実践への充実		
授業の評価方法	出席状況、受講態度・レポートの提出、プレゼンテーション等を総合的に評価する。		
授業のサポート体制	受け入れに対して近隣の教育委員会とのサポート		
学外の関係機関・団体との連携	随時、小・中・高との教育機関との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	学校ボランティアⅡ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教職課程	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	臨床教育学部 （教育学科1年次・児童教育学科1年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計25名（男子学生23名 女子学生2名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	教職を目指す者にとって、教育現場の実態を知ることは非常に重要である。その貴重な体験・実践を本講座では連続的に行い、教員としての資質や教育現場の現代的使命について考える。従って、学校でのボランティア実践が中心となるので、免許取得だけでなく、教員採用試験を考えている学生に限定して本講座は開講する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア実践者に聞く。 2. 学生ボランティア実践 3. 学生ボランティア実践 4. 学生ボランティア実践 5. 学生ボランティア実践 6. 学生ボランティア実践 7. 様々なボランティアについて 8. 学生ボランティア実践 9. 学生ボランティア実践 10. 学生ボランティア実践 11. 学生ボランティア実践 12. 学生ボランティア実践 13. 実践の成果と課題について 14. 実践の成果と課題について 15. まとめとレポート 		
教科書	なし		
授業の工夫点	ボランティア実践への充実		
授業の評価方法	出席状況、受講態度・レポートの提出、プレゼンテーション等を総合的に評価する。		
授業のサポート体制	受け入れに対して近隣の教育委員会とのサポート		
学外の関係機関・団体との連携	随時、小・中・高との教育機関との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 神戸海星女子学院大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	現代人間学部1年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計15名（男子学生0名 女子学生15名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	3時間程度を予定している。
必修・選択の別	選択		
授業目的	わが国に「ボランティア」という言葉が一般化して四十数年。様々な取り組みがなされてきた。また、阪神・淡路大震災で多くのボランティアが活動し、この年をボランティア元年と称した。2001年にはボランティア国際年として世界的な取り組みがなされた。そこで、ボランティア論ではボランティアの歴史や現代社会におけるボランティア活動のあり方、阪神淡路大震災においてわが国のボランティアがどう成長したのかを学ぶ。		
授業内容	<p>授業の概要</p> <p>神戸市内のボランティア活動の実態について、関係機関（ボランティアセンター等）に出向いて調査をおこなう。さらに何らかのボランティア活動に参加し、その結果を報告しお互いの気づきのきっかけをつかむこととする。</p> <p>授業計画</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア活動とは 2. 現代社会におけるボランティア活動 3. 子どもを対象にしたボランティア活動 4. 高齢者を対象にしたボランティア活動 5. 障害者を対象にしたボランティア活動 6. ボランティアの歴史 7. 地域社会におけるボランティア活動 8. ボランティア活動の具体的活動 高齢者の経験と知恵を活かして 9. ボランティア活動の具体的活動 学生ボランティア 10. ボランティア活動の具体的活動 障害者へのボランティア活動 11. ボランティア活動の具体的活動 12. 災害時の活動 13. ボランティア活動をはじめよう 14. コーディネート機能 15. まとめ 		
教科書	<p>別途作成。</p> <p>参考図書</p> <p>福祉ボランティア 朱鷺書房</p> <p>ボランティアのすすめ ミネルヴァ書房</p>		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業態度とレポート。レポートは具体的な活動を通して、ボランティア活動への理解をと課題をまとめる。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 帝塚山大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行動生理学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	心理福祉学部1年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計125名（男子学生57名 女子学生68名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	任意
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	近年、地域社会から大学生に向けてボランティア活動を求める声が高まっている。本講義の目的は、ボランティア活動に臨床心理学的分野の視点から活動に参加し、かつ地域貢献を果たせるための基礎的知識・技術、特にコミュニケーション技術を学ぶ。さらに、地域で活躍するボランティア、大学サークル、NPO、福祉施設の人たちから、直接現場の声を聴き、大学生としてのボランティア活動のあり方について考える。		
授業内容	第1回 本授業の目的と方向性 第2回 ボランティア論(1) 第3回 帝塚山大学PW推進室におけるボランティア活動 第4回 ボランティア論(2) 第5回 帝塚山大学サークルにおけるボランティア活動 第6回 ボランティア論(3) 第7回 地域・NPOボランティア活動 第8回 ボランティア論(4) 第9回 ボランティアを受ける側からの提案 第10回 ボランティア論(5) 第11回 ボランティア報告書の書き方(1) 第12回 ボランティア報告書の書き方(2) 第13回 プレゼンテーション「ボランティアに参加して」(1) 第14回 プレゼンテーション「ボランティアに参加して」(2) 第15回 各種団体のプレゼンテーション(報告と紹介)		
教科書	適宜、資料等を配布する。		
授業の工夫点	「ボランティア論」(1年次・講義)で学習し、次年度に「心理ボランティア実習Ⅰ・Ⅱ」で実践するようカリキュラムを組んでいる。		
授業の評価方法	出席、小レポート、期末レポート、ボランティア体験レポートから評価する。		
授業のサポート体制	大学負担でボランティア保険に加入している。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	心理ボランティア実習Ⅰ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行動生理学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	心理福祉学部2年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計39名（男子学生14名 女子学生25名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	12～16時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域社会における臨床心理分野の活動に、「ボランティア」という立場で参加し、体験を積み重ねることにより、学内で学んできた臨床心理学の理論やカウンセリング技法を、より実践性のあるものに高め、地域で実践できる人材の育成を目的とする。すなわち、現場での関係者やクライアントとの関わりを通じて、ボランティアや心的・物的支援の重要性、また、自己の実施したボランティアを振り返ることにより、カウンセリング技法、コミュニケーション能力、自己覚知を目指す。		
授業内容	第1回 オリエンテーション(必ず、出席すること) ※第2回以降については、スケジュールを個別に発表する。(合同による授業と、カンファレンス形式による個別あるいは小集団による授業からなるので、そのつど提示する。)		
教科書			
授業の工夫点	「ボランティア論」(1年次・講義)で学習し、次年度に「心理ボランティア実習Ⅰ・Ⅱ」で実践するようカリキュラムを組んでいる。		
授業の評価方法	(1) ボランティア活動実績 (2) ボランティア活動報告書の内容 (3) 実施施設責任者の評価 (4) 授業担当者の評価		
授業のサポート体制	大学負担でボランティア保険に加入している。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	心理ボランティア実習Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	行動生理学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	心理福祉学部2年	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計42名(男子学生32名 女子学生10名)	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	12～16時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	地域社会における臨床心理分野の活動に、「ボランティア」という立場で参加し、体験を積み重ねることにより、学内で学んできた臨床心理学の理論やカウンセリング技法を、より実践性のあるものに高め、地域で実践できる人材の育成を目的とする。 すなわち、現場での関係者やクライアントとの関わりを通じて、ボランティアや心的・物的支援の重要性、また、自己の実施したボランティアを振り返ることにより、カウンセリング技法、コミュニケーション能力、自己覚知を目指す。		
授業内容	第1回 オリエンテーション(必ず、出席すること) ※第2回以降については、スケジュールを個別に発表する。(合同による授業と、カンファレンス形式による個別あるいは小集団による授業からなるので、そのつど提示する。)		
教科書			
授業の工夫点	「ボランティア論」(1年次・講義)で学習し、次年度に「心理ボランティア実習Ⅰ・Ⅱ」で実践するようカリキュラムを組んでいる。		
授業の評価方法	(1) ボランティア活動実績 (2) ボランティア活動報告書の内容 (3) 実施施設責任者の評価 (4) 授業担当者の評価		
授業のサポート体制	大学負担でボランティア保険に加入している。		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 追手門学院大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	博物館学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部対象(1年次以上対象)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計354名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	「ボランティア」とは、本来、自発的な活動を意味する言葉であって、タダ、あるいは安上がりの人的資源をさす言葉ではない。ボランティアを「大人の居場所づくり」と捉えることも可能である。私たちの多くは、自分の存在を他者から認められたいと願う。あるいは、自分が社会に対して求めているものが満たされない時に、一人でまたは他者を巻き込んで、欲しいものを創り出そうとするだろう。また、必要な知恵や技術やネットワークを求めて、自らの時間や労力を提供する場合もあるだろう。これらのエネルギーが生み出す活動がボランティアである。本講義では、自分たちの暮らしをもっと豊かに、もっと楽しくするためのボランティア活動を取り上げ、活動運営のための実践的ノウハウを学ぶことを目的とする。		
授業内容	1.オリエンテーションーボランティアとは？ 2.ボランティアのイメージを広げる。 3.知っておきたい関連用語(1) 4.知っておきたい関連用語(2) 5.NPOについて知ろう(1) 6.NPOについて知ろう(2) 7.具体例から考えるボランティア(1) 8.具体例から考えるボランティア(2) 9.ボランティアの歴史(1) 10.ボランティアの歴史(2) 11.民間企業に何が出来るか？ 12.自助グループについて 13.社会変革とボランティア		
教科書	特になし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポートによる評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 園田学園女子大学

授業科目名	ボランティア活動理論と方法、NPOとボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計336名(男子学生0名 女子学生336名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアやNPOに関する基本的な概念や理論の理解を促すとともに、必要に応じてゲストスピーカーを招いてボランティア活動の多様性や学生学生としての参加の可能性などを紹介する。受講者はボランティアに関する知識の習得のみを目指すのではなく、ボランティアやNPOについて学ぶことを通して市民社会や地域社会に関心を持つとともにボランティアやNPOを含む社会の文化的・社会経済的背景に目を向けて欲しい。授業を通して、ボランティアを身近に感じ、自分自身でも何かを始めてみようと感じてもらえれば、本講義の目的は達成される。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクションー講義の進め方ーボランティア活動を学ぶことの意義 2. ボランティアとは？ 3. ゲストスピーカーによるミニ講演 4. 市民活動の諸相 5. NPOとは？ 6. 災害救援とボランティア① 7. 災害救援とボランティア② 8. ゲストスピーカーによるミニ講演② 9. 市民活動と資金 10. わが国のNPO事情・アメリカ社会のNPO事情 11. 実践事例① 12. 実践事例② 13. ボランティア活動の多様性の理解 14. 講義のまとめ 15. 試験 		
教科書	適宜資料配布		
授業の工夫点	ゲストスピーカーを取り入れている。		
授業の評価方法	筆記試験、出席点、授業態度		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 神戸国際大学

授業科目名	ボランティア実習／サービスマーケティング		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	商法・英米法	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	経済学部(1～3年次対象)	授業のレベル	その他
平成20年度履修者数	計10名(男子学生8名 女子学生2名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	12日間
必修・選択の別	選択		
授業目的	フィリピンの人々との交流をとおして、フィリピンの社会的現実を学び、治安／人権／少数民族／環境／保健衛生／女性や子供のエンパワメントへの問題意識を啓発するとともに建学の精神を学びあう海外体験学習プログラムである。		
授業内容	Lectures on Issues, English Training, Visits to Community, Home Stay Activities, Volunteer Work		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	事前学習 フィリピンでの授業や交流活動、レポート、参加状況を総合的に評価		
授業のサポート体制	「ある」の場合、この欄にその具体的な内容を記入してください。		
学外の関係機関・団体との連携	トリシティ大学(フィリピン)		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 京都学園大学

授業科目名	入門NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経済・経営学部2年次以降	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計122名（男子学生115名 女子学生7名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>NPOという言葉は今日では毎日、新聞などのマスコミに登場する。一見、ボランティアと同じようにも見えるが、その範囲はかなり広い組織体を含んでいる。この世には会社と市役所などの政府があればすべて上手くゆくように思えるが、どうしてNPOが存在するのだろうか？また、NPO自体もすべて善ではなく、なかには不祥事を起こしている場合がある。NPOについて、正しい理解をもつことが欠かせない。</p> <p>NPOは会社や政府とは異なる原理や行動をもっているが、他面では企業や政府とも結びつきがあり、それらはまさに協働にほかならない。NPOと他の組織体との協調行動は多様であり、それらが世の中の連鎖をなしている。この授業を通じて、私たちはこの世のなかの仕組みを全体的に理解する機会になります。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 様々な組織の特徴(会社、政府、非営利組織)を見てみよう 2. 公共・公益とは何だろう 3. 違いと共通から見える政府とNPO、企業とNPO 4. NPOの定義・論理は何だろう 5. NPOとボランティアの関連を考えてみよう 6. NPOを法律面から見てみよう 7. 心理面から見たNPOも考えてみよう 8. NPOの優遇政策とはどんな政策なのか 9. ボランティアと寄付の実態と関係を見てみよう 10. 公益法人制度とNPOはどんな関係があるのだろうか 11. NPOの様々な種類・タイプを探ってみよう 12. ユニークなボランティア団体を探ってみよう 13. 強制力とフリーライダーの関係を考えてみよう 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席回数を考慮しつつ、受講生が多ければ試験実施します。少なければ(50名以下を想定)理解度テストを随時、実施します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO経営論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経済・経営学部2年次以降	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計21名（男子学生19名 女子学生2名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>この授業では、先ず非営利組織の具体的な活動や組織の特徴を取上げる。そして、NPO活動と行政の関係、さらには企業との関係を取上げる。地域社会との関連が強い地域通貨が何故、取り入れられるのか、それはどのような理論的背景のもとに考えられるのか、どのような効果をもたらしているか、などになる。</p> <p>次に、NPOを起業しようとするれば、具体的にどのように考えられるかを取上げる。企業とは異なるものの、起業へのステップは類似しているところが多い。さらに、NPOの経営問題を取上げるが、企業や政府とも異なる非営利組織の経営上の特徴を探ることとする。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 入門NPOからNPO経営論への引継ぎ 2. これだけは理解してから始めましょう 3. 協働の実態と問題を探ってみよう 4. NPOと行政、NPOと企業との関係はあるのでしょうか 5. 協働を促すためにどんな政策がとられるのだろうか 6. 地域通貨とは何だろう 7. ビデオ「エンデの遺言」から現代の経済社会の実像に迫ってみよう 8. NPOも起業なのです。起業へのステップを探ることにしよう 9. 貴方もNPO法人を設立してみませんか 10. NPO法人設立のノウハウ、手順を学びましょう 11. NPOの経営問題は何だろう。企業における経営問題との関連を比較しながら、NPO特有の経営問題を取上げる 12. NPOに関連する業績評価、NPO・バンク・ファンドなどを探ってみよう 13. 再び、NPOはどうしてこの世に存在するのでしょうか？ 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席回数を考慮しつつ、受講生が多ければ試験実施します。少なければ(50名以下を想定)理解度テストを随時、実施します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 奈良大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学・文化人類学・民俗学・建築史・意匠	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	社会学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計152名(男子学生103名 女子学生49名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代社会においてボランティアが果たす役割を学ぶ。		
授業内容	ボランティアと称する活動は幅広く、参加者も多様であり、関連する組織も様々である。この言葉が現在使われているような意味で定着してきたのは、ここ二十年のことである。しかし、その前から同様の働きを果たしているものはあった。それらは現在のボランティアとどのように異なるのであろう。なぜ、現代社会にボランティアが必要とされているのであろう。▲ この授業では、具体的なボランティア活動、なかでもまちづくりなど身近な地域に関わる活動を主な事例としてとりあげ、ボランティアとは何か、ということを考えていきたい。ボランティアの意義や役割を検討することが、現代社会を冷静に見つめ直すことにつながっていくからである。▲ 授業を通じて、自分たちにはできることは何なのか、より住みやすい社会を作るためには何が必要なのか、考えること。▲▲1. ガイダンス ボランティアという言葉▲2-3. ボランティア元年とは▲4. NPOあるいはNGOという組織▲5-14. 様々なボランティア活動▲災害・国際協力・環境・食の安全・福祉・居住・まちづくり・コミュニティ活動としての祭など▲15. まとめ 現代社会の問題点		
教科書	内海成治 [編著]『ボランティア学のすすめ』(昭和堂)、鳥越皓之 [編]『環境ボランティア・NPO の社会学 シリーズ環境社会学1』(新曜社)、その他授業中に適宜紹介する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	平常点(ミニレポート)60%、期末レポート40%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO実習		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	その他(不定期)
担当教員の専門分野	社会学・文化人類学・民俗学・建築史・意匠	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	社会学部	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計9名(男子学生2名 女子学生7名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	45時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPO活動の体験とフィールドワーク		
授業内容	NPO、すなわち特定非営利活動法人には、様々な種類や規模があり、活動内容も多様である。この実習では、ある NPO 組織における具体的な活動に参加することにより、組織のあり方や背景となる周辺地域について理解することをめざす。▲ 具体的には、京都において戦前に建てられた町家と呼ばれる建物の保存・再生に関わる NPO 組織が対象である。▲ 体験するだけでなく、組織そのものを社会のなかに位置づけて分析することが重要となる。なぜこのような組織や活動が必要なのか、どのような人々が関わっているのか、町家が持つ歴史的背景や現代の社会状況を踏まえた上で考察してほしい。▲▲1. ガイダンス▲2. NPO とはなにか▲3. フィールドワークという方法▲4. 組織及び社会的背景について ▲ (1) 組織について学ぶ▲ (2) 町家について学ぶ▲5. 具体的な運営/活動に参加する▲ (1) 事務局やイベントの運営を経験する▲ (2) 見学会や体験会に参加する▲ (3) 町家調査を行う▲6. まとめ NPO 組織や現代社会の問題点について		
教科書	片桐新自 [著]『歴史的環境の社会学 シリーズ環境社会学3』(新曜社)など、授業で適宜紹介する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	活動への積極的な参加70%、レポート30%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 摂南大学

授業科目名	国際ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	外国語学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計200名(男子学生100名 女子学生100名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	本講義では国際ボランティアを、一過性のイベントとしてとらえるのではなく、自分自身を見つけるチャンスとし、それを将来的に活用する。学部の枠を取り払い、青年海外協力隊や民間ボランティア等の現場を素材にケーススタディを行い、最低限必要な国際的 社会常識と知識を深める。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクションと授業内容概要 2. (起-1)ボランティア 3. (起-2)国際理解 4. (起-3)国際協力 5. (承-1)貧困の現状把握 6. (承-2)国際協力の現状把握 7. (転-1)国際ボランティア・NGOボランティア 8. (転-2)国際ボランティア(青年海外協力隊) 9. (転-3)国際ボランティア(国連ボランティア) 10. (転-4)国際ボランティア(NGOボランティア) 11. (結-1)国際ボランティアの活動にあたって 12. (結-2)自分に何ができるのか 13. (結-3)更なる発展に向けて 14. まとめ 		
教科書	教科書:「国際協力・国原交流ハンドブック基礎から実印」実数出版		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	講義中、不定期に実施する3~4回の小テストの合計(100点)で評価する。毎回の出席確認はしない。小テストには教科書・参考書・百科事典・講義ノートの持込を許可する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経営情報学部3・4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計90名(男子学生71名 女子学生19名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPO(非営利組織)の活動が活発化しているが、こういった市民の自主的な活動が、地域社会にどのような影響を及ぼし、市民社会に新しい展開があり、ソーシャルキャピタルになりうるのか、その可能性を学びます。NPOの雇用や経済全体に占める割合が年々増えている中で、NPOとこれまでの自治会等の地縁団体との関係、ボランティアとの関係、地域や自治体との関係、コミュニティビジネス等について学び、社会貢献、地域貢献ができる人材に成長することをめざします。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. NPOとは何か 3. NPOの現代的意義 4. NPOの設立 5. NPOの社会的サービス 6. 自治会等の地縁団体の活動 7. コミュニティ行政 8. 企業の社会貢献 9. NPOの現状と問題点 10. NPOの実践から学ぶ 11. コミュニティビジネス 12. NPOと行政の協働 13. 市民社会の展望 14. まとめ 		
教科書	教科書:適宜、レジュメ及び資料を配布します。 参考書:「NPO基礎講座(新版)山岡義典編著ぎょうせい2300円」及び必要に応じて指示します。		
授業の工夫点	なし		
授業の評価方法	出席点(15%)、レポート・討議(15%)、定期試験(70%)によります。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	教養特別講義「薬系インターンシップ・ボランティア」		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	薬学	共通・専門等の別	その他(教養)
開設学部(学科)及び年次	薬学部3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計52名(男子学生22名 女子学生30名)	授業区分	講義、演習、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	延べ50時間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	薬学部では、1、2年次:「なりたい自分をさがす」、3、4年次:「なりたい自分をきめる」、5、6年次:「なりたい自分にむかう」を到達目標と定め、全学年にわたるキャリア形成教育を展開している。「薬系インターンシップ・ボランティア」では、自らの能力及び適性に応じて進路を選択できるようになるために、薬剤師が活躍している分野で就労体験(インターンシップ)やボランティア活動を行い、自らのキャリアプランが正しいか否かを確認する。 薬学教育モデル・コアカリキュラム.B(イントロダクション)(1)薬学への招待、G(アドバンス教育ガイドライン)(7)企業インターンシップ ※本講義は2006年度以降入学生対象とする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. インターンシップ・ボランティアの目的 2. インターンシップマナーガイダンス 3. ボランティアマナーガイダンス 4. インターンシップ・ボランティア(各コース10回以上) 下記の5コースから1コース選択 5. インターンシップ・ボランティア コース1:製薬企業等インターンシップ及び保険薬局ボランティアあるいはインターンシップ 6. インターンシップ・ボランティア コース2:公務員インターンシップ及び保険薬局ボランティアあるいはインターンシップ 7. インターンシップ・ボランティア コース3:セルフメディケーションインターンシップ 8. インターンシップ・ボランティア コース4:保険薬局ボランティアあるいはインターンシップ 9. インターンシップ・ボランティア コース5:病院ボランティア 10. インターンシップ・ボランティア 11. インターンシップ・ボランティア 12. 事後学習1 13. 事後学習2 		
教科書	なし		
授業の工夫点	事前マナーガイダンス、事後発表会の他に、体験期間中に日誌をつけ、教員がそれをチェックしている。		
授業の評価方法	受講状況、レポート、グループ討議など総合的に評価します。		
授業のサポート体制	教育センター教員による精神的サポート		
学外の関係機関・団体との連携	製薬企業、医薬品開発業務受託機関、保険薬局、ドラッグストア、病院等		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 大阪国際大学

授業科目名	NPO・NGO論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際人権法	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	法政経学部(法政経学科2年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計40名(男子学生27名 女子学生13名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的			
授業内容	国際社会でNPOの役割が重要になりつつあるため、NPO・NGOの活動内容について理解を深める。		
教科書	NPO/NGOと国際協力		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況・受講態度・小テスト・期末試験		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 流通科学大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期(前期と後期に計2回開講)
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門(医療福祉サービス学科専門科目、その他学部学科は全学フリーゾーンとして履修可)
開設学部(学科)及び年次	医療福祉サービス学科専門科目、その他学部学科は全学フリーゾーンとして履修可	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計465名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティア活動の歴史、今日の現状と課題、今後の展望について考える。		
授業内容	授業計画(大項目のみ) *ボランティアとは *ボランティア活動の歴史 *ボランティア活動と法 *ボランティア活動の実際 *まちづくりとボランティア活動の役割・課題		
教科書	使用しない。プリント教材で対応。		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ プール学院大学

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	国際文化学部(国際文化学科)1~4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	定めていない
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の社会的な役割についての理解、ボランティア活動への動機付けなど		
授業内容	第1回 はじめに/第2回 ボランティア活動とは何か/第3回 ボランティア、NPO、NGO/第4回 ボランティアマネジメントとは何か/第5回 ロール・プレイ/第6回 バリアフリー・チェック(1)/第7回 バリアフリー・チェック(2)/第8回 地域通貨とボランティア/第9回 環境問題とボランティア(1)/第10回 環境問題とボランティア(2)/第11回 国際協力とボランティア/第12回 ボランティアの組織化(1)/第13回 ボランティアの組織化(2)/第14回 まとめ		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	中間レポート40%、学期末の試験40%、毎回の課題提出20%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	サービスラーニング		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	国際文化学部(国際文化学科)(英語学科)1~4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	40時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	一定期間、社会奉仕活動を体験することによって、知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、またサービス体験から新たな視野を得る		
授業内容	第1回 オリエンテーション/第2回 活動先の概要と活動の心得/第3回 計画書と活動日誌の書き方について/第4回 個別面談/第5回 個別面談/第6回 ふり返り/第7回 ふり返り/第8回 ふり返り/第9回 ふり返り/第10回 ふり返り/第11回 ふり返り/第12回 報告書とレポートの書き方について/第13回 プレゼンテーションについて/第14回 報告会		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	サービス活動、活動日誌、ふり返り、報告会での発表、レポートを総合的に評価します。		
授業のサポート体制	学習支援室にサービス・ラーニング・コーディネーターを2名配置し、学生からの相談を受け付けている。2名は授業に出席し、振り返りに参加している。		
学外の関係機関・団体との連携	育児補助(保育所・学童保育)、教科指導補助・不登校指導、日本語教室での日本語学習補助および母語保持補助、懇談会での中国語通訳・翻訳(以上、小学校)。英語・数学指導補助(中学校)。利用者との交流(老人保健施設)。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 関西福祉大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	社会福祉学部1年次、看護学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの思想と歴史、現状や課題をより広い視野から学習する。また、福祉社会におけるボランティア活動の意義と役割を理解する。さらに、ボランティアコーディネートについて学び、福祉専門職と関連する諸分野、市民との協働による福祉の向上を目指すし、支援を必要とするさまざまな対象への、総合的支援を実現するための知識や技術を身につける。		
授業内容	1 ボランティアとは(ボランティアの思想) 2 ボランティアの原則とボランティアの役割 3 ボランティア活動の心構え 4 ボランティア活動における留意点 5 施設での活動 6 コミュニティでの活動 7 政策の動向とサービスラーニング 8 教育現場での活動(体験学習) 9 災害支援におけるボランティア活動 10 ボランティア活動の課題 11 政策の動向とサービスラーニング 12 ボランティアコーディネート 13 アドボカシーとボランティアコーディネート 14 リスクマネジメント 15 演習		
教科書	特に指定しない		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席30%、期末テスト70%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続			

授業科目名	地域環境とまちづくり I		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	建築	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	社会福祉学部1年次、看護学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	日常生活を支える基盤としての住まい(住居)とその環境づくりを主テーマとする。講義は、Part I～Ⅲの3部で構成される。すなわちPart I:「住居学入門」では、人間と住まいのいとなみ、住居づくりの伝統、風土による特徴、現代都市生活における住まいづくりの課題を紹介する。Part II:「現代住居の条件」では居住環境の安全、健康、利便、快適および家族に対応する空間構成などの基本条件の理解を進める。Part III:「福祉住環境」では、子育て期や高齢世代、障害を有する人々すべてが元気で暮らせる福祉住環境のコーディネーションについて学ぶ。		
授業内容	1 住居学入門(1)オリエンテーション 2 住居学入門(2)住まいと風土(日本) 3 住居学入門(3)住まいと風土(世界) 4 住居学入門(4)都市化時代の住まい 5 現代住居の条件(1)健康条件と環境調整 6 現代住居の条件(2)安心・安全と建築構造 7 現代住居の条件(3)近隣環境のアメニティ 8 現代住居の条件(4)家族と住空間の構成 9 現代住居の条件(5)居住状態を調査する 10 居住福祉の実現(1)人間的居住の実現へ 11 居住福祉の実現(2)福祉住環境コーディネート(前半) 12 居住福祉の実現(3)福祉住環境コーディネート(後半) 13 居住福祉の実現(4)福祉系居住施設の改革 14 講義のまとめ 16 定期試験		
教科書	・「私たちの住居学: サステナブル社会の住まいと暮らし」中根芳一(編著) ・講義中にプリントを随時配布して補完する		
授業の工夫点			
授業の評価方法	講義中随時ショートレポート(3回程度)20%、中間レポート(2回)20%、期末試験(または期末レポート)60%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続			

授業科目名	地域環境とまちづくりⅡ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	建築	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	社会福祉学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	人々が営々と持続してきた農村・都市の「地域づくり」の多様な取り組みに学ぶことを主テーマとする。講義は、3つのサブテーマで展開される。(1)「地域づくりの歴史」では、伝統的な村と町におけるコミュニティの姿とその近代化、今日につながる流れを探る。(2)「自然と歴史を生かす地域づくり」では、水辺・緑地環境および歴史的景観を保存しつつ、魅力ある地域づくりに生かしている事例に学ぶ。(3)「現代のまちづくり学」では、21世紀社会の課題に向かう住民、企業、NPO、自治体が協働する新しいまちづくりの理論と実践の在り方を展開する。		
授業内容	1 オリエンテーション 2 地域づくりの歴史(1)伝統的な村落の営みと景観 3 地域づくりの歴史(2)近世城下町の営みと景観 4 地域づくりの歴史(3)近代化と地域社会の変容 5 地域づくりの歴史(4)現代のまちづくりへの動向 6 自然と歴史を生かす地域づくり(1)水と緑のネットワーク 7 自然と歴史を生かす地域づくり(2)水と緑が創る景観とアメニティ 8 自然と歴史を生かす地域づくり(3)歴史文化遺産の保全とツーリズム 9 自然と歴史を生かす地域づくり(4)赤穂市における歴史文化遺産の保全とまちづくり 10 現代のまちづくり学(1)まちづくり学入門 11 現代のまちづくり学(2)日本の農業・農村の未来 12 現代のまちづくり学(3)中心市街地の振興と再生 13 現代のまちづくり学(4)ニュータウンを福祉コミュニティに 14 講義のまとめ 15 定期試験		
教科書	講義時の資料プリントと映像で持って基本的な情報は準備される。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	随時に実施するショートレポート(5回程度)20%、中間レポート(前半・後半)20%、定期試験60%		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続			

○ 常磐会学園大学

授業科目名	ボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	国際コミュニケーション学部(1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計80名(男子学生45名 女子学生35名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	通訳・翻訳ボランティアに活躍が期待されている背景には、地域の外国籍住民の増加や定住化がある。本講義では、在住外国人の現状、外国人登録や在留資格についての基本的な解説を行う。また在住外国人を対象とした通訳・翻訳ボランティアについての活動や支援方法、心構えなどについて学ぶ。		
授業内容	1回オリエンテーション 2回ボランティアに関する基本的諸問題① 3回ボランティアに関する基本的諸問題② 4回対人援助者としての心構えとは 5回災害とボランティアの実務① 6回災害とボランティアの実務② 7回学校とボランティアの実務① 8回学校とボランティアの実務② 9回ケーススタディ① 10回ケーススタディ② 11回プレゼンテーション① 12回プレゼンテーション② 13回プレゼンテーション③ 14回まとめ 15回期末テスト		
教科書	必要に応じて資料を配布する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席及び授業への参加度(20%)、プレゼンテーション(40%)、期末テスト(40%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	教職特別講座Ⅰ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	国際コミュニケーション学部(2年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計45名(男子学生34名 女子学生11名)	授業区分	講義、演習、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修(国際幼児児童教育学科)選択(国際コミュニケーション学科)		
授業目的	<p>教職免許状(幼・小・中・高)取得希望者を対象に、10～15名程度の少人数クラス編成(希望校種を基本とする)で、教職に対する志望動機をより確かな意志へと導くとともに、教員としての幅広い視野と、十分な知識・技能を着実に身につけられるよう、継続的な指導を行うことを目標とする。</p> <p>上記の目標を達成するために、3年間にわたり、主に以下の「授業計画」に挙げた項目に関して講義、見学・観察、実習等を行う。見学、実習等については、時間割で定められた時間以外の時間(長期休暇中を含む)に実施する場合がありますので注意すること。「教職特別講座Ⅰ」は、「教職特別講座Ⅱ」履修の、「教職特別講座Ⅱ」は、「教職特別講座Ⅲ」履修の先修条件である。</p>		
授業内容	<p>A この科目の目標と内容、方法、及び受講するにあたっての心構えについて理解する。</p> <p>B 教職課程(大学での教員養成)と教員について、基本的な事項を理解する。</p> <p>C 教員としての確かな知識(一般教養、及び教職教養等)、技能(音楽・美術・体育等を含む)を確実に身につける。</p> <p>D さまざまな教育施設(学校教育施設・社会教育施設)についての知識を深めるとともに、見学・実習等によって、その必要性と重要性を認識し、教材化を図る。</p> <p>E 社会問題となっているさまざまな教育問題について、発表・討議等を通して理解を深めるとともに、その考察の観点や分析方法を学ぶ。</p> <p>F 学校見学や現職教員の講話、学校関係者との交流等を通じて、教員という仕事を具体的に理解する。G 社会奉仕活動・地域でのさまざまな活動等に参加する。</p> <p>H その他</p>		
教科書	適宜、指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席40%、発表・レポート・見学・実習等30%指導者の所見30%で評価する。		
授業のサポート体制	12人の教員編成で授業している。		
学外の関係機関・団体との連携	事前に連絡をとり協力要請している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	教職特別講座Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	国際コミュニケーション学部(3年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計61名(男子学生41名 女子学生20名)	授業区分	講義、演習、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修(国際幼児児童教育学科)選択(国際コミュニケーション学科)		
授業目的	<p>教職免許状(幼・小・中・高)取得希望者を対象に、10～15名程度の少人数クラス編成(希望校種を基本とする)で、教職に対する志望動機をより確かな意志へと導くとともに、教員としての幅広い視野と、十分な知識・技能を着実に身につけられるよう、継続的な指導を行うことを目標とする。</p> <p>上記の目標を達成するために、3年間にわたり、主に以下の「授業計画」に挙げた項目に関して講義、見学・観察、実習等を行う。見学、実習等については、時間割で定められた時間以外の時間(長期休暇中を含む)に実施する場合がありますので注意すること。「教職特別講座Ⅰ」は、「教職特別講座Ⅱ」履修の、「教職特別講座Ⅱ」は、「教職特別講座Ⅲ」履修の先修条件である。</p>		
授業内容	<p>A この科目の目標と内容、方法、及び受講するにあたっての心構えについて理解する。</p> <p>B 教職課程(大学での教員養成)と教員について、基本的な事項を理解する。</p> <p>C 教員としての確かな知識(一般教養、及び教職教養等)、技能(音楽・美術・体育等を含む)を確実に身につける。</p> <p>D さまざまな教育施設(学校教育施設・社会教育施設)についての知識を深めるとともに、見学・実習等によって、その必要性と重要性を認識し、教材化を図る。</p> <p>E 社会問題となっているさまざまな教育問題について、発表・討議等を通して理解を深めるとともに、その考察の観点や分析方法を学ぶ。</p> <p>F 学校見学や現職教員の講話、学校関係者との交流等を通じて、教員という仕事を具体的に理解する。G 社会奉仕活動・地域でのさまざまな活動等に参加する。</p> <p>H その他</p>		
教科書	適宜、指示する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席40%、発表・レポート・見学・実習等30%指導者の所見30%で評価する。		
授業のサポート体制	12人の教員編成で授業している。		
学外の関係機関・団体との連携	事前に連絡をとり協力要請している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 神戸山手大学

授業科目名	NPO論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	人間文化学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	現代社会学部3・4年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計36名(男子学生25名 女子学生11名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代社会で重要な役割を担ってきているNPOの歴史、組織、仕組み、運営、実態について理解を深める。NPOのミッションの意味と重要性、NPOと一般企業の違いから、その社会的役割を考える。		
授業内容	1. 「NPO」とは何か 2. NPOの歴史・制度① アメリカ 3. NPOの歴史・制度② 日本 4. NPOの歴史・制度③ 韓国 5. NPOの震災復興 6・NPOの実践 保健・医療・福祉のNPO 社会教育のNPO まちづくりのNPO 子どもの健全育成のNPO 学術、文化、芸術、スポーツのNPOほか 7. NPOの運営 8. 協働の参画 9. NPOの現場 10. NPOで働く		
教科書	NPOという生き方		
授業の工夫点	フィールドワークでの現場見学		
授業の評価方法	期末テストor小テストと講義中の小テスト		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	まちづくり論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	建築学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	現代社会学部3・4年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計68名(男子学生51名 女子学生17名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	さまざまな「まちづくり」を神戸の実例に学び、まちづくりの現場や協議会活動を直接理解し、めざすべき自律連帯都市(コンパクトシティ)を論じる。		
授業内容	国際化、情報化等の進展もたらす地域経済への影響等を、日本の縮図と言われる兵庫経済の産業構造や産業政策の変化、また産業界・企業の経営革新等の具体的事例の中から分析し、考察する。 講義にあたっては、政策立案の背景にある産業界、中小企業の現状、課題、施策適用事例等を具体的に説明する外、主要産業における企業の経営実態については、経営現場の実務家による実践的な講義を取り入れ、全体を通して、地域経済再生のための道筋として、グローバル、ローカル双方の視点からの行動、チャレンジが重要であることをアピール、解説していきます。 1. 兵庫の産業構造と主要産業の概況 2. 兵庫の産業政策とその推進方策 3. 新産業創造・科学技術対策 4. クラスター戦略・企業誘致対策 5. 中小企業対策とその変遷(地場産業、下請企業、小売商業対策等) 6. 観光・集客・ツーリズム振興対策 7～11. 主要業界の経営実態と将来方向(概ね次の各分野から実務家を依頼) (1)鉄鋼、造船 (2)電機、機会 (3)食品・化学 (4)ファッション・ベンチャー (5)観光・ホテル 12～14. 商工団体等による中小企業支援の現状と今後の方向(各団体の実務家を依頼) (1)商工会議所の地域経済に果たす役割(神戸商工会議所からの事例報告) (2)商工会の役割と新たな挑戦(県商工会連合会からの事例報告) (3)播磨科学公園都市の形成に向けた戦略的取り組み (ひょうご科学技術協会からの事例報告) 15. 調査研究レポート作成の視点とポイント、作成指導		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 京都創成大学

授業科目名	NPO		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	経営情報	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計41名（男子学生30名 女子学生11名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	「仕組み」を知れば「未来」が予測できるようになります。NPO法人の成り立ちや仕組みを知って、企業や自治体、ボランティア団体等の現在の動きとこれからの流れを学びます。自分達の社会を豊かなものにするのは自分自身です。他人任せにせず、自分で考えられる人材を養成することを授業の目的とし、そのための戦略の立て方や情熱の持ち方についても身につけてもらいたいと思っています。		
授業内容	NPOのことだけではなく、社会全体の問題を学びながら、NPOが置かれている立場、今後目指すべきことを考えていきます。様々な実例を交えて具体的にNPOやNPO法人が分かるように心がけます。前半は様々な法人の成り立ちやNPO法人の設立方法、運営実態、中盤は行政や経済の仕組み、後半は「実際にNPOを立ち上げるとしたら・・・」という場合の方法論や組織運営の仕方を学びます。		
教科書	集英社インターナショナルの「利益が上がる！NPOの経済学」(跡田直澄著)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	【定期試験】30%【課題提出】40%【出席点】20%【その他】10%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 京都嵯峨芸術大学

授業科目名	総合プロジェクト(ボランティア)		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育社会学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	芸術学部1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計6名（男子学生1名 女子学生5名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	個人によって異なる
必修・選択の別	選択		
授業目的	1995年1月17日に起きた阪神大震災は、ボランティアによる救援活動の重要性を広く一般に認識させるきっかけとなった。行政の機能が麻痺状態となった時に、ボランティアなしには復興活動ができなかったからである。この災害の年は、のちに「ボランティア元年」ともいわれるようになり、以後、とりわけ若者を中心にボランティアへの積極的な参加・関心が集まってきたのである。こうした変化は「ボランティア革命」とも呼ばれている。 本講では、こうしたボランティア活動の理念を解説し、ボランティアへの理解を深めた上で、各受講生の自主的な計画に基づき、担当者と相談しながら受講者自らがボランティア活動をし、これを学習することを目的とする。 本プロジェクトは、講義が中心なのではなく、受講生が自らボランティア活動を実践することを前提としたものであるため、全員に集合してもらうことは初回をふくめて最小限にとどめ、その後は必要に応じてメールや報告書を通して受講生への指導・援助をおこなうものとする。		
授業内容	1. イントロダクション 2. ボランティア領域の現在 3. 現代社会におけるボランティアの位置 4. ボランティア活動の設定・計画 5. ボランティア活動の実施と報告 6. まとめと反省		
教科書	使用しない		
授業の工夫点	身近な、ちょっとしたボランティア活動でもかまわない。本プロジェクトがそのきっかけ作りとなればよいと思っている。実際にボランティア活動をおこなうため、積極的な参加姿勢が求められる。ボランティアの情報提供も適宜おこなうが、その内容は身近な活動から芸術大学生の特性を生かしたもので、幅広い活動としてとらえて欲しい。		
授業の評価方法	ボランティア活動中に提出する中間報告と、終了後に提出する事後報告書(レポート)によって評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 大阪人間科学大学

授業科目名	ボランティア概論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア論、野外教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(社会福祉学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計107名（男子学生53名 女子学生54名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	この授業では、ボランティア活動事例や身近な題材を通じて、ボランティアについての理解を深め、活動を通じて社会と関わる具体的なアクションへのきっかけ作りを目指します。		
授業内容	1.オリエンテーション 2.～4.ボランティアの基礎知識 5.～9.ボランティア活動事例 10.ボランティアを始める前に 11.ボランティアとリスクマネジメント 12.ボランティアと人権 13.ボランティア活動の国際比較 14.ボランティアの動向と新たな担い手 15.まとめ		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	期末試験と授業中の小レポートを総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動ケーススタディA		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア論、野外教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(社会福祉学科2年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名（男子学生15名 女子学生4名）	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の事例の検証を通じてボランティア活動への理解を深め、ボランティアとしての態度や視点を学ぶ。また、各自の体験に基づいた事例発表を通じて、プレゼンテーション能力を高める。		
授業内容	1.オリエンテーション 2.ボランティアと自己理解 3.コミュニケーションとは 4.～7.コミュニケーションスキル実習 8.～14.ボランティア活動事例研究 15.まとめ		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況、授業への貢献度、討議、発表、およびレポートを総合評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア活動ケーススタディB		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア論、野外教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(社会福祉学科2年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名（男子学生15名 女子学生4名）	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動の事例の検証を通じてボランティア活動への理解を深め、ボランティアとしての態度や視点を学ぶ。また、各自の体験に基づいた事例発表を通じて、プレゼンテーション能力を磨く。		
授業内容	1.～3.グループワークトレーニング 4.事例発表ガイダンス 5.事例発表準備 6.～10.活動事例発表 11.ボランティアの新たな担い手 12.企業活動とボランティア 13.ボランティア活動の動向 14.総括討論準備 15.総括討論		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況、授業への貢献度、討議、発表、およびレポートを総合評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	ボランティア論、野外教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(社会福祉学科2年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名（男子学生13名 女子学生6名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	前期:1週間以上、後期:1週間以上
必修・選択の別	選択		
授業目的	個々の学生は、主体的に自らの目的を設定し、自らの計画に基づき、ボランティア活動に参加する。体験した活動の中で、ボランティアの役割や意義についての理解を深める。		
授業内容	第1週～第15週 1週間以上のボランティア活動実践(ワークキャンプ含む)、 第16週～第30週 1週間以上のボランティア活動実践。ボランティア活動実践において、その都度レポートを提出を義務付ける。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	実習の体験と実習レポートで評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティア実習指導		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	ボランティア論、野外教育	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(社会福祉学科2年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計19名(男子学生15名 女子学生4名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア実習を効果的に行うために、実際に必要な知識を修得すると共に、計画⇒活動⇒分析⇒評価⇒再評価…の体験学習サイクルにおける相談と助言を行う。		
授業内容	1.オリエンテーション実習のゴールの理解 2.実習を計画する前に 3.リスクマネジメントとボランティア保険 4.～5.前期実習計画作成 6.キャンプ実習ガイダンス 7.キャンプ実習まとめ 8.～14.ボランティア活動状況報告 15.前期のまとめ 16.～18.後期実習計画作成 19.施設見学 20.施設見学まとめ 21.～25.活動事例研究 26.施設見学 27.施設見学まとめ 28.～29.活動報告書作成 30.総括		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況、授業への貢献度、討議、発表、およびレポートを総合評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	ボランティアマネジメント		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論、ボランティア論、地域福祉論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間科学部(社会福祉学科3年次生)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計47名(男子学生36名 女子学生11名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアという人的資源を活用する手法は、欧米では「ボランティアマネジメント」と呼ばれている。ボランティアのマネジメントは、一般的な従業員のマネジメントとは異なった特徴・課題を持つ。本講義はこうしたボランティアマネジメントについて、その理論的課題と実践を明らかにしていこうとするものである。		
授業内容	1.イントロダクション 2.ボランティアのイメージ 3.ボランティアの動機 4.ボランティアの活動継続 5.ボランティアの積極性とリーダーシップ 6.～7.大学生とボランティア 8.～9.ボランティアマネジメントの考え方 10.ボランティアプログラムの作成 11.ボランティアの募集 12.ボランティアの面接トレーニング 13.ボランティアのリスクマネジメント 14.ボランティアのリコグニション・評価 15.まとめ		
教科書	ミネルヴァ書房の「ボランティア学」(桜井 政成著)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	日常的な授業への参加姿勢と、筆記試験に代わるレポートによって評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO・NGOネットワーク		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPO活動（人権問題を中心に）	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（社会福祉学科4年次生）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計29名（男子学生25名 女子学生4名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPO/NGOとは何か、またこれらの組織やボランティア活動が持つ社会的な意味や課題は何かを考え、新しい社会活動、社会サービス分野を理解することを目的とします。		
授業内容	1.NPO/NGOとは何か 2.ボランティア活動とは何か 3.NPO/NGOの活動範囲と組織 4.社会問題と社会開発 5.福祉政策とNPO/NGO 6.「NPO法」と国際比較 7.コミュニティ・ビジネスについて 8.企業の社会貢献活動 9.地方自治体とNGO 10.国連活動とNGO 11.～13.ワークショップ 14.ワークショップ後のフォロー 15.レポート作成		
教科書	日本経済新聞社の「NPO入門」(山内 直人著)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業中の参加実績と小テスト、課題に沿ったレポート提出による。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	未定		

授業科目名	まちづくりと共生		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	環境社会学、地域社会学、まちづくり社会調査	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間環境学科2年次生）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計12名（男子学生7名 女子学生5名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	「共生」とは、人種・民族・階層・性・世代などの違う者たちの間に生まれる関係を言います。これらの人々が一緒に暮らしていくためには、道路や建物などのハード面でも、暮らしのルールやマナー、思いやりなどのソフト面でも様々な配慮が必要です。この講義では、そのような共生を生み出す街づくりを具体的なフィールド調査をもとに検討し、提案します。		
授業内容	1.地域社会の現状 2.街づくりの歴史 3.街づくりを担う人々と共生 4.フィールドワーク① 5.ワークショップ① 6.共生を考える視点について 7.調査計画作成 8.～10.調査 11.中間まとめ 12.提案内容検討 13.～14.プレゼン利用作成 15.プレゼンテーション		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	プレゼンテーション内容を中心に授業中の態度などを総合的に評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	まちづくりビジネス入門		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	まちづくりビジネス	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間環境学科2年次生）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計21名（男子学生11名 女子学生10名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	まちや地域には解決しなければならぬたくさん問題が渦巻いている。たとえ中心市街地の空洞化とか商店街の衰退とか、過疎や過密、災害危険、自然破壊、弱者切り捨てなどみんなが困っている切実な問題を解決するだけでなく、されによりよい方向に向けて改善し、創造し、人々が生きる希望をもてるようにする。地味ではあるが、やりがいのある、世の中から必要とされているそういう仕事を「まちづくり」と呼んでみよう。この授業は未知への課題へのチャレンジと位置づけ、受講者とともに、何が問題で、どこに突破口と展望があるかをさぐりたいと思う。		
授業内容	講義形式を基本とするが、しばしば受講生との討論を行う。また、講義に触発された受講者の意見発表などの機会を用紙する。3回程度のレポート提出を義務づける。また、講義の際にショートレポートを課すことがある。		
教科書	学芸出版社「まちづくり道場へようこそ」（片寄俊秀著）		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート評価に、講義時間における発表内容の評価などを加味する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	その他（「まちづくりビジネス演習」と統合）		

授業科目名	まちづくりビジネス演習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	まちづくりビジネス演習	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間科学部（人間環境学科2年次生）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計17名（男子学生10名 女子学生7名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	「まちづくりビジネス入門」をフィールドにおいて実践的に学ぶ中で、ビジネスプランの作成、実践と反省、今後の展開方向などを整理分析して、研究成果としてまとめる。		
授業内容	テーマ及びフィールドの設定の段階から受講生自身が参加して考えを進めたい。現場の人々の対応には、受講生自身が細心の注意を払う必要があるが、そのこと自体が自らを成長させるための学習であると位置づけてほしい。企画書の作成、実践計画の作成、実践経過のまとめレポートの提出が必要である。		
教科書	学芸出版社「まちづくり道場へようこそ」（片寄俊秀著）		
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート内容についての評価と実践課程での試行錯誤の課程を観察して評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	その他（「まちづくりビジネス入門」と統合）		

○ 大阪成蹊大学

授業科目名	ボランティアワーク1		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	半期、集中授業
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	芸術学部（全学年）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計25名（男子学生8名 女子学生17名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	45時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<ul style="list-style-type: none"> ・実践を通して、人として社会で活動するための視点を学ぶ。 ・地域社会の一員としての自覚と能力を伸ばし、環境教育の関心を高める。 		
授業内容			
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	長岡京市教育委員会、長岡京市環境経済部、西山森林推進会議、榎サントリー環境部、NPO法人みらいず 他		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 東大阪大学

授業科目名	ボランティア活動演習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	生活福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	こども学部3年次生	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計96名（男子学生42名 女子学生54名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会の一員として、相互支援国際貢献の必要性や重要性を理解する。		
授業内容	ボランティアの思想と歴史、地域社会におけるボランティア活動の意義と役割を理解する。福祉の向上を目指し、支援を必要とするさまざまな対象への総合的支援を実現する為の知識とスキルを身につける。		
教科書	レジメ・資料を配布		
授業の工夫点	特になし		
授業の評価方法	出席・態度・計画の提出・発表・レポートの総合評価		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	付属幼稚園あり		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 神戸夙川学院大学

授業科目名	NPO・NGO論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	スリランカの民族問題・和平問題	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	観光文化学部観光文化学科1～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計42名（男子学生24名 女子学生20名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	NPO・NGOにかかわる基本的な用語、NPO・NGOの社会的役割や課題を、自分の言葉で説明できるようになること。身近な課題に自ら工夫して取り組めるようになること。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. NPOとは何か？－関連用語の整理 3. 社会におけるNPO 4. NPOはなぜ存在するのか 5. 日本におけるNPOの歴史 6. NPO・NGOの活動分野 7. NPOをめぐる法制度 8. 日本のNPOが抱える諸課題（運営、人材、資金） 9. NPO・NGOの活動事例を読む（例：シャプラニール＝市民による海外協力の会 など） を全15講の講義と期末試験を実施する。		
教科書	教員作成プリント		
授業の工夫点	講義中心ですが、単元によっては受講者に文献要約・報告を担当してもらいます。知識の定着を確認するための小テストを実施します。毎回の授業後に講義内容への質問・意見を提出してもらいます。		
授業の評価方法	授業への取り組み、レポート等提出物、期末試験で評価します。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 神戸常盤大学

授業科目名	ボランティアの理論と実践		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉教育・ボランティア学習	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	保健科学部（看護学科1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計29名（男子学生2名 女子学生27名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	新しい公共・市民社会の形成に向けて社会全体が進む中、ボランティアに対する期待と要望は膨らみをみせている。また、ボランティアは自分自身の人間的成長をもたらすとともに、社会環境を変化させる力をもつものである。よって、保健・医療・福祉の連携にとどまらず、専門職者とボランティアとの協働は、今後ますます重要になると考えられる。本講義では、専門職を目指す学生として視野を広げ、保健・医療・福祉の連携、および、ボランティアとの協働について理解することを目標とする。		
授業内容	第1回：ボランティアのイメージを語り合う 第2回：ボランティアの概念の整理 第3回：ボランティアの歴史と意義 第4回：ボランティア・市民活動・NPO・NGO 第5回：NPO法（特定非営利活動促進法）とNPO法人 第6回：ボランティア・市民活動の動向（社会福祉・国際交流・国際協力・教育・その他の分野） 第7回：ボランティアセンターと社会福祉協議会のボランティア支援（ボランティアコーディネーター） 第8回：福祉施設におけるボランティアとボランティアマネジメント 第9回：市民活動団体の組織と運営およびボランティアマネジメント 第10回：企業の社会貢献活動と市民活動・NPOおよび行政とのパートナーシップ 第11回：ボランティア活動の実践 第12回：ボランティア活動の報告・討議 第13回：ボランティア活動の実践 第14回：ボランティア活動の報告・討議 第15回：補足とまとめ・理解度の確認		
教科書	大阪ボランティア協会出版部『学生のためのボランティア論』（岡本榮一・菅井直也・妻鹿ふみ子編）		
授業の工夫点	講義のみではなく、話し合いやワークショップによって授業をすすめていく。また、新聞記事や映像を提示し、意見交換を行う。ボランティアの実践に際しては、これまで学習したことを地域に活かすサービスマーケティングを行う。		
授業の評価方法	筆記試験・レポート・授業中の積極的な参加と意見交換・実践活動の報告内容等を総合的に判断する。		
授業のサポート体制	ボランティアの理論についてのまとめ・ボランティア実践活動報告・学生がボランティアをする意義について		
学外の関係機関・団体との連携	長田区社会福祉協議会・長田区ボランティアセンター・長田区福祉教育・ボランティア学習実践研究会・長田区ユニバーサルデザイン研究会・小規模作業所新商品開発・長田神社前商店街・長田中央市場		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ ノートルダム清心女子大学

授業科目名	キリスト教学XIV		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	社会福祉学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部2・3・4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計21名（男子学生0名 女子学生21名）	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	20時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアとは何かを、まず誰のために何かを実際にやってから、一緒に考えていきたい。自己のボランティア観を構築することを到達目標とする。		
授業内容	1. サマリア人のたとえについて 2. ～6. サマリア人のたとえの現代的意義 ①マザーテレサ ②ジャンパニエ ③その他 7. ～8. ボランティア事前指導 9. ～10. ボランティア事後指導 ボランティア体験（20時間） 福祉関連施設 5～7日間		
教科書	旧・新約聖書		
授業の工夫点	本授業は、ボランティア体験を最も重視する。学外体験実習のため、欠席は認めない。		
授業の評価方法	①定められた体験期間の出席状況、②ボランティア体験施設の証明書（指定書類）、③体験実習報告書を評価基準とする。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	国内社会福祉施設での実習（ボランティア活動）		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	キリスト教学XV		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	キリスト教と日本文学	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1・2・3・4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計9名(男子学生0名 女子学生9名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	48時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアとは何かを、まず誰のために何かを実際にやってから、一緒に考えていきたい。自己のボランティア観を構築することを到達目標とする。		
授業内容	1. ～20. 講義及びミーティング ①事前指導 ②講習会 ③事前合宿 ④事後指導 ⑤大学祭での発表 ボランティア体験(48時間) マレーシアの社会福祉施設 15日間		
教科書			
授業の工夫点	「マレーシア奉仕団」として、マレーシア・イボ市の障害者施設で障害者と生活を共にし、生きることの素晴らしさ・大切さを学ぶとともに国際感覚を養う。		
授業の評価方法	①体験後レポート、②体験態度を評価基準とする。		
授業のサポート体制	本授業の中核をなす「マレーシア奉仕団」では、引率教員・TA・学生の渡航費、保険料等の一部を大学が負担している。		
学外の関係機関・団体との連携	マレーシアの社会福祉施設での実習(ボランティア活動)、マラヤ大学との学生交流		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア学 I		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1・2・3・4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計136名(男子学生0名 女子学生136名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	参加者一人ひとりが主体的に取り組み、また、友人の輪を広げ、お互いが共に同時代を生活している仲間であることを確認する。その結果として今の社会の問題に目を向け、取り組んでいくことができる「リスクテイカー」を育てていきたい。		
授業内容	1. オリエンテーション 2. コミュニケーションゲーム① 3. コミュニケーションゲーム② 4. コミュニケーションゲーム③ 5. 「よのなか」①「ハンバーガーから世界が見える」 6. 「よのなか」②「お金と人生の関係」 7. 「よのなか」③「市長になって住みよい町を創ろう」 8. 「よのなか」④「政治と行政の仕事」 9. 「よのなか」⑤「少年法を考える～裁判員制度を切り口に」 10. 「よのなか」⑥「よのなかと人の命～自殺問題とは何か」 11. 「よのなか」⑦「ホームレス問題を考える」 12. 「よのなか」⑧「宗教について考える①」 13. 「よのなか」⑨「宗教について考える②」 14. 「よのなか」⑩「人生の目標を考える」 15. まとめ～これからに向けて		
教科書			
授業の工夫点	さまざまな本物体験やワークショップを通して、参加者一人ひとりが自分なりの「ボランティア観」を築き、今後の人生(よのなか)を生きていくための指針を獲得していくことを目指す。		
授業の評価方法	出席を重視する。毎回授業終了時にレポートを課す。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア学Ⅱ		
担当教員(学内又は学外)	学外教員(3名)	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア(3名とも)	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1・2・3・4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計110名(男子学生0名 女子学生110名)	授業区分	講義、実習(実技)
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	聴覚障害者とのコミュニケーション手段のひとつである手話を学ぶとともに、聴覚障害者を正しく理解し、共に生きる社会づくりを目指す。 手話で簡単な日常会話ができるようになる。		
授業内容	実技 1. 手話の基礎 つたえあってみましょう①② 2. 自己紹介①(名前・あいさつ) 3. 自己紹介②(指文字) 4. 自己紹介③(家族) 5. 自己紹介④(趣味) 6. 自己紹介⑤(数字) 7. 自己紹介⑥(仕事) 8. 自己紹介⑦(住所) 9. 自己紹介⑧(まとめ) 10. 時の表現①(一日) 11. 時の表現②(一週間・一ヶ月) 12. 時の表現③(一年) 13. 感情表現・反対語 14. テスト 15. 講評・手話サークル活動について	講義 1. 聴覚障害とは？ 2. 手話とは？ 3. 耳のしくみ 4. 聴力ときこえの状況 5. 聴覚障害者のバリア 6. 聴覚障害者のコミュニケーション 7. ろう教育 8. 聴覚障害者の暮らし ①家庭生活 ②社会生活 ③学校・仕事 9. 聴覚障害者の福祉 10. 盲ろう者について 11. 聴覚障害者に関わる組織	
教科書	「新し手話教室『入門』」(全日本ろうあ連盟出版部)、「実用手話単語集」(同)、「誇りを持って未来へ」(同)「たっちゃんと学ぼう」(同)		
授業の工夫点	授業の到達目標を達成するため、毎回3名の講師により、実技と講義を組み合わせた授業を行う。		
授業の評価方法	①期末筆記試験(聴覚障害者等の理解度)、②期末実技試験(手話実技の習熟度)、③受講態度と意欲、④出席 ①②合わせて60点、③10点、④30点		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア学Ⅲ		
担当教員(学内又は学外)	学外教員(3名)	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア(3名とも)	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1・2・3・4年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	未確定	授業区分	講義、実習(実技)
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア学Ⅱで学んだことを生かして手話の語彙を増やししながら、聴覚障害者と会話ができることを目指す。また、聴覚障害者を取り巻く問題について考え、共に生きる社会づくりを目指す。		
授業内容	実技 1. 自己紹介の復習 2. 手話の文法 3. 日常会話の練習①(行事) 4. 日常会話の練習②(旅行) 5. 日常会話の練習③(買い物) 6. 日常会話の練習④(病院) 7. 日常会話の練習⑤(食事) 8. 日常会話の練習⑥(保育所) 9. 日常会話の練習⑦(学校) 10. 日常会話の練習⑧(職場) 11. 触手話・指点字 12. 手話によるスピーチの練習 13. 手話によるスピーチの練習 14. 手話によるスピーチの練習 15. 手話によるスピーチの発表・講評・今後の活動に向けて	講義 1. 聴覚障害者の情報保障について①家庭生活 2. 聴覚障害者の情報保障について②学校 3. 聴覚障害者の情報保障について③仕事 4. 聴覚障害者の情報保障について④社会 5. 聴覚障害者の情報保障について⑤医療 6. 聴覚障害者を取り巻く社会問題 7. 重視聴覚障害者について 8. 高齢聴覚障害者について 9. 人権について	
教科書	「新し手話教室『入門』」(全日本ろうあ連盟出版部)、「実用手話単語集」(同)、「誇りを持って未来へ」(同)「たっちゃんと学ぼう」(同)		
授業の工夫点	授業の到達目標を達成するため、毎回3名の講師により、実技と講義を組み合わせた授業を行う。 ボランティア学Ⅱの単位を修得していること、又は、同程度の手話の技術と聴覚者障害への理解があることが履修条件。		
授業の評価方法	①期末課題レポート提出(10点)、②期末実技試験(手話によるスピーチ、60点)、③出席(30点)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名		生涯学習概論Ⅰ	
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	生涯学習概論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文学部（現代社会学科2・3・4年） ※全学部2・3・4年履修可能	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計108名（男子学生0名 女子学生108名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択（社会教育主事課程履修者・司書課程履修者は、必修）		
授業目的	生涯学習社会の構築をめざす施策の基盤となっている教育論をまず理解するとともに、これまでの生涯学習の流れを把握する。次に、生涯学習に関する施策や地域の実践・活動について、具体的に把握する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 社会変化から生じる生涯学習と社会教育の課題と意義 3. 生涯学習・社会教育の内容・方法・形態 4. 生涯教育論の展開 5. 生涯学習に向けての施策① 6. 生涯学習に向けての施策② 7. 生涯学習施設・社会教育施設 8. 学習支援のための情報提供及び相談 9. 生涯学習と学校教育 10. 生涯学習と社会教育・家庭教育 11. 生涯学習とボランティア活動 12. 職業能力の開発と社会教育支援者 13. 自分にとっての生涯学習 14. まとめ 15. 試験 		
教科書	「よくわかる生涯学習」(香川正弘・鈴木眞理著、ミネルヴァ書店)		
授業の工夫点	わが国では、生涯学習社会の構築をめざした教育施策が展開されている。このような動向に理解を深めるとともに、特に生涯学習にかかわってどのような施策が展開されているのかを把握する。		
授業の評価方法	①受講態度・出席(30%)、②課題提出(20%)、③試験又はレポート提出(50点)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	その他(2009年度から「社会教育に関する科目」として開講(文学部現代社会学科科目からはずれる))		

授業科目名		生涯学習概論Ⅱ	
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	生涯学習概論	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文学部（現代社会学科2・3・4年）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	未確定	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択（社会教育主事課程履修者は、必修）		
授業目的	生涯学習の国際的な動向に着目しながら、今日的課題について把握し、社会教育の本質について考える。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. 生涯学習・社会教育の意義 3. 国際化と生涯学習 4. 多文化社会と生涯学習 5. ～7. 生涯学習をめぐる国際的な議論 8. グループ討議 9. ～11. グループ発表 12. ～14. 生涯学習・社会教育の施策 15. まとめ 		
教科書			
授業の工夫点	UNESCOやOECDなどさまざまな国際機関や、国際会議において生涯学習をめぐる議論や施策が展開されている。先進国のみならず発展途上国や中進国における課題にも目を向けながら、総合的に生涯学習について考える。		
授業の評価方法	①授業への参加態度(20%)、②発表(40%)、③課題提出(40%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	国際ボランティア活動経験者(医師)による特別講義の実施		
今後の授業の継続	その他(2009年度から「社会教育に関する科目」として開講(文学部現代社会学科科目からはずれる))		

授業科目名	社会教育課題研究		
担当教員(学内又は学外)	学内教員(3名)	授業期間	通年
担当教員の専門分野	生涯学習概論、地域社会学、アジア社会史	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部(現代社会学科2・3・4年)	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数	計11名(男子学生0名 女子学生11名)	授業区分	演習
単位数	4	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択(社会教育主事課程履修者は、必修)		
授業目的	今日の地域の生活課題・社会的課題を具体的に掘り下げながら、学習課題をとらえらるとともに、生涯学習や社会教育の専門的な知見をふまえながら、実践的な能力の育成を図る。		
授業内容	1. オリエンテーション 2. ～5. 地域の社会教育・生涯学習に関する学習課題についての検討 6. ～7. アジア社会の特質と生涯学習 8. ～9. 訪問調査に関する準備 ～Power Pointを用いた発表について 10. ～11. 訪問調査に関する準備 ～資料収集・事前討議 12. ～22. 訪問調査と討論 23. ～26. コミュニティづくりと社会教育 27. ～30. 訪問調査を踏まえた発表		
教科書			
授業の工夫点	身近な地域の実践活動について訪問視察など行うとともに、近年様々な領域で関係が深まっているアジア諸国に目を向けながら、今日の日本社会の課題あについても検討する。		
授業の評価方法	①出席、②発表や議論などの授業参加状況、③提出物 ①②③を総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	地域の学習関連施設、教育行政機関の職員や指導者からの指導助言の協力を得る。		
今後の授業の継続	その他(2009年度から「社会教育に関する科目」として開講(文学部現代社会学科科目からはずれる))		

授業科目名	社会福祉学 I		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉学	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間生活学部 (人間生活学科1・2年、児童学科2・3・4年)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計174名(男子学生0名 女子学生174名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択(人間生活学科は、選択必修)(教職課程[福祉科]履修者・社会福祉士課程履修者・保育士課程履修者は、必修)		
授業目的	社会福祉の基礎的な知識を習得した上で、今日何が問題なのかを考察することができることを目標とする。		
授業内容	1. イントロダクション・社会福祉の概念 2. 少子・高齢社会の福祉問題 3. ～6. 社会福祉の歴史 イギリス救貧法から現代の福祉国家へ 日本の福祉の変遷 7. 社会福祉構造改革と社会福祉法制 8. ボランティアと社会福祉援助技術 9. 生活保障と公的扶助 10. ～11. 児童福祉、障害者福祉、高齢者福祉 12. ～13. 女性福祉、地域福祉 14. 現代社会福祉の課題 15. 学期末試験		
教科書	「基礎からはじめる社会福祉論」(菊池正治・清水教恵編、ミネルヴァ書房)、「現代社会福祉用語の基礎知識」(学文社)		
授業の工夫点	社会福祉概論として、社会福祉学が対象とする領域を網羅的に概観すると同時に、社会福祉原論の一部として、専門として社会福祉を学ぶ者に対して、社会福祉学の基礎的な知識を提供する。		
授業の評価方法	①期末試験(80%)、②出席及びミニレポート(20%)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	地域福祉論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域福祉論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間生活学部(人間生活学科3・4年)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計36名(男子学生0名 女子学生36名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	今日的な福祉理念およびそれを具現化した制度・事業・実践、推進主体等について学び、地域福祉時代のソーシャルワーカーに求められるセンス・視点の涵養を図る。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 今日の福祉理念と地域福祉の概念、地域福祉の歴史 2. 地域社会の変容とコミュニティ、コミュニティ政策 3. 住民、利用者参加の意義と課題 4. 在宅福祉サービス、福祉情報、福祉教育 5. サービスのネットワーク化とトータルケアシステム構築 6. NPO・ボランティア活動とその支援 7. 成年後見制度と地域福祉権利擁護事業 8. 福祉計画の系譜と地域福祉計画・地域福祉活動計画 9. 地域福祉推進と国・地方自治体の役割・関係 10. 社会福祉協議会の発展・活動・経営① 11. 社会福祉協議会の発展・活動・経営② 12. 民生委員制度の発展と民生委員の活動 13. 福祉施設の社会化と地域福祉 14. 地域福祉推進を支える民間財源と共同募金運動 15. 学期末試験 		
教科書	「地域福祉論」(福祉士養成講座編集委員会編、中央法規出版) 「地域福祉新時代の社会福祉協議会」(山本主税・川上富雄編著、中央法規出版)		
授業の工夫点	講義終了時にリアクションペーパーの提出を求める。内容豊富かつ実践的講義のため、テキスト事前通読を求める。		
授業の評価方法	①出席状況(30点)、②期末試験(70点)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	その他(2009年度から「地域福祉学Ⅰ」として開講。また、新たに「地域福祉学Ⅱ」を開設予定)		

授業科目名	社会福祉援助技術論Ⅳ		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	地域援助技術	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間生活学部(人間生活学科3年)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計29名(男子学生0名 女子学生29名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択(社会福祉士課程履修者は、必修)(教職課程[福祉科]履修者は、選択必修)		
授業目的	地域援助技術の方法の理解とコミュニティワーカーに必要な資質とは何かを明らかにする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 地域援助技術の展開過程 2. 地域援助技術の援助原則 3. 地域援助技術の展開過程と社会福祉調査の種類 4. 社会福祉調査の手順と技術 5. 地域社会の診断方法 6. 地域集団・組織の診断方法 7. ニーズ把握と分析方法 8. 情報の収集、広報、動機づけ 9. 「地域福祉活動計画」の策定方法 10. 住民組織活動の支援方法 11. 社会資源の開発・活用方法 12. 集団及び組織・機関の連絡調整方法 13. 記録と評価、その活用方法 14. 現地調査① 15. 現地調査② 		
教科書	「社会福祉援助技術論Ⅱ」(福祉士養成講座編集委員会編、中央法規出版)		
授業の工夫点	地域援助技術の7つの原則をもとに、その具体的展開方法について、社会福祉協議会活動の実践事例を通じて学ぶ。また、コミュニティワーカーとしての役割・あり方について共に考える。福祉実践現場での授業を交える。		
授業の評価方法	①出席状況(30点)、②レポート・課題の達成度(30点)、③学期末試験(40点)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	社会福祉協議会での実践事例を現場で学ぶ。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	福祉科教育法 I		
担当教員 (学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉科教育法	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人間生活学部(人間生活学科2年)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	未確定	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択(教職課程[福祉科]履修者は、必修)		
授業目的	高等学校福祉科教育の意義を理解する。教科にこだわらず生徒たちの日常の中に福祉マインドや人権意識を育てることの意義を理解する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 高校生が福祉を学ぶということ 2. 福祉科設立の背景と福祉教育の歩み 3. 学校教育における福祉教育 4. 福祉科教員に求められるもの 5. 福祉科の教育課程 6. 福祉を教える① 7. 福祉を教える② 8. 地域で福祉を学ぶ 9. 福祉教育とボランティア活動 10. 事例研究①ふれあいの中から学ぶ高校生 11. 事例研究②生活の中の福祉教育 12. 地域や家庭との連携 13. 福祉科授業の方法と社会福祉の理解 14. 「総合的な学習」の時間と福祉教育 15. まとめ 		
教科書	「高等学校学習指導要領解説福祉編」(文部科学省)		
授業の工夫点	教科「福祉科」の教育法にこだわらず、学校教育の様々な場面や地域・家庭において、福祉教育を推進する力や、福祉意識や人権意識を啓発できる能力を養う。		
授業の評価方法	①課題レポート・課題達成度(60点)、②出席状況・授業中の発表等態度(40点)		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ エリザベト音楽大学

授業科目名	人間学V-1(社会奉仕活動のサービスマーケティング)		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	教職・教養学科目担当	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	音楽学部音楽学科、2～4年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計19名(男子学生3名 女子学生16名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	あり
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	「サービスマーケティング」とは「専門知識と社会実践をリンクさせた新しい教育プログラム」を意味し主にアメリカの大学教育で開発されてきた。このアイデアに基づき、本授業では学生が一定期間、これまで学んだ自分の専門を生かして無償の社会奉仕活動を体験し、その体験をふり返ることで体験から生きた知識を学ぶことを狙いとする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション、受講希望学生との面談 2. 社会奉仕活動による体験学習「サービスマーケティング」とは 3. 奉仕活動の基礎知識、マナー、コミュニケーション・スキル 4. 実習先の訪問と選定 5. ～7. 実習体験 8. 実習体験の中間報告とふり返り 9. ～12. 実習体験 13. 実習体験のふり返りとレポート作成 14. 体験の発表 15. まとめ 		
教科書	授業でその都度紹介する。		
授業の工夫点	実習としては老人ホームや病院での「癒しの音楽」の提供、小学校の障害児学級での音楽活動の計画と実施、広島市内のホームレス支援活動などを考えているが、受講学生と相談しながら実習先を決め、その準備、実習、ふり返りを行う。また希望する学生(男女各2名まで)には夏季休暇を利用してフィリピンでの地域奉仕活動に他大学の学生とともに参加するプログラムがある。		
授業の評価方法	授業と実習への参加度50% レポート・課題提出50%		
授業のサポート体制	実習先の担当者との連携、担当学生との密なコミュニケーション		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 岡山理科大学

授業科目名	科学・工作ボランティア入門		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	物理化学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計33名（男子学生21名 女子学生12名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年、理工系離れが問題になっているが、その対策のひとつとして科学・工作教室等を行うボランティア活動が注目されている。本講義では、地域で活躍している外部講師を招いて科学・工作ボランティア活動を実践的に紹介する。また、グループを組んで、自分たちで選んだ楽しい実験・工作（基本的に身近な材料を使ってできるもの）を準備し、発表会で披露してもらう。これらを通じて、受講生自身が科学・技術をおおいに楽しむとともに、科学・工作ボランティア活動で活躍できる人材を育成する。特に教員および博物館学芸員志望者には、就職後にも役立つので受講を勧める。なお、受講生には学園祭での科学体験イベント（11月）や地域で行われている科学・工作ボランティア活動に参加することを期待する。これらの活動は認定科目「ボランティア活動」により単位化が可能である。		
授業内容	第1回 ガイダンス（講義内容と進め方の説明） 理科離れの現状、科学・工作ボランティア活動の意義、地域で行われている活動の紹介 第2回 外部講師による講習（1）講師：三木淳男先生（岡山市立芳泉中学校教諭、岡山仮説の会） 第3回 外部講師による講習（1） ※ 第2回と同一日に連続して行う。 グループ分け 第4回 外部講師による講習（2）講師：宮田昌二先生（岡山大学教育学部付属中学校教諭） 第5回 外部講師による講習（2） ※ 第4回と同一日に連続して行う。 グループごとに発表会内容検討 第6回 外部講師による講習（3）講師：水田雅明先生 他3名（岡山市少年少女発明クラブ） 第7回 外部講師による講習（3） ※ 第6回と同一日に連続して行う。 グループごとに発表会内容検討 第8回 発表会準備（1）発表会内容確定、実験器具およびプレゼンテーションなどの準備 第9回 発表会準備（2）実験器具およびプレゼンテーションなどの準備 第10回 発表会準備（3）実験器具およびプレゼンテーションなどの準備 第11回 発表会準備（4）発表会予行演習 第12回 発表会準備（5）仕上げ 第13回 発表会 第14回 発表会 ※ 第13回と同一日に連続して行う。 第15回 レポート作成		
教科書	なし		
授業の工夫点	外部講師を招き、実際に行われているボランティア活動を紹介して貰い、ボランティア活動に対する興味を引き出す。		
授業の評価方法	レポートの内容（50%）、発表会の内容（50%）によって評価する。発表会の評価には、受講生相互の評価も加味する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	講師として活動の紹介		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 安田女子大学

授業科目名	ボランティア活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	環境隣地実習、ボランティア活動	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	家政学部、生活デザイン学科、管理栄養学科 2年	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計70名（男子学生0名 女子学生70名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアは、これまで「主体性の原則（自由意志の原則）、非営利性の原則（非配当性の原則）、市民公益性の原則」の3つの原則など、福祉に関わる中で表現されてきました。 現代のボランティア活動について、社会的意義、個人の積極的参加の養成、方法等について、生涯学習の立場より理解を深めると同時に、奉仕活動などの実際を経験します。		
授業内容	1.ガイダンス・概論 2.現代ボランティア活動の社会的意義（1） 3.個人の積極的参加について 4.5.実地ボランティア 活動実施要領の説明 ・10月18日（土）広島平和記念公園・ゴミ拾い、平和学習 6.実地ボランティアの反省とまとめ 7.ボランティア活動者の体験談聴講 8.9.グループ別自主課題ボランティア活動の計画 10～13.グループ別ボランティア活動の実施 14. 15.グループ別活動の反省とまとめ		
教科書	大木裕子；NPOのマネージメント；西日本法規出版；2004.		
授業の工夫点			
授業の評価方法	・出欠とレポート提出		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	学校等支援活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国語教育基礎論研究 国語科教育の実践的研究	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	文学部、現代ビジネス学部、家政学部	授業のレベル	
平成20年度履修者数	未定	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>学校等支援活動とは、本学と学校等（幼稚園、小学校・中学校・高等学校、特別支援学校）及び保育所、並びにその所管官庁との協定に基づき、本学の学生が行う保育・教育支援活動である。</p> <p>活動に参加する学生は、学校等に大学から派遣され、学校等の校長や指導教員等の指導・助言を受けて、学校等の教育活動の支援を行う。この活動を通して、学校等の教育活動が活性化することが期待されているとともに、将来、教員や保育士を目指す学生の資質・能力が向上するよう願われている。</p> <p>なお、詳細は『免許・資格の手引』（大学）または『履修の手引』（短大）を参照すること。</p>		
授業内容	活動校の計画に従う。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	活動の記録及び活動校からの成績により評価を行う。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 広島経済大学

授業科目名	身近なボランティア活動		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際協力、国際理解	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経済学部全学年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計35名（男子学生29名 女子学生6名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	3時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	<p>この授業では、広島市内のいくつかの団体に協力してもらい、学外でのボランティア活動に挑戦してもらいます。そして、そこでの新たな人との出会いや受講生との議論の中から、自分なりのボランティア活動の意義や生き方を学んで欲しいと考えています。きっとそこには、新しい自分やもう一つの社会<オルタナティブ・ソサエティ>との素敵な出会いが待ち受けているはずです。</p>		
授業内容	<p>第1回 ガイダンス 第2回 ボランティア活動の歴史と意義 第3回 ボランティア活動の実際 <国内編> 第4回 ボランティア活動の実際 <地域編> 第5回 計画案作成① 第6回 計画案作成② 第7回 ボランティア活動の基本原則や留意点 第8回 ボランティア活動の五か条 第9回 実践活動実施① 第10回 実践活動中間報告及び検討会 第11回 実践活動実施② 第12回 報告書の作成や報告会の準備 第13回 報告会 第14回 総括・授業評価</p>		
教科書	教科書は特定しません。授業内容に応じて、資料を配付します。また適宜ビデオ教材も用います。		
授業の工夫点	アクティブラーニング		
授業の評価方法	(1)出席状況 …………… 25% (2)活動計画案の内容 …………… 25% (3)授業態度や実践活動の様子 …………… 25% (4)報告会や報告書の内容 …………… 25%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	二葉の里 歴史の散歩道のボランティアの方々		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア参画論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	宗教学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	経済学部全学年	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計13名（男子学生10名 女子学生3名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	40時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	大学生がボランティア活動に、主体的に参画していけるようになることを目標とする。		
授業内容	講義は、広島県立生涯学習センター（広島市東区光町二丁目1-14）にて実施する。ボランティア実習は、10月中旬～1月末内で、児童館、福祉施設等で40時間実施する。		
教科書	授業の中で配付する。		
授業の工夫点	事前打ち合わせの実施後、実際の福祉施設等での実習		
授業の評価方法	ポートフォリオ（評価票）・レポート・プレゼンテーション等を用いて総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	広島県教育委員会との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 広島国際学院大学

授業科目名	ボランティアとNPOの社会学		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	現代社会学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計20名（男子学生20名 女子学生0名）	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	高齢化や国際化進む時代にあつて、ボランティアやNPOの意義と現状についての理解を深める。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティアとNPOの理念 2. ボランティア・NPO団体の現状 3. 団体主催者の話 4. 体験をするにあたって 5. 体験 6. 報告書の作成 7. 体験報告会 8. まとめ 		
教科書	無		
授業の工夫点	体験を重視		
授業の評価方法	受講状況、実践、報告等を総合的に評価		
授業のサポート体制	非常勤講師による授業		
学外の関係機関・団体との連携	NPOセンター		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 福山大学

授業科目名	地域とボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	心理学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間文化学部 1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計60名（男子学生43名 女子学生17名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	9時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	現在の大学に求められている立場からどのような関わりができるかを考えることを目的とする。地域とボランティアについて考える際に、知識だけでなく先輩が既に行っている活動を知るとともに、受講者自らの問題意識に応じて、教育、医療、福祉、司法などの現場で実習も行う。そしてボランティア活動についての知識を学ぶだけでなく、実際に地域社会の活動に参加して、地域の人とどのような関わりができるかを体験的に学び、大学生活の中でボランティア活動へ自然に参加できる素地を作ること为目标にしている。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティアとは？ 2. ボランティアの定義 3. 心理学科で実施している活動紹介(1) 4. 心理学科で実施している活動紹介(2) 5. 心理学科で実施している活動紹介(3) 6. ボランティア活動の心構え 7. ボランティア活動実習 8. ボランティア活動実習 9. ボランティア活動実習 10. ボランティア活動実習 11. ボランティア活動実習 12. ボランティア活動実習 13. ボランティア活動報告会 14. ボランティア活動報告会 15. ボランティア活動報告会 		
教科書	資料配付		
授業の工夫点	心理学科で伝統となっている活動への参加を促し、先輩が後輩に助言する。		
授業の評価方法	活動記録表の提出と買戻報告(プレゼン)の内容		
授業のサポート体制	情報提示、事前指導		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 比治山大学

授業科目名	ボランティアワーク I		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	乳幼児期の音楽教育、リトミック教育	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	現代文化学部（言語文化学科、地域文化政策学科、マスコミュニケーション学科、社会臨床心理学科1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計51名（男子学生27名 女子学生24名）	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	(1)ボランティア活動に関心を持ち、[活動の意義・役割を理解すること。(2)ボランティア活動を実施するにあたって必要な事項を理解すること。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1:オリエンテーション 2:平和をつくる～広島市民の国際ボランティア活動の意義～ 3:イントロダクション「どうしてボランティアするん？」 4:私からはじめるあつたかな街づくりPart I 5:私からはじめるあつたかな街づくりPart II 6:広島市まちづくり市民交流プラザで学習 7:企業の貢献について～広島企業の企業貢献～ 8:ボランティア活動と仏教の教え(1) 		
教科書	講師作成プリント		
授業の工夫点	学外講師を招き、具体的な事例や、様々な視点からボランティアについて知識を深め「ボランティアワークII」へ繋げていく。		
授業の評価方法	授業態度(20点)、出席状況(30点)、課題提出状況(50点)を総合して評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	外部講師による講義		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアワークⅡ		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	乳幼児期の音楽教育、リトミック教育	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	現代文化学部(言語文化学科、地域文化政策学科、マスコミュニケーション学科、社会臨床心理学科1～2年次)	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計42名(男子学生21名 女子学生21名)	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	(1)私たちの社会とボランティア活動のかかわりについて、体験学習を通して理解すること。(2)学んだもの、身に付けたものを広く社会に活かし自己実現を図ること。		
授業内容	(1)実際にボランティア活動を30時間行います。(2)ボランティア活動は指示に従って実施してください。(3)「ボランティアワークⅡ」のオリエンテーションは、前期15回目の授業で行います。		
教科書	なし		
授業の工夫点	「ボランティアワークⅠ」で学んだ知識を実際のボランティアを体験することにより、技術を高める。実際に社会に貢献できる。		
授業の評価方法	活動状況(50点)、課題提出状況(50点)を総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	受入施設、団体との連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 福山平成大学

授業科目名	ボランティア活動論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	障害者福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	福祉健康学部 (福祉学科1年次、こども学科1年次) 看護学部(看護学科1年次生)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計142名(男子学生45名 女子学生97名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修※看護学部の学生は選択		
授業目的	本学では、ソーシャルワーカー養成のもとに本講義が解説されたのであるが、両者の底流にある精神には共通するところが多い。社会問題を解決していくために、自ら行動できることである。自分とボランティアを考える学習と、実際に活動することで、「相手を知り、相手の立場に立てる」自分、積極的・自主的に活動できる自分を探究する。		
授業内容	(前期) 1.オリエンテーション(人はなぜボランティアをするのか) 2.大学生活とボランティア活動 3.わが国における学生ボランティア活動 4.ボランティア活動の歩み(日本) 5.ボランティア活動の歩み(世界) 6.私たちの社会とボランティア 7.高齢者との関わり 8.児童との関わり 9.障害をもつ人との関わり 10.環境問題との関わり 11.NPO、NGO 12.夏期休暇中でのボランティア活動計画		
教科書	適宜プリントを使用		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席・参加態度、レポート作成・提出と期末テストなどによって総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア活動論演習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	障害者福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	福祉健康学部 （福祉学科1年次、こども学科1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計73名（男子学生31名 女子学生42名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修		
授業目的	グループワークを中心に、活動分野を選択し、プログラムを立て実際に活動を進めていく。		
授業内容	（後期） 1. 夏期休暇中での活動報告 2. グループワーク開始にあたって 3. 活動分野グループ分け 4. 活動にあたっての注意点 5. 活動課題・テーマ・目標検討 6. 活動プログラム作成 7. グループでの活動開始、実行 8. グループでの活動開始、実行 9. グループでの活動開始、実行 10. グループ活動の振り返り 11. グループ活動の振り返り、プレゼン資料作り 12. グループのプレゼンテーション 13. グループのプレゼンテーション 14. 個人レポート提出		
教科書	適宜プリントを使用		
授業の工夫点			
授業の評価方法	後期は、グループワーク参加・活動とレポート提出、演習の取り組みなどで総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	大学近隣の福祉施設に学生のボランティアを受け入れてもらっている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPO	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	福祉健康学部（福祉学科2年次、健康スポーツ科学科2年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計83名（男子学生70名 女子学生13名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年、新聞紙上で、NPOという記事を見かけないことがないと思われるほど、取り上げられるようになってきたが、その実態や我々の生活にどのような役割を果たしているのかまだまだ知られていない。21世紀は行政・企業・NPO NGOの三つのセクターが牽制、協働しなければ課題解決できない時代となってきた。NPOを通じてこれからの市民社会がどう形成されようとしているのか検証していく。		
授業内容	1. NPO・NGOとは何か。ボランティアとはどう違うのか。 2. NPO・NGOが期待される社会背景と意義、役割 3. 特定非営利活動促進法概論とNPO法人化の仕組み 4. 高齢者介護・障害者自立支援とNPO 5. 子育て支援とNPO 6. 国際貢献、国際協力とNPO 7. 環境問題とNPO 8. 青少年の健全育成とNPO 9. 生涯学習とNPO、NPOの教育力 10. まちづくりとNPO 11. NPOと企業、行政との協働、関係論 12. NPOのマネジメント論 （人材育成、資金調達、組織運営マーケティング等） 13. NPOのマネジメント論 14. NPOの評価 15. 試験		
教科書	レジメを随時配布		
授業の工夫点	一方的な講義とせず、ワークショップなど学生参加型で一緒に作業しながら授業を作っていく。		
授業の評価方法	出席授業態度を重視する。最終回に試験を実施。出席の状況、中間でのレポート提出、試験結果をみて総合評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 倉敷芸術科学大学

授業科目名	キャリア・チャレンジ I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	教育学、キャリア教育	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部、2～4年次対象	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計30名 (男子学生20名 女子学生10名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	街づくりに貢献出来るボランティア活動		
授業内容	1.ガイダンスⅠ:趣旨・内容等の説明 2.ガイダンスⅡ:職務体験の意味説明・マナー指導等含む レポート1「職務体験実施計画書」提出 3.ガイダンスⅢ:職務体験実施計画の実施に向けて 4.企画運営等の実地活動(1) 5.企画運営等の実地活動(2) 6.企画運営等の実地活動(3) 7.企画運営等の実地活動(4) 8.企画運営等の実地活動(5) 9.企画運営等の実地活動(6) 10.企画運営等の実地活動(7) 11.企画運営等の実地活動(8) 12.企画運営等の実地活動(9) レポート2「職務体験実施報告書」提出 13. 報告・反省会Ⅰ 14. 報告・反省会Ⅱ 15.レポート3「職務体験総合レポート」提出		
教科書	無		
授業の工夫点	理論と実践の融合を目指す		
授業の評価方法	プロジェクトに取り組む姿勢及び参加状況(60%)、レポート(40%)で総合的に評価する。なお、ガイダンス、報告会、反省会とプロジェクト活動をあわせて30時間以上が必要となる。レポート 1・2(20%)レポート3(20%)		
授業のサポート体制	学外の専門家の協力を得て実施		
学外の関係機関・団体との連携	倉敷市、倉敷商工会議所、倉敷青年会議所		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 呉大学

授業科目名	ボランティア入門		
担当教員 (学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	社会情報学部1年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計45名 (男子学生30名 女子学生15名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアへの関心が高まり、福祉分野のみならず、環境、国際協力、教育、情報、災害救援、まちづくりなどの様々な分野で活動に取り組む人々が増えてきた。そこでボランティアに関する諸問題、歴史、現状、動向、課題を示しより広い視野から検討する場を提供するとともに、実践につながる契機となることを目標とする。このことにより、受講生の人間性や人間力の向上に寄与し課題の発見力と実践力を身につけるという学習効果に結び付けたい。		
授業内容	1.ボランティアの思想について考察し、ボランティアの条件、捉え方、市民的公共性の担い手としてのボランティアについて考える。2.ボランティア活動の歴史的背景について考察する。3.変革期の行政とボランティアについて考察する。4.ボランティアの教育的意味、教育をめぐる施策、ボランティア教育、学校ボランティアについて考える。5.具体的活動事例-災害とボランティアについて実践活動を見る。6.具体的活動事例-高齢者に係るボランティアについて見る。7.具体的活動事例-障害者とボランティアについて考える。8.具体的活動事例-環境問題とボランティアについて考える。9.具体的活動事例-国際協力とボランティアについて考える。10.具体的活動事例-情報技術の社会的意味や情報ボランティア活動について考察する。11.ボランティアからNPO・NGOへ。12.ヨーロッパのボランティア活動の歴史、活動の実態、今後の課題等について考察する。13.アメリカのボランティア活動の歴史、活動の実態、今後の課題等について考える。14.実践活動。15.期末考査。		
教科書	「ひろしまNPOなんでも大百科」中国新聞社発行		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席と期末考査をもとに総合的に判断する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 広島国際大学

授業科目名	ボランティア I		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア、社会福祉援助技術論、社会福祉学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	心理科学部 コミュニケーション学科1年次、感性デザイン 学科1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計57名（男子学生39名 女子学生18名）	授業区分	講義
単位数	1	ボランティア体験の時間数	約15時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	日本のボランティア活動は、1995年の阪神大震災の年に始まったといわれる。学校教育におけるボランティア活動は、他人や社会の力となり、他人や社会から感謝される体験を持つという貴重な体験である。ボランティア活動は、学校教育の中では養成しにくい、自主性や自立性、思いやりや責任感、コミュニケーション能力などを養うことができる。日本の学校教育の中に位置づけることのできるボランティア活動の内容と方法を考える。またボランティア活動が備えなければならない資格やマナーについて考える。		
授業内容	第1回. オリエンテーション 第2回. ボランティア活動の歴史 第3回. ボランティア活動の実例に学ぶ 第4回. ボランティア活動の実例に学ぶ 第5回. ボランティア活動の実例に学ぶ 第6回. 青少年とボランティア活動(1) 第7回. 青少年とボランティア活動(2) 第8回. 学校教育とボランティア活動(1) 第9回. 学校教育とボランティア活動(2) 第10回. 学校教育とボランティア活動(3) 第11回. 地域づくりとボランティア活動 第12回. 地域福祉とボランティア活動 第13回. 環境保護とボランティア活動 第14回. 生活化するボランティア活動 第15回. テスト		
教科書	『ボランティアのすすめ』（岡本栄一監修 河内昌彦 他編著）		
授業の工夫点	授業では講義にとどまらず、実践を行なっている。20年度は学内で行えるボランティア活動として、グループに分かれて気付き実践したことを報告し合った。		
授業の評価方法	授業中のミニ・レポートと試験を加味して、総合的に評価する。		
授業のサポート体制	学生からの相談に応じて随時行う。		
学外の関係機関・団体との連携	社会福祉協議会及びボランティアセンターと随時情報交換を行う。年度によっては講義を行っていただく場合もある。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティアⅡ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員、学外教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	心理科学部 コミュニケーション学科1年次、感性デザイン 学科1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計25名（男子学生13名 女子学生12名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	15時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代の日本の社会生活の中で、ボランティアはどのような位置づけであるか、また、自分の住む街には、どのような種類のボランティアとよばれる取り組みがあるのかを、地域の人々と一緒に学ぶ授業である。それにより、ボランティア活動は人生において、どのような意味を持つのかを考え、自分には何ができるのかを模索する。さらに、地域コミュニケーション、異世代コミュニケーション、異文化コミュニケーションとはどのようなことかを体験的に学ぶ場とする。		
授業内容	第1回. ボランティア全般 ボランティア参加のためのこころがまえ 第2回. 福祉障害者ボランティア 障害者とのコミュニケーションについて 聴覚障害者支援方法を学ぼう 第3回. 環境美化ボランティア 私たちの町をきれいにするとは 第4回. 育児支援ボランティア 第5回. 福祉高齢者ボランティア バリアフリーのまちづくりをデザインしよう！ 第6回. 読み聞かせボランティア 本が大好き！元気な広島っ子を育てよう！ 第7回. 学術研究支援ボランティア 身近な黒瀬地域をもっと知ろう 第8回. 国際文化交流ボランティア 私に出来るボランティア まとめ ボランティアについてとことん話し合いました		
教科書	適宜プリント		
授業の工夫点	初めてボランティアに参加する学生であることから、人とかかわるための基本的なマナーを社会心理学・コミュニケーション学・パフォーマンス学の見地から学ぶことができる。また、地域の方々との交流を通して多方面の考え方を学び、広義での「キャリア教育」に通ずる学びが可能である。		
授業の評価方法	参加態度、発言、レポートなどにより、評価する。レポートは学外実習時の参加に対する心構え、役割意識、行動報告書、貢献度の自己評価などを基準とする。		
授業のサポート体制	実習には、大学のマイクロバスを提供、往復の送迎をしている。実習時には学内の教員が必ず引率している。		
学外の関係機関・団体との連携	この授業は東広島市教育委員会生涯学習課主催の「ボランティア発見講座」との共催で実施している。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 環太平洋大学

授業科目名	地域ボランティア実習		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	保育・福祉・心理、教育学・保育	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	次世代教育学部（乳幼児教育学科2年次、学級経営学科2年次）体育学部（体育学科2年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計31名（男子学生28名 女子学生3名）	授業区分	実習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	8～16時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	基本的知識や技術、心構えなどを身につける。		
授業内容	1.ボランティアとは(1)ボランティア論 2.ボランティアとは(2)NPOと行政と社会教育 3.ボランティアとは(3)教育におけるボランティア 4.地域社会とボランティア 5.ファンリテーターとは 6.さまざまなボランティア(1)図書館、公民館、博物館 7.さまざまなボランティア(2)学校、幼稚園、保育園 8.さまざまなボランティア(3)子ども劇場 9.さまざまなボランティア(4)プレイパーク 10.さまざまなボランティア(5)科学教育、家庭文庫 11.演習 12.ボランティアの計画(1)地域の調査と必要なボランティアの発見 13.ボランティアの計画(2)連携と受け入れ 14.演習 15.定期試験		
教科書	ボランティア活動		
授業の工夫点	ボランティア活動時の事故防止、学内でのアクションリサーチ(学内の改善点をさがす)、学外(おかやまプレーパーク)での実習活動(子どもの遊びを引き出す)		
授業の評価方法	出席・レポート・ボランティア態度		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	岡山県中央児童相談所、岡山県社会福祉協議会ボランティアセンター、NPO法人岡山市子どもセンター		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 徳島文理大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人間生活学部人間福祉学科3年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計14名（男子学生8名 女子学生6名）	授業区分	講義、演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	特に決めていない
必修・選択の別	選択		
授業目的	近年の社会構造の変化とボランティア活動の必要性について学ぶ。ボランティア体験を通し、学んだことを皆で話し合い、これからのボランティア活動について考える。		
授業内容	【1】ガイダンス：ボランティアとは 【2】ボランティア活動の歴史と現状 【3】私にとってのボランティア 【4】ボランティア活動の歩み 【5】高齢者問題とのかかわり～Ⅰ 【6】高齢者問題とのかかわり～Ⅱ 【7】児童問題とのかかわり～Ⅰ 【8】児童問題とのかかわり～Ⅱ 【9】障害者問題とのかかわり～Ⅰ 【10】障害者問題とのかかわり～Ⅱ 【11】環境問題とのかかわり 【12】国際問題と国際ボランティア 【13】ボランティア活動を始めるにあたって 【14】福祉現場の職員として 【15】これからのボランティア活動 まとめ		
教科書	「大学とボランティア」内外学生センター、「わかる・みつかる・できる—学生のためのボランティアガイド」内外学生センター		
授業の工夫点	・演習を中心に進める。 ・NPO法人理事長、当事者(作業所メンバー)の講話。		
授業の評価方法	レポート評価、ボランティア経験を評価点に換算する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	NPO法人理事長、当事者(作業所メンバー)の講話		
今後の授業の継続	未定		

○ 高松大学

授業科目名	ボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	全学部1～4年次対象	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計39名(男子学生26名 女子学生13名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアの基礎的な知識の修得を初め、日常生活がボランティア・スピリットと無縁ではないことを学ばせる。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション 2. ボランティアとは 3. ボランティアの歴史 4. ボランティアの類型 5. 現代社会とボランティアの課題 6. 生涯学習とボランティア 7. 勤労者とボランティア 8～10. 学生とボランティア 11. 12. ボランティア活動の事例研究 13. 14. ボランティアの体験発表 15. 期末試験 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席重視。学習意欲、受講態度、毎回の授業での設問に対する「出席カード」へのコメント。時間外に各自実践した「ボランティア活動記録報告書」の提出。期末試験。すべての総合評価。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 久留米大学

授業科目名	市民事業論特講 I		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論、公共政策論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部(心理学科、情報社会学科、国際文化学科、社会福祉学科)経済学部(経済学科、文化経済学科)全て2年次以上	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計92名 (男子学生81名 女子学生11名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>ソフト化時代の市民参加型まちづくりを求めて</p> <p>みなさんも、最近「まちづくり」という言葉をよく聞くと思います。みなさんの中には、この言葉を聞いても、「オレは公務員になるつもりはないから関係ないよーん」と思っている人もいるかも知れません。あるいは、道路や建物を作ったり、工場を誘致したりすることが思い浮かぶかも知れません。しかしご存じの通り、近年の公共事業の大半は、あまり人々の役に立たずに自治体の赤字を増やすだけという結果になっています。企業を誘致しようとしても、高度成長時代の花形製造業は時代遅れになり、いまさら国内に工場を作ってももうかるはずはありません。たいてい思うようにいかず失敗しているところでしょう。ひとりひとりの市民を離れたところで行われてきた地域振興が、行き詰まっているのが現在の状況ということが言えると思います。</p> <p>では、これからの時代は、どこに力を入れたまちづくりを目指していくべきなのでしょうか。</p> <p>私たちが食べたり飲んだり、仕事をしたり遊んだり、子供を育てたりしながら、いろいろな暮らしを営んでいる場、それが私たちの住んでいる「街」です。だから、街づくりとは、お役所や一部の政治家だけがやるべきことではなく、様々な生きているひとりひとりの市民が、その様々な暮らしに根差して、自分自身の個性豊かな生き方に基づいて担っていくべきものです。</p> <p>21世紀の産業のホープは「ソフト化産業」と言われています。情報、観光、福祉、医療などを指しているのですが、これらはすべて、今述べた私たちひとりひとりの暮らしに、直結しているという共通点があります。ですから、これからの街づくりは、このような側面にもっと力を入れていくものでなければなりません。すなわち、「工業化高度成長時代の行政主導型地域振興」から「ソフト化成熟時代の市民参加型まちづくり」への転換です。</p> <p>現在、このような新しいタイプのまちづくりが、全国いたるところで始まっています。それを担っているのは、NPO法人(非営利組織)や協同組合であったり、様々なボランティアグループであったり、福祉や環境などの社会的価値をかがげコミュニティビジネス企業であったりします。行政の場合にも、市民の創意と自主性にまかせる事業が成功しています。すなわち、これまでのように、企業にせよ行政にせよ、そこで働く人々やそこに住む人々のあずかりしらないところでものごとを決めて、勝手に押し付けるやりかたはもう時代遅れなのです。市民ひとりひとりが主体的に意志決定に参加して担う事業こそ、今全国でわきおこっている新なお、本講義は前後期とも一般社会人の方々も対象とした公開講義です。</p> <p>本講義前期「市民事業論」では、NPOや協同組合等々の市民事業や市民の自発的活動を通じて、実際に地域の中のいろいろな場面で「ソフト化時代の市民参加型まちづくり」を第一線で担っておられるの方々にゲスト・スピーカーにお招きします。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス—本講の概要と進め方、予定される講師およびテーマの紹介、諸注意事項など—(伊佐) 2 佐藤剛史氏(九州大学大学院農学研究院助教、NPO法人環境創造舎代表) <ul style="list-style-type: none"> 「九州大吟醸の挑戦、糸島エコバックの発想」 3 福田俊明氏(NPO法人伊万里はちがめプラン理事長) <ul style="list-style-type: none"> 「生ごみを宝に—食資源循環によるまちづくり—」 「伊万里はちがめプランとコミュニティ・ビジネス」 4 里川徑一氏(AIM 国際ボランティアを育てる会) <ul style="list-style-type: none"> 「世界の中のあなたとわたし—国際協力団体だからこそ国内で! !—」 5 今村 勲氏(NPO法人日本ガーディアン・エンジェルス久留米支部) <ul style="list-style-type: none"> 「コミュニティの安全—地域安全NPOとしての取り組み—」 6 小林華弥子氏(大分県由布市市会議員)「ゆふいんとまちづくり」 7 古賀弥生氏(アートサポートふくおか代表・久留米大学非常勤講師) <ul style="list-style-type: none"> 「芸術文化でまちづくり」 8 坂東あけみ氏(ベトナムの子ども達を支援する会 事務局長) <ul style="list-style-type: none"> 「小さなNGOにできる大きな仕事 in Vietnam—国際協力におけるNPOの協力のあり方の一事例—」 9 吉永美佐子氏(NPO法人高齢者快適生活つくり研究会代表理事) <ul style="list-style-type: none"> 「誰もがくらしやすいまちづくり—アクティブシニア時代のまちづくり—」 10 緒方 満氏(福岡自動車交通労働者協同組合理事長) <ul style="list-style-type: none"> 「ワーカーズコープタクシー福岡の挑戦」 「ワーカーズコープタクシー福岡の挑戦」 11 原 征治氏(ODA改革ネットワーク九州) 12 永吉 守氏(NPO法人大牟田・荒尾 炭鉱のまちファンクラブ理事、九州伝承遺産ネットワーク副会長、久留米高専・福岡工大非常勤講師) <ul style="list-style-type: none"> 「<炭都>の心象風景をく世間遺産>として活用する—大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブの活動—」 13 桜木英一氏(NPO法人Webスポーツクラブ21事務局長) <ul style="list-style-type: none"> 「地域からのスポーツ発信—スポーツも健康も地域から—」 14 まとめ(伊佐) 		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席・受講態度=50%、講義レポート=50% なお、受講態度不良(私語、居眠り等)の場合には減点としますので、注意してください。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	講師招聘		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	非営利組織経営論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	非営利組織論、公共政策論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経済学部(経済学科、文化経済学科) 全て2年次以上	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計58名(男子学生53名 女子学生5名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	<p>ここ数年、世界的に(民間)非営利組織(NPO)の台頭が伝えられ、わが国においても、阪神・淡路大震災以来、さまざまな方面からNPOは注目を集めています。</p> <p>NPOも組織である以上、事業運営はもちろん、組織それ自体を維持・発展させていくことが求められるはずで、そのためには、「NPOを経営する」という視点からも考察していくことが必要になります。</p> <p>本講では、以上の点を念頭に置き、NPOのマネジメントに関わる諸要素—ミッション、人材育成、組織構造など—を解説し、さらに、そうしたマネジメントを支援するシステムの必要性も論じてみたいと思います。そうした観点から、さまざまな具体例や事例も交えながら、講義を進めていきます。</p> <p>最後に、本講の目的は、NPOの定義とその分析枠組み、マネジメント全般を学ぶことによって、経済社会におけるNPOの存在意義や可能性について考えてもらうことにあります。</p> <p>なお、本講では通常の講義形式だけではなく、グループ・ディスカッションや講義レポート等を通じ、受講生に主体的に参加を求めることで、上記の諸点について理解を深めてもらいたいと思います。</p>		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1 ガイダンス(講義の概要・目的・注意点等) 2 NPOの本質について考える ボランティア、NPO、NGO(1) 3 ボランティア、NPO、NGO(2) グループ形成とアイス・ブレイキング 4 グループ・ディスカッションと報告 5 地域におけるNPOの活動—事例紹介(1)— 6 NPOマネジメントについての基礎知識 7 受講生による報告 8 ボランティアのモチベーション 9 ボランティアの育成 10 グループ・ディスカッションと報告 11 地域におけるNPOの活動—事例紹介(2)— 12 リーダーシップと支援システム 13 グループ・ディスカッションと報告 14 まとめ 		
教科書	『ボランティア・NPOの組織論』 田尾・川野編著 学陽書房 2004年		
授業の工夫点			
授業の評価方法	講義レポート(30%)、グループ・ディスカッションの評点(40%)、出席状況および受講態度(30%)で評価します。なお、受講態度不良(私語、居眠り等)の場合には減点としますので、注意してください。 再試験評価方法:実施しません。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	コミュニティスポーツ論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	スポーツ経営学、コミュニティスポーツ論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部(心理学科、情報社会学科、国際文化学科、社会福祉学科)経済学部(経済学科、文化経済学科)全て2年次以上	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計9名(男子学生4名 女子学生5名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	本授業では、スポーツの多様な関わり(「する」「みる」「ささえる」スポーツ)を理解するとともに、スポーツによるコミュニティ形成の理論と実践を学ぶことを目的とする。講義だけではなく、地域スポーツクラブでのボランティア活動も取り入れた授業を展開していく。		
授業内容	1 オリエンテーション(授業内容の説明) 2 生涯スポーツとは 3 地域コミュニティとは 4 ボランティアとは 5 スポーツ行政論 6 スポーツマネジメント論 7 総合型地域スポーツクラブ概論 8 総合型地域スポーツクラブの事例 9 グループワーク 10 グループワーク 11 グループワーク 12 クラブでのボランティア活動 13 クラブでのボランティア活動 14 クラブでのボランティア活動 15 プレゼンテーション(活動報告発表会)		
教科書	授業で資料を配布する。		
授業の工夫点			
授業の評価方法	評価は「出席」「レポート課題」「学習態度」の3つの視点で評価する。 評価配分は、「出席:60%」「レポート課題:30%」「学習態度:10%」とする。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	障害者福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部(心理学科、情報社会学科、国際文化学科、社会福祉学科)経済学部(経済学科、文化経済学科)全て2年次以上	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計343名(男子学生242名 女子学生101名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	ボランティアの形態・理念・実践の方法などを中心としてともに学んでいきたい。特に実践の方法として具体的に家庭や車イスでの介護技術や手話・点字・音訳などのミニ講座、障害を持つ疑似体験(キャップハンディ)なども行います。		
授業内容	1 ボランティアって～有料と無対価 2 対社会的と対人的ボランティア 3 活動と運動～ソーシャルアクション 4 キャップハンディ～車イスで外へ出る 5 介護と要介護～美談のタネ 6 介護福祉のミニ介護技術講座 7 聴覚障害者の話とミニ手話講座 8 ボランティアサークルの設立と運営論 9 ボランティアとしての人権問題 10 視覚障害者の話とミニ点字・音訳講座 11 施設と在宅福祉でのボランティア活動 12 ボランティアに望むもの～当事者の声 13 フォーマルとインフォーマルの福祉 14 共に生きる～ノーマライゼーション		
教科書	テキスト『わたしらしく生きる』ナカニシヤ出版		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席が一番です。小レポートを数回と最後にまとめのレポートを提出してください。		
授業のサポート体制	講師自身が障がい者福祉企業の経営を行って、社員の方が授業支援を行っている。		
学外の関係機関・団体との連携	講師の経営する企業のボランティア経験者の授業支援		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア実習演習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学(含社会福祉関係)	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文学部(心理学科、情報社会学科、国際文化学科、社会福祉学科)全て2年次以上	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計10名(男子学生5名 女子学生5名)	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	特に時間数は設定していないが、体験は実施する。
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	近年、さまざまな分野のボランティア活動が広がりを見せている。この授業では、それぞれのボランティア参加活動、ボランティア体験をもとに、ボランティアとは何か、ボランティア組織の現状、ボランティア社会の可能性について、考察する。この授業は、同時に、それぞれの学生が多様なボランティアに参加することを支援する。		
授業内容	1 オリエンテーション 2 ボランティアとは 3 筑後地域のボランティア 4 ボランティアセンターの紹介 5 ボランティア、取材先の相談 6 ボランティア、取材先の相談 7 ボランティア、取材先の確定 8 途中経過の報告 9 途中経過の報告 10 報告会 11 報告会 12 報告会 13 まとめ		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業への参加20%、報告会での相互評価60%、報告書20%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア実習先		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 九州共立大学

授業科目名	ボランティア活動		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	生涯学習、社会教育、社会体育、社会福祉	共通・専門等の別	その他(自由選択)
開設学部(学科)及び年次	2年生	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計184名(男子学生140名 女子学生44名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	「社会教育主事」資格取得者を対象としているので社会教育主事として現場で役立つ実践力を強化すること		
授業内容	第1回授業ガイダンス:ボランティア活動の情報収集と整理方法 第2回ボランティア活動に係る調査の技法 第3回講座・研修プログラムの立案の実際 第4回カウンセリングの知識・技術 第5回ボランティア活動グループの組織化と支援 第6回他機関・施設との連携・協力のあり方と協働プログラムの開発 第7回広報の知識・技術と実際 第8回行政や関係機関への情報提供 第9回マルチメディアの活用法 第10回データベースの活用技術 第11回コミュニケーション、プレゼンテーション等の技術 第12回ボランティア養成プログラムの立案と実際 第13回ボランティア養成プログラムの実施と評価 第14回まとめ:ボランティア活動の活性化とコーディネーターの役割 第15回評価・発表会		
教科書	なし		
授業の工夫点	国立夜須高原少年自然の家、福岡県立社会教育総合センター、本学生涯学習研究センターでのボランティア実習等の案内		
授業の評価方法	出席30%、授業態度・私語の禁止10%、レポート提出10%、学外実習20%、定期試験(発表会)30%		
授業のサポート体制	社会教育施設のボランティア事業案内		
学外の関係機関・団体との連携	北九州市民センター、県福祉センターとの連携		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ガーデニング実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ガーデニング	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	4年生	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計7名(男子学生4名 女子学生3名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	12時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	樹木、野菜、花卉栽培などの基礎、ガーデニング資材、ガーデニング植物の特性と管理技術を現場体験を通して習得する。		
授業内容	第1回花壇現地調査 第2回花壇デザイン 第3回育苗:種まき、挿し木 第4回コンテナガーデン 第5回温室前花壇施工:土壌改良 第6回野菜:(家庭菜園) 第7回正面前花壇施工 第8回ハンギングバスケット 第9回見学 第10回屋上ガーデン施工 第11回屋上ガーデン施工 第12回黒崎花宿場花フェスティバル見学及び施工ボランティア 第13回花壇管理:施肥、剪定、草取り 第14回屋上ガーデン管理:施肥、剪定、草取り 第15回花壇管理:施肥、剪定、草取り		
教科書	なし		
授業の工夫点	実践させること		
授業の評価方法	出席60%、授業中の発表と態度など、施行技術20%、定期試験及び再試験は実施しない。		
授業のサポート体制	環境サイエンス学科全教員で対応している。		
学外の関係機関・団体との連携	北九州市道路サポーター:申請し認可を受ける。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 日本文理大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経営経済学科	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計187名(男子学生158名 女子学生29名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	30時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	阪神淡路大震災においては、さまざまな人たちが団体が多様な救援活動を展開し、ボランティア活動が大きく注目されるようになりました。近年のボランティア活動は、福祉の領域から教育、保健・医療、生活文化、環境、国際協力など幅広い分野に及んでいます。 ボランティア活動の歴史や基本的な理念を理解し、何らかの方法で実際にボランティア活動の実践に挑戦することを目指します。 なお、平成19、20年度については、平成20年に開催される第8回全国障害者スポーツ大会における選手団を支援するボランティア活動を目指します。		
授業内容	○第1回 オリエンテーション・障害者スポーツ大会とボランティアについて ○第2回 障害者福祉と障害者スポーツについて ○第3回 肢体不自由者の理解と介助技術 ○第4回 視覚障害者の理解と介助技術 ○第5回 知的障害者の理解と介助技術 ○第6回 精神障害者の理解 ○第7回 聴覚障害者の理解 ○第8回 手話1 聞こえないってどんなこと・伝え合ってみよう ○第9回 手話2 自己紹介の仕方・感情表現の仕方 ○第10回 手話3 数字を覚えよう・趣味について話してみよう ○第11回 手話4 指文字を覚えよう・大会を想定した会話をしてみよう ○第12回 要約筆記の基礎と実技 ○第13回 大分県の観光・特産品等の紹介 ○第14回 接遇マナーの基本 ○第15回 全国障害者スポーツ大会でのボランティア活動について		
教科書	選手団担当ボランティア養成講座テキスト		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況と受講態度、提出物等により総合的に評価します。		
授業のサポート体制	各種障害者の理解と介助技術及び手話、要約筆記等は大分県から講師派遣		
学外の関係機関・団体との連携	大分県国民体育大会・障害者スポーツ大会局		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア実習		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	社会福祉	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	経営経済学科	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計120名(男子学生96名 女子学生24名)	授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	60時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	第8回全国障害者スポーツ大会に参加する選手が支障なく競技に挑むことが出来るよう案内、介助、誘導等のボランティア活動に取り組むとともに交流を通じて、ボランティア活動の精神を実感し、障害者への理解を深めることを目的とします。		
授業内容	○第 1回 オリエンテーション・大会の概要諸注意 ○第 2回 大会会場、練習会場、宿舎等下見 ○第 3回 選手団到着から宿舎への案内 (10月 9日(木)) ○第 4回 公式練習会場での案内、介助、誘導 (10月10日(金)) ○第 5回 開会式、競技会場での案内、介助、誘導(10月11日(土)) ○第 6回 競技会場での案内、介助、誘導 (10月12日(日)) ○第 7回 競技会場、閉会式での案内、介助、誘導(10月13日(月)) ○第 8回 選手団離島の案内 (10月14日(火)) ○第 9回 レポートの作成 ○第10回 報告会		
教科書	選手団担当ボランティア養成講座テキスト		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席状況と受講態度、提出物等により総合的に評価します。		
授業のサポート体制	大分県国民体育大会・障害者スポーツ大会局の実施本部員の指揮下に入りボランティア実習		
学外の関係機関・団体との連携	大分県国民体育大会・障害者スポーツ大会局		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 沖縄大学

授業科目名	ボランティア入門 I (一部・クラス01)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員(オムニバス)	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部(福祉文化学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計81名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修		
授業目的	1. ボランティア活動の意義について実践を通して理解させる。 2. 3年次の社会福祉現場実習を視野に入れてボランティア活動の体験学習をさせる。 3. ボランティア活動に必要なマナーについて学ぶ。		
授業内容	1. オリエンテーション・仲間をつくろう 2. ボランティア活動について① 3. ボランティア活動について② 4. 社会人としてのマナー① 5. 社会人としてのマナー② 6. 社会人としてのマナー③ 7. 社会人としてのマナー④ 8. 社会人としてのマナー⑤ 9. 社会人としてのマナー⑥ 10. 社会人としてのマナー⑦ 11. ボランティア活動について① 12. ボランティア活動について② 13. ボランティア活動について③ 14. ボランティア活動について④		
教科書	『ビジネスマナー』(青木テル著)(早稲田教育出版)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席を重視する。評価は、出席とテスト(ロールプレイおよび筆記)またはレポートで行う。レポートを作成させる。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア入門Ⅰ(二部・クラス02)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員(オムニバス)	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部(福祉文化学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計51名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修		
授業目的	1. ボランティア活動の意義について実践を通して理解させる。 2. 3年次の社会福祉現場実習を視野に入れてボランティア活動の体験学習をさせる。 3. ボランティア活動に必要なマナーについて学ぶ。		
授業内容	1. オリエンテーション・仲間をつくろう 2. ボランティア活動について① 3. ボランティア活動について② 4. 社会人としてのマナー① 5. 社会人としてのマナー② 6. 社会人としてのマナー③ 7. 社会人としてのマナー④ 8. 社会人としてのマナー⑤ 9. 社会人としてのマナー⑥ 10. 社会人としてのマナー⑦ 11. ボランティア活動について① 12. ボランティア活動について② 13. ボランティア活動について③ 14. ボランティア活動について④		
教科書	『ビジネスマナー』(青木テル著)(早稲田教育出版)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席を重視する。評価は、出席とテスト(ロールプレイおよび筆記)またはレポートで行う。レポートを作成させる。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア入門Ⅱ(一部・クラス01)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員(オムニバス)	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部(福祉文化学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計80名	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修		
授業目的	1. ボランティア活動に求められる倫理について学ぶ。 2. ボランティア活動を通して自己の変化を確認する。 3. ボランティア活動に必要なマナーについて学ぶ。		
授業内容	1. オリエンテーション・夏休みの活動レポート 2. ボランティア活動を通して① 3. ボランティア活動を通して② 4. 社会人としてのマナー① 5. 社会人としてのマナー② 6. 社会人としてのマナー③ 7. 社会人としてのマナー④ 8. 社会人としてのマナー⑤ 9. 社会人としてのマナー⑥ 10. 社会人としてのマナー⑦ 11. ボランティア活動を通して① 12. ボランティア活動を通して② 13. ボランティア活動を通して③ 14. 授業評価、感想レポート、ボランティア手帳の提出		
教科書	『ビジネスマナー』(青木テル著)(早稲田教育出版)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席を重視する。評価は、出席とテスト(ロールプレイおよび筆記)またはレポートで行う。レポートを作成させる。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア入門Ⅱ(一部・クラス01)		
担当教員(学内又は学外)	学内教員、学外教員(オムニバス)	授業期間	半期
担当教員の専門分野	ボランティア	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	人文学部(福祉文化学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計45名	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修		
授業目的	1. ボランティア活動に求められる倫理について学ぶ。 2. ボランティア活動を通して自己の変化を確認する。 3. ボランティア活動に必要なマナーについて学ぶ。		
授業内容	1. オリエンテーション・夏休みの活動レポート 2. ボランティア活動を通して① 3. ボランティア活動を通して② 4. 社会人としてのマナー① 5. 社会人としてのマナー② 6. 社会人としてのマナー③ 7. 社会人としてのマナー④ 8. 社会人としてのマナー⑤ 9. 社会人としてのマナー⑥ 10. 社会人としてのマナー⑦ 11. ボランティア活動を通して① 12. ボランティア活動を通して② 13. ボランティア活動を通して③ 14. 授業評価、感想レポート、ボランティア手帳の提出		
教科書	『ビジネスマナー』(青木テル著)(早稲田教育出版)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席を重視する。評価は、出席とテスト(ロールプレイおよび筆記)またはレポートで行う。レポートを作成させる。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ボランティア体験		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	集中授業
担当教員の専門分野	法の比較文明論	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	法経学部(法経学科3・4年次)	授業のレベル	上級
平成20年度履修者数		授業区分	実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動を通して、NPOやNGO等の社会的諸活動の意義を考察する。		
授業内容	1. テーマ設定のための講義と、実習先の事前調査に基づくレポート作成 2. 外部講師による講義(マナー関連と実習先の担当者) 3. 昨年度実習生の体験をきく。 4. 作文指導 5. 実習レポート添削 6. 懇親会での発表		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	福祉のまちづくり		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	障害者福祉・ソーシャルワーク	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	法経学部(法経学科2・3・4年次) 人文学部(福祉文化学科2・3・4年次)	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計130名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	グループ学習を基本とする。学生一人ひとりが主体的に学ぶことを通して「福祉のまちづくり」とは何かについて基本的な理解を得て新しい視点で自分の身の回りのまちづくりを見ることが出来る。		
授業内容	福祉のまちづくりの実践・法制度の歴史と現在、未来について考える。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポートを中心に評価するが、出席と出席カードも重視する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	まちづくり I (一部・クラス01)		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	経済学・まちづくり	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	法経学部(法経学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計35名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択必修		
授業目的			
授業内容	すばらしいまちづくりが各地で生まれているが、そうした事例を学びながら、これからの沖縄のまちづくりについて考えたい。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート、期末試験の結果で評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	まちづくり I (二部・クラス02)		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	経済学・まちづくり	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	法経学部(法経学科1年次)	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計13名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択必修		
授業目的			
授業内容	すばらしいまちづくりが各地で生まれているが、そうした事例を学びながら、これからの沖縄のまちづくりについて考えたい。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	レポート、期末試験の結果で評価する。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	まちづくり II		
担当教員 (学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	都市計画・まちづくり	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	法経学部(法経学科2・3年次)	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計22名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	まちづくりを進める上で重要な住民参加の手法を具体的な事例や演習を通して理解し、体得してもらおう。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 現地調査:実際に各自が現地に足を運び、レポートをまとめる。 2. プレゼンテーション:現地レポートやワークショップの成果などを発表する。この講義を通して簡単な図表やスケッチを交えたプレゼンテーションの重要性を理解する。 3. グループ作業:グループに分かれて作業を行い、とりまとめる課題にも取り組む。 		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業、演習への参加、課題(レポート)の総合評価とする。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	まちづくりⅢ		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	都市計画・まちづくり	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	法経学部(法経学科2・3年次)	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計16名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択必修		
授業目的			
授業内容	「中心市街地の活性化」をテーマとして、沖縄の状況に即したまちづくり～地域づくりのあり方をワークショップなどの演習を交えながら考察する。中心市街地を取り巻く状況、具体的な現状と課題、生き延びる店舗のあり方、既存の町の空間を利用したまちづくりの方向性などを取り上げる。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	授業、演習への参加、課題(レポート)の総合評価とする。		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ノートテイク講座Ⅰ		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学生対象	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計53名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	本学の大学ノートテイクとして活動ができる。		
授業内容	聴覚障がい者の社会状況を正しく理解した上で、本学に在籍する聴覚障がいを持つ学生に対し、講義参加を保障できるノートテイクを育てる。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席、授業態度、現場実習、レポート、試験		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	ノートテイク講座Ⅰ		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学生対象	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計35名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	本学の大学ノートテイクとして活動ができる。		
授業内容	ノートテイク講座Ⅰで学んだことを踏まえ、様々な場面での情報保障の方法を演習を中心に学ぶ。		
教科書	なし		
授業の工夫点			
授業の評価方法	出席、授業態度、現場実習、レポート、試験		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携			
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 尚綱大学

授業科目名			
社会福祉概論			
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文化言語学部2年生	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計2名(男子学生0名 女子学生2名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	社会福祉の基本となる理念や社会福祉のしくみ、社会福祉サービス、専門職等の仕事について理解する。さらに、高齢者、障害者、児童、保健医療ならびに経済的に生活困難な人々への理解をとおして、個々のニーズに対応する社会福祉サービスや援助方法について学ぶ。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会福祉への視点 2. 社会福祉の歩み 3. 社会福祉の歩み 4. 社会福祉の諸分野 5. 社会福祉の諸分野 6. 社会福祉の諸分野 7. 社会福祉と関連施策 8. 社会福祉と法制度 9. 社会福祉の対象 10. 社会福祉の専門職 11. 社会福祉の援助方法 12. 社会福祉の援助方法 13. 社会福祉の動向と課題 14. 社会福祉の動向と課題 15. 総括 		
教科書	「社会福祉の構造と課題」今泉編著		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続			

授業科目名			
現代社会とボランティア			
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	文化言語学部3年生	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計7名(男子学生0名 女子学生7名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代社会の諸相に焦点をあて、ボランティアの基礎理念を学ぶ。また具体的な社会現象の分析をとおして、ボランティア活動の社会的な意義と役割の大切さを発見したい。また、変わりゆく社会とボランティア活動の支えによるさまざまな可能性について理解を深める。さらに、国内外のボランティア体験などの紹介をとおして、共に生きる姿勢を学習する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア活動の定義 2. 私にとってのボランティア 3. 私にとってのボランティア 4. 人はなぜボランティアをするのか 5. ボランティアが創り出す新たな価値 6. ボランティアが創り出す新たな価値 7. ボランティア活動と社会福祉 8. ボランティア活動と社会福祉 9. ボランティア活動と社会福祉 10. ボランティア活動と環境 11. ボランティア活動と地球市民 12. ボランティア活動と教育 13. 国際ボランティアNGO活動 14. ボランティアセンターとマネジメント 15. まとめ 		
教科書	学生のためのボランティア論		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続			

授業科目名	現代社会とボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	幼児教育学科1年	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計45名(男子学生0名 女子学生45名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	現代社会の諸相に焦点をあて、ボランティアの基礎理念を学ぶ。また具体的な社会現象の分析をとおして、ボランティア活動の社会的な意義と役割の大切さを発見したい。また、変わりゆく社会とボランティア活動の支えによるさまざまな可能性について理解を深める。さらに、国内外のボランティア体験などの紹介をとおして、共に生きる姿勢を学習する。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. ボランティア活動の定義 2. 私にとってのボランティア 3. 私にとってのボランティア 4. 人はなぜボランティアをするのか 5. ボランティアが創り出す新たな価値 6. ボランティアが創り出す新たな価値 7. ボランティア活動と社会福祉 8. ボランティア活動と社会福祉 9. ボランティア活動と社会福祉 10. ボランティア活動と環境 11. ボランティア活動と地球市民 12. ボランティア活動と教育 13. 国際ボランティアNGO活動 14. ボランティアセンターとマネジメント 15. まとめ 		
教科書	学生のためのボランティア論		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続			

授業科目名	社会福祉		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野		共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	幼児教育学科1年	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計143名(男子学生0名 女子学生143名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	必修		
授業目的	社会福祉の基本となる理念や社会福祉のしくみ、社会福祉サービス、専門職等の仕事について理解する。さらに、高齢者、障害者、児童、保健医療ならびに経済的に生活困難な人々への理解をとおして、個々のニーズに対応する社会福祉サービスや援助方法について学ぶ。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会福祉への視点 2. 社会福祉の歩み 3. 社会福祉の歩み 4. 社会福祉のしくみ 5. 社会福祉のしくみ 6. 社会福祉のしくみ 7. 社会福祉の諸分野 8. 社会福祉の諸分野 9. 社会福祉の諸分野 10. 社会福祉と法制度 11. 社会福祉の専門性 12. 社会福祉の援助方法 13. 社会福祉の援助方法 14. 社会福祉の動向と課題 15. 総括 		
教科書	「改定 保育士養成講座 社会福祉」講座編纂委員会		
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続			

○ 活水女子大学

授業科目名	海外ボランティア		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	英語	共通・専門等の別	共通
開設学部(学科)及び年次	文学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計3名(女子学生3名)	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	45時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動自体、意義のあることだが、世界各国から来た同世代の若者と海外で共同生活を送ることで、現地の文化に触れるだけでなく、参加者各々の出身国の文化に対する理解も育むことができ、二重の意味での異文化理解の場となる。非英語圏のボランティア開催地も多いが、キャンプ内での共通言語は基本的に英語なので、英語コミュニケーション能力の向上にもつながる。		
授業内容	国際教育交換教会による、国際ボランティアプロジェクト(IVP)、及び豪エコボランティア(CVA)への参加。事前説明会、オリエンテーション、帰国報告会、時期説明会での体験報告等、帰国レポート作成。		
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法	説明会、報告会への参加。レポート。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	国際教育交換協議会		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 宮崎産業経営大学

授業科目名	ボランティアテイア		
担当教員(学内又は学外)	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会体育指導論・世界の新体操	共通・専門等の別	専門
開設学部(学科)及び年次	法・経営学部全学年	授業のレベル	
平成20年度履修者数	計46名	授業区分	講義、実習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	必修		
授業目的			
授業内容			
教科書			
授業の工夫点			
授業の評価方法			
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 西南女学院大学

授業科目名	ボランティア論ボランティア活動論		
担当教員(学内又は学外)	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学、地域福祉	共通・専門等の別	その他(共通:福祉学科、専門:看護学科)
開設学部(学科)及び年次	保健福祉学部(看護学科・福祉学科1年次)	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計48名(男子学生0名 女子学生48名)	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティアやNPOなど多岐に渡る市民活動を通して、福祉分野のボランティア活動の特質や意義について学び、福祉ボランティアの今後の可能性について考えることを目標とする。具体的には、ボランティアの位置、ボランティア活動の基本理念、理論や実践について学ぶ。とりわけ実践については、社会福祉の諸領域における活動事例を学び、自らも調べることを通じてボランティアの意義を確認するとともに、多角的な視点からボランティア活動について考える。		
授業内容	1. ボランティア活動の理念 2. ボランティア活動の歴史 3. 多分野におけるボランティア活動の実際 4. 地域におけるボランティア活動の現状 5. 社会福祉におけるボランティアの意義と今後の可能性		
教科書			
授業の工夫点	実際にボランティア活動に携わっている方を外部講師として招聘した。		
授業の評価方法	授業への出席状況と参加態度、及び学期末のレポートによって総合的に評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 鹿児島純心女子大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPO職員	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	全学部全学科	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計5名（男子学生0名 女子学生5名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	地方分権化の中の、急速な高齢化と国及び地方自治体の財政窮乏は、地域の福祉を住民自らの手に委ねようとしている。高齢化社会のボランティア活動は、単に善意の発露ということどならず、地域住民の暮らしの安心安全と生活の質を維持するのに不可欠の活動となってきた。 本講においては、現代社会の変化をたどりながら、高齢社会の青少年から高齢者にいたるボランティア活動の現状とあり方を明らかにしようとするものである。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 日本社会の構造と変化・・・結いのよさと共同体の息苦しさ(後田) 2. 日本の家族・・・家族制度から少子核家族へ(後田) 3. 高齢化の進行とボランティア活動(後田) 4. ボランティア活動の意義(後田) 5. 高齢者と日本型のボランティア活動(後田) 6. 災害時の高齢者とボランティア活動(後田) 7. まちづくりとボランティア活動(後田) 8. 生涯学習支援のボランティア活動(後田) 9. 街の中のボランティア活動の現状と課題(義山) 10. 青少年のボランティア活動(義山) 11. 青少年支援のボランティア活動(義山) 12. 近隣社会のボランティア活動(義山) 13. ボランティアの推進を担う専門職との関わり方(義山) 14. ボランティア活動における社会資源の有効活動(義山) 		
教科書	現代のエスプリ・江幡玲子・深沢道子 編著『ボランタリズム』-順ぐりのおかえし-(至文堂2003/)		
授業の工夫点	特になし		
授業の評価方法	レポート		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 九州看護福祉大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉工学	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	看護福祉学部1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計46名（男子学生28名 女子学生18名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	高齢者や障害児者と共に生きる社会が、ノーマルとする理念を現実化するためには、地域の人々の参加や協力が必要である。このようなボランティア活動にシステムやルールがあれば、より高いサービスが提供できるであろう。そのほか、心理面のサポートのあり方等についても考え、実践のための基礎づくりを目指す。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 社会経済環境の変化とボランティア活動 2. 勤労者・企業等とボランティア活動の意義 3. 勤労者（企業人）のボランティア活動の現状と問題点 4. 企業・労働組合の社会貢献活動とボランティア支援 5. ボランティア・NPOと企業・行政とのパートナーシップとボランティア社会 6. 最高のボランティアはお母さんだ 7. 愛ってなんだろう 8. 自分の存在価値って何？ 9. 自分と他者（他者になることはできない） 10. 国際社会と日本のちがいは 11. NPO法人の設立と活動 12. NPO法人の実践事例分析 13. 地域の福祉ネットワークの中におけるNPO法人の役割 14. 大きな福祉論とコミュニティケア活動 15. 試験・レポート 		
教科書	小林出版の「実践的ボランティア論」(西島衛治編著)		
授業の工夫点			
授業の評価方法	試験・レポート・出席をもとに評価する。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGO・NPOマネジメント論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	社会学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	看護福祉学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計27名（男子学生13名 女子学生14名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	NGO・NPOは、貧困・教育・紛争・保健医療・環境・福祉などの分野で国際協力活動を展開している。NGO・NPOは、活動資金・人材（スタッフ）・支援のノウハウなどが必要であり、そしてそれを理念をもとに運営をしなければならない。この講義では、NGO・NPOについて理論的に学び、NGO・NPOを現在運営マネジメントしている方を講師として、その運営方法・活動などについて事例をもとに理解する。		
授業内容	1. NGO・NPOとは何か 2. NGO・NPOの組織論 3. NGO・NPOの存在理由 4. NGO・NPOの活動理念 5. NGO・NPOの運営 6. NGO・NPO活動事例 7. NGO・NPOの課題 8. NGO・NPOの将来 この8項目を柱とし、15回の講義を行う。		
教科書	資料配布		
授業の工夫点			
授業の評価方法	各担当教員からの成績を総合80%、出席20%		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 立命館アジア太平洋大学

授業科目名	ボランティア研究		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際教育	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	アジア太平洋学部2年次以上、アジア太平洋マネジメント学部2年次以上	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	講義
単位数	2または4	ボランティア体験の時間数	2単位の場合：60～119時間 4単位の場合：120時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	海外でのボランティア活動を通じてボランティアの意義や目的を学ぶと共に、国際的な視野を広げ、その後の学習などに活かす。		
授業内容	事前・事後授業、実習、事前・事後提出書類（レポート、実習日誌）の提出の全てを義務付けている。事前授業では受講生を少人数グループに分け、ボランティア活動に関する意義や目的などについてディスカッションし、グループごとにプレゼンテーションをすることで、活動参加前に獲得目標を明確にする。実習中は活動の記録及び振り返りの作業として毎日日誌をつけることを課す。事後授業では再び少人数グループで、実際に参加してみて感じた事、学んだ事などについて、振り返りをさせる事で、経験の振り返りと定着を図る。		
教科書	なし		
授業の工夫点	事前・事後の指導を必ず行っている点		
授業の評価方法	事前・事後授業での発表、事前・事後レポート等を総合的に評価		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	国際教育交換協議会（GIEE）のプログラムのみ単位認定の対象としており、ガイダンス等にも参加してもらっている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	特殊講義地域づくりと地域の諸課題		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	会計・ファイナンス	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	アジア太平洋学部2年次、アジア太平洋マネジメント学部2年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計151名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	地域の諸課題に対するビジョンを形成し、地域が抱える諸課題や地域づくりの実際について多面的に検討する。地域づくりの第一線で活躍している方や地域に関する専門家をゲストスピーカーとして招き、日ごろの実践や地域づくりの現状や課題について語ってもらう機会を多く設ける。これらを通じて「地域づくりとは何か」についてのイメージを形成し、今後、自分たちが地域コミュニティの一員として地域の諸課題にどのように関わっていくべきかを深く考え、かつ実践する契機を与えることをねらいとする。		
授業内容	第1回「地域マネジメントに関する5つの 이슈」(APU) 第2回「おおいたの地域づくりの現状と課題」 第3回「大分における地球環境保全の取組み:企業と連携した社会的課題の解決への挑戦」 第4回「人づくりと地域づくりによる地域自立」 第5回「食づくり、酒づくりの雇用創出、地域再生:熊本県荒尾市・宇城市、JICAの現場から」 第6回「うみたまごの企業戦略」 第7回「社会起業家と地域づくり」 第8回「経済データから見た大分の現状」 第9回「大分のモノづくりの現状」 第10回「由布院の観光まちづくり」 第11回「まちづくり手法としてのハットウ・オンパク:地域を磨き、人を磨く」 第12回「『地域間格差』の実態と活性化戦略」 第13回「観光まちづくりのマーケティング戦略」 第14回「温泉地再生:現状と課題」		
教科書	なし		
授業の工夫点	地域づくりの第一線で活躍している方や地域に関する専門家をゲストスピーカーとして招き、講義やディスカッションを行う。		
授業の評価方法	出席とレポート50%、レポート50%		
授業のサポート体制	Teaching Assistantを1名配置している。		
学外の関係機関・団体との連携	NPO法人や企業のトップをゲストスピーカーとして招いている。		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGO・NPOと市民ネットワーク		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	その他（四半期（クォーター開講科目））
担当教員の専門分野	比較社会・文化	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	アジア太平洋学部3年次	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計104名	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	1. 社会運動論の視点からNPO/NGOを考える。 2. NPOなどの活動を見ることにより現代社会を考える。		
授業内容	第1回オリエンテーション 第2回NPO/NGOとは？ 第3回NPO/NGOの歴史 第4回現代社会論1 第5回現代社会論2 第6回社会運動論1 第7回社会運動論2 第8回NPO法人アサザ基金の考察 第9回地元学ネットワークの考察 第10回NPO法人かみえちご山里ファン倶楽部の考察 第11回外部講師の講義 第12回現代社会論と社会運動論 第13回学生からの発表 第14回まとめ		
教科書	なし		
授業の工夫点	外部講師による講義や学生からの発表を通じて、考察視点やキータームについて考える機会を与えている。		
授業の評価方法	中間レポート10%、最終レポート60%、感想30%、発表（希望者のみ）		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	NPO法人の専務理事による講義		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 日本赤十字九州国際看護大学

授業科目名	ボランティア論		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	国際開発・環境・ジェンダー	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	看護学部2年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数		授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	
必修・選択の別	選択		
授業目的	国際交流、支援、災害救援、地域の活動などに必要なボランティアの考え方とNGO・NPOの活動について学習し、可能な限りボランティア活動を体験する。		
授業内容	1.ボランティア活動、NGO・NPO入門 2.関心ある分野のNGO・NPO 3.NGO・NPOでの活動 4.活動の報告と分析 自分の問題関心にしたがって担当教員のアドバイスに基づいてNGO・NPOを選び、その団体の活動およびそこでの自分の活動を、分析し、報告する。		
教科書	プリントを配布		
授業の工夫点	自分の問題関心にしたがって担当教員のアドバイスに基づいてNGO・NPOを選び、その団体の活動およびそこでの自分の活動を、分析し、報告する。		
授業の評価方法	レポート及びプレゼンテーション		
授業のサポート体制			
学外の関係機関・団体との連携	ある		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 沖縄キリスト教大学院大学

授業科目名	ボランティア プログラム		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	文化研究、移民研究、アメリカ研究	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部 （英語コミュニケーション学科全学年）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計33名（男子学生4名 女子学生29名）	授業区分	演習
単位数	2	ボランティア体験の時間数	2時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	ボランティア活動についての学びを通し、社会における自己のあり方ならびに他者とのつながりについての意識化を行い、社会人としての自主的なボランティア活動に関わるきっかけをつくることを目的とする。		
授業内容	1. オリエンテーション・グループ討論「価値観について」 2. 「違い」について（ゲーム、ディスカッション、講義） 3. 「障害」について（ゲーム、ディスカッション、講義） 4. 「ボランティア」について（ゲーム、ディスカッション、講義） 5. 「視覚障害」について（ゲーム、ディスカッション、講義） 6. 「聴覚障害」について（ゲーム、ディスカッション、講義） 7. 「身体障害」について（ゲーム、ディスカッション、講義） 8. 気づきを生むための体験学習（1） 9. 気づきを生むための体験学習（2） 10. ボランティア企画 11. 事前学習（1） 12. 事前学習（2） 13. ボランティア実践報告 14. 事後学習 15. まとめ NGO,NPO,ボランティア概観など、次へつなげるために		
教科書	クラスにて講師作成資料配布		
授業の工夫点	クラスでは、ボランティアに関する基本的なことについて理論学習（講義）を行う。後半は、本学が設定したボランティア・プログラムやグループまたは個人による自由なボランティア活動を行う。		
授業の評価方法	1. 授業への参加態度重視 2. 毎回のクラス毎のフィードバックレポート 3. ボランティア活動企画、実行 4. レポート提出		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

授業科目名	NGO・NPO論		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	NPO学	共通・専門等の別	専門
開設学部（学科）及び年次	人文学部（英語コミュニケーション学科4年次）	授業のレベル	中級・応用
平成20年度履修者数	計46名（男子学生3名 女子学生43名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	0時間
必修・選択の別	選択必修		
授業目的	近代国家間の国際政治という枠組みに囚われることなく「地球市民」という意識と連帯を持って、グローバルなテーマに取り組む思考と方法を理解・身につけることを目標とする。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. NGO・NPOとは？ 2. 近代国家と国際政治 3. 開発の政治学と国際貢献・協力 4. 国際ボランティア 5. 国連と国際協力団体 6. グローバリゼーションと連帯の可能性 7. ODAと途上国の現状 8. 「地球市民」としての活動と国際政治 9. 医療NGOケーススタディ 10. 開発NGOケーススタディ 11. 人権NGOケーススタディ 12. 環境NGOケーススタディ 13. 教育NGOケーススタディ 14. 日本国内におけるNPOの歴史と活動 15. NGO・NPO活動の展望と課題 		
教科書	不使用		
授業の工夫点			
授業の評価方法	毎回、授業の最後に、講義内容についてのエッセイを書いてもらう。		
授業のサポート体制	ない		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 聖マリア学院大学

授業科目名	社会とボランティア		
担当教員（学内又は学外）	学内教員	授業期間	通年
担当教員の専門分野	専門基礎	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	看護学部看護学科1年次	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計37名（男子学生4名 女子学生33名）	授業区分	演習
単位数	1	ボランティア体験の時間数	15時間
必修・選択の別	選択		
授業目的	「カトリックの愛の精神」に基づくコミュニティでの様々なボランティア活動を通して、ケア/ケアリングの要素である思いやりや信頼について学ぶ。本科目はコミュニティでの学びを通して基礎分野科目の知識と技術を統合し、また、ケア/ケアリングをより専門的なレベルへと高める看護専門科目への関心を深める役割を持つ。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. オリエンテーション ボランティア精神 2. ボランティアに求められるもの 3. ～12. ボランティア活動(学生自身の自発的なボランティア活動によって構成される) 13. 活動報告(1) 14. 活動報告(2) 15. 活動報告(3)、まとめ 		
教科書	<p><指定>守本、河内、立石編「ボランティアのすすめ 基礎から実践まで」(ミネルヴァ書房)</p> <p><参考> M/マクレガー他「ボランティアガイドブック共感主義ボランティア入門」(誠信書房)、ミルトン・メイヤロフ「ケアの本質」(ゆみる出版)、キャロル・レッパネン・モンゴメリー「ケアリングの理論と実践 コミュニケーションによる癒し」(医学書院)、シスター・シモーン・ローチ「アクト・オブ・ケアリング」(ゆみる出版)</p>		
授業の工夫点	○実体験からの学びを深めるため、コミュニティの中で学生自身の自発的な活動によって構成されていること。○単発ではなく、ボランティアの継続性を重視していること。		
授業の評価方法	個別・グループディスカッションレポート(20+20%)、最終レポート(50%)、授業への参加度(10%)		
授業のサポート体制	随時、担当教員、事務部担当職員(サポートスタッフ)への相談可。		
学外の関係機関・団体との連携	ボランティア活動先としての連携がある。活動先は原則として本学と協力関係にある病院、事業所、学校等としているため。		
今後の授業の継続	今後も継続		

○ 保健医療経営大学

授業科目名	ボランティア入門		
担当教員（学内又は学外）	学外教員	授業期間	半期
担当教員の専門分野	福祉団体役員	共通・専門等の別	共通
開設学部（学科）及び年次	保健医療経営学部 （保健医療経営学科 1年次）	授業のレベル	初級・入門
平成20年度履修者数	計23名（男子学生19名 女子学生4名）	授業区分	講義
単位数	2	ボランティア体験の時間数	なし
必修・選択の別	選択		
授業目的	「…自己の尊厳と自己の人格の自由な発展とに欠くことのできない経済的、社会的及び、文化的権利を実現する権利を有する。」（国連世界人権宣言22条）この観点から高齢者や障害者の社会的歴史、思想、制度などを考えると共に、一つの実践であるボランティアの形態・理念・実践の方法などを中心として共に学ぶ。		
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> 1. 普遍と選別～誰でも不自由になる 2. 個性ある価値観～対等と同質の違い 3. 不自由な人の歴史～生産性との戦い 4. ADA法～不自由な人の人権法 5. 介護者と要介護者～要介護心理 6. 社会的不利～バリアフリーとは 7. 高齢者と障害者～選別主義 8. 自由と不自由～福祉と管理 9. 福祉文化とは～基本的人権の保持 10. ボランティアって～自発と無対価 11. 対社会的と対人的ボランティア 12. 活動と運動～ソーシャルアクション 13. ボランティアサークルの設立と運営 14. 共に生きる社会～ノーマライゼーション 15. 障害者の詩コンサート 		
教科書	なし、随時資料準備		
授業の工夫点	講師が車椅子に乗った障害当事者なので、「共に考える」をテーマとしてアクションある授業を展開。		
授業の評価方法	レポート及び出席重視による評価		
授業のサポート体制	常に健常者の人が援助。 授業中は、講師の説明された要点をパソコンでスクリーンに投影		
学外の関係機関・団体との連携	ない		
今後の授業の継続	今後も継続		